はじめに

入試の現代文で問われていることは、**「言語としての日本語」**です。いいかえれば、**「書いてあることを書いてある通りに理解すること」**です。心理テストではありません。自由な作品鑑賞・解釈力でもありません。しかしながら、「書いてあることを書いてある通りに理解すること」は、ふつうに考えられているほど受動的で消極的な行為ではありません。むしろ、テクスト（文脈）以前の先入観や自分勝手な解釈を排して、文脈の中で著者の見解を正しく追うという**能動的で積極的な知的行為**なのです。いいかえれば、現代文には、指導を受けて獲得するべき**「読み方」「方法」**があるということです。

しかも、その「読み方」「方法」は**論説文にも小説・物語文にも共通**したきわめて一貫したものです。それは**「対比の発見と追跡」という方法**です。くわしくは、授業で展開されます。ともあれ、ここで強調したいことは、みなさんが受講しようとしているこの現代文授業は、**「方法の現代文」**だということです。

ノートの取り方

テキストへの書き込みが基本です。**赤／青／緑**（黒板では緑ですが、第三の色であれば何色でもＯＫ）**の三色**をご用意ください。文章の対比を色分けして塗っていきます。主役キーワードが赤、敵役キーワードが青、脇役キーワードが緑です。

解法の手順……**文章（論説も小説も）は、すべて対比とその言い換えの連鎖からできている。そうであるならば……**

少しでもはやく確実に読解するために

1　本文末の**書名＝タイトルをみる　→　テーマが判明**することが多い。さらには、「〇〇と△△」というようにいきなり**対比発見のてがかり**をくれることもある（現代文では、書名をつけることは多い。とくに共通テストの現代文では必ず記載されます！　論説では文章の終わりに、小説では冒頭に書かれるのが普通です）。

2　**設問の傍線部と問題文**をざっと読み、キーワードの見当をつける（**設問は本文のキーワードにかかわることが多い**）。タイトルの次は「キャスティング＝配役＝誰が出演するのか」に注目。本編の前に「エンドロール」を見てしまう感じです。ただし**選択肢まで読んではダメ**。五択で四つは誤りの選択肢なのだから、先に読むと歪んだ先入観ができてしまう。

3　**本文最後の数行をさきに**目を通し、テーマおよび結論、キーワードと対比の見当をつける。ドラマの最終場面、クライマックスを先に見てしまう感じ。

4　**本文を冒頭から読み**、設問の傍線部にあたるたびに、選択肢を読み、その時点でしぼれるものはしぼる。ただし問いの約半数は全文を読みとおさないと解答できないから、読んでいる途中で判断できないものは先送りにする。

記述式問題解答へのガイドライン

１　**字数指定の八割以上**書くことがのぞましい（「五十字以内で説明せよ」という設問なら四十字以上書く）なお、指定字数の半分（五割）に満たない場合は、採点の対象とならないことが多い（つまり０点）

２　記述解答の採点は、**原則的に加点制（ポイント制）**（キーワード・キーフレーズごとに得点を与える。つまり、余分なことを書いたとしても減点はされないのが普通だから、字数の許す限り、重要と思った語句を記入してやる）

３　**誤字・脱字・略字**はそれぞれ１点減点（とくに略字は印象悪いよ！）

４　**「理由はなにか」「なぜか」**などの問いかけに対しては、「〜から。」「〜ので。」「〜ため。」など理由を示す語でしめくくる。そうでないと、１点減点。逆に、理由を求めている設問ではないのに「から」「ので」「ため」でしめくくると減点だよ。

その他解答欄・解答用紙に関する諸注意

a

	人	間	は	…

→　※**「原稿用紙」ではなく「解答欄」**だから最初のマスを空ける必要はない

b

…	…	…	こ	と

→　※**句点なし！**（１点減点）

設問文に「句読点も字数にかぞえる」とある場合、文末には必ず句点（。）をつける・句読点をかぞえるという指摘がない場合でも、「説明終わり」の印として句点（。）をつけるのが原則

ただし、「抜き出せ」という設問の場合は、当然本文のまま（余分なものは付けない）

c

…	…	…	こ	と。

→　※**句読点は一文字分！**（１点減点）

より本質的な記述問題への解答の仕方〈答案に盛り込むべき要素〉

> ○具体例は原則としてカット。よりまとまった表現を解答に盛り込むべし！
> ○対比の表現（ＡではなくＢである）！
> ○繰り返し、言い換えられている表現は大事。ただし一本化！

抜き出し問題の諸注意……「語」「語句」「一文」などと表記されているものの範囲について

○「語」＝「一単語」・「ワン＝ワード」・「一品詞」（ただし「一文字」とは限らないからね！）

○「語句」＝複数の単語もありうる。「語」よりも広い概念。「部分」と表記されることもある。

○「一文（文）」＝句点（。）で区切られるまとまり。

語 ⇒ 心身
語句 → 心身の一体性
一文・文 ⇒ 心身の一体性、すなわち、身体が真に身体としてあるとき、身体は「外部」的ではない。

（例）［心身の一体性、すなわち、身体が真に身体としてあるとき、身体は「外部」的ではない。］この考察は、「道具」を見直す契機になる。

誤りの選択肢の典型例一覧　〈誤りに名前をつけられるほどのパターンがある！〉

1 **対比混乱の誤り** ……本文中で**対比・区別**されていることばを同種のものとして扱ってしまっている誤り。あるいは、主役キーワードの説明を求めている設問で、敵役キーワードを挙げている誤り。**キーワードのグループ分け失敗**の選択肢といってもいい。

2 **同一性分断の誤り** ……本文中で同種のことばを対比であるかのように扱ってしまっている誤り。これも**キーワードのグループ分け失敗**。**同質性分断**ともいう。

3 **正しい対比喪失の誤り** ……本文中で「**A⟷B**」という対比で記述されているのに、無関係な「C」という要素を勝手にもちこんだり、「**C⟷D**」といった本文にない対比をもちこんでいる誤り。例えば、本文は「**善⟷悪**」という対比で書いているのに、「美」や「醜」という無関係な対比をもちこみ、本文の正しい対比を見失っている誤り。

4 **不当な全称判断** ……本文中の記述がないのに、「**すべての○○は**」「**あらゆる○○は**」と勝手に拡張している誤り。類似した誤りとして**不当な一般化**があります。例えば本文では「バラ」という個別のものに焦点を当てているのに、「花というものは」などと拡張している誤り。

5 **不当な限定判断** ……本文中の記述がないのに、「**○○のみ**」「**○○だけ**」と勝手に縮小してしまっている誤り。類似した誤りとして**不当な矮小化**(わいしょうか)があります。例えば本文では「人間関係全般について」書いてあるのに、「近所づきあい」の次元を書いている選択肢。話を不当にちっぽけにしているわけです。

6 **不当な価値判断** （不当な当為(とうい)判断）……本文では「○○である」「○○だ」という事実判断をしているのに、「**○○であるべきだ**」「**○○にしなければならない**」「**○○する必要がある**」と勝手に改変してしまった誤り。またAとBの特徴の比較をしているだけなのに、**Aの方が優れているといった優劣を持ち込んだ**選択肢の誤り。特に論文を読んだり書いたりする上で、「事実判断と価値判断（当為判断）」との違いには気を使う必要があるんだよ。

7 **部分的指摘の誤り** ……本文中では、**「AとともにB」「Aと同時にB」「AしかもB」**と追加表現がなされているのに、「A」だけ、あるいは「B」だけを扱ってしまっている誤り。本文の記述にまったく反しているわけではないため、「高度な」誤りといえます。こういうものに気づけるようになることが、現代文での高得点のカギだよ。

8 **記述に反する誤り** ……文字通り、本文中の記述に真っ向から反する選択肢。例えば本文では「AはBである」としているのに「AはBではない」としている誤り。

9 **記述なし** ……………文字通り、本文中の記述にはいっさい書いてない内容を勝手にのせている選択肢。ただし、「本文の記述に反しているものを選びなさい」といった間違い探しの設問のとき、本文には書いてないだけで、間違いとはいえないということがあるから注意。つまり、「誤り」としては1〜8・10〜12のほうが深刻な誤りといえ、そちらを優先する。

10 **文脈喪失の誤り** ……文章中で特定の意味づけをして使っていることばを、**文脈外の「常識」や辞書的な意味**で扱ってしまっている誤り。例えば、「飛躍」ということばを、本文は「行き過ぎ」「誤解」という意味付けをして記述しているのに、勝手に「発展」「前進」というようにとらえてしまっているもの。

11 **物理的スリカエの誤り** ……**心理や気持ちを問うている設問で、物理的に説明している選択肢。**小説問題の選択肢としてよく出ます。例えば「暗い気持」を天候や日照量の説明にしてしまっている誤り。

12 **比喩を文字通りに解釈した誤り** ……本文中で、たとえになっている表現（擬人法もふくむ）を文字通りにとってしまった選択肢の誤り。比喩は立派な表現技法です。これをリアルに解釈するとずいぶんおかしなことになります。例えば「いやー、歩きつかれちゃって、膝(ひざ)がわらってるよ」なんて表現があるけど、ホントに笑ったら怖い！

予習の仕方　……必ず予習しましょう。映像講義を視聴しているだけでは、解答力は身に付きません。その上で、以下のようなプランが考えられますが、プランCをオススメします。

プランA……映像授業を見る前にまず、自力で解答する
プランB……映像のチャプター１（タイトルと設問条件解説・最終段落先取り読み）まで見てから映像を止めて、解答する
プランC……第三講までプランBで、解法の手順をしっかり学んだ後、第四講からプランA
プランD……現代文があまり得意ではない方は、第四講以降、AとBを交互に繰り返す。例えば、偶数の講義ではプランA、奇数の講義ではプランBというように

予習の時間　＝問題にアタックする演習時間

各講二〇分が基本です（ただし、第一講のみ予習要りません）。その他、以下のようなアレンジも可能です。パターンCがオススメです。

パターンA……右の基本時間通り
パターンB……時間設定にとらわれず、納得いくまで解答する
パターンC……基本時間通りで解答する講と、じっくり納得いくまで解答する講を交互に繰り返す。時間設定を気にするあまり、読み方や解法が雑になっては元も子もありません。かといって悠長に構えすぎてもダメ。本来入試は時間限定付きですから。そこで、じっくり解く回と本番を想定した回を交互に組み合わせましょう。

目標得点

……配点はしてありませんから、その講義ごとに、全何題中いくつできたのか、という得点率
（例えば第二講なら全部で十五題。十題以上正解なら目標クリア。記述問題は、各「ポイント箇所」を一題と数えましょう）

○　私大……………（第二講・九講・十講・十三講・十四講・十五講・十七講・十九講・二十講・二十一講・二十三講）
→六十五％以上

○　記述問題をふくむオリジナル…………（第五講・二十四講）**→六〇％以上**

○　共通テスト（マーク式問題に相当）……（第一講その１その２・三講・四講・六講・七講・八講・十一講・十二講・十六講・十八講・二十二講）**→七〇％以上**

○　復習問題…………**八〇％以上**

復習の仕方について

予習と授業が柱ですが、復習するなら……

設問をもう一度解き直すというタイプの復習はオススメできません。勉強したような気になるだけで、現代文の場合、発展的な学習とは言えない。文章を読み物として再読することはオススメです。なんたって良質な文章、各テーマのモデルのような文章を集めていますから。ただし、設問については授業内で疑問を解決しましょう。また解説テキストでも確認できます。一方で、現代文入試問題での読解力・解答力を向上させるためには、同じ問題を解き直すのではなく、授業をモデルとして、問題集などで新しい問題に次々チャレンジしていきましょう。スタディサプリでも多くの講座が用意されています（高３用講座だけでなく、高１・２用講座も合わせて活用してください。こちらも実際の良質な入試問題が素材ですから）。その文章・設問も対比で読める・解けるようにする訓練を続けることが有効です。

おすすめの問題集

『マーク式基礎問題集・現代文・改訂版』（河合出版）
『マーク式総合問題集・国語』（河合出版）……「全統マーク模試」を収録したもの
『はじめての共通テスト対策　国語』エデュケーショナルネットワーク編（Z会）……試行調査２回分＋オリジナル２回分から成り、古文や漢文も含みます。マークシートや記述解答用紙も付属。
『Z会・現代文のトレーニング』（増進会出版）……「入門編／必修編／小説編／記述編／私大編」がそれぞれあります。
『ハイスコア！共通テスト攻略　国語　現代文』Z会編集部（Z会）……〈参考書＋問題集〉、〈マーク式＋記述式〉、〈センターの過去問題＋試行試験問題＋オリジナル〉など、それぞれの要素を盛り込んでいます。現代文のみです。
『入試現代文へのアクセス』（河合出版）……「基本編／発展編／完成編」があります。

おすすめの用語解説集

『読み解くための現代文単語』（シグマベスト・文英堂　小柴大輔　編著）

おすすめの参考書

『小柴大輔の一冊読むだけで現代文の読み方&解き方が面白いほど身につく本』（KADOKAWA）

教材選定について

- 有名大学およびセンター試験の過去問の中から良問をセレクト
- 各テーマ（異文化理解論・家族論・認識論・芸術論・哲学論など）の読書資料になる価値の高い文章をセレクト
- それぞれの学問界を代表する筆者の文章をセレクト
- 奇問は外し、入試現代文のモデルとなる設問をセレクト。アタックすることを通じて解答力を高められる設問ばかり。

目次

第一講　入試現代文の導入　その１《評論》……p. 11
入試現代文の導入　その２《小説》……p. 12
第二講　異文化理解論・文化人類学……p. 20
第三講　家族論・ジェンダー論・言語論（前編）……p. 26
第四講　家族論・ジェンダー論・言語論（後編）……p. 31
第五講　認識論・脳科学……p. 36
第六講　《小説その２》母親と子供の対比……p. 43
第七講　《小説その３》母親と子供の関係（継母と娘）……p. 52
第八講　科学技術史・大学史……p. 61
第九講　芸術論・音楽史・音楽社会学……p. 69
第十講　日本語論……p. 75
第十一講　認識論・哲学論（前編）……p. 80
第十二講　認識論・哲学論（後編）……p. 86

第一講　入試現代文の導入　その１《評論》

　ことばが語と文法からなるというのは、ことばをある切り口で切ったときの一つの事実ではある。しかしそうして切り取ったことばには、一つ、決定的に欠ける点がある。それはことばのもつ対話性を二次的にしか考えられないという点である。ことばはそもそも他者とのかかわりの場で働くもの。ところが〈語―文法〉的なことば観は、しばしば独我論的で、そこに他者とのかかわりが見えてこない。

　もちろん、ことばを道具として獲得したのちには、その道具を使って他者と対話することにはなる。しかしそこにおいて、対話はことば獲得の結果であって、それ以上のものではない。言い換えれば、このことば観のなかでは、ことばが獲得されたのち、それによってはじめて他者との対話が可能になるのであって、他者との対話（もちろんことば以前の）からことばが生まれてくるという発想がない。つまりことばそのもののもつ第一次的、本質的な対話性に目を向ける視点が、そこにはすっぽり抜け落ちているのである。Aこのことば観によっては、ことばが私たちの生活世界において働くその様をありのままに見ることはできない。

（浜田寿美男（はまだすみお）『「私」とは何か―ことばと身体の出会い―』による）

問１　傍線部Ａ「このことば観」とあるが、それはどのような「ことば観」か。その説明として最も適当なものを、次のうちから一つ選べ。

①　ことばは他者との対話から生まれ、〈語―文法〉的に運用されているということば観。
②　ことばは道具として獲得され、他者との関係の場で機能しているということば観。
③　ことばを生活世界とのかかわりで運用し、対話性への視点を欠落させていることば観。
④　ことばを〈語―文法〉的にとらえ、他者との対話性を模索しようとすることば観。
⑤　ことばを他者との関係の場から切り離し、本質的な対話性を喪失させていることば観。

第一講　入試現代文の導入　その2《小説》

※第一講は「予習なし」で授業のみ聞いて解答していく都合上、文章については**太字**（ゴシック）のところに注目してください。

次の文章は、夏目漱石の小説『道草』の一節である。これを読んで、後の問いに答えよ。

島田は吝嗇な男であった。妻のお常は島田よりもなお吝嗇であった。

「爪に火を点すってえのは、あの事だね」

彼が実家に帰ってから後、こんな評が時々彼の耳に入った。しかし当時の彼は、お常が長火鉢のそばへすわって、下女に味噌汁をよそってやるのを何の気もなくながめていた。

「それじゃ何ぼ何でも下女がかわいそうだ」

A **彼の実家のものは苦笑した。**

お常はまた飯櫃やお菜のはいっている戸棚に、いつでも錠をおろした。たまに実家の父が訪ねて来ると、きっと蕎麦を取り寄せて食わせた。その時は彼女も健三も同じものを食った。その代わり飯時が来ても決していつものように膳を出さなかった。それを当然のように思っていた健三は、実家へ引き取られてから、間食の上に三度の食事が重なるのを見て、大いに驚いた。

しかし健三に対する夫婦は金の点に掛けてむしろ不思議なくらい寛大であった。外へ出る時は黄八丈(注)の羽織を着せたり、縮緬の着物を買うために、わざわざ越後屋(注)まで引っぱって行ったりした。その越後屋の店へ腰を掛けて、柄を択り分けている間に、夕暮れの時間がせまったので、おおぜいの小僧が広い間口の雨戸を、両側から一度に締め出した時、彼は急に恐ろしくなって、大きな声を揚げて泣き出した事もあった。

彼の望むおもちゃは無論彼の自由になった。その中には写し絵(注)の道具も交じっていた。彼はよく紙を継ぎ合わせた幕の上に、三番叟(注)の影を映して、烏帽子姿に鈴を振らせたり足を動かさせたりして喜んだ。彼は新しい独楽を買ってもらって、時代を着けるために、それを河岸ぎわの泥溝の中に浸けた。ところがその泥溝は薪積み場の柵と柵との間から流れ出して河へ落ち込むので、

彼は独楽の失(な)くなるのが心配さに、日に何べんとなく扱(あつか)い所(じょ)(注)の土間を抜けて行って、何べんとなくそれを取り出して見た。そのたびに彼は石垣の間へ逃げ込む蟹(かに)の穴を棒で突ッついた。それから逃げそこなったものの甲を抑えて、いくつも生け捕りにして袂(たもと)へ入れた。……

要するに彼はこの吝嗇な島田夫婦に、よそからもらい受けた一人っ子として、異数の取り扱いを受けていたのである。

しかし夫婦の心の奥には健三に対する一種の不安が常に潜んでいた。

彼らが長火鉢の前で差し向かいにすわり合う夜寒の宵などには、健三によくこんな質問を掛けた。

「お前のおとっさんはだれだい」

健三は島田の方を向いて彼を指さした。

「じゃお前のおっかさんは」

健三はまたお常の顔を見て彼女を指さした。

これで自分たちの要求を一応満足させると、今度は同じような事をほかの形できいた。

「じゃお前の本当のおとっさんとおっかさんは」

健三はいやいやながら同じ答えを繰り返すよりほかに仕方がなかった。しかしそれがなぜだか彼らを喜ばした。彼らは顔を見合わせて笑った。

ある時はこんな光景がほとんど毎日のように三人の間に起こった。ある時は単にこれだけの問答では済まなかった。ことにお常はしつこかった。

「お前はどこで生まれたの」

こう聞かれるたびに健三は、彼の記憶のうちに見える赤い門――高藪(たかやぶ)でおおわれた小さな赤い門の家(うち)をあげて答えなければならなかった。お常はいつこの質問を掛けても、健三が差しつかえなく同じ返事のできるように、彼を仕込んだのである。彼の返事は無論器械的であった。けれども彼女はそんな事には一向頓着(とんじゃく)しなかった。

「健坊、お前本当はだれの子なの、隠さずにそうおいい」

彼は苦しめられるような心持ちがした。時には苦しいより腹が立った。向こうの聞きたがる返事を与えずに、わざと黙っていたくなっ

た。

「お前だれが一番好きだい。おとっさん？　おっかさん？」

健三は彼女の意を迎えるために、向こうの望むような返事をするのがいやでたまらなかった。彼は無言のまま棒のように立っていた。それをただ年歯の行かないためとのみ解釈したお常の観察は、むしろ簡単に過ぎた。**彼は心のうちで彼女のこうした態度を忌み悪（にく）んだのである。**

夫婦は全力を尽くして健三を彼らの専有物にしようとつとめた。また事実上健三は彼らの専有物に相違なかった。従って彼らから大事にされるのは、つまり彼らのために彼の自由を奪われるのと同じ結果に陥った。 B**彼にはすでに身体（からだ）の束縛があった。しかしそれよりもなお恐ろしい心の束縛が、何もわからない彼の胸に、ぼんやりした不満足の影を投げた。**

夫婦は何かに付けて彼らの恩恵を健三に意識させようとした。それである時は「おとっさんが」という声を大きくした。ある時はまた「おっかさんが」という言葉に力を入れた。おとっさんとおっかさんを離れたただの菓子を食ったり、ただの着物を着たりする事は、自然健三には禁じられていた。

自分たちの親切を、無理にも子供の胸に外部からたたき込もうとする彼らの努力は、かえって反対の結果をその子供の上に引き起こした。健三はうるさがった。

「なんでそんなに世話を焼くのだろう」

「おとっさんが」とか「おっかさんが」とかが出るたびに、健三はおのれひとりの自由をほしがった。自分の買ってもらうおもちゃを喜んだり、(注)錦絵（にしきえ）を飽かずながめたりする彼は、かえってそれらを買ってくれる人をうれしがらなくなった。少なくとも両（ふた）つのものをきれいに切り離して、純粋な楽しみにふけりたかった。

夫婦は健三をかわいがっていた。けれどもその愛情のうちには変な報酬が予期されていた。金の力で美しい女を囲っている人が、その女の好きなものを、いうがままに買ってくれるのと同じように、彼らは自分たちの愛情そのものの発現を目的として行動する事ができずに、ただ健三の歓心を得るために親切を見せなければならなかった。そうして C**彼らは自然のために彼らの不純を罰せられた。しかも自ら知らなかった。**

(注)　○黄八丈——黄色の地に鳶（とび）・茶などの縞（しま）を織り出した絹織物。八丈島が本産地。

○越後屋――東京日本橋にあった大呉服店。
○写し絵――光線によって、ガラスに描いた絵などを幕に映し出すもの。幻灯。
○三番叟――歌舞伎の舞の役。ここでは、それを模した人形のおもちゃ。
○扱い所――今の区役所または町役場などに当たるもの。
○錦絵――江戸時代に創始された華麗な多色刷浮世絵版画。

問１　傍線部Ａ「彼の実家のものは苦笑した。」とあるが、なぜ苦笑したのか。その説明として最も適当なものを、次から一つ選べ。
①　お常が、実家のものの前で、これ見よがしに下女に味噌汁をよそっていたから。
②　主人の妻から味噌汁をよそってもらっている下女が、いかにも恐縮していたから。
③　主人から冷遇されている下女に対して、健三がほとんど無関心な態度を示したから。
④　お常が、主人の妻という身分でありながら、健三の前で下女に味噌汁をよそったから。
⑤　お常が、下女に手ずから味噌汁をよそってやったのは、その量を惜しんでのことだから。

問２　傍線部Ｂ「彼にはすでに身体の束縛があった。……ぼんやりした不満足の影を投げた。」とあるが、ここで「身体の束縛」「心の束縛」とはどのようなことをさすか。その説明として最も適当なものを、次から一つ選べ。
（選択肢カット）

問３　傍線部Ｃ「彼らは自然のために彼らの不純を罰せられた。」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次から一つ選べ。
①　島田夫婦が健三を愛するのは、義理の親とはいえ当然のことであったが、甘やかしすぎたために、結果として健三のわがままを増長させてしまったのである。

②　健三には小さな赤い門のある家の懐かしい思い出があって、島田夫婦の心からの愛情もただ煩わしいものとして、かえって彼らに無言の反抗をしたのである。

③　島田夫婦は健三が本当の子ではなかったので、愛情を表現するのにもいつも押しつけがましいものがあって、結果として彼の離反を招くことになったのである。

④　健三は島田夫婦にとって、義理の子とはいえ、たった一人の子であったために、まるで自分たちの専有物のように取り扱って、逆に自縄自縛に陥ったのである。

⑤　島田夫婦には実子がなく、子供を育てた経験が十分ではなかったので、健三の扱いに慎重になりすぎて、たえず不安にかられざるをえなかったのである。

第一講　知識モノ解説

文学史・人物解説

●その１の筆者　浜田寿美男＝はまだ　すみお（一九四七～）香川県生まれ、京都大学大学院で心理学を専攻。発達心理学者

●その２の筆者　夏目漱石＝なつめ　そうせき（一八六七～一九一六）東京生まれ、東京帝国大学英文科卒。いわずと知れた大文豪。東大講師を辞め（当時事件だった）、朝日新聞専属小説家へ。小説家としての処女作『吾輩は猫である』、遺作『明暗』

語句

独我論＝どくがろん→実在するのは自分の自我とそれが生んだもののみという圧倒的主観重視の考え方。本文では、言語の取得には他者はいらず、自己完結なのだ、との考え方で登場

吝嗇＝りんしょく→けち／吝嗇家→けちん坊・守銭奴（しゅせんど）・しみったれ・吝ん坊（しわんぼう）

cf 英国の文豪チャールズ・ディケンズの『クリスマス・キャロル』に出てくるスクルージは、ケチの典型で〝スクルージ＝ケチ〟として一般名詞化しているほど／フランスの喜劇作家モリエールの作品にも『守銭奴』があります。現代日本でも笑えて楽しめる作品ですよ

爪に火を点す→ろうそくのかわりに爪を使うほど、節約倹約

下女＝げじょ→炊事や雑用のための下働きに召し使われた女性

異数＝いすう→特別扱い・この場合の「数」は等級をあらわす

年歯（年端）の行かない＝としはのいかない→幼い

歓心を得る＝かんしんをえる→機嫌を取る

恐縮＝きょうしゅく→申しわけなく思い、恐れ入ること

冷遇＝れいぐう→冷たい扱い

増長＝ぞうちょう→高慢になる・つけあがる・えらそう

自縄自縛＝じじょうじばく→自らの言動によって自らの身動きがとれなくなること　関連語　自業自得

復習問題　第一講

次の傍線部にあたる漢字を、次の選択肢から選びなさい。

（ア）はじめてことばをカク得する　①確　②革　③穫　④獲　⑤拡

（イ）その発想は極めて独ガ論的だ　①賀　②我　③蛾　④雅　⑤牙

（ウ）カン察から自然の探求が始まる　①観　②勘　③感　④寛　⑤官

（エ）愛情自体の発ゲンとはいかない　①言　②現　③元　④源　⑤眩

（オ）心と身体をソク縛している　①則　②即　③側　④束　⑤捉

次の語句の意味として最も適当なものを、次の選択肢から選びなさい。

（カ）爪に火を点す
①　余念なく集中する　②　自虐的である　③　質素倹約に努める
④　細かく気を配る　⑤　手先が器用である

（キ）年歯の行かない
①　気の利いたことをいえない　②　まだ幼い　③　ものごころついた
④　社会性の目覚めない　⑤　無駄に年を重ねる

（ク）歓心を得る
①　気に入られようとする　②　強い興味をひく　③　ほめたたえられる
④　相手を思いやる　⑤　冷淡さを隠す

第二講　異文化理解論・文化人類学

新月の夜は磯(いそ)あさりにでかける。真夜中、珊瑚(さんご)のかたまりが点々とするソロモン諸島の環礁沿いの浜辺は、最大干潮を迎える。波の音は遠のき、星の明かりが一面にこぼれる静かな闇夜(やみ)である。

灯油ランプを手に手に、女性や子どもたちがやってくる。人びとは海岸線に対して垂直になるように並ぶ。そしてお互いに五メートルほどの間隔を保ちながら、海水がすっかり引いた珊瑚の岩礁がむきだしになった磯を、横一列になってゆっくりと移動していく。歩き出す足元から、小魚がぴしゃりと跳ねる。長い環礁の浜辺はどこまでもまっすぐに続いている。岩のくぼみを明かりで照らしながら、海に取り残された小さな生き物たちを探す。

人びとがもっとも熱心に探しているのが、黒いだんだら模様のあるケショウサザエである。ケショウサザエは日本のサザエに比べてやや小ぶりだが、味はほとんど変わらない。サザエを貝殻ごと念入りに火であぶって、まだ熱いうちにエキスのしたたる肉にかぶりつくときの幸せは、いまさらここに書くまでもないだろう。

三時間あまり磯を歩いて採集を続けると、獲物がはいった袋はずっしりと重たくなる。そろそろ潮も満ち始めた。一所懸命探したはずなのに、わたしの収穫はほかの村人の半分くらいである。人びとは貝だの蟹(かに)だのをわたしの袋にほうりこんでくれる。なんだか申しわけない。

その時、一〇人ほどの参加者のなかで、ひとりだけ飛び抜けてたくさんのサザエを採っている少女がいた。その一二歳ぐらいの少女の袋には、サザエばかりがぎっしりとつまっていた。不思議である。聞けば彼女は経験豊かな大人たちをしりめに、いつも誰よりもサザエを多く採るのだという。

それを彼女の才能と言ってしまうのは簡単である。だが、いったいどんなたぐいの能力なのだろう。彼女はサザエの居そうな場所をよく知っているのだろうか？　それとも、ほかの人よりもちょっと熱心なのだろうか？　暗い所で効果を発揮する人並みはずれた視力？　[A]　集中力？　彼女のうちの何かが普通とは違うはずだ。そして、どんな理由であれ、その結果、彼女には「見える」のである。わたしには見えないたくさんのサザエが。磯あさりの技量は、結局この「見える」という能力に集約される。

さて、ここでわたしが、何の説明もなく、次のように言いきってしまうのを許してほしい。「見えることが世界を構築する。」誤解を受けることを覚悟の上で、あえて「見える」という視覚に関する言葉を、「感じる」こと一般の象徴として用いた。だがもちろんこれは、単に獲物に対する視覚的な能力に止まる話ではない。認識世界は経済世界細部にまで宿っている。日常生活のさまざまな事象は、その「見え方」によって、全く別の意味（価値）を持ってくる。

われわれにとって大切なことは、何を見ているのかと言うより、むしろどう見えているのかにかかっている。サザエは、それを石だと見る人にとってはあくまでも石であるが、それをサザエであると見る人にとっては決して石ではない。同じように「はたしてわたしは彼らと同じように世界を見ているのだろうか」という問いかけは、異文化の中で生活している者にとって、常に、繰返し立ち現れるやっかいな悩みである。

文化人類学者が異文化を説明する記述に、たとえば「彼らはこう考えている」というものがある。この手法を用いれば、一見【B】理解者の顔をして居られるが、実は複数の相対的な価値の存在を暗に示唆することによって、彼らの世界の絶対性を[C]ないがしろにしている。美しいものは美しい、わかる人にはわかる、見える者には見える、こうした極めてあたりまえの言説ですら、相対主義の名のものに[D]覆い隠されてしまう危険性がある。

「彼らにはこう見える」と書くには【E】勇気が必要だ。[F]往々にして記録者のわたしにはそう見えていないことが多いからだ。にもかかわらず、確かに彼らには見えている。見えていなければありえない事実がある。[G]もどかしいのは、見えているという現象のまえに、それより先の分析が拒絶されてしまうことだ。もっとも美や超自然的な事象に比べれば、少なくともサザエは、検証の可能性を残してくれる。特定の誰かが、常にほかの人よりも多くサザエを見ることができるという事実は、採ってきたサザエを数えれば明白である。分析は困難であるが、検証は可能である。

新月のたびに村人たちと磯あさりに出るうちに、いつのまにかわたしの収穫もいくぶんかましになってきた。それまでは、単に【H】岩場に見えていた場所に、いくつもの一定したパターンがあるのを発見した。磯はけっして単調ではなく多様であり、その多様性のなかに、しっかりとした規則性があった。その規則性は、許されれば名前をつけておきたくなるような、再現性のあるくりかえしだった。そして、そのくりかえしの間に、ときどきサザエの模様がはいっているのだ。サザエをみつける瞬間は、サザエそのものより先に、サザエの形、サザエの不自然さが、目の中に飛び込んでくるような気がする。

いろいろなものが見えるようになってくると、磯あさりがぜん楽しくなった。できないことができるようになる喜びは、なにものにもかえがたい。それはまるでおさな子のように、そう、まさに世界を獲得していく作業である。しかし、ここでわたしがいくら「見えるようになったのだ」と書いても、それだけでは誰も納得してくれないだろう。次は「なぜ」「どのようにして」見えるようになったのか、それを語らなければならない。

パターン？　規則性？　ここはなんとしても、見えないサザエが見えるようになるための、新しい言葉をみつけなくてはならない。

遠くで単調な波の音が聞こえている。夜の空は澄みきっている。身がさざめくような［I］ほどの星の数だ。思考が行き詰まって現実の世界に引き戻される、と、突然、視界の端にサザエの影がちらっとよぎるのである。

（竹川大介『サザエを見る目』「月刊みんぱく」一九九六年五月号、一五〜一七頁　一部省略による）

問１　空欄［A］・［B］・［E］・［H］・［I］に入れるのにもっとも適切な語を次の中から選びなさい。ただし、一つの語は一か所にしかはいらない。

①　おびただしい　②　それなりの　③　たぐいまれな　④　漠然とした　⑤　ものわかりのいい

問２　傍線部Ｃ・Ｆの意味としてもっとも適切な語を次の中から選びなさい。

Ｃ　①　異化する　②　軽視する　③　再評価する　④　重視する　⑤　認識する

Ｆ　①　しばしば　②　そろそろ　③　たまたま　④　なかなか　⑤　わざわざ

問３　傍線部Ｄについて、覆い隠されてしまうものは何か。本文中から九字の語句を抜き出しなさい。

問４　傍線部Ｇの「それより先の分析」が可能になるためには、何が必要なのか、本文中から五字の語句を抜き出しなさい。

問５　次の中で、本文の趣旨に合致するものには○を、合致しないものには×を記しなさい。

①　筆者にとって最大の関心事は、美や超自然的な事象である。
②　文化の型によって、見えるものと見えないものとの間に違いが生じる。
③　ケショウサザエを探す人の熱心さは、その収穫量ではかることができる。
④　自分の目に見えないものは、いくら経験を重ねても見えるようにはならない。
⑤　分析は困難でも検証可能なものは、事実としてその存在を認めることができる。
⑥　わかる人にはわかるといった言説は、複数の相対的な価値の存在を認めることによって成立する。

第二講　知識モノ解説

文学史・人物解説

●竹川大介＝たけかわ　だいすけ　京都大学理学部卒、同大学院で人類学を専攻。理学博士。現在、北九州市立大教授

語句

文化人類学→文化という概念を中心に、人間について研究する学問
新月＝しんげつ→太陽と重なって月自体は見えないときで、夜なら闇夜。朔（さく）ともいう。英語でも「ニュー・ムーン」
念入り＝ねんいり→細かいところまで注意を払う　cf 余念がない→一つの事に集中
相対的＝そうたいてき→絶対的でなく、いろいろそれぞれあるうちの一つ
示唆＝しさ→ほのめかす・それとなく示す
超自然的→物理的自然現象を越えた・オカルト
夥しい＝おびただしい→たくさん・星の数・真砂（まさご）の数ほど

復習問題　第二講

次の傍線部にあたる漢字を、次の選択肢から選びなさい。

（ア）互いに間カクをあける　①角　②覚　③隔　④画　⑤各

（イ）海岸で魚介類をサイ集する　①再　②宰　③祭　④催　⑤採

（ウ）魚介の収カク量を誇る　①穫　②覚　③確　④閣　⑤核

（エ）見えることが世界をコウ築する　①構　②効　③考　④高　⑤硬

（オ）誤解も覚ゴのうえで行う　①伍　②誤　③娯　④悟　⑤御

（カ）それとなく正解をシ唆する　①指　②志　③示　④詩　⑤視

（キ）検査結果をキ録にとどめる　①記　②着　③機　④紀　⑤基

（ク）仮説を実験で検ショウする　①証　②賞　③性　④省　⑤将

（ケ）岩場や岩礁のキ則性を知る　①期　②軌　③規　④揮　⑤気

（コ）分析をキョ絶してしまう　①虚　②拒　③炬　④去　⑤居

第三講　家族論・ジェンダー論・言語論（前編）

家族が言葉を誘発している。家族についておびただしい言葉がついやされ、そのあり方が分節化され、それをめぐる経験が名づけなおされている。内側と外側からのこの言葉の群れは、家族をめぐるどういう事態を指し示しているのだろうか。

家族が言葉を必要としているのである。かつてある社会学者は次のような指摘をしたことがある。A 家族という集団は「あれは、やっぱり、こうしておこうね」というようなナンセンスな言葉で用が足りるほど濃い液体でみたされているものであって、もし言葉が必要な事態が発生したらまったく無力である、と。いかにも生活実感をなぞったようにみえるこの指摘は、いまや牧歌性をすら感じさせるかもしれない。それほどに家族のあり方が関心の集中点となり、切実に言葉が必要な事態が生じているのである。そしてその「事態」は、家族の無力さよりもむしろ、このような指摘そのものの無力とその虚偽性を明らかにせずにおかない。家族を支配するナンセンスな言葉とはなにを意味するのか、「濃い液体」として表現されている関係はどのようなものなのか、そもそも家族が無力であるとはどういう事態を指すのか。ここには分節されるべき状態があり、それを塗りつぶすような指摘自体が言葉を誘発するという問題がある。

私たちは、いってみればこの「濃い液体」に類するような言葉で家族を考えてきたのではないか。家族の危機とはこの液体の濃度が薄まることであり、さらには液体そのものが流れ出したり飛び散ったりすることであった。あるいは反対に、B その濃度の上昇が液体内の個人を窒息させてしまうことこそが危機的事態なのだと考えられた。こうして、肯定的にせよ否定的にせよ、家族はそこで分析を中断させてしまう分割不能の単位、一体不可分の場所として考えられてきた。その場をみたす液体はまさしく分割できないものであり、その濃度は生活にそくして確かめるまえに先入見や予断で判定されてしまうだろう。そこには、家族は言葉を必要としないということ、いや言葉を拒むものであるという前提がおかれていた。そうであるとすれば、考えをすすめるための前提が間違っていたことになる。

このような前提をくつがえして、液体の成分分析をはじめたのが女性たちであることはいうまでもない。間違った前提のもとで苦しみ、間違った前提がもたらす負担を背負ってきた者たちによって、それはくつがえされる。つまり、家族は言葉を必要と

するのである。言葉を必要としたとき、家族はただ無力なものとして現れただろうか。そうではなかった。単純な成分分析によっては還元しきれない関係として家族が見出(みいだ)された。「経験」の場として再発見されたといってもよい。社会生活のほぼ隅々まで「商品化の精神」が浸食して、否定的なかたちですら危ういほどに経験の余地が切り縮められたとき、C消極的ないし否定的な場として社会的経験の欄外におかれてきた家族が逆説的に発見されたのである。間違った前提のもとでいわば「不問」にされてきた領域が、そのような前提のうえに成り立つ社会を考えぬくための場所として、おびただしい問いを引きよせることになった。

（市村弘正『小さなものの諸形態』による）

問１　傍線部Ａ「家族という集団は『あれは、やっぱり、こうしておこうね』というようなナンセンスな言葉で用が足りるほど濃い液体でみたされている」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次のうちから一つ選べ。

①　没個性的で意味のない言葉だけを使っているように見えても、家族というものは血縁によってしっかりと結ばれているものである。
②　それぞれ自己を主張する言葉はなくても、家長によって支えられてきた伝統的な家であるかぎり、その家族は強いきずなで結ばれているものである。
③　男性主体の言葉を使っているように見えても、伝統的に家を中心としてきた社会においては、それぞれの家族はかたくまとまっているものである。
④　めいめいの個性的な言葉を用いなくても、家族というものはその家の古くからのしきたりによって十分まとまっているものである。
⑤　内容をさほど具体的に表す言葉でなくてもコミュニケーションが可能なほどに、家族は、共通の体験と知識を有し、親密に結ばれているものである。

問２　傍線部Ｂ「その濃度の上昇が液体内の個人を窒息させてしまう」とあるが、その説明として最も適当なものを、次のうちから一つ選べ。

① 自分の家族が親密の度を増すことによって、家族以外の他者から排除されてしまうということ。
② 家族内の関係が複雑になることによって、自分自身の立場が失われてしまうということ。
③ 家族の構成員の関係が明確になればなるほど、その関係が家族内における個人を分節化してしまうということ。
④ 家族内の関係が緊密になればなるほど、それに属する個人がその関係によって自由を奪われてしまうということ。
⑤ 家族というものが不可視のものになればなるほど、その中の個人は無視される存在になってしまうということ。

問３　傍線部Ｃ「消極的ないし否定的な場として社会的経験の欄外におかれてきた家族が逆説的に発見された」とあるが、「家族が逆説的に発見された」とはどういう意味か。その説明として最も適当なものを、次のうちから一つ選べ。

① 従来社会的な意義をもたないとされてきた家族が、現代の「商品化の精神」の普及によって、逆に社会を考える場として改めて見直されることになった。
② 家族は本来人間生活の経験を習得し、実践する場であったが、現代の「商品化の精神」の普及によって、逆に経験の機能が弱まり、家族の意義の見直しが必要となった。
③ 家族は本来言葉を必要としないほど内輪の経験によって成り立っていたが、現代の「商品化の精神」の普及によって、逆に言葉が必要とされる事態となり、無力で消極的な存在になった。
④ 従来閉鎖的で濃密な人間関係の中で成り立ってきた家族が、現代の「商品化の精神」の普及によって、逆に社会的に開放された存在へと変質していることが明らかになった。
⑤ 従来家族という単位は、さして社会的な機能を持たないと考えられてきたが、現代の「商品化の精神」の普及によって、逆にその機能が拡大されることになった。

第三講　知識モノ解説

文学史・人物解説

●筆者　市村弘正＝いちむら　ひろまさ　思想史・社会哲学の研究者。法政大学法学部教授

語句

おびただしい＝夥しい↓たくさん・数多く
分節化＝ぶんせつか↓細かく割って、分析＆説明する　文の発音上の区切りを意味する「文節」とは違うから注意
牧歌性＝ぼっかせい↓牧場で歌を歌うように、のんきでいいねというプラスの意味とのんきすぎでよくないとのマイナスの意味がある。本文は後者です
虚偽性＝きょぎせい↓ウソやデタラメの度合い
先入見＝せんにゅうけん↓きめつけ・既存の固定観念・先行したイメージ・先入観
予断＝よだん↓前もっての判断・先入観の類義語
還元＝かんげん↓単純化する（本文での意味はこれ）・元に戻す（化学の「酸化還元」など
／「円高還元セール」↓輸入品を安く買えた分、値引きしてお客様にも利益を振り分けますというもの）
逆説＝ぎゃくせつ↓一般的な説明や理解とは反対のところに真実がある・パラドックス

復習問題　第三講

次の傍線部にあたる漢字を、次の選択肢から選びなさい。

（ア）家族が言葉をユウ発している　① 雄　② 遊　③ 優　④ 誘　⑤ 悠

（イ）家族の在り方を分セツ化して語る　① 接　② 節　③ 刹　④ 設　⑤ 切

（ウ）社会に大変なジ態が起きている　① 自　② 時　③ 事　④ 辞　⑤ 次

（エ）のんきで牧カ性を感じる　① 家　② 化　③ 荷　④ 香　⑤ 歌

（オ）極めてセツ実な問題である　① 摂　② 節　③ 切　④ 拙　⑤ 折

（カ）報告書に虚ギが見つかる　① 戯　② 偽　③ 儀　④ 義　⑤ 議

（キ）これらは一体で不カ分である　① 科　② 加　③ 可　④ 過　⑤ 果

（ク）先入見やヨ断は禁物である　① 予　② 余　③ 代　④ 与　⑤ 預

（ケ）単純にはカン元できない複雑さ　① 環　② 甘　③ 還　④ 換　⑤ 喚

（コ）風雨による岩のシン食が進む　① 深　② 浸　③ 津　⑤ 新　⑤ 進

第四講　家族論・ジェンダー論・言語論（後編）

　家族という場に対するさまざまな問いかけが、その問いの言葉そのもののあり方を問うにいたるのは必然だった。というより、家族が言葉を必要とするというとき、それはただの性別不問の言葉ではありえなかった。不問にされ不可視にされてきたのは、なによりも女性の経験であり、必要なのはそれを明らかにする言葉であるという認識によって、その「問い」は支えられていたからである。家族をめぐる言葉は、こうして女性のあり方をめぐる言葉となる。しかし、女性をめぐる言葉は、そのまま女性の言葉でありうるだろうか。

　たとえば、『男が言語をつくった』という書名をもつ本がある。そこでは、社会の家父長制的意味基盤とか言葉の家父長制的定義ということが繰りかえし強調されている。この「家父長制」という概念が、女性たちの経験を名づけなおす作業のなかで、性支配を軸とする新たな意味を与えられた名前であることはいうまでもない。この概念を根本におくことによってその本が明らかにしようとしているのは、男性による言葉の占有状態、したがって言語的に占有された社会の有り様である。ひらたく言えば、この社会について、それを分類し記述し対象化してきたのは男たちの言葉である、という批判であった。そこでは女性は沈黙を強いられ「不可視の状態」に放置されるだろう。この状態に対してその本が提示するのは、「女の言語使用形式」のたえざる実践の主張である。つまり、女性の言葉の不断の発動宣言であった。

　しかし、事態はもう少し複雑なのではないか。沈黙から言語の使用形式の変革までの道のりが長いというだけではない。少なくとも「男の言葉」を拒否することがそのまま女の言葉を表面化させることになる、というわけにはいかない。D男／女の経験と男／女の言葉との関係は、そういう対称性のもとにあるのではない。それはヒエラルキー(注)の歴史的重力のもとにおかれている。「家父長的秩序における女の沈黙（および不可視性）」について語る言葉、それを明らかにする言葉はどのようなものでありうるのか。可視性へと引きあげる言葉はどこから手に入れるのか。端的にいえば、女性の経験を語りうる言葉、その不可視性の水準を記述しうる言葉は、さしあたり「男の言葉」でしかないかもしれないのである。そこでは、自分たちに沈黙を強いてきた言葉によって、さらにいえば性支配として機能する言葉を通して、みずからの切実な経験を語らなければならないのである。女の言

葉が始動するとき、そのときは男の言葉が指示する女の経験だけでなく、同時に、それを支える男の経験をも相対化しなければならないだろう。「家父長制的な意味基盤」を生きる経験を内側から語りつくすとは、そのような逆説的な言語行為をひきうけるということであろう。

（市村弘正『小さなものの諸形態』による）

（注）ヒエラルキー――上下関係の整ったピラミッド型の身分組織。

問４　傍線部Ｄ「男／女の経験と男／女の言葉との関係は、そういう対称性のもとにあるのではない。」とあるが、その理由として最も適当なものを、次のうちから一つ選べ。

①　男が経験を語ろうとするとき、男の立場だけでなく女の立場も配慮するという行き届いた関係になっていないから。
②　女はその経験を語ろうとするとき、「男の言葉」を拒否し、女性の言葉を不断に発動させる必要があるから。
③　男にしろ女にしろ、経験と言葉との関係は、経験があればそれをすぐさま言葉にできるというものではないから。
④　男が経験を表現する言葉を持ち得たのに対して、女はそれを持ち得ないような家父長制のもとに置かれてきたから。
⑤　男の言葉と女の言葉との関係は、その本質に差があるものではなく、厳密には使い分けができないものであるから。

問５　本文の中で述べられている内容に合致しないものを、次のうちから二つ選べ。順序は問わない。

①　家族は言葉を必要とする事態が発生したら無力である、というある社会学者の指摘自体が家族を分節化するさまざまな言葉を誘発している。
②　家族は従来、個人の経験の場としての意味をもっていたが、逆にそれが個人の経験の範囲を狭めてしまうものとして認識し直された。
③　現代の「商品化の精神」によって、だれもが同様の経験をすることができるようになり、個人の経験がもっていたはずの独自性や一回性といった意味が奪われてしまった。
④　家族というものが見直されるに際して、最も注目されたのは、それまで家族の中で軽視されてきた女性の経験であり、

女性をめぐる言葉であった。

⑤『男が言語をつくった』という本は、「家父長制」という概念を用いて「不可視の状態」に置かれてきた女性による言語の占有を意図し、価値観の変換を図ったものである。

⑥女性は、現在でも積み重ねられた歴史の中に置かれているがゆえに、女性自身の言葉ではなく、男性の言葉によって自らを語らざるをえない。

第四講　知識モノ解説

語句

家父長制＝かふちょうせい↓戦前の旧民法に見られるような男中心の家制度。家長である父、男の支配権力の強い家のありかた

ヒエラルキー↓位階制・ピラミッド型の上下関係　ヒエラルヒー・ハイアラーキーともいう

不断＝ふだん↓断えないこと・ノンストップ　常日頃を意味する「普段」と区別しよう

対象＝たいしょう↓学問研究などが向かう相手、物質・対象物・オブジェクト

cf 対象的に見る＝客観的に距離をおいて見る

対称＝たいしょう↓図形的なバランス・シンメトリー　例　線対称・点対称・左右対称

cf 対照＝たいしょう↓質的な差異や対比・コントラスト　例　姉妹なのに対照的な性格だね

端的＝たんてき↓短くずばり

相対化＝そうたいか↓絶対化しない・比較考察の相手とする

復習問題　第四講

次の傍線部にあたる漢字を、次の選択肢から選びなさい。

（ア）言葉のテイ義を正確にする　①底　②体　③提　④訂　⑤定
（イ）男による言葉のセン有状態　①選　②占　③浅　④宣　⑤践
（ウ）物理学の研究対ショウとする　①証　②称　③象　④照　⑤償
（エ）左右対ショウな図形を置く　①象　②昭　③照　④称　⑤床
（オ）これまでチン黙を強いられる　①沈　②鎮　③枕　④陳　⑤珍
（カ）不ダンに雨が降り続く　①談　②段　③断　④弾　⑤暖
（キ）絶対視せずソウ対化する　①相　②壮　③双　④奏　⑤想
（ク）社会の変カクに乗り出す　①閣　②核　③確　④画　⑤革
（ケ）向こうの提案を拒ヒする　①非　②被　③否　④誹　⑤批
（コ）能力の水ジュンを高める　①純　②準　③順　④巡　⑤准

第五講　認識論・脳科学

さて、ここまでわかるということについてさまざまに考えてきましたが、つきつめると、わかり方はふたつのパターンにまとめられるのではないかと思います。つまり、答えが自分の頭の中に用意出来るタイプのわかりと、答えが自分の外（自然とか社会とか）にしか存在しないタイプのわかりです。

答えが自分の頭の中に用意出来る、とはどういうことでしょうか。すでに述べたことですが、われわれが相手の会話を理解出来るのは自分の頭の中にモデルが準備されていて、それと重ね合わせることが出来るからです。

今日はよいお天気ですね、と話しかけられた時は、実は自分の頭の中でも「今日はよいお天気ですね」と、同じ言葉を繰り返しているのです。そして相手の言葉と自分の言葉とがうまく重なったとき、わかったと感じます。外国語がわからないのは、自分の中に重ね合わせに使う材料がないか、あっても少ないため、重ね合わせが出来ないのです。自分の持っている言葉の財産が増え、重ね合わせがうまくゆくようになると、少しずつわかるようになります。

聞き間違えというのは、相手の言葉と自分の持っている言葉との重ね合わせ（あるいは照らし合わせ）に失敗することです。重ね合わせは、予測と言い換えることも出来ます。相手がこう言ったのだろうな、という予測がうまくゆかないのです。失語症の人は手持ちの言葉が失われるため、このような重ね合わせがうまくゆかなくなります。「上を向いてください」というと、横を向いたり、「右を向いてください」というと、左を向いたりします。頭を動かせと言っているらしい、というくらいのおおざっぱな予測は立てられるのですが、それ以上は正確に自分の言葉を相手の言葉に重ね合わすことが出来なくなります。

これはごく単純な重ね合わせの例ですが、もっと複雑な場合も原理的には同じです。

たとえば日本人が好きな話題に卑弥呼という謎の女性があります。劉備・関羽・張飛の活躍で有名な三国志の時代に、曹操が建国した魏という国があります。その魏で編まれた国史、『魏志』の中に記録されている倭国のひとつ邪馬台国の女王です。『魏志』の中の東夷伝・倭人というくだりに書いてあるのだそうです（『中国正史日本伝』、岩波文庫）。

しかし、この邪馬台国が日本のどこにあったのか、卑弥呼というのは日本の歴史でいうとどの人物にあたるのかなどということ

とがよくわかりません。当時の日本はまだ文字を使っていませんから、遠い中国で書き留められたこのわずかな文章だけが頼りになる文字記録なのです。

邪馬台国を考える時、『魏志倭人伝』の記録を正しいものと信じ、この記述を正確に解析することで邪馬台国の場所を特定しようとする研究者がいます。これは筆者のいう重ね合わせ的理解の典型です。どこかに事実（と思われるもの。つまり考え方のモデル）があって、これを唯一絶対のよりどころとして現在の日本の地理にあてはめてゆくわけです。そして、あ、わかった、解けたと感じるのです。あるいは、いや違う、ここにはそんなことは書いてないと考えます。

学校教育という教育形式は、多くがこの重ね合わせ的理解に重点を置いています。将来、知らないことに遭遇したとき、重ね合わせに使えるようなさまざまなモデルを教えようとします。先生がモデルであり、教科書がモデルです。われわれは学校で教えられたことを自分の判断の基準とし、人生を切り開いてゆくことになります。

一方、もうひとつのわかり、つまり答えが自分の外（自然とか社会とか）にしか存在しないタイプのわかりがあります。こちらはかなり性質が違います。

自分の中には重ね合わせるべきモデルは用意されていません。つまり［B］はありません。参照すべき教科書もなく、先生も教えてはくれません。自分で新しく発見してゆくしかないタイプの理解です。

たとえば自然の仕組み、自然の働きに関する理解がそうです。

ふたつの物質の間には引力が存在する、などという理解は自分の頭が持っている経験とは重ね合わせようがありません。これは人間の心が思いついたひとつの仮説です。この仮説が正しいかどうかは、自分の経験だけでは答えの出しようがありません。答えは自然に問うしかありません。つまり、実験しなければわからないのです。実験の中から、あ、そうか、と発見するのです。

心と脳の関係なども、よくわからない自然の働きのひとつです。

「心は脳とは別の存在である」と、考えている哲学者や宗教家がいます。ですが、「心が脳を離れて存在するわけがない」という考えも成り立ちます。どちらの場合も、われわれの頭の中に、答えは用意されていません。重ね合わせるべきモデルはないのです。この関係の答えは自然だけが持っており、自然に問うしか、解決の道はありません。

自然にどうやって答えを尋ねるかというと、まず自分で自分なりの答え、あるいは説明の仕方（仮説といいます）を作り出し、その仮説でうまくゆくかどうかを観察してみるわけです。

実は「心は脳とは別の存在である」というのも、「心が脳を離れて存在するわけがない」というのも、仮説にすぎません。

「心は脳とは別の存在である」と、考えている哲学者や宗教家は、この仮説がうまく自然を説明すると考えています。一七世紀のデカルトという哲学者は、今ここで考えている自分、そして、今ここで考えているという事実がはたして本当のことかどうかを疑っている自分、この考えたり、疑ったりしている存在以外に確かな存在はどこにもない、ということを発見しました。そこから心は身体からは自立した存在である、という強力な思想を展開したのです。

ひとつの仮説を打ち立て、それを心という自然に尋ねてみたところ、心があぁそれでいいよと答えてくれたわけです。

一方、「心は脳の働きである」というのも仮説です。この仮説を用いると、人が死ぬと心がなくなることも、死なないまでも、昏睡になると心の働きがなくなることも、薬を使って脳の働きを変えれば、心の働きが変わることも、脳が損傷されれば心の働きも損傷されることも、すべて説明出来ます。「心は脳の働きである」という仮説に対して、自然がそれで話が合うよ、と答えを示してくれているのです。筆者はこの考えを信じています。おそらく科学者の九九パーセントはこの考えを信じているのではないかと思います。

でも、どちらが本当なのかというと、実はわかりません。なぜなら、われわれの頭の中には答えはなく、答えは自然の中にしか存在しないからです。

科学的研究の世界のわかる・わからないはすべて、このタイプです。わからないことをすでにわかっている説明の仕方によってなぞってゆくのではなく、わからないことを仮説をたてながら説明してゆくのが仕事です。最近は脳の研究が盛んですが、研究が盛んだということは、とりもなおさず脳の働きがどうなっているのか、心の働きがどうなっているのか、よくわかっていないということです。あるいは遺伝子の研究が盛んです。遺伝子もその働きがよくわからないのです。病気の世界もわからないことばかりです。わかった分だけ、わからないことが増加するようなところがあります。ひとつわかると、その向こうに別の問題が発見されます。C研究には終わりというものがないのです。

心の働きの結果である人間のふるまい、さらにその結果である社会の動きなどについての理解も自然現象の理解と似ています。

学校で教わるタイプの理解を重ね合わせ的理解と呼ぶなら、自分で仮説を立ててゆくしかないタイプの理解は発見的理解と呼ぶことが出来ます。われわれはこのふたつのわかり方を駆使して、社会に立ち向かっています。しかし、行動に本当に必要なのは後者であることは説明の必要もないでしょう。社会で生きてゆく、自然の中で生きてゆく、というのはその時その時、新しい発見、新しい仮説を必要とします。

英語の表現に、海図なき海へ旅立つ、というのがあります。

正しい海図が準備されている海を航海するのは安全ですが、大発見時代のようにまだ知られていない、海図のない海に向かって帆を上げるのは大変なことでした。すべて自分の判断にしたがって、海図を作りつつ航海してゆかなければなりません。生きてゆく、というのは海図なき航海に似ています。わかっているようで、何もわかっていないのが人生です。

われわれは何となく、困ったことがあれば誰かがなんとかしてくれるだろう（「誰か」が海図です）、わからないことがあれば誰かが教えてくれるだろう（「誰か」が海図です）と、誰かを期待して生きています。ですが、生きることは、自分の足で立ち、自分の足で歩くことです。世界に立ち向かうためには、自分が使えるしっかりした海図を自分で作ってゆかなければなりません。そうやってはじめて大きい意味や深い意味を発見することが出来るようになるのです。

（山鳥重（やまどりあつし）『「わかる」とはどういうことか　――認識の脳科学』）

問１　傍線部Ａ「答えが自分の外（自然とか社会とか）にしか存在しないタイプのわかり」について次の問に答えよ。

（甲）この種のわかりを端的に表現している語句を本文中より五文字以内で抜き出せ。

（乙）答えが自分の外にしかないことに関連して、人間が社会で生きていくことを何にたとえているか。本文中からもっとも適切な語句を抜き出せ。

問２　空欄［Ｂ］に入れるのにもっとも適切な語句を次の選択肢から一つ選べ。

①　柔軟な知識の運用力　　②　既存の仮説　　③　既知の答え
④　相対的に正しい基準　　⑤　実験による確証

問３　傍線部Ｃ「研究には終わりというものがないのです」について、その理由を本文に即して百字以内で説明せよ。ただし、句読点も字数に数える。

問４　次の各文について、本文の主旨に合致しているものには○、合致しないものには×をつけよ。

①　失語症の人の行動のズレは、問題解決の仮説づくりに失敗したのではなく、言葉のモデルをうしなったことによるものである。
②　邪馬台国の位置をめぐっては証拠となる事実が少なく、そのためさまざまな仮説が入り乱れ、答えをひとつにできない。
③　教育を通じ重ね合わせ的理解のためのモデルを獲得するが、実際の人生では未知な出来事が起こるため、解決の道を自分で発見する型の理解しか役立たない。
④　脳の働きの研究や遺伝子の研究と同様に、人間の行動や社会の動向については、既知のモデルの中で予測する理解は有効ではない。
⑤　「心は脳とは別の存在である」と考えている哲学者や宗教家は、心や脳の研究については仮説を立てて自然に問うてみるわかり方しかないことを理解していない。

第五講　知識モノ解説

文学史・人物解説

●筆者　山鳥　重＝やまどり　あつし（一九三九〜）兵庫県生まれ、神戸大医学部、同大学院修了。記憶障害、失語症、認知障害を専門とする脳科学者

●ルネ・デカルト（一五九六〜一六五〇）フランスの哲学者、数学者、傭兵。『方法序説』の中の「われ思うゆえにわれあり（コギト　エルゴ　スム）」という一節は「倫理社会」の教科書にも載るほど有名

語句

原理的＝げんりてき→発想や思考の根本から・根源的に・本質的に

東夷＝とうい→古代中国の中華思想からくる表現で、東側の野蛮な国（人）を指す

cf　南蛮＝なんばん　西戎＝せいじゅう　北狄＝ほくてき　邪馬台国　卑弥呼

遭遇＝そうぐう→思いがけなく出会うこと・不意の出会いや事件

昏睡＝こんすい→意識不明の状態

復習問題　第五講

次の傍線部にあたる漢字を、次の選択肢から選びなさい。

（ア）知的な財サンを後代に残す　①参　②産　③餐　④賛　⑤散

（イ）難解でフク雑な問題に対処する　①複　②復　③福　④副　⑤腹

（ウ）詳細なキ録を文書化する　①紀　②軌　③既　④器　⑤記

（エ）土壌の成分を解セキする　①析　②績　③積　④籍　⑤斥

（オ）日本の伝統文化の典ケイ事例　①形　②傾　③型　④系　⑤掲

（カ）唯一絶タイの模範解答はない　①体　②態　③耐　④帯　⑤対

（キ）手元の辞書を参ショウする　①証　②賞　③症　④照　⑤象

（ク）生物学の仮セツを実験で証明　①折　②設　③説　④拙　⑤窃

（ケ）叡智をク使して難問にいどむ　①句　②苦　③供　④久　⑤駆

（コ）海図のないコウ海に旅立つ　①講　②航　③公　④後　⑤更

第六講《小説その2》　母親と子供の対比

次の文章は、島尾敏雄の小説『砂嘴（さし）の丘にて』の一節である。「私」の母の話では、かつて折笠先生は、すでに夫もあり二人の赤ん坊まである母に結婚を申し込んだことがあり、それは不調に終わったという。その後、毎年先生から季節の品の贈り物が届けられたりしていた。これを読んで、後の問いに答えよ。

私が始めて折笠先生という人に会ったのは暑中休暇でいつものように私たちが、「いなか」に帰っていた時のことだ。私は（注）尋常科の一年生だったように思う。その年のいなかへは私と上の妹の二人だけが行くことになった。そして母は、いなかに居る間のいつか一日を折笠先生の所に遊びに行くことを私たちに約束させた。

ある日、私と妹は祖母に連れられて、折笠先生の家を尋ねた。

その時の私は、母の疑いのない口ぶりに支えられていた。だが気はすすまなかった。その場合むしろ祖母の方から積極的に私たちは連れ出された。何かの縁故から祖母は折笠先生の人柄について、聞き知る所があって、心を動かしていたような所があった。祖母は、私の母と折笠先生とのいきさつよりはむしろ、折笠先生の家が、太平洋の浜辺寄りのその地方での昔からの古い家の一つで、彼の伯母のかねという人と、若い頃（ころ）にかなり親しいつき合いをしたことに、なつかしさをあおられたようであった。その人はもう大分前に死んでいたが、祖母はおかねさんの実家の様子と、その甥（おい）であるという折笠先生を一度見て置きたいと思ったようだ。

祖母と私と妹とは、私たちのいなかの駅から二つか三つ目の駅で汽車を下り、駅前から小さな町中を通り抜け、町外れの踏切を渡ると、見渡す限りの田圃（たんぼ）のある風景の中で、下駄（げた）の底に吸いつきそうな砂ぼこりの白っぽい県道が、乾き上がって行く手の森かげの方に伸びているのを見た。

A <u>私たちはその白い道を乾ききって歩いて行った。</u>

夏休みで、いなかに帰っている間は、概（おおむ）ね私は自由な思いをしたが、然（しか）しどうしても果たさなければならない義務が二つか三つかは負わされていた。例えば父の方のおじやおばたちの家々を回らなければならないこと。私はそれがあんなに自分にとっ

て嫌悪されていたことが滑稽（こっけい）なことに思い返される。B私がその嫌悪の様子を露骨にしてみせる程、祖母や、そして母も、私をたしなめながら喜ぶことを私は知っていた。私は折笠先生の訪問もその年の夏休みのいやなおつとめの一つに数え挙げていた。

私と妹は、よそ行きの洋服を着なければならなかった。それは特別にそういう日のために都会の母から用意されていたもので、祖母は私たちにそれを着ることを強く要求した。然し、私はそれを着ることを好まなかった。はでな縞（しま）模様の（注）羽二重地のシャツ、そして妹は同じ生地のぞろりとしたワンピース。明らかに一つの反物から分けて作ったことが歴然としていて、そのようなはでな服装を、私たちのいなかでは殆（ほとん）ど見ることが出来ない。その為（ため）に私たちは、いなかの子供たちの揶揄（やゆ）の的になったものだ。そのよそ行きを着ている時の私と妹は、広い道や町筋をさけて、人のいない鉄道線路や田圃道を選ばなければならなかった。その日は祖母がついていたので、いくらか肩身のせまい思いをなくすことが出来たが、見馴（な）れた妹の都会くさい、羽二重地のワンピースや眼元（めもと）深くかぶる帽子などの恰好（かっこう）が、いつものことながらCもう少しどうにかならないものかと思っていた。私は自分の妹を醜いと思い、そのいくらか大人びて見える切れ目の長い眼許（めもと）や、口許の勝気そうに引きしまったあんばいの美しさに気付くことが出来なかった。彼女のえくぼさえ私は醜く思った。彼女の気安げな大胆さを低能のせいにしていた。子供の私は、彼女がいつまでも私の為には荷厄介な付属物のように此（こ）の世の中にあって私の傍（そば）にくっついて邪魔をしているように思っていた。

どんなに長い白い道を歩いたことだったろう。その長い道の途中には氷水屋もラムネ屋も見つけることが出来なかった。そして私たちは再び負わなければならない帰途のその苦労にうんざりした気持ちで折笠先生の家に辿（たど）りついた。

折笠先生は中学校の教師をしていた。それで私たちは、彼を先生と呼んでいたのだが、丁度折悪（あ）しくその日先生は学校の慰安会で、夜遅くしか帰って来ないということであった。

その日私は折笠先生の家のたたずまいから、或（あ）る深く打たれるものを感じた。不幸な静けさのようなものが、彼の屋敷うち一ぱいにみなぎっていた。その屋敷は白い街道筋から坂道の誘導で引きこまれた小高い所に、よく手入れのとどいた丈高の生垣ですっかり囲まれていたが、そこにだけ通ずる細い坂道を登って行く時に、既に訪問者に一種名状しがたい憂愁の感情が、起こって来るようであった。

その日の訪問の印象が、こんなにいつまでも私の心に焼きついているということは恐ろしいことだ。西も東も分からない年頃（としごろ）の私が、そのときの印象だけで、或る型の家のたたずまいと、或る型の人間の気配とについて、固定観念のようなものが出来上

がってしまった。

　こまかなことは忘れたが、ただ二つのことが記憶にあざやかだ。それはその屋敷には蠅（はえ）がいなかったこと。その夜は折笠先生の帰宅が遅くて私たちは先生の奥さんに強く引き留められて泊まったのだが、夜中に私は強いおとなの体臭に眼を覚ましたこと。彼は宴会で酒に酔っていた。おかしなことだが、それは私の期待に合致したのだ。私の母のこしらえごとで折笠先生は不幸な人でなければならなかった。彼は生ける屍（しかばね）のような毎日を鄙（ひな）びたいなかの旧家で、希望を断ち、運命への消極的な復讐（ふくしゅう）の生活を送っている筈（はず）であった。それで彼が泥酔して帰って来たことは、いかにも似つかわしいことに思われた。やっぱりそうだったのだ。私は熟柿（じゅくし）臭い折笠先生に違いない人に抱き上げられたのを知っていたが、何か未知の人への恐怖と、寝ている所を酔っ払いの騒々しさで眠りから引き戻された不快と、私が折笠先生を考える時につきまとっている或る気分の為の羞恥（しゅうち）とで、瞼（まぶた）のうらをわななかせつつ眠りを装っていた。

「………」

　折笠先生がその妻に何か言った言葉に、又私は恥ずかしい思いをした。それは何か子供である私の無心な美しさのようなことに対する彼の詠嘆の言葉であったようだ。然し実際は私は狸寝（たぬきね）をしていて、眼を覚まして彼と初対面の挨拶（あいさつ）をすることが億劫（おっくう）な気持ちと、おとなが子供の私に抱いている感じを崩してしまっては悪いだろうという心遣いで、殊更に身体（からだ）をぐったりさせ、しばらくは、彼の毛むくじゃらの、と感じた腕の中で、見透かされはしないだろうかというおののきと闘っていた。それにしても、折笠先生の奥さんは、何という可哀（かわい）そうな人なのだろうとその時の私は思ったのだ。

「あなた、起こしてしまいますよ。そんなに……」

　その言葉からは、何かしら世間というものからの私に対する批評に似たものをかぎつけてみるだけで、折笠先生とその妻との毎日の生活のどんなかげりもひき出すことは出来なかった。

　あわただしく小さな嵐（あらし）が過ぎ去ってしまったように、いつのまにか私は再び眠りの中に陥（お）ち込んでいた。

　翌朝眼をさましてからの、私のちぐはぐな気持ちを調整する為の努力は、私を一層無口にし、おしゃまなものに見せかけていたであろう。あれ、こんな人だったのかしらん。顔のひげが美しく剃（そ）られて青く見える。血色のいい顔の人。眼が象のそれのように細くてやさしく何処（どこ）にも荒廃の気配など見えはしない。昨夜お酒を飲んで来た不幸な人の面影など、何処にも留（とど）めてはいな

い。そして奥さんとのおだやかな応対。

私ははぐらかされていた。だから一層完全に振る舞おうとして、私は折笠先生が大事にしていたレコードをふみ割ったりした。すると彼は、私の戸惑いするすきも与えずに、こわれたレコードの残骸（ざんがい）を私の見えない所にあわてて押し込んでしまった。私は自分の勘定の彼からの借り方がふくらんで来るように思った。然し救済されている感じを植えつけられたことも事実だ。

（注）匡子（まさこ）はまだ小さかった。一言ものを言わない子。私は彼女を美しいとは思えなかった。彼女が私に美しく見えれば、私の小さな世の中がふくらんでくる期待が持てたのに、私に彼女の美しさは見えなかった。口もとのとがって見えたのが、私がいつも厄介で美しくないものに感じている私の上の妹の、ひねくれの気性に似ていると思い、失望した。頬（ほお）の赤いのは、いなかっぺいだと思えた。

私の母がこしらえあげた物語めいた生活など、此の世の中にありはしなかった。私はそういう知恵を覚えて帰ったのに、何故（なぜ）かその日のことが強く脳裏に刻みつけられてはなれない。

（注）○尋常科の一年生——現在の小学校一年生。
○羽二重——羽織地や礼服地用のなめらかでつやのある上質の絹織物。
○匡子——折笠先生の娘。

問１　傍線部Ａ「私たちはその白い道を乾ききって歩いて行った。」とあるが、「乾ききって」はどのような表現効果をねらったものか。その説明として最も適当なものを、次のうちから一つ選べ。

①　「乾ききって」は、後の「氷水屋もラムネ屋も見つけることが出来なかった。」という表現と照応して、炎天下を歩く私たちのたえがたいのどの乾きを強調している。

②　「乾ききって」は、「乾き上がって」いる炎天下の道という表現と照応して、目的地に早く到達しようとほこりの立つ長

い道のりをひたすら歩む私たちの焦燥感を強調している。

③「乾ききって」は、砂ぼこりが下駄の底に吸いつきそうなほど「乾き上がって」いる白い道という表現と照応して、炎天下を歩かなければならない私たちの悲しさを強調している。

④「乾ききって」は、「乾き上がって」いる白い道という表現と照応して、炎天下の乾いた道を歩く私たちののどの乾きだけでなく、うんざりした気持ちや疲労感を強調している。

⑤「乾ききって」は、「乾き上がって」いる道という表現と照応して、炎天下の白い道を汗とほこりにまみれながら歩く私たちの当惑したみじめな気持ちを強調している。

問２　傍線部Ｂ「私がその嫌悪の様子を露骨にしてみせる程、祖母や、そして母も、私をたしなめながら喜ぶことを私は知っていた。」とあるが、「私」はどのような少年だったと思われるか。その説明として最も適当なものを、次のうちから一つ選べ。

①　祖母や母の態度から、大人のエゴイズムを感じとって鋭く反発する、純真で正義感の強い少年。

②　祖母や母の態度から、大人の本音と建て前は違うものだと見ぬいて敏感に反応する、早熟な少年。

③　祖母や母の態度から、本音と建て前を巧みに使い分ける大人の偽善を感じて失望する、繊細な少年。

④　祖母や母の態度から、自分に対する大人たちの深い愛情を感じとらずにはいられない、心やさしい少年。

⑤　祖母や母の態度から、大人の身勝手さに反発しながらも大人に理解を示す、冷静で賢い少年。

問３　傍線部Ｃ「もう少しどうにかならないものかと思っていた。」とあるが、その時の「私」の気持ちはどのようなものだったのか。最も適当なものを、次のうちから一つ選べ。

①　いなかの子供たちに揶揄される、はでいかにも都会的な服装や恰好と、それを何とも思っていないような妹を、いらだたしく思っていた。

②　自分のはでな縞模様のシャツを誇る気持ちから、自分のと同じ生地の悪趣味な服を好んで着たがる妹を、荷厄介な付属物のように思っていた。

③　都会的な恰好をしていなかの子供たちの揶揄の的になり、自分の醜さにも気付かない妹を、ひどく哀れに思い、どうにかしてやりたいと思っていた。
④　反発しながらもみとめている妹の本当の美しさに対する恥じらいから、洗練された都会的な妹の服装を、かえってはでみっともないものと思っていた。
⑤　醜いと思う妹と一緒に歩くことをきらう気持ちから、いつもは気にならなかった妹の都会的な服装を、はでみっともないものと思っていた。

問４　この文章は、少年だった「私」のどのような体験を描いたものか。その説明として最も適当なものを、次のうちから一つ選べ。

①　母の話とは違って幸福そうな折笠先生の姿に予想がはぐらかされた上に、先生の娘の匡子が美しくもなくひねくれて見えるのに失望したという体験を、鋭い感受性を通して描いている。
②　常に母や祖母の期待通りに演技する少年が、眠っている自分を抱き上げて無心な美しさを詠嘆した純粋な折笠先生に対しても無邪気さを装ってしまったという体験を、反省をまじえて描いている。
③　母の話から折笠先生夫妻に不幸のかげりをかぎつけようとしていたが、結局、それは母のこしらえごとであったと悟って落胆しながらも、救済されたという体験を、ドラマチックに描いている。
④　折笠先生が不幸な人だということは、思い込みにすぎないと悟ったにもかかわらず、先生とその家にまつわるどこか暗い印象がぬぐいきれなかったという体験を、鋭い感受性を通して描いている。
⑤　母の話から大人の世界を理解できたと確信していた少年が、折笠先生の幸福な現実を見て動揺し、こしらえごとを語ってきた母に対する不信と憎悪の念を抱いた体験を、淡々と描いている。

第六講　知識モノ解説

文学史・人物解説

●島尾敏雄＝しまお　としお（一九一七〜一九八六）神奈川県生まれ、九州帝国大学・法文学部卒。

語句

尋常科＝じんじょうか↓尋常小学校・旧制の小学校／尋常は「普通」の意味
あんばい＝塩梅・按配・案配↓物事の様子・具合・調子
縁故＝えんこ↓血縁などのつながり
いきさつ＝経緯（「けいい」とも読む）・そこにいたる背景・因果の糸・緯は横糸、経は縦糸の意味
たしなめる＝軽くしかる・おだやかに注意する　cf たしなむ＝心得がある・親しむ・つつしむなどの意味
反物＝たんもの↓和服の生地
歴然＝れきぜん↓はっきり
揶揄＝やゆ↓からかいや皮肉
肩身の狭い＝かたみのせまい↓恥ずかしく引け目を感じる　cf 肩肘（かたひじ）張（は）らない＝堅苦（かたくる）しくない
荷厄介＝にやっかい↓厄介と同じ・手間がかかって面倒
折悪しく＝おりあしく↓タイミングわるく
たたずまい↓様子や醸し出す雰囲気
名状しがたい＝めいじょうしがたい↓言葉では表現しにくい・いわく言い難い
憂愁＝ゆうしゅう↓もの悲しい雰囲気

羞恥＝しゅうち→恥ずかしいという感情
　同音異義語　周知＝広く知れ渡っている　衆知＝多くの人々の知恵
屍＝しかばね→死体・死骸
鄙びた＝ひなびた→いなかっぽい
狸寝　狸寝入り＝眠ったふりをする
わななかせる＝ふるわせる・おののく・戦慄（せんりつ）
無心＝むしん→無邪気・無垢／「無心する」には遠慮なく金品をねだるの意味もある
詠嘆＝えいたん→感動・感動を声に出すこと
おしゃま＝通常は、女の子のませた様子ですが、本文では、大人しくしているという意味　cf借りてきた猫
勘定＝かんじょう→計算・貸し借りの計算。本文では、相手に対して悪いな、申し訳ないという感情を心の借金とし
　て表現しています

復習問題　第六講

次の傍線部にあたる漢字を、次の選択肢から選びなさい。

（ア）夏期休カの到来を待ちわびる　　①科　②暇　③過　④課　⑤禍

（イ）キ車の線路沿いを歩く　　①気　②軌　③騎　④汽　⑤貴

（ウ）教員のイ安会に出席する　　①易　②居　③慰　④医　⑤偉

（エ）厄カイな問題を解決する　　①怪　②晦　③回　④戒　⑤介

（オ）人心の荒ハイに抵抗する　　①輩　②灰　③敗　④排　⑤廃

次の語句の意味として最も適当なものを、次の選択肢から選びなさい。

（カ）名状しがたい

①実体なく名ばかりの　②有名とは言えない　③言葉で表現できない

④他者から承認されない　⑤確かに思い出せない

（キ）無心

①純真無垢な心　②無意識の状態　③前後不覚の状態

④欲求欲望の強い　⑤社会について無関心

（ク）億劫

①遠慮がち　②意地をはる　③思慮深い

④面倒くさい　⑤体裁を繕(つくろ)う

第七講《小説その3》母親と子供の関係（継母と娘）

次の文章は、幸田文の小説『おとうと』の一節である。これを読んで、後の問いに答えよ。

げんと碧郎らは割合上機嫌に夏休みの一日一日を過ごしていたが、母はずっと憂鬱にあまりいい顔はしていなかった。一ツにはレウマチの悪化もあったが、碧郎への態度のとりかたについて父と意見の合わないことも、憂鬱の大きな原因らしく察せられた。だから、ときに碧郎が屈託なくはしゃいで大笑いしたりすると、A<u>げんは母をはばかってびっくりとする。</u>その点碧郎は何の心遣いもないのんき坊主だった。そんなある日、母への訪問客があった。ご信仰の友達で、古くからの交際である。母がこの家へ後妻に来る以前からのつきあいがずっと続いているのだが、金のある家庭に円満な生活をしている、いわゆるいい奥さまである。美貌で身なりがよくて、強い意見というものを有たず、優しい人なのだが、交際が好きである。年配は母とほぼ同年齢だった。そういう見た眼にも明るい人が訪ねて来てくれたことは、家の中じゅうへ光がはいってきたようなもので、憂鬱な母もいそいそと迎え、げんも嬉しかった。母は久しぶりに楽しげであり、客はやや長く話しこんでいて、帰りにげんにも愛敬よく挨拶して行った。げんは何一つ不愉快を予想していなかった。

それが、客を門まで送りだして座敷へあがると、母の顔はこわらしいものに引っ吊れていた。そして、「ちょっと話したいことがあってよ」と呼ばれた。

弟のことだと思った。が、意外だった。「あなたいつか、銀座で田沼さんの奥さまに逢ったっていったわね。」

「ええ」と答えるものの何事だか見当はつかない。

「そのとき、いい加減長々とお話していたんでしょ？　私、ただ逢ったという単純なことだとばかり思いこんでいたけど、そういうの、私のばかかしらん。私はあなたがうそをつくとは思ってもいなかったんだけど、私みたいにばか正直なのもつくづくよしあしね。」母はよほどおこっているらしく、眼つきが許すまじという色を見せて、B<u>いいかたがいやにねじれていた。</u>圧されつつ、げんはわからない。そんなことをいわれる覚えはなかった。

「そのときのこと覚えている？」

「ええ。」

「それならよく考えて、どういう会話をしたか、ありのままに私にも一度いってごらんなさい。」

げんは素早くそのときのことを思いうかべて検べるけれど、合点が行かない。「私なんかいけないことといったんですか。」

「――素直にいってごらんっていえば！　いったんですかなんて訊かれたって、私が訊いていた当人じゃないもの。」

げんは恐れてだまっていた。母が待ちきれずにいいだした。「あのとき、私が万年筆の具合が悪くなったから丸善へ持って行って修繕して来て頂戴って頼んだんだったわね。」

「ええ、そうだったわ。」

「田沼さんの奥さまにあんた、お父さんの万年筆でなくて母さんのだ、母さんのだと幾度もいったんじゃない！　母さんのわざわざ学校の帰りにお使いにやらされるんだっていったでしょ！　こんなお使いしていれば、通学距離が遠いところへもってきて手間が取れるから、うちへ帰るの日が暮れるって嘆かなかった？」

　これはだめだ、とてもいい解くことはできないと思われた。なぜなら、母にいわれていることは全部見当違いなことなのだけれど、しかしそのなかに使われていることばは一ツ一ツ思いあたる影をもっていた。たしかに会話のなかに母の万年筆ということばもあり、帰りが遅くなる云々もあった。が、大切なことが間違われていた。会話は二人のするものであって、一人でするものじゃない。問われて答えたことが一緒くたにされて悪意な解釈をされてしまっている場合は、はなはだいい解きにくいだろう。母はいうだけいうとじっとげんを見つめて、意識して無言になった。いい解こうとする気を起こさせないほど母の怒りが現れていた。絶望の空気が漂った。だが、げんは一しょう懸命にそれからそれと考えた。第一に、なぜあの奥さまはそんなへんなことを母へいうのだろうということだった。第二に、母があの奥さまの話を悪く取ってしまったのではないかという疑いである。第三に、あの夫人の微笑である。美貌の微笑が憎らしくおもえた。あのときも他意なく親しく優しく、げんのお使いをすることをねぎらい、ほほえんでさよならをした、たったいまも門のところでげんに笑いかけて別れて行った、――あの微笑の優しさのどこにげんを誣(注)いるものが隠されているんだろう。ふしぎであった。

　母は無言くらべをしているようなげんにたまらなくなる。「どうして何もいわないの？　いえないんじゃない？　……私はね、あなたがまさか陰でそんないやなことをいってると信じたくないのよ。だけど、あんたがそんなふうにへんな陰口きかないじゃい

られないなら、それもそれでしかたがないと思うの。正直にいって頂戴。田沼さんの奥さまに訴えるくらいなら、なぜ私にじかにいわないの。私あんたにいい加減に扱われていたと思うと、情ないし腹がたってたまらない。どうなのよ、返辞なさいよ。」

　母は涙をはらはらとこぼした。げんは母は悪くないと感じた。気の毒な気がした。「母さん、あのおばさまにだまされてるんじゃない？　何て聞かされたのか知らないけど、あのおばさまがへんなんじゃないかしら。」

　それはほんとうにげんの思ったままをいったことばだった。が、母はあっけにとられたというようすをし、いうべきことばがないといった表情でげんを見た。「まあ、あんたって人はまあ。……よくもそんな、田沼さんの奥さまはそんなかたじゃないわ、そんなだますなんて――だまして一体誰(だれ)が何の得になるのよ。」

「じゃあ、母さんはあのおばさまのいうことを全部信用してるのね。」

　C母はぐっと詰まった。眼だけが躍起になっていて、口はだまって返辞をしなかった。げんはそれを見ていて、むかむかっとむちゃくちゃになった。「母さんは、あたしを信用していないのね、いいわ。田沼さんのおばさまはそんな人じゃないって母さんは私にいうけど、田沼さんのおばさまにもげんはそんな子じゃないっていってもらいたいわ。あたし、母さんにある程度は信用してもらってると思ってた！」

　おしまいのほうは涙声になった。母は眼ばかりの顔をつと横へそらした。「あたし、いわない。いわなかったわ。田沼さんのおばさまはあのとき、どこへ行くの？　お父さんの万年筆ですかと訊いたわ。あたし、返辞しただけだわ。これから丸善へ行って帰るんじゃ遅くなるだろうとか、いつもお使いするのか、よくいうこと聴くのね、うちの栄子はしてくれたことないとかいったわ。……母さんがなんと思ったって、あの人とあのとき話したのあたしなんですもの。あたしはあのおばさま、なんて意地の悪いうそつきなんだろうとはっきりわかったわ。」げんは興奮でがたがた顫(ふる)えていた。

「――ああ、後悔してくれるかと思えば逆に噛(か)みつくのね、あんたは。」母は田沼夫人のいうことをまったく信じこんでい、げんにちっとも信用をもっていないのである。げんは母へぐうっと不快を募らせた。

「あんたもそんなふうに私を睨(にら)んでどうするの？　……碧郎さんといいあんたといい――あたしもうどうしていいかわからない！」

　どうしていいかわからないと悲しげにいわれて、Dげんはふわっと母の悲嘆のなかへ惹(ひ)きいれられた。母とやりあうとき、い

つでもげんは母を疎ましく憎らしく思う感情と、気の毒に申しわけなく思う感情と、相反する二ツの感情の両方へあちこち引っ張りまわされて、しまいにはもうどうでもいいから、とにかく早くその場が済むようにと思うのである。母もげんもどちらからともなく立ってしまった。いずれ母は例によって自室で祈りがはじまるのだろう、げんは台所よりほか居どころはない。

（注）○訨いる——事実をまげて人を悪くいうこと。

問１　傍線部Ａ「げんは母をはばかってびっくりとする。」とあるが、ここでのげんの気持ちの説明として最も適当なものを、次のうちから一つ選べ。

①　母の憂鬱な様子に気づかず、ひとりではしゃいでいる碧郎の無神経さに、驚きあきれている。
②　碧郎の明るい笑い声によって、かえって暗く沈んで行く母の屈折した心理を危ぶんでいる。
③　神経質な母のひどく不機嫌な様子に遠慮して、弟の笑い声にもびっくりするほどおびえている。
④　母の憂鬱の原因を察するにつけ、弟ののんきな笑い声が母を刺激することをおそれている。
⑤　常に憂鬱な母にひきくらべ、自分たちだけが楽しそうにすることに、うしろめたさを感じている。

問２　傍線部Ｂ「いいかたがいやにねじれていた。」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次のうちから一つ選べ。

①　まったく筋の通らないことを言った。
②　事実をひどくねじ曲げた言い方をした。
③　非常にいじけたようなことばづかいをした。
④　ひねくれて訳の分からないことを言った。
⑤　ひどく皮肉のこもった言い方をした。

問３　傍線部Ｃ「母はぐっと詰まった。」とあるが、それはなぜか。その説明として最も適当なものを、次のうちから一つ選べ。

①　母の涙にもたじろがずげんが思いがけず田沼夫人の批判をし、わが子としてはふさわしくないことばまで口にするのを聞いて、驚きと悲しみに襲われたから。

②　言いたいことはだれよりもまず自分に話せと言いながらも、結局は友人のことばだけを重んじてしまっていることを、げんの一言によって鋭く指摘されたから。

③　茫然(ぼうぜん)とした心理状態の虚を突いて出て来たげんのことばにより、それまで自分の信じ込んできた事が激しく揺さぶられ、不安が一度に胸に広がるのを感じたから。

④　もともと神経質な母は先刻来の口論にだんだんと気持ちが不安定となっていたが、年来の信仰の友とたのむ人をげんになじられ、その動揺が極度に達したから。

⑤　感情的な母親と冷静な子供との間では議論の帰結は明らかで、無言だったげんが発言し始めると、母の追及のことばはたちまちその論理の矛盾をあらわしたから。

問４　傍線部Ｄ「げんはふわっと母の悲嘆のなかへ惹きいれられた。」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次のうちから一つ選べ。

①　ふだんからの行き違いもあり、感情の赴くままに激しく言い争ってしまった母ではあったが、その深く悲しげな様子に、我知らず母への同情の思いがわき出てきたということ。

②　友達のことばのみを信用し自分をまるで眼中に置いてくれない母のやり方に、顫えるほど興奮し怒ったが、争いの後の反動として母の悲嘆への謝罪に似た思いに駆られたということ。

③　弟を間にした反目もあり、不快の念は強烈であったが、口論の後の母の悲しげな姿に、後妻として自分と弟の世話をしてくれているその人への和解の心が生まれたということ。

④　いさかいのために出会ったような二人ではあったが、その母への相反する二つの感情のうち、このときは自己の意志に反するように母を気の毒に思う感情が勝ってしまったということ。

⑤　母の流した涙に本当は母は悪くないのだと信じながらも行き掛かり上激しく抗弁したが、それに当惑した母への哀れみの思いが無意識のうちに復活してきたということ。

第七講　知識モノ解説

文学史・人物解説

●筆者　幸田文＝こうだ　あや（一九〇四〜一九九〇）東京生まれ、文豪、幸田露伴の次女。代表作は本作の『おとうと』のほか『父　その死』『きもの』『みそっかす』など

●幸田露伴＝こうだ　ろはん（一八六七〜一九四七）東京生まれ、東京英学校（今の青山学院大）中退。筆者の父。本文中にも「父」として登場。明治の文豪のひとりで、文学結社「硯友社（けんゆうしゃ）」の尾崎紅葉とも親交があった。代表作『五重塔』『風流仏（ふうりゅうぶつ）』

●青木玉＝あおき　たま（一九二九〜）東京生まれ、東京女子大国語科卒。今回の文章には登場しませんが、筆者の娘で作家。テレビ朝日の「徹子の部屋」にも出演。代表作『小石川の家』

語句

屈託ない＝くったくない→こだわりや心配がない・無邪気
　cf屈託する→物事にあきている・することがなくいやになる
はばかる＝憚る→「〜をはばかる」で、つつしむ・遠慮するの意味。幅をきかせる・のさばるの意味もある
　例「憎まれっ子、世にはばかる」
後妻＝ごさい→妻と死別あるいは離婚した後、結婚した妻。のちぞえ
愛敬＝あいきょう→にこやかで親しみやすさ、かわいらしさがある。「愛嬌」とも書く
こわらしい＝強らしい→こわばってかたい
合点＝がてん→同意、納得すること。得心が行く
他意＝たい→心中にかくされた別の意図・悪意
あっけにとられる→意外さに驚きあきれる
躍起＝やっき→あせってむきになる
皮肉＝ひにく→表面上のことば使いに反し、真意は相手への悪口。遠回しの批判・あてこすり・アイロニー・イロニー
抗弁＝こうべん→反論

復習問題　第七講

次の傍線部にあたる漢字を、次の選択肢から選びなさい。

（ア）あの奥様は交サイが好きな方だ　①催　②際　③祭　④裁　⑤再

（イ）気持ちのいいアイ拶を交わす　①逢　②合　③相　④愛　⑤挨

（ウ）帰り道のキョ離が遠くなる　①炬　②拒　③距　④据　⑤居

（エ）いい加ゲンに扱われると腹が立つ　①源　②減　③元　④厳　⑤眩

（オ）相手の態度に興フンしてしまう　①奮　②憤　③噴　④紛　⑤粉

次の語句の意味として最も適当なものを、次の選択肢から選びなさい。

（カ）屈託ない
①苦労をしらない　②話を聞かない　③無邪気である
④信用できない　⑤融通がきかない

（キ）他意なく
①あっけない　②自己本位な　③遠慮がない
④裏の意図はない　⑤幼く弱い

（ク）躍起になる
①自暴自棄になる　②むきになる　③元気になる
④相手を見下す　⑤挑発的になる

第八講　科学技術史・大学史

技術に関する職能集団は、人間が技術を社会的に利用し始めたころからすでに何らかの形では存在するようになったと考えられる。親方・徒弟制度が、正式に採用されるか否かは別にして、それに類した教育・伝承の方法は、ほとんど普遍的に、どの時代、どの地域にも存在する。そこでは、殆（ほとん）ど例外なく、閉鎖的な仕組みが造られた。こういう場合には、技術と知識とは截然（せつぜん）と分かれていることは少なく、「ノウハウ」として理解されていたから、例えば天文を読む知識も、編暦や占いの「技術」と直結するものであった。そして、そうした職能は世襲か、もしくはそれに近い伝承形態によって後代へと伝えられるものだったと言えよう。必然的にそれらは、閉鎖的にならざるを得なくなり、行動規範としては、何よりもまず、自分がその集団のなかで伝えられた技術や知識を、その集団の外部の人間に伝えることが、最も厳しく戒められる倫理的な制約となった。

火を人間に解放して罰せられたプロメテウスの故事は、神話の世界ではあるが、このことを鮮やかに示すものである。古代ギリシャのピュタゴラス教団は、むしろ宗教的な結社であったと考えられているが、ここでも、知識と技術との秘匿には極めて厳しい制限が付されており、この規制を侵した者に対する罰則も「樽（たる）詰めの刑」などという凄（すさ）まじいものであったという。いずれにしても、知識や技術は不特定多数の人々に開放されるべきものではなく、[A]限られた人間たち、選ばれた人々に縦に伝承されるべきものであったと考えられる。

職能集団の「掟（おきて）」として古来有名なのは、やはり古代ギリシャ、コスの医師集団の行動規範であった。これはしばしば「ヒポクラテスの誓い」という形で、歴史上伝承されてきたものである。この誓いは、ギリシャの神々に対して、医師としてなすべきこと、なさざるべきことを宣誓するという形式をとっており、医師という職能集団の明文化された行動規範として機能したことは、必ずしも医師に限定されない、むしろ当時の倫理観一般からの反映があることは確かであるにしても、はっきりしている。いわゆるヒポクラテス集典と言われるもののなかには、この『誓い』のほかにも、『医師の心得』、『医師について』、『品位について』、『法』など、倫理的な側面から医師集団の理想を記したものが残されている（大槻真一郎（おおつきしんいちろう）翻訳・編集責任『ヒポクラテス全集』全三巻、エンタプライズ、一九八五～八八）。

この「誓い」でも、最初に述べられているのは、師から得た知識や技術を誰に伝えるべきか、また伝えるべきでないか、が明言される。致死薬は誰に頼まれても投与しない、堕胎はしない、医師の立場を利用して異性と関係を結ばない、患者や家族について治療の機会を通じて知ったことは決して他に漏らさない、などの項目が並んでいる。

　このヒポクラテスの誓いと呼ばれるものは、上にも書いたように、神々の前で行われる誓約であって、もしこれを破れば神々からの罰則があることになっており、言い換えれば、制裁事項に関しては、人間である医師集団は定めていないという点が注目される。

　西欧の歴史のなかでは、こうした医師の誓約は、やがてキリスト教と結び付いて、唯一神に対する誓約という形に変形していく。一二世紀ルネサンスの結果、ギリシャ・ローマ時代の古典文献が流入すると同時に、高度な知識の教育のための社会的制度として、大学が生（うま）れ、B<u>知識は、ある意味では、縦の伝承形式から「解放」されることになった。</u>

　一二世紀ルネサンス以降、西欧世界では、大学が誕生して、知的伝統の継承と発展の機関として、確固たる地位を築いた。この段階で、技術の伝統と知識の伝統とは明確に分離したと考えてよい。しかし、大学が最初から知識の伝統のなかでの職業者を養成する機関として生れたわけではなかった。もともと、最も重要な知的職能集団である聖職者に関しては、教会組織、あるいは修道会組織がその任に当たってきていたわけであるし、医師にしても、大学が存在しない時代から、その養成は親方・徒弟のような形で行われて来ていた。しかし大学が社会制度として確立されてみると、そこにこうした知的職能者の養成を委（ゆだ）ねることは、妥当な選択であると考えられた。したがって、一三世紀になると、大学には付属の医学校、神学校、法学校が併設されるようになった。それに伴って、厳しくその伝播（でんぱ）が制限されていた知識は、大学という新しい教育制度のなかで、よりオープンな性格のものに変質していく。

　しかし、誤解されてならないのは、このような大学に期待されたのは、世俗的な職業教育機関の機能ではなかったという点である。第一に、現代社会のように、大学が、社会的な制度として定着し、また、大学に入るための予備的な意味も籠（こ）めて、中等教育が整備されている、というような状況とは全く異なって、当時の大学は、文字通り学びたい人間の集まりであった。したがって、そこを卒業することが何らかの社会的に評価される「資格」と結び付くということもあり得ない話であった。一言で言ってしまえば、C<u>「リセンシアート」（資格取得者）を作り出す機関として大学が機能していた</u>わけではなかったのである。

もう一つのより重大な違いは、医学校、神学校、法学校の修了者である医師、聖職者、法曹家たちの、社会における働きである。

これらの仕事は、確かに一面では「職業」である。彼らは、その仕事をすることによって、生計を立てている。しかし、これらの職業は、実は神からの「召命」という決定的な前提があって初めて成立するものであった。こうした仕事に就く人間は、それなりに才能に恵まれ、能力を備えている必要がある。その才能や能力は、もちろん、特に神がそれらの人々を選んで与えたものである。それは、彼らに、そうした仕事に従事させようと、神がもともと目論(もくろ)んだことに由来している。

何故(なぜ)なら、そうした仕事は、この世で「苦しんでいる人々」に、救いの手、助けの手を差し伸べるものだからである。身体の病いに苦しみ、精神の不安に苦しみ、そして社会的な正義を犯されて苦しんでいる人々に対して、神は、特別に才能を与え、自分の意図を実現する手先になってくれるべき人々を用意し、それらの人々の手を借りて、助けと慰め、正しさと補いとを、与えようとした。したがって、神は、彼らに常に呼びかけているのである。「苦しんでいる人々のために、（私があなたに与えた）その才能を使いませんか？」と。

呼びかけられた側が、この呼びかけを感じ、かつその呼びかけに同意して（それは、神が人間の自由意志を尊重することの証(あかし)と考えられた）、神の前に「やらせて戴(いただ)きましょう」と誓約して、初めて、これらの職業は成立するものとなる。彼らは、神の言葉、神の愛、神の正義を具現するための媒体なのである。これらの仕事が、例えば英語では《profession》と呼ばれるのは、「神との約束を受け入れ、実行する誓約をする」という意味であり、あるいはまた《vocation》と呼ばれるのは、「神の呼びかけ」という意味である。

いずれにしても、これらの仕事が、他の一般の職業、例えば「木樵(きこり)」、「パン焼き」、「蹄鉄打(ていてつう)ち」、「肉屋」などとはD<u>本質的に異なる</u>と考えられたのは、単に、医師、聖職者、法曹家が「知的」な職業であるからではなく、まさしくそのような理由、つまりは、それらが、そしてそれらだけが、神の「召命」によると考えられたからであった。

（村上陽一郎『科学者とは何か』による）

（注）　○プロメテウス＝ギリシャ神話中のタイタン族の英雄。天上の火を人間に与えたためにゼウスの怒りを買い、罰として

コーカサス山に鎖でつながれ大鷲(おおわし)に肝臓を食われたが、後にヘラクレスに助けられたという。〇ピュタゴラス教団＝前六世紀頃の哲学者・数学者であるピュタゴラス（ピタゴラスのこと）が、南イタリアのクロトンで創立した宗教団体兼学術団体。霊魂の不滅と輪廻(りんね)を信じて魂の浄化のために禁欲と戒律への服従を重んじ、魂を鎮める音楽と永遠不変の真理を教える数学の研究に精進した。〇コス＝ギリシャ領の小アジアにあった地名。ヒポクラテスの生誕の地。〇ヒポクラテス＝前四六〇頃～前三七五頃。ギリシャの医者。迷信を排して観察や経験を重んじ、当時の医術を集大成した。医学の祖・医術の父と呼ばれる。

問１　傍線部Ａ「限られた人間たち、選ばれた人々」とは、どのような人々ですか。最も適当なものを一つ選びなさい。

①　大学で学ぶことができる人々
②　神によって才能が与えられた人々
③　閉鎖的な職能集団に所属している人々
④　宗教的結社の指導者になれるような人々
⑤　いかなる時も職業倫理を守ることができる人々

問２　傍線部Ｂ「知識は、ある意味では、縦の伝承形式から『解放』されることになった」とはどのような意味ですか。最も適当なものを一つ選びなさい。

①　ルネサンスの結果として、大学ではキリスト教関係の文献からばかりでなく、ギリシャ・ローマ時代の古典文献からも知識を得ることができるようになったこと。
②　医学校・神学校などの付属した大学の出現により、親方・徒弟制度が完全に否定され、技術と知識の伝播に厳しい制限が伴わなくなったということ。
③　親方・徒弟制度のように閉鎖的であった知的職能者の養成が、学びたい人間に門戸を開いた大学という教育制度に委ねられたということ。
④　大学に入るための予備的な意味をもった中等教育を受けていれば、文字通り学びたい人間は誰でも大学で知識を得ることができるようになったこと。

⑤　大学に付属した医学校で教育が行われるようになるとともに、かつてのように、唯一神に対する医師の誓約が強制されなくなったこと。

問３　傍線部Ｃ「『リセンシアート』（資格取得者）を作り出す機関として大学が機能していたわけではなかった」とありますが、では大学はどのような機関として機能していたのですか。最も適当なものを一つ選びなさい。

①　職能集団の「掟」を否定し、宗教的・倫理的に中立の立場をとる教育機関として機能していた。
②　親方・徒弟制が果たした役割を継承し、より能率的に技術的職能者を養成する機関として機能していた。
③　西欧の歴史の中で最も重要な知的職能集団である聖職者のみを養成する機関として機能していた。
④　知識の伝統と技術の伝統とを明確に分離し、知的伝統を継承・発展させる機関として機能していた。
⑤　社会的に評価される「資格」の世俗性を否定し、崇高な神の英知を教える機関として機能していた。

問４　傍線部Ｄ「本質的に異なる」とありますが、どのような点で異なっているのですか。最も適当なものを一つ選びなさい。

①　医師、聖職者、法曹家という職業は才能の有無によらず本人の自由意志によって選ぶことを神に許されているという点。
②　医師、聖職者、法曹家という職業はこの世で「苦しんでいる人々」に奉仕しているという点。
③　医師、聖職者、法曹家という職業は大学で学ぶことによって誰でもが就くことができるという点。
④　医師、聖職者、法曹家という職業は神の呼びかけに応じ神の意図を実現するためのものであるという点。
⑤　医師、聖職者、法曹家という職業は神が与えた才能だけを必要としているという点。

第八講　知識モノ解説

文学史・人物解説

●筆者　村上陽一郎＝むらかみ　よういちろう（一九三六〜）東京都生まれ、東大教養学部科学史科学哲学分科卒、同大学院比較文化専攻博士課程修了。科学史科学哲学分野の碩学（せきがく）、学問界のアイドル。「受験サプリ高１高２現代文」第六講でも登場しています（そちらは、杉田玄白の翻訳に関する考察）。学年問わず、そちらもアタックしてみて

語句

職能＝しょくのう→職業上必要とされる才能・スキル
截然＝せつぜん→はっきりと
世襲＝せしゅう→子孫が代々受け継ぐこと　cf 踏襲　襲名
規範＝きはん→ルール・守るべき道徳の規準
戒める＝いましめる→禁止する・抑制する
倫理＝りんり→ひとのなすべきこと、なさざるべきことを考えること・道徳哲学・エシックス　倫理観
制約＝せいやく→縛り・条件
故事＝こじ→言い伝え・昔あったこと
秘匿＝ひとく→人に知られないように隠すこと・隠匿
明文化＝めいぶんか→文字化や文章化してクリアにすること
制裁＝せいさい→規則に従わないものをこらしめること・懲罰
妥当＝だとう→適切であること・受け入れ可能であること
中等教育→中学校と高校（そこで学んでいるのが生徒）
　cf 大学が高等教育（そこで学んでいるのが学生）　小学校が初等教育（そこで学んでいるのが児童）
当時の大学→ウニベルスタシス・学びたい者と教える者との組合（ユニオン）
目論む＝もくろむ→計画をめぐらす・くわだてる
具現＝ぐげん→具体的な形にあらわすこと

復習問題　第八講

次の傍線部にあたる漢字を、次の選択肢から選びなさい。

（ア）縦の伝ショウ形式を採用する　①承　②証　③省　④招　⑤翔

（イ）気ショウ予報の技術を学ぶ　①床　②像　③象　④相　⑤照

（ウ）集団の厳格な規ハンを守る　①汎　②畔　③版　④磐　⑤範

（エ）厳しい条件やセイ約の下にある　①声　②制　③精　④聖　⑤世

（オ）樽詰めの刑などの罰ソクがある　①束　②即　③捉　④則　⑤側

（カ）道徳や倫理カンが問われる問題　①歓　②勘　③観　④監　⑤寛

（キ）チ死薬を投与してはならない　①弛　②治　③致　④置　⑤遅

（ク）相手に経済的な制サイを加える　①栽　②裁　③催　④災　⑤債

（ケ）唯一神に対するセイ約を果たす　①誓　②制　③性　④聖　⑤姓

（コ）医学校や法学校をヘイ設する　①弊　②幣　③丙　④併　⑤塀

第九講　芸術論・音楽史・音楽社会学

次の文章を読んで、設問に答えなさい。なお、各段落の冒頭には、ア〜キの番号を付してある。

ア　世界の他のどんな文化にも見られない西洋音楽の特質の一つに、それがA「再生技術」の開発に全力を傾注し、それをモーターとして一〇〇〇年以上にわたって発展してきたという点が挙げられる。このことはグレゴリオ聖歌以来の西洋音楽とキリスト教の密接な結びつきと、深く関わっていたのだろう。聖なる歌はいつでもどこでも同じように歌われねばならない。勝手な歌い方をして、土着の異教徒の歌と混ざり合ってはいけない。神の声は世界の津々浦々まで、「正しい形で」伝承されなければならないのである。生まれた瞬間に消えていく音楽というはかない芸術を、固定し複製可能なものにしようとしてきた点で、西洋の音楽は極めて特異な性格を持っていた。

イ　おそらく「再生技術開発史」としての西洋音楽の歴史は、B三つの段階に分けて考えることが出来よう。その第一段階が、中世からルネサンスにかけての、五線譜の開発の歴史である。これは音響の数値化の歴史であったとも言える。音高／音価をそれぞれ縦軸／横軸とする、音空間の設計図の開発史である。周知のように五線譜においては、まるで方眼紙のように、縦線と横線とが等間隔で整然と引かれている。そして西洋の音楽では専ら、その目盛上に正確に記すことが出来る楽音（いわゆるドレミファの音階上の音）のみが用いられ、それ以外のノイズは排除される。また二対一（♩：♪）といった具合に、数比として示すことが出来る音価の関係のみが使用され、いわく言いがたい（数比化しにくい）「こぶし」のような揺れは、楽譜からは原則として取り除かれる。音楽をいわば身体から引き剝（は）がし、客観化するわけである。リズムが身体にへばりついている（その人の身に備わったものである）限り、それはあくまで個人の「芸」という時間的／空間的制約を超えることは出来ない。西洋音楽がこれほどまでに世界中で広まりえたのは、マックス・ウェーバー[注1]が『音楽社会学』の中で「音楽の合理化のプロセス」として考察したところの、この客観化によるところが大きかった。

ウ　五線譜として合理化された部分は他人でも再生出来るが、それ以外の部分は生身の人間の身体から決して分離させることが出来ない。例えばショパンのノクターンやマズルカが彼自身によって一体どのように弾かれていたか。それこそがこれらの曲に

生命を吹き込んでいただろう、ショパンによる演奏の繊細きわまりないテンポの揺れが、どのようなものであったか。いくら楽譜を眺めていてもそれは分からない。五線譜に収まっている音は何とか再生が可能であるが、そこにはまりきらないニュアンスにこそ宿っていたショパンの「芸」(C)は、彼の死とともに永遠に失われてしまった。

エ　数値化不能の「生身の身体にへばりついている部分」まで含め、音楽をほとんどそのまま伝承する確実なやり方は、日本の伝統芸能のような厳格な徒弟制度を通して、身体コピーを作る方法だろう。楽譜に記せない部分（それは多くの場合、身体的要素であるわけだが）まで含めて、曲の弾き方を完全に身体で理解している人間を育てるのである。一八世紀くらいまでの作曲家には、「後世に作品を残す」という意識はあまりなかった。バッハにしてもモーツァルトにしても、その作品の多くはいわば「使い捨て」であって、だからこそ《マタイ受難曲》のような大傑作も初演から一〇〇年近く演奏されず、お蔵入りしたままだったわけである。楽譜は「後世にまで作品を再生可能なものとして残す」というよりは、どちらかというと高価な記念品のような性格を持っていた。

オ　しかしながら一九世紀に入って「永遠の名作」という概念が音楽においても広まり始め、作曲家の地位も向上して、彼らが「作者の意図」について強く主張するようになるとともに、「作品を後世にいかに正しい形で残すか」という問題が切実になってくる。そこで重要な役割を果たすようになるのが、一九世紀に入って生まれた近代の音楽院である。(注2)とりわけ重要なのが、メンデルスゾーンやシューマンによって創設された、ライプチヒ音楽院（一八四三年設立）である。フンボルトの教養教育の理念に強く影響を受けていたこの学校は美学や音楽理論や歴史を重視し、バッハ以来のドイツ音楽の理念を正しく受け継ぐことを使命としていた。それは過去の偉大な音楽を、その精神まで含めて正しく継承し、再現することが出来る身体を複製する機関だったとも言える。

カ　自分の意図を託する他者の身体を、作曲家自ら作り上げることもあった。例えば、晩年耳が聞こえずピアノも弾けなくなっていたベートーヴェンは、自作の演奏を他人に委(ゆだ)ねた最初の作曲家の一人である。彼の内弟子とも言うべきツェルニーは《皇帝》協奏曲を初演し、ベートーヴェンのピアノ・ソナタの正しい弾き方についての著作も残している。そして教育者としてリストらを育て、そのリストは当時誰も弾こうとしなかったベートーヴェンの《ハンマークラヴィーア・ソナタ》を公開演奏した。同じく自分ではピアノが弾けなくなったシューマンと、(注3)ヴィルトゥオーソとして名高かった妻クララの間にも、同様の関係を見出す

ことが出来よう。リストもワイマールで数多くの弟子を教え、後継者のハンス・フォン・ビューローには娘コジマを娶(めと)らせた。またワーグナーは自分の楽劇が要求している特殊な歌唱法をマスターした歌手を育てる学校の設立を構想していたし、マーラーやシェーンベルクも作品の意図を正しく理解している子飼いの演奏家の育成に全力をあげた。こうした一九世紀の作曲家における楽派(シューレ)への情熱が、西洋音楽における「再生技術史」の第二段階と考えられるだろう。

キ　D学校の制度化に続く再生技術開発の第三の段階は、言うまでもなく二〇世紀におけるレコードの隆盛である。音だけを身体から切り離して抽出再生することを可能にしたこのメディアの登場が、人々に当初どのような印象を与えたかを伝えるドキュメントの一つが、トーマス・マン(注4)の長篇小説『魔の山』にある。

（岡田暁生(あけお)『音楽の聴き方』より）

注１　マックス・ウェーバー……ドイツの社会学者・経済学者（一八六四年〜一九二〇年）。
注２　フンボルト……ドイツの言語学者・政治家（一七六七年〜一八三五年）。
注３　ヴィルトゥオーソ……超一流の演奏家のこと。
注４　トーマス・マン……ドイツの小説家（一八七五年〜一九五五年）。

問１　傍線部Ａ「『再生技術』」の説明としてもっとも適当なものを、次から一つ選べ。
①　音楽を身体から引き剥がして客観化する合理化のプロセス。
②　神の声を正しい形で世界の津々浦々にまで伝承させる聖なる歌。
③　作品が要求する特殊な歌唱法をマスターした歌手を育てる学校の設立。
④　生まれた瞬間に消えていく音楽を複製可能なものとして固定させる試み。
⑤　身体から切り離された音だけを抽出することが可能な再生メディアの登場。

問２　本文で、筆者は、傍線部Ｂ「三つの段階」について、順次、論じていく。それぞれの内容と段落番号[イ]～[カ]での記述との関係を述べた以下の項目のうち、もっとも適当なものを一つ選べ。

①　段落[イ]・[ウ]は「第一段階」を説明し、[エ]～[カ]では「第二段階」を説明している。
②　段落[イ]～[エ]は「第一段階」を説明し、[オ]・[カ]では「第二段階」を説明している。
③　段落[イ]で「第一段階」を説明し、[ウ]・[エ]でその問題点を指摘し、[オ]・[カ]で「第二段階」が説明される。
④　段落[イ]・[ウ]で「第一段階」を説明し、[エ]・[オ]でその問題点を指摘し、[カ]で「第二段階」が説明される。
⑤　段落[イ]は「第一段階」の説明だが、[ウ]以降は「第一段階」と「第二段階」の説明が交互に提示される。

問３　傍線部Ｃ「『芸』」とはどういうものか、本文中の語句を用いて、二十五字以内で説明しなさい（句読点等を含む）。

問４　傍線部Ｄ「学校の制度化」とあるが、それが目指したことを端的に述べた四十五字以内の部分を本文中から見つけ、最初と最後の五字をそれぞれ抜き出して示しなさい（句読点等を含む）。

第九講　知識モノ解説

文学史・人物解説

●筆者　岡田暁生＝おかだ　あけお（一九六〇〜）京都府生まれ、大阪大学文学部卒、同大学院へ進み、文学博士。現在、京都大学人文科学研究所准教授。本書『音楽の聴き方』は吉田秀和賞受賞、入試でも頻出です。他に『西洋音楽史―「クラシック」の黄昏』『オペラの運命』（サントリー学芸賞）などの著作があります

語句

土着＝どちゃく↓その土地に根付いている・先祖代々続く
津々浦々＝つつうらうら↓いたるところ・あまねく広く・全国すみずみまで
特異＝とくい↓特別・異質
専ら＝もっぱら↓ただそれだけ・専門に
客観化＝きゃっかんか↓自分自身と距離をおいて冷静に見ること・対象化・物体化
制約＝せいやく↓制限・縛り・限定
合理化＝ごうりか↓曖昧さをなくし数値化したり、秩序や法則性を見いだすこと・効率化・能率化
お蔵入り＝おくらいり↓完成した作品が公開されないこと・日の目を見ない
子飼い＝こがい↓未熟なうちから大切に育て上げて、一人前にすること

復習問題　第九講

次の傍線部にあたる漢字を、次の選択肢から選びなさい。

（ア）作品の完成に全力をケイ注する　①形　②経　③掲　④契　⑤傾
（イ）展示用に作品のフク製を作成する　①副　②復　③複　④福　⑤腹
（ウ）ヨーロッパ音楽の特イ性を挙げる　①偉　②異　③意　④威　⑤居
（エ）メロディを五線フに書き留める　①譜　②布　③符　④普　⑤訃
（オ）等間カクに距離をたもつ　①各　②隔　③画　④格　⑤拡
（カ）公開の演ソウ会を催す　①相　②送　③壮　④奏　⑤想
（キ）徒テイ制度で後継者を育てる　①挺　②体　③邸　④弟　⑤亭
（ク）大作家のケッ作を上演する　①潔　②結　③決　④血　⑤傑
（ケ）新たに音楽院をソウ設する　①創　②想　③草　④総　⑤荘
（コ）独特の歌ショウ法を訓練する　①昌　②唱　③省　④章　⑤証

第十講　日本語論

古文とは、単純に言ってしまえば、「平安時代の女の文章を学ぶこと」である。

平安時代に、公式の文書は漢文である。平安時代の貴族は、みんな国家公務員の官僚だから、彼等が普段に書く文章も漢文である。この状態を今で言えば、「公式文書はみんな英語で、官僚達は英語で日記を書き、手紙さえも英語だった」というようなことである。古文の一種である平安時代のひらがなの文章は、［A］のためのものであって、［B］のものではなかった。もう一つのかな文字――［C］は、［B］が漢文を読むための補助具であって、この時代に、「漢字が読めないから、かなで文章を書く［B］」というのは、まず存在しないのである。

「［B］は漢字、［A］はひらがな」という区分があって、D<u>我々の知る日本語は、この「女の文章」を母胎として生まれる。</u>「ひらがなの文章」の中に漢字が入り込んでできあがるのが、現代日本語のルーツとなる「和漢混交文」だからである。

和漢混交文は、「漢字の中にかな文字が入り込んでできた文章」ではない。なぜかと言えば、和漢混交文ができあがった後になっても、公式文書はずーっと漢文のままだったからである。漢文は、かな文字が混入することを許さない。許すんだったら、和漢混交文が成立した後の公式文書は、和漢混交文になっていてもいいはずである。ひらがなに比べて［C］がマイナーな存在にとどまったのも、これが漢文を読むために発明された補助的な文字だったからである。官僚は尊大でいっさいを撥ねつけ、女は柔軟でなんでも取り込む――「女の向上心」と「官僚の排他性」を並べてみればわかることだが、女言葉が日本語の中心となってしまったのは、このためなのである。

その平安時代には、「漢文ではない公式文書」もあった。たとえば、神様に捧げる祝詞（のりと）である。平安時代は祭政一致の時代だから、神様を祀るのも公的行事である。神様は「古い日本のもの」だから、外国からやってきた言葉――漢文は受けつけない。「古い日本語」で対応する。ひらがな・カタカナは、漢字から派生した文字だから、漢字が日本に輸入される以前の「古い日本語」には、これを書き留める文字がない。だから、輸入された漢字をあてて書く。それが、万葉仮名である。「万葉仮名」と言われると、なんだか「『万葉集』を作るために発明された文字」のように思われてしまうが、そうではない。これは、漢字渡来以前

の古い日本語を書き留めるために使われた「漢字のかな的使用」なのだ。これを「万葉仮名」と言ってしまったのは、『万葉集』の研究をする国文学者の越権行為だろうと、私なんかは思うのである。

「万葉仮名」は、漢字渡来以前の「古い日本語」を書く手段である。祝詞はこれで書かれるし、『古事記』だってこれで書かれた。祝詞も『古事記』も、漢文ではないが、漢字だけの文章である。それが「もう一つの公式文書」なのだから、「漢字が読めないから、かな文字で文章を書く［B］」というものは、存在する余地がない。存在するのだとしたら、「漢文が読めないから万葉仮名で文章を書く［B］」である。「古い文化の様式で生きている田舎の［B］」は、こういうことをする。都会の［B］はそんなことをしない。漢文で文章を書くか、文章をまったく書かないかのどちらかである。

（橋本治の文章による）

問１　文意より考えて空欄［A］、空欄［B］に入れるのに最適なことばを、それぞれ漢字一字で記せ。

問２　空欄［C］に入れるのに適切なことばを片仮名で記せ。

問３　傍線Ｄ「我々の知る日本語は、この『女の文章』を母胎として生まれる」とあるが、筆者がそのように考える理由として最適なものを次から選びなさい。

①　和漢混交文のベースには女性の書く漢文があり、それとひらがな語を巧みに交えることで現代日本語文の基礎が築かれたから。
②　和漢混交文は女性の書くひらがなの文章と男性官僚の書く漢文とがうまくミックスしてできたものだから。
③　和漢混交文のベースとなった漢文に女性の書くひらがな語を取り込んで現代日本語文ができあがったから。
④　和漢混交文は女性の書くひらがなの文章中に漢字で表記された語が入り込むことでできたものだから。
⑤　和漢混交文には現代日本語のルーツとなった重要な語彙が多く含まれているから。

問４　この文章のはじめに「古文とは、単純に言ってしまえば、『平安時代の女の文章を学ぶこと』である」とあるが、筆者がそのように考える理由として最適なものを次から選びなさい。

①　和漢混交文は、万葉仮名や漢文の知識のみならず、女性たちの書くひらがなの文章に関する知識をも必要としたから。
②　祝詞などの特殊な例を除けば、平安時代に男性の手で書かれた公式文書は外来の文章である漢文であったから。
③　万葉仮名で書かれた祝詞などの特殊な文章も、結局は巫女などの女性によって書かれたものであるから。
④　平安時代の日本語文は専らひらがなで女性たちによって書かれたので、その文章を学ばねば当時のことばを理解できないから。
⑤　女言葉が平安時代の日本語の中心であったから。

第十講　知識モノ解説

文学史・人物解説

●筆者　橋本治＝はしもと　おさむ（一九四八〜）東京都生まれ、東大国文学科卒。『桃尻娘』シリーズで知られる人気作家。身長一八〇センチを超える長身で、趣味は毛糸の手芸。編み物の本も出版している

○『古事記』八世紀、奈良時代（上代）に成立した神話的歴史書

cf ほぼ同時期（少しあと）に成立した『日本書紀』は「正史」

○『万葉集』八世紀、奈良時代（上代）に成立した歌集。貴族の歌だけでなく防人（さきもり）の歌や東歌（あずまうた）も収録しており「ますらおぶり（男性らしい）」と評される

cf 平安時代の勅撰和歌集である『古今和歌集』は、貴族や僧侶の歌で占められ「たおやめぶり（女性らしい）」と評される

語句

尊大＝そんだい→いばってえらそうな態度・威丈高（いたけだか）

祝詞＝のりと→神事の時に神官がとなえることば

祭政一致＝さいせいいっち→神事、宗教儀礼と政治が〝まつりごと〟として一体

祀る＝まつる→神事や儀式をとりおこなうこと・あるものや人を神として安置すること　祭祀＝さいし

派生＝はせい→もとになるものから分かれて生まれること

越権＝えっけん→与えられた権限を越え出ること・出過ぎたまね

復習問題　第十講

次の傍線部にあたる漢字を、次の選択肢から選びなさい。

（ア）かつてコウ式文書は漢文であった　①硬　②公　③考　④講　⑤高
（イ）外務省の官リョウとして仕事する　①寮　②療　③僚　④遼　⑤瞭
（ウ）漢文を読むためのホ助具を用意する　①保　②補　③捕　④歩　⑤舗
（エ）日本語は女の文章を母タイに生まれた　①胎　②態　③耐　④退　⑤帯
（オ）異質なものを柔ナンに取り込む　①難　②何　③軟　④楠　⑤南
（カ）外部に対してハイ他的な性格をもつ　①排　②廃　③敗　④拝　⑤背
（キ）コウ上心をもって日々をすごす　①講　②高　③向　④効　⑤考
（ク）あるものを原型としてハ生する　①覇　②葉　③羽　④派　⑤波
（ケ）外国からト来してきた文化もある　①渡　②途　③徒　④登　⑤兎
（コ）重大な越ケン行為を指摘する　①顕　②県　③圏　④険　⑤権

第十一講　認識論・哲学論（前編）

〝共同化された知覚世界〟をもつことのできる個体とは、他の個体から何かを学び、その学んだものを他の個体と分かち合うような個体である。トンボやカブト虫や金魚や鳩（はと）や鼠（ねずみ）は、他の個体とそのような関係をもつことができない。しかし、私たちはそれができる。私たちは、自分たちの知覚している世界が、他者にもまた同様に開かれており、その世界の中で生じるさまざまな事象を他者と分かち合うことができると考えている。また、自己に体験できることは、基本的に他者にも体験できると考えている。私たちとトンボやカブト虫や金魚や鳩や鼠との相違は、次のように言うこともできる。私たちは、自己と他者とを基本的に同型的な存在であり、自己と他者とは共通世界をもっており、自己の世界に対する関係と他者の世界に対する関係とは基本的に同じであると考えている。自己と他者とをこのように組織化していることが私たちの特徴であり、そのことが〝共同化された知覚世界〟を可能にしているのだと考えられる。これに対して、トンボやカブト虫や金魚や鳩や鼠は、そのように自己と他者とを組織化していない。彼らには、〝共同化された知覚世界〟を可能にするような、自己と他者についての認識が存在していないと言えよう。かくして、彼らは〝共同化された知覚世界〟をもちえないのである。

　結局、〝共同化された知覚世界〟をもつことができるのは、A〝共同化された知覚世界〟を挟んで成立するような〝自己〟と〝他者〟を創（つく）り出しうる存在であるということになる。これは、「Aをもつことができるのは、Aをもつことができる Bである」と語っているに等しい。それはトートロジー（注１）である。しかしだからと言って、述べてきたことが無意味だというわけではない。このトートロジーは、〝共同化された世界〟と〝自己〟と〝他者〟という三つの項が、互いに独立ではなく依存しあった概念であることを物語っているのである。〝共同化された知覚世界〟というターム（注２）は、世界を共有し合うような関係性にある二つの項、つまり共通世界を軸にシンメトリー（注３）な構造をもつ二つの項として自己と他者とを組織化できる者の存在を前提にしている。そのように自己と他者とを組織化した者が存在しないことには、〝共同化された知覚世界〟は成立しようにも成立することができない。逆に、自己と他者とは基本的に同じようなものであり他者もまた自己と同様な知覚世界をもちうるのだというように、〝自己〟と〝他者〟とを組織化できた者が存在するならば、当然の帰結として〝共同化された知覚世界〟が成立しうることになる。

具体的な例を考えてみることによって、〝共同化された知覚世界〟をもちうることと、〝自己〟と〝他者〟とをそのような共通世界を挟んで成立する二項として組織化することとが密接に関連していることを見てみたい。ロビンソン・クルーソーは一匹の犬と孤島に暮らしていた。誰も話し相手のいないロビンソンは、おそらく犬に話しかけたことが数多くあったものと考えられる。(注4)ある日、沖の水平線に微かにマストのようなものが見えたとしよう。海を見つめるロビンソンと犬との間で、次のようなやりとりが想像できる。

ロビンソン「おや、あれは何だ……。おい、見ろ、船だぞ。船だ。」
　犬「ウーワン」
ロビンソン「おまえにも見えるか。」
　犬「ワン」
（しばらくロビンソンは海を見つめるが、マストはそれ以上大きくならずに水平線に沈んでしまう）
ロビンソン「くそ……いっちまいやがった。」
　犬「ワン」
ロビンソン「そうか、おまえもイギリスに帰れなくて残念か。」

ロビンソン・クルーソーは人間の中で育ち教育を受けた存在である。彼はすでに〝共同化された知覚世界〟を獲得している。彼の知覚は〝共同化された知覚〟である。沖に発見した船のマストを、ロビンソンは（現実には不在の）他者と共に見つめるのである。彼は他者がそのマストを知覚しうることを知っている。だから、マストが見えることに力強く同意し、マストが見えたという喜びを共有してくれる他者が側にいてくれることを希求するのである。かくして、彼は、側にいる犬が彼と〝共同化された知覚世界〟を分かち合うことはできないことを半ば承知しつつ、犬を他者に見立てるのである。犬にできることは高々そのようなロビンソンの気分を彼と分かち合うことだけである（もちろん、これは犬のすばらしい能力である）。犬には、ロビンソンと〝共同化された知覚世界〟を分かち合う能力がない。犬には、ロビンソンという〝他者〟の体験世界を分かち合おうとするような〝自己〟が全面的に欠けているのである。にもかかわらず、ロビンソンは犬に語りかけ、目の前に生じた出来事の知覚を共有し、その切なく苦しい体験を分かち合ってもらおうとするのである（ありがたいことには、犬はそのような主人の気分に共鳴してくれる）。ロビンソンの〝自己〟は、知覚を共有し合い体験を分かち合うような〝他者〟なしには片時も存続しえないかの

ようである。もし犬がいなければ、ロビンソンは、おそらく自分の一面を〝他者〟とみなし、自分自身に語りかけたＢだろう。しかし、犬は決して一人でそのような会話を行うことはない。このような意味において、〝共同化された知覚世界〟をもつことは、そのような世界を共有し合うような〝自己〟と〝他者〟とをもつことであると言えよう。

（麻生武（あさおたけし）『身ぶりからことばへ　赤ちゃんにみる私たちの起源』）

（注）１　トートロジー――同じ意味内容の繰り返しのこと。
　　２　ターム――用語。
　　３　シンメトリーな――対称的な。
　　４　ロビンソン・クルーソー――一七一九年に刊行されたデフォーの小説『ロビンソン・クルーソー』の主人公。

問１　傍線部Ａ「〝共同化された知覚世界〟を挟んで成立するような〝自己〟と〝他者〟」における〝自己〟と〝他者〟の関係性はどのようなものか。その説明として最も適当なものを、次から一つ選べ。

①　〝自己〟と〝他者〟とは、それぞれが独自の知覚世界をもつという意味で、対立的な関係となっている。
②　〝自己〟と〝他者〟とは、まったく同一の知覚世界をもつという点で、一体的な関係となっている。
③　〝自己〟と〝他者〟とは、補完的に知覚世界を構成するところから、相互に依存しあう関係となっている。
④　〝自己〟と〝他者〟とは、互いに同様な知覚世界をもつとともに、シンメトリーな関係となっている。
⑤　〝自己〟と〝他者〟とは、同型的な知覚世界の組織化が可能でありながら、互いに独立した関係となっている。

問２　ロビンソン・クルーソーと犬の例で、「犬」は筆者によってどのような存在としてとらえられているか。その説明として最も適当なものを、次から一つ選べ。

①　語りかけられてはいるが結局は世界を共有しあえないので、〝自己〟と〝他者〟が本質的に異なっていることを示唆する存在としてとらえられている。
②　ロビンソンが分かち合いたいと考えている気分に共鳴することによって、彼の孤独をやわらげる〝他者〟としてとらえ

られている。

③　喜びを共有する〝他者〟がほしいというロビンソンの希求を受け止めて、マストが見えたという喜びをともに分かち合う相手としてとらえられている。

④　語りかけに反応する〝他者〟の役割を果たすことによって、ロビンソンの〝自己〟を存続させるための存在としてとらえられている。

⑤　実際には存在しない〝他者〟の代わりとして語りかけられる相手にはなっているものの、〝自己〟をもたないので、〝他者〟とはなりえないものとしてとらえられている。

問３　傍線部Ｂの「だろう」の用法の説明として最も適当なものを、次から選べ。

①　筆者の考えを断定的になりすぎないようにやわらげている。

②　筆者の意見を読者に強く訴えかけ確認を促している。

③　ある条件の下で起こりうる可能性を示している。

④　未来に起こることがらを推量として表している。

⑤　特に強調したい部分を文脈から浮き立たせている。

第十一講　知識モノ解説

文学史・人物解説

●筆者　麻生武＝あさお　たけし（一九四九〜）京都大学理学部数学科と教育学部心理学科を卒業。大阪市立大大学院へ進み、現在、奈良女子大教授。専攻は、発達心理学

●ダニエル・デフォー『ロビンソン・クルーソー』で知られる、十七〜十八世紀のイギリスの小説家。航海と無人島でのサバイバルの話はあまりに有名。続編があり、こちらはユーラシア大陸横断の冒険

語句

個体＝こたい↓個々の生き物・個人
組織化＝そしきか↓まとめる・体系としてまとめて考える
概念＝がいねん↓ことば、とくに抽象語
高々＝たかだか↓せいぜい
片時＝かたとき↓わずかな時間・寸時・いっとき
示唆＝しさ↓それとなく教え示す
補完的＝ほかんてき↓足りない点をおぎなうこと

復習問題　第十一講

次の傍線部にあたる漢字を、次の選択肢から選びなさい。

（ア）この知カクされた世界を分かち合う
①覚　②確　③画　④角　⑤拡

（イ）相互にイ存する関係にある
①衣　②依　③意　④威　⑤易

（ウ）絶海のコ島に漂着する
①個　②小　③孤　④湖　⑤子

（エ）自己と他者の二コウの相補的関係
①講　②項　③考　④効　⑤校

（オ）犬との会話の場面をソウ像する
①相　②創　③草　④総　⑤想

（カ）実際的で有益な知識をカク得する
①覚　②確　③獲　④穫　⑤核

（キ）平和の実現を強くキ求する
①気　②期　③機　④希　⑤企

（ク）この書物の見解には共メイできる
①銘　②明　③鳴　④迷　⑤命

（ケ）あなたと私でこの空間を共ユウする
①優　②有　③遊　④裕　⑤雄

（コ）カタ時も君を忘れたことはない
①型　②片　③肩　④形　⑤潟

第十二講　認識論・哲学論（後編）

ロビンソン・クルーソーが味わっていた孤独感とはいったいどのようなものだろうか。彼が耳にする風の音や波の音を聞くものは、彼の他(ほか)には誰もいない。彼の目に映るものを共に見てくれるものも誰もいない。彼が苦しもうと悲しもうと誰も知らない。彼は世界から取り残され、たった一人ぼっちなのである。彼はそれゆえに苦しむのである。トンボやカブト虫や金魚や鳩や鼠は、はたしてロビンソンのように孤独感で苦しんだりするだろうか。孤独であることを意識しそれを味わえるのは、人間の高度な能力の一つであるように思われる。

私たちは仲間と生活し交流し合っていれば孤独感を抱かないと言うわけではない。私たちがロビンソン・クルーソーの物語に心をひかれるのは、私たちがある意味でロビンソン・クルーソーに他ならないからである。私たちは、少なくとも大人である私たちは、いつからか孤独であることを知っている。C私たちはいわば〝私〟という孤島に住むロビンソン・クルーソーなのである。私たちの味わう孤独は次のような諸命題で定義できる。「私の今知覚している世界は、本質的に他の誰にも知覚できない世界である」・「私の今感じている感覚を感じることのできる者は誰もいない」・「私の抱いている気持ちを他者が理解することは不可能である」・「私のことばの本当の意味を理解するものは誰もいない」などである。これは簡単に言うと、自己は唯一無二の存在であり、他者と自己とは本質的に異なった存在であるという意識である。このような意識を〝私（わたくし）〟意識と呼ぶことができるDだろう。〝私（わたくし）的なもの〟とは決して他者と分かち合うことのできないようなもの、すなわちもっぱら〝私〟だけに属するものである。トンボやカブト虫や金魚や鳩や鼠などの生物が、孤独を味わうことができなかったのは、別な言い方をすれば、彼らには〝私的な〟世界つまり〝私〟だけの世界というものが成立していなかったためとも考えられるように思われる。

以上に述べたことと、それまでに述べてきたこととが一見すると矛盾しているように感じられるかも知れない。だが、〝私的な〟世界をもちうることと、〝自己〟と〝他者〟とを基本的に同型的なものとして認識し〝共同化された知覚世界〟をもつこととは、E決して矛盾しているわけではない。後者があってこそ、前者が成立しうるのである。

差異の概念は、常に同一性や類似性の概念を前提にしている。私たちは、まったく異なるものを比較することができない。たとえば、形容詞とプリンとを比較することは困難である。しかし、納豆とプリンとを比較するのは容易である。なぜならば、両者は物体でありしかも加工品であり食物であるなど多くの同一性・類似性をもっているからである。自己と他者とが互いに似た存在であることを知らず、自己と他者とが共通世界を分かち合っていることを知らない、トンボやカブト虫や金魚や鳩や鼠などには、自己と他者との断絶を理解することはできない。〝自己〟と〝他者〟とを似た同型的な存在として組織化し、その両者に平等に開示された〝共同化された世界〟をもつことのできたものにだけ、その〝共同的な世界〟から疎外されたという意識が発生しうるのである。

（麻生武『身ぶりからことばへ　赤ちゃんにみる私たちの起源』）

問４　傍線部Ｃ「私たちはいわば〝私〟という孤島に住むロビンソン・クルーソーなのである」とあるが、これはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次から一つ選べ。

①　〝自己〟と〝他者〟の本質的相違を意識することにより、〝自己〟の内部世界を共有する〝他者〟を見いだせずにいるということ。

②　〝自己〟と〝他者〟の相違を絶対的なものと認識するがゆえに、〝自己〟の内面に対する〝他者〟の理解を拒絶してしまうということ。

③　〝自己〟の内面を〝他者〟に知られてしまうことへの抵抗感から、〝他者〟による理解を望みながらも得られずにいるということ。

④　〝自己〟と〝他者〟の本質的な相違を克服するために、〝自己〟の内部に理解者となる架空の〝他者〟を探し求めてしまうということ。

⑤　〝自己〟と〝他者〟との共同化された知覚世界を認識しながらも、これを一種の仮想的な関係として意識してしまうということ。

問５　傍線部Ｄの「だろう」の用法の説明として最も適当なものを、次から選べ。
①　筆者の考えを断定的になりすぎないようにやわらげている。
②　筆者の意見を読者に強く訴えかけ確認を促している。
③　ある条件の下で起こりうる可能性を示している。
④　未来に起こることがらを推量として表している。
⑤　特に強調したい部分を文脈から浮き立たせている。

問６　傍線部Ｅ「決して矛盾しているわけではない」とあるが、なぜそう言えるのか。その理由として最も適当なものを、次から一つ選べ。
①　〝自己〟が〝他者〟から切り離されているという孤独感から生じる〝私的な〟世界は、〝共同化された知覚世界〟を挟んで〝自己〟が〝他者〟を意識することとは無関係に成立するから。
②　〝自己〟を唯一無二の存在と意識する〝私的な〟世界は、〝自己〟と〝他者〟とに平等に開示されている〝共同化された知覚世界〟の一部として成立するから。
③　〝自己〟と〝他者〟との本質的な違いが生み出す〝私的な〟世界は、〝共同化された知覚世界〟を構成する〝自己〟と〝他者〟とが相補的な存在であるとの自覚から成立するから。
④　〝自己〟を中心とする〝私的な〟世界は、〝共同化された知覚世界〟を軸にシンメトリーな関係として構造化されている〝他者〟の世界の対極として成立するから。
⑤　〝自己〟と〝他者〟との断絶の意識に基づく〝私的な〟世界は、〝自己〟と〝他者〟との同型性を認識し〝共同化された知覚世界〟を分かち合うことができてはじめて成立するから。

第十二講　知識モノ解説

語句

命題＝めいだい→言語的な表明・言明・テーゼ・プロポジション

唯一＝ゆいいつ→・ただ一つ・二つとない

無二＝むに→二つとない・比類ない

矛盾＝むじゅん→つじつまがあわない・論理が首尾一貫していない・撞着（どうちゃく）・パラドックス・二律背反・
　双方の意見が同時には成り立たない

相補的＝そうほてき→お互いに足りないところを補い合う

復習問題　第十二講

次の傍線部にあたる漢字を、次の選択肢から選びなさい。

（ア）研究成果をメイ題として表現する　①銘　②明　③名　④迷　⑤命

（イ）両者の意見は矛ジュンして両立しない　①純　②準　③盾　④順　⑤巡

（ウ）両国の平和条約がセイ立する　①制　②成　③生　④姓　⑤聖

（エ）日米の文化間の差イを研究する　①易　②治　③違　④異　⑤夷

（オ）外来文化との類ジ性を探る　①字　②次　③磁　④自　⑤似

（カ）動物と人間を比カク研究する　①覚　②閣　③較　④郭　⑤嚇

（キ）ヨウ易には分かりえない人間の心理　①要　②様　③容　④用　⑤揚

（ク）商店の棚にカ工品が並んでいる　①化　②加　③過　④火　⑤科

（ケ）世代間に大きなダン絶がある　①断　②段　③弾　④団　⑤談

（コ）調査の結果を市民にカイ示する　①回　②誠　③会　④開　⑤解

〈 Memo 〉

〈 Memo 〉

テキスト解答・解説

誤りの選択肢の典型例一覧　〈誤りに名前をつけられるほどのパターンがある！〉

1　対比混乱の誤り　……本文中で**対比・区別**されていることばを同種のものとして扱ってしまっている誤り。あるいは、主役キーワードの説明を求めている設問で、敵役キーワードを挙げている誤り。**キーワードのグループ分け失敗**の選択肢といってもいい。

2　同一性分断の誤り　……本文中で同種のことばを対比であるかのように扱ってしまっている誤り。これも**キーワードのグループ分け失敗**。**同質性分断**ともいう。

3　正しい対比喪失の誤り　……本文中で**「A⟷B」**という対比で記述されているのに、無関係な「C」という要素を勝手にもちこんだり、**「C⟷D」**といった本文にない対比をもちこんでいる誤り。例えば、本文は**「善⟷悪」**という対比で書いているのに、「美」や「醜」という無関係な対比をもちこみ、本文の正しい対比を見失っている誤り。

4　不当な全称判断　……本文中の記述がないのに、**「すべての○○は」「あらゆる○○は」**と勝手に拡張している誤り。類似した誤りとして**不当な一般化**があります。例えば本文では「バラ」という個別のものに焦点を当てているのに、「花というものは」などと拡張している誤り。

5　不当な限定判断　……本文中の記述がないのに、**「○○のみ」「○○だけ」**と勝手に縮小してしまっている誤り。類似した誤りとして**不当な矮小化**（わいしょうか）があります。例えば本文では「人間関係全般について」書いてあるのに、「近所づきあい」の次元を書いている選択肢。話を不当にちっぽけにしているわけです。

6　不当な価値判断　（不当な当為判断（とうい））……本文では「○○である」「○○だ」という事実判断をしているのに、**「○○であるべきだ」「○○にしなければならない」「○○する必要がある」**と勝手に改変してしまった誤り。またAとBの特徴の比較をしているだけなのに、**Aの方が優れているといった優劣を持ち込んだ**選択肢の誤り。特に論文を読んだり書いたりする上で、「事実判断と価値判断（当為判断）」との違いには気を使う必要があるんだよ。

7 **部分的指摘の誤り** ……本文中では、**「AとともにB」「Aと同時にB」「AしかもB」**と追加表現がなされているのに、「A」だけ、あるいは「B」だけを扱ってしまっている誤り。本文の記述にまったく反しているわけではないため、「高度な」誤りといえます。こういうものに気づけるようになることが、現代文での高得点のカギだよ。

8 **記述に反する誤り** ……文字通り、本文中の記述に真っ向から反する選択肢。例えば本文では「AはBである」としているのに「AはBではない」としている誤り。

9 **記述なし** ……………文字通り、本文中の記述にはいっさい書いてない内容を勝手にのせている選択肢。ただし、「本文の記述に反しているものを選びなさい」といった間違い探しの設問のとき、本文には書いてないだけで、間違いとはいえないということがあるから注意。つまり、「誤り」としては1～8・10～12のほうが深刻な誤りといえ、そちらを優先する。

10 **文脈喪失の誤り** ……文章中で特定の意味づけをして使っていることばを、**文脈外の「常識」や辞書的な意味**で扱ってしまっている誤り。例えば、「飛躍」ということばを、本文は「行き過ぎ」「誤解」という意味付けをして記述しているのに、勝手に「発展」「前進」というようにとらえてしまっているもの。

11 **物理的スリカエの誤り** ……**心理や気持ちを問うている設問で、物理的に説明している選択肢**。小説問題の選択肢としてよく出ます。例えば「暗い気持」を天候や日照量の説明にしてしまっている誤り。

12 **比喩を文字通りに解釈した誤り** ……本文中で、たとえになっている表現（擬人法もふくむ）を文字通りにとってしまった選択肢の誤り。比喩は立派な表現技法です。これをリアルに解釈するとずいぶんおかしなことになります。例えば「いやー、歩きつかれちゃって、膝（ひざ）がわらってるよ」なんて表現があるけど、ホントに笑ったら怖い！

第一講　入試現代文の導入　その1《評論》

《本文の対比構造》

主役＝筆者のことば観

ことばのもつ対話性を第一次的に考える
他者とのかかわりの場
ことばが私たちの生活世界において
働くその様をありのままに見る

⇕ 主な対比

敵役＝〈語―文法〉的ことば観

ことばが語と文法からなる
ことばのもつ対話性を二次的に
考える・独我論的
ことばを道具として獲得
対話はことば獲得の結果

《解説》

問１《傍線部説明・選択肢》

文章というものは、もれなく対比・比較で書かれています。今回の文章は、ことばをテーマとした〝言語論〟ですが、二つの立場の見解が戦わせられています。すなわち、〝筆者が主張したい方〟と〝比較・敵役の主張〟です。では、設問の「このことば観」はどっちなのか考えて文章を読み、その後、選択肢を吟味することになります。はい、この傍線の「ことば観」は敵役です。筆者が第一に考えるべきと見なす「対話性」や「ことばが私たちの生活世界において働くその様」を、「ありのままに見ることはできない」というダメな考え方のほうです。言い換えれば、他者なんていなくても、単語と文法さえ覚えれば、ことばは一人でもマスターできるぜ、という考え方です。筆者は、これを「独我論的」と批判しています。漢字の字形通りの意味です。さらに〝ドクガ〟という語感、響き、いかにも悪そうですね。〝毒牙〟〝毒蛾〟さえ連想します。〝ドクガロン〟て怪獣いそうです（そういうダークサイドっぽいほうが好きという人もいるでしょうけどね）。こんなふうに筆者の主張ではないほうを問うてくることもあるのです。設問のすべてが筆者の主張を問うているとは限らないのです。このこと自体、よく知っておいてね。

では、選択肢を吟味します。①は「ことばは他者との対話から生まれ」が×です。後半の「〈語―文法〉的に運用」は敵役としてOKですが、前半は筆者の見解です。こうして選択肢のなかで、筆者の見解と敵役見解を同じもののように混ぜてしまう間違い、あるいはそもそも敵役を答えてほしいのに主役メッセージを答えてしまうなど、これらを対比混乱の誤りと呼んでいます。動画授業では、カラーリングしてますよね。本文の正しい理解のために色を分けたのに、それをごちゃ混ぜにしている間違いです。〝間違いの王様〟です。②は、「ことばは道具として獲得され」は敵役としてOKですが、後半の「他者との関係の場で機能している」が筆者側ですから、×。これも名付けて対比混乱の誤りです。③は、「ことばを生活世界とのかかわりで運用し」が筆者側ですから×。後半の「対話性への視点を欠落させている」のみ敵役。これまた混ぜ混ぜの対比混乱の誤りです。④は、「ことばを〈語―文法〉的にとらえ」が敵役でよし、ですが、「他者との対話性を模索」が筆者側で×。対比混乱の誤りです。もはやしらじらしー！と叫びそうです。そうです、わかってくると誤りの選択肢のほとんどがしらじらしいのです。こうした解法をマスターして、試験会場で「しらじらしー！」と叫べるようになりましょう（だまって静かに解答しなさいと、試験監督に注意されますけど）。正解は⑤です。筆者が大事だと考えるものをことごとく欠落させたものとして、見事に敵役の説明になっています。

第一講　入試現代文の導入　その２《小説》

《本文の対比構造》

主人公「健三」

身体の束縛 ＋ 心の束縛
島田夫婦の専有物
島田夫婦から離反

主な対比

敵役＝島田夫婦

《もらい子、健三への対し方》

押しつけがましい愛情
愛情そのものの発現ではない

小さな対比

《普段の行動》

吝嗇・爪に火を点す
下女に味噌汁をよそってやる
飯櫃やお菜のはいっている戸棚に錠

《解説》

小説もまた、もれなく対比・比較で書かれています。主人公＝健三（養子に出された経験のある夏目漱石自身でもあるようです）と健三をもらいうけた島田夫婦との対比です。島田夫婦が敵役です。ただしこの夫婦には二面性があります。普段は、非常にケチケチなのに、もらい子健三にはどんどんものを与えるという二面性で、小さな対比となっています。文章を読むときに、ただ一生懸命に読むとかストーリー展開に気を使うのではなく、何と何を比べているのかに注意を向けましょう。とたんに文章がクリアに読め、筆者がどんなメッセージを伝えたかったのかクリアになり、設問もクリアに答えられるようになります。小説問題で出題者が求めていることは、みなさんの独創的な文学鑑賞の能力ではないし、みなさんがもっている心理的に豊かな感受性でもありません（そのようなものは、マーク・シート形式で審査できませんし、模範解答もありません）。書いてあるままの現代日本語の試験です。〝書いてあるまま〟といっても対比で書いてあるから、そこの区別ができているかと問うてきます。いいですか、小説問題には読み方があるし、解き方があるんですよ。

問１《傍線部説明・選択肢》

さて、問１は島田夫婦の二面性の内、普段の生活ぶり、ケチぶりについての説明を求めています。「健三に対する夫婦は金の点に掛けてむしろ不思議なくらい寛大」なのに、普段は「吝嗇」です。「爪に火を点す」とも書かれています。この流れの中に「下女に味噌汁をよそってやる」行動も位置づけられるのです。それで健三の実家の人たちは「苦笑」しているのです。やれやれ、やりすぎだよね、といった感じで。したがって⑤が正解です。「その量を惜しんで」がグッド。金惜しみ、物惜しみ、そのケチぶりが表現されています。②の「主人の妻～恐縮」、④の「主人の妻という身分～下女」は、ともに身分の上下という無関係なものを対比・比較させています。本文の正しい対比をわざと見失っている間違いです。いいですか、出題者は意図的にこういうスレチガイの間違いをつくっているのですからね。こっちもそういう目で選択肢を見る習慣をつけましょう。名付けて正しい対比喪失の誤りです。①は「実家のものの前で、これ見よがしに」が×です。健三が「実家に帰ってから後」の「評」ですから、目の前で実演アピールしたわけではありません。記述に反する誤りです。そもそも何をアピールするというのでしょう。〝これが正しい味噌汁のよそいかた講習会〟でしょうかね。〝下女以上の働き者〟アピールでしょうかね。いずれにせよ〝これ見よが

し⟷ひっそり〟は比べられていません。これも正しい対比喪失の誤りです。③は「苦笑」の相手・対象が違います。本来は島田夫婦のケチぶりへの苦笑のはずが、「健三がほとんど無関心な態度を示したから」になっています。困っている女性に手を差し伸べる紳士たれ、という家訓でもあるんですかね。記述に反する間違いです。

問２はカット

問３《傍線部説明・選択肢》

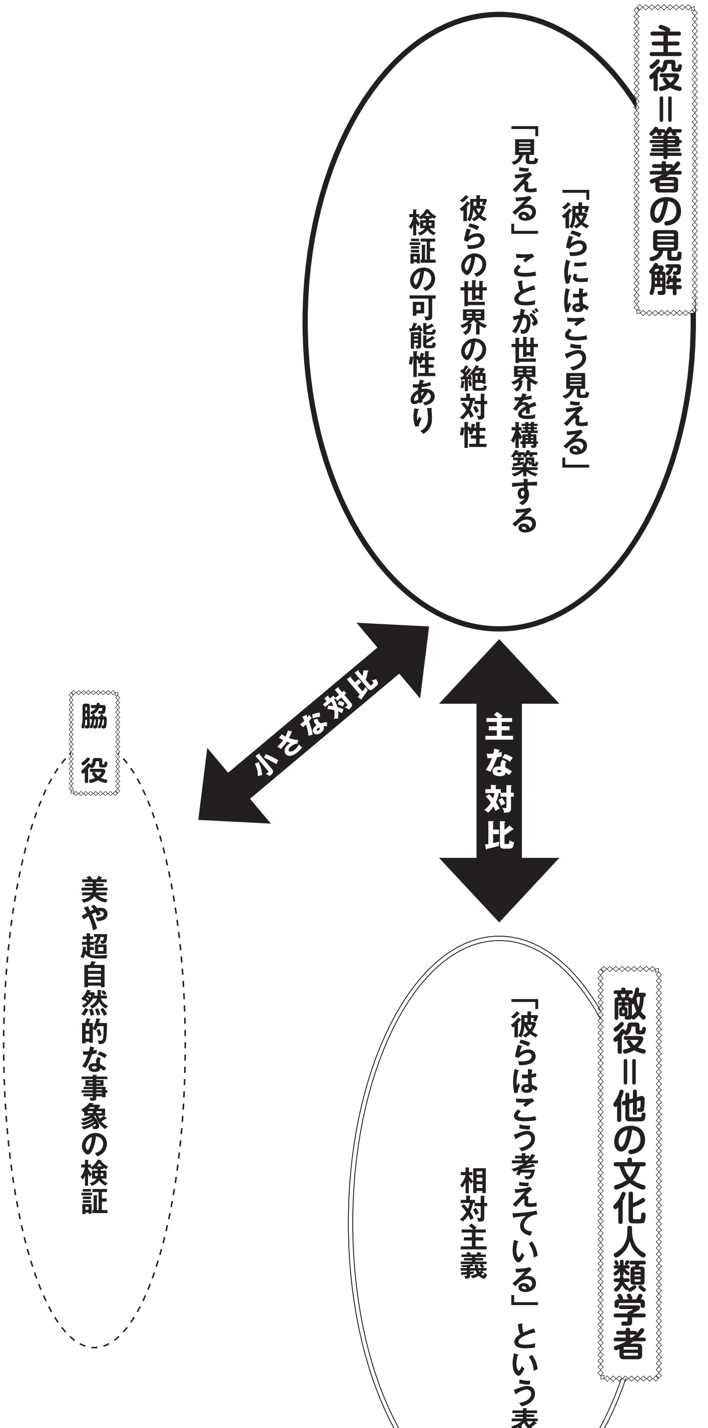
愛情そのものの現れと言えない、島田夫婦の強引な親切ぶりは当然のように健三君の反発や心の離反を招きます。これが傍線の「彼らは自然ために彼らの不純を罰せられた」です。①はまず、「健三を愛するのは、義理の親とはいえ当然」が×です。「自然＝当然」は、正しくは夫婦が罰せられた（健三の心が離れて行くこと）にかかるはずです。それが〝子を愛するのは当然〟のような用い方をしてしまいました。本文の記述と違う、記述に反する誤りです。また「甘やかしすぎ」も×です。強引な愛情表現ですからね。記述に反する誤りです。さらに「健三のわがままを増長」も×ですね。健三のキャラクター設定もおかしくなってます。健三は〝自分勝手〟キャラではありません。素直なこどもとして描かれています。ゆえにある程度まで、夫婦の言いなりになりますし、度が過ぎる夫婦の〝親切の押し売り〟に当然のように反発を覚えるのです。ことごとく記述に反します。こんなふうに、もともと本文での〝キャラクター設定〟はどうなっているのか意識することは、小説問題を解答するときには大切な習慣ですよ。②の「健三には小さな赤い門のある家の懐かしい思い出があって、島田夫婦の心からの愛情もただ煩わしい」という表現では、「小さな赤い門」と「島田夫婦」の言動が対比扱いですが、実際には「小さな赤い門」は夫婦に言わされているものです。授業のカラーリングでも「島田夫婦」と「小さな赤い門」は同じ青の分類です。これを違うものであるかのように、対比であるかのように表現しては間違いです。こういうのを同一性分断の誤りと呼んでいます。さらに「心からの愛情」は笑っちゃうほどのしらじらしさですね。記述に反する誤りです。④は、どうでしょう。島田夫婦が「自縄自縛に陥った」が、もう感動的なくらいの見事な間違いです。間違いに感動するのはどうかと思いますが、これぞ選択肢問題の〝間違いの王様〟、そうです、対比混乱の誤りなのです。縛られている、「束縛」されているのは健三君です！　なにげなく読んで解答していると、この④を

答えに選んでしまいそうです。しかし「縛」は健三について書かれていることで（カラーリングでは赤）で、島田夫婦の不純さ側キーワードではない。したがって島田夫婦の「自縄自縛」とやってしまうのは、なんという仕組まれた対比混乱か！　こういう選択肢を自信をもって×とできるようになるために、この現代文講座があるといってもいいくらいです。⑤はどうか。まず「子供を育てた経験が十分ではなかった」が本文中に根拠のないものです。記述なしです。さらに「慎重になりすぎて」も×です。記述なしと言ってもよいですが、夫婦は「強引」なわけだから「慎重」は、記述に反すると言えます。はい、正解は③です。

模範解答
その１　問１＝⑤
その２　問１＝⑤　問３＝③

第二講　異文化理解論・文化人類学

《本文の対比構造》



《解説》

問１《空欄補充・選択肢》

空欄[A]では、「彼女の才能」を列挙した一連の流れに注目します。空欄直前の「人並みはずれた視力？」と同様に「集中力？」を修飾します。したがって、③の「たぐいまれな」を選びます。「類い稀」ですから抜きん出た力を表現するのにふさわしいですね。空欄[B]は、直後の「理解者」とセットになりますから、⑤の「ものわかりのいい」と決まります。空欄[E]は「勇気」につながるものですが、抜群の誇らしげな勇気ではなく、〝ほどほどの〟〝ある程度の〟といった表現になります。自分には「見えていないことが多い」状況で「彼らにはこう見える」と発言するからです。こうして②の「それなりの」を採用します。空欄[H]は直後の「一定したパターン」「規則性」の対比表現です。したがって「漠然とした」と決まります。空欄[I]は「星の数」という数量の多さを表す言葉とセットです。①の「おびただしい」と決まりますね。程度がはなはだしいことを示すときにも使います。

問２《語句言い換え・選択肢》

「ないがしろ」は本来大事なものを軽んじることで漢字では「蔑ろ」です。本文直後の「覆い隠されてしまう危険」と同様に大切なものの価値を見えなくしてしまうことです。したがって、②「軽視する」が正解です。他の「異化（特別扱いという意味だよ）」「再評価」「重視」「認識」などは、すべてプラスの価値を評価しうる方ですから間違い。「往々にして」は、ときどきあるいはよくあることを指します。本文だと直後に「多い」という表現があります。こういうわけで①「しばしば」が正解です。

問３《キーワードに関する語句抜き出し》

「文化人類学者（筆者以外のということになります）」の「相対主義」（世界にはそれぞれ、いろいろな考え方があるんだよといった感じの外部からの目です）では、「覆い隠されてしまう」大事なものとはなにか。それはその文化圏内に生きている人たちの固有性、唯一絶対のものの見方です。本文の言葉では「彼らの世界の絶対性」です。「覆い隠されてしまう」と「ないがしろにしている」という周辺語句の類似にも注目ください。「彼ら」という指示語が不適切ではないかと一瞬思いますが、本文中のど

こかを指しているのではなく「現地の人たち」という意味を込めて使われていますのでＯＫです。

問４《キーワードに関する語句抜き出し》

設問文の「何が必要なのか」が手がかりになります。まさに筆者自身が求めて止まないものとはなにか。終わりから二段落目の「新しい言葉をみつけなくてはならない」の「なくてはならない」が決定的なヒントで、「新しい言葉」と決まります。

問５《全文理解にもとづく正誤問題》

①はあきれかえってでんぐり返りそうな間違いですね（試験中にでんぐり返しなどすると椅子にすわって解答しなさいと試験監督からたしなめられると思いますが）。筆者が研究対象にしているソロモン諸島の文化圏の人たちはどのようにこの世界を見ているのか、この世界は「どう見えているのか」は、たとえばサザエの収穫高などで検証可能なものです。それは「美や超自然的な事象に比べ」ある程度客観的に（モノのレベルで）調査できるということです。これも小さいながら対比混乱の誤りと言えます。しかも×と判断出来たら得点になる。いい問題ですね。②は○です。筆者の文化研究において「見える」「見えない」は大キーワードです。③は×です。岩礁が「どう見えているのか」が大事で、これはある文化圏で育つことで養われるものです。決して「熱心」「集中力」「視力」の問題ではありません。対比混乱の誤りと言えます。④は×です。「見える」は「単に獲物に対する視覚的な能力」ではありません。ある個人的資質ではなく、むしろある文化圏内にいるとどんなふうに世界が「見える」眼になるのかが大事です。筆者も現地での生活をつづけ、同じ経験を重ねるうちに「できないことができるようになる喜び」を感じています。〝相手文化の眼〟を「獲得」できるのです。記述に反する誤りです。このことは勉強や学習にも通じる話だね。例えば、英文が単なる暗号や記号のつらなりではなく意味のある文章として「見える」ようになるのも、ヒアリングで呪文ではなく意味のある発話として「聞こえる」ようになるのも、学習という文化的訓練によるのです。現代文だっていっしょだよ。ただの黒い活字一色の文面だったものが、筆者のメインメッセージと比較・敵役メッセージとの対比で文章が「読める」のは、もって生まれた各個人の能力というよりも、文化的な訓練です。つまりこの授業を通じて、正解も「見える」ようになるのです。⑤は○です。「美や超自然的な事象」とサザエを比べていましたよね。⑥は×です。「わかる人にはわかるといった言説」は筆者の

側、「複数の相対的な価値の存在を認めること」は、他の「文化人類学者」の側、つまり敵役側の言葉です。混ぜてはいけません。〝混ぜるな危険〟は、洗剤だけの話ではありませんね。そうです、対比混乱の誤りです。現代文も「わかる人にはわかる」のです。オカルトではありません。魔法学校の話でもありません。人間の血が混じっていると優れた魔法使いになれないというような話ではありません。現代文は、この授業で展開されているような方法的訓練で「わかる」ようになります。これは筆者が言うように「まさに世界を獲得していく作業」で、この「喜びはなにものにもかえがたい」ものです。みなさんが「わかる人」になれるよう、私も奮闘してまいりますので、よろしく。

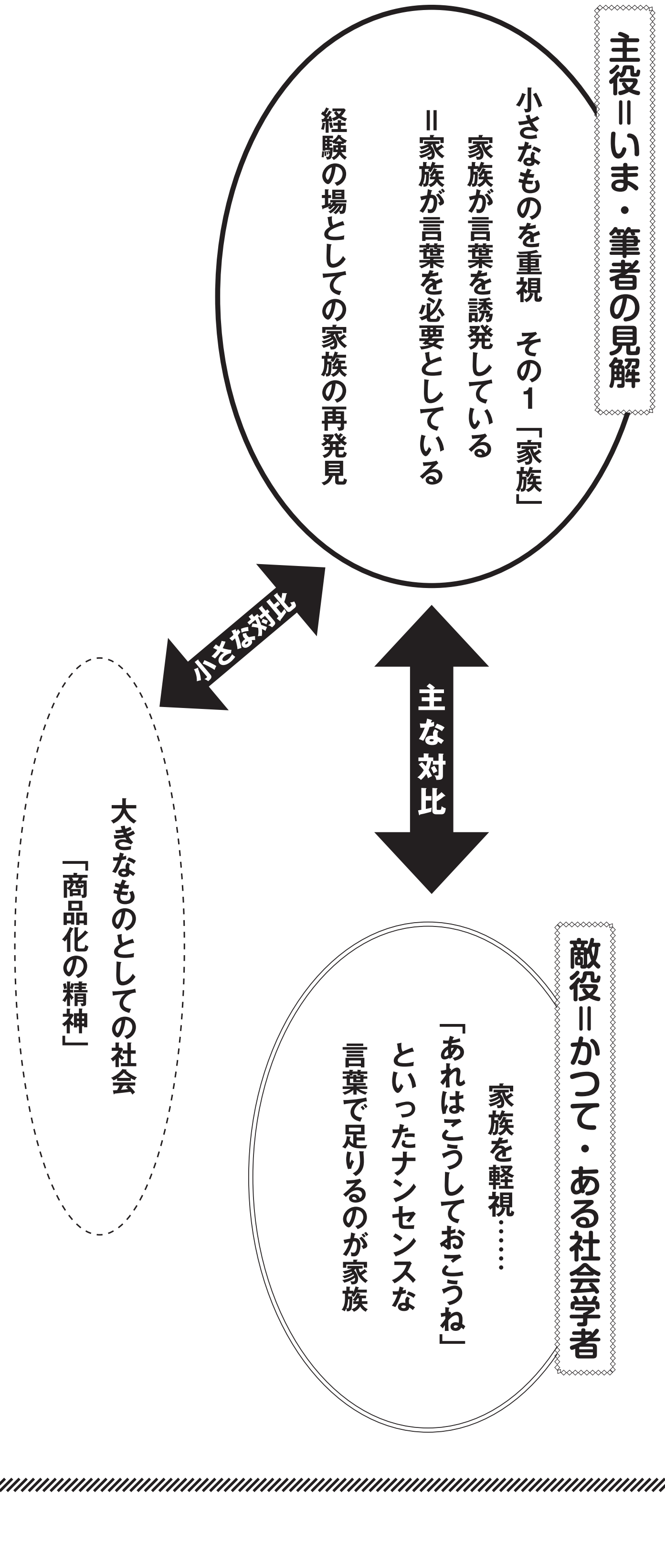
模範解答

問１　A＝③　B＝⑤　E＝②　H＝④　I＝①　問２　C＝②　F＝①　問３　彼らの世界の絶対性

問４　新しい言葉　問５　①＝×　②＝〇　③＝×　④＝×　⑤＝〇　⑥＝×

第三講　家族論・ジェンダー論・言語論（前編）

《本文の対比構造》



《解説》

問１《傍線部説明・選択肢》

今回の敵役である、かつての「ある社会学者」の見解が傍線部ですよ。一方、筆者は何と言っているのか。「家族が言葉を必要とする」と述べ、家族の「内側と外側」、つまり家族内、家族同士でも言葉をついやすこと、さらに現代の社会学者などが家族について学問的に、外から言葉を尽くして説明し始めていることを重視しています（そういえば、〝家族ともっと話そう〟というキャッチフレーズで〝家族割引〟をしている携帯電話会社もありますね。それから、「家族論」は昨今の入試現代文や入試小論文でも頻出のテーマです）。それなのに、傍線部にあるように、〝あれ、これ、それ〟みたいな「ナンセンスな言葉で用が足りる」としているわけです。すなわち、「おびただしい言葉（たくさんの言葉）」⟷「ナンセンスな言葉（言葉の意味内容が尽くされてない・からっぽな言葉づかい）」という対比です。傍線は後者です。〝かあさん、あれはどこかな。あれですか、それならおとうさんの頭の上ですよ〟みたいに、無事に老眼鏡、発見とかね。したがって⑤が正解。「内容をさほど具体的に表す言葉でなくてもコミュニケーションが可能」という表現は、本文の正しい対比を踏まえています。一方、他の選択肢はことごとく、この正しい対比をスコーンと忘れ、ありもしないことがらを比べています。①は「没個性的」が×です。〝個性⟷没個性（個性なし）〟なんて、本文は比べていません。④も同様に「個性的な言葉」を持ち出していて×です。②は「自己を主張する言葉」が×です。〝オレがオレが、という自己主張⟷ひかえめで奥ゆかしい言葉〟など比べていません。こうした問題をつくっているひとたちって、ホントよくもまあ、見事に間違い表現を、つまり本文にはない表現を、〝創作〟するものですなあ。感心します。イヤミじゃありません。本当に感心します。みなさんも現代文読解と設問の解法を学び、こうして〝つくられた間違い〟を即座に指摘できるようになりましょうね。笑いながら設問をとけるようになります（本番の試験中にクスクス、ゲラゲラでは注意されますから、ニヤニヤ、ニコニコくらいでね）。さて、③は「男性主体の言葉」が×です。〝女性主体の言葉⟷男性主体の言葉〟は、ここでは比較されていません（第四講で扱う、この文章の後半から登場するものです）。というわけで、すべて正しい対比喪失の誤りです。加えて、細かい点ですが、①は「血縁」も×です。これは「濃い液体」を文脈抜きに勝手に血のつながりと解釈した間違いです。本文では、「生活」をともにすることからうまれるもの、「一体」感の意味で使っています（一般に、夫婦は血縁ではないしね）。こういうのを、文脈喪失の誤りといいます。

問２《傍線部説明・選択肢》

こちらも問1同様に、従来の考え方、かつての「ある社会学者」に見られるような考え方の説明です。家族同士、家族内では大して言葉もいらず、濃密な人間関係があるという方です。関係が濃すぎてときに縛りあって、息苦しいくらいだということです。受験勉強しているみなさんも感じることがあるでしょ。勉強に打ち込んでいる自分のことを家族が気遣ってくれるのは、わかるけど、それは期待のあらわれでもあるから、ちょっとうっとうしい、でも感謝もしないと、とかね（受験は人生の縮図みたいなところがあるから、いろんな経験になるんだよ）。したがって、④が正解です。①は、「家族以外の他者から」が×。ここでは「液体内」「家族内」の話のはず。記述に反する誤りです。〝家族内⟷家族外〟というヘンなものを比べているという点では、正しい対比喪失の誤りです。②は「複雑」が×。家族関係をめぐって〝複雑⟷簡素・シンプル〟なんて比べていませんね（大家族と核家族かよ！）。正しい対比喪失の誤りです。③は「明確」が×。これまた〝明確⟷不明確〟なんて比べていません（親子関係を明確にとか、兄弟関係を明確にとかですかね。なんかヘンです）。さらに「分節化」も×。これは筆者側のことばだよ。この点では対比混乱の誤りです。⑤は「個人は無視される」が×。むしろ、家族内では関係が濃密な分、気に掛けるはずですから。記述に反する誤りといえるでしょう。

問３《傍線部説明・選択肢》

今度は、筆者側からの反撃です。従来の考え方を乗り越えていく方向ですよ。「かつて」、つまり「従来」は、家族は社会に比べて軽視され、「『不問』にされて」きた。タイトルの『小さなものの諸形態』を踏まえると、大きな社会のほうにばかり、これまではスポットライトが当てられてきたけれども、いまや、小さな家族にスポットライトが向けられるようになり、家族が「発見された」。もちろん、大昔から家族はあった、そこにいた（いわば舞台、ステージの上にいた）わけですが、主人公は〝大きな社会〟とみなされ、誰も家族に注目してこなかったということです。ところが、その〝大きな社会〟の方が、かすんでしまったため、背後にいた〝小さな家族〟に、がぜん注目がいくようになった。どうしてかというと、「社会生活のほぼ隅々まで『商品化の精神』が浸食」し、「経験の余地が切り縮められた」からです。「商品化の精神」については、本文に説明がありませんが、以下のようなイメージでよいでしょう。例えば、未知の土地へ行って、すごい経験をしてくるぞ、と思っても現代社会ならパッ

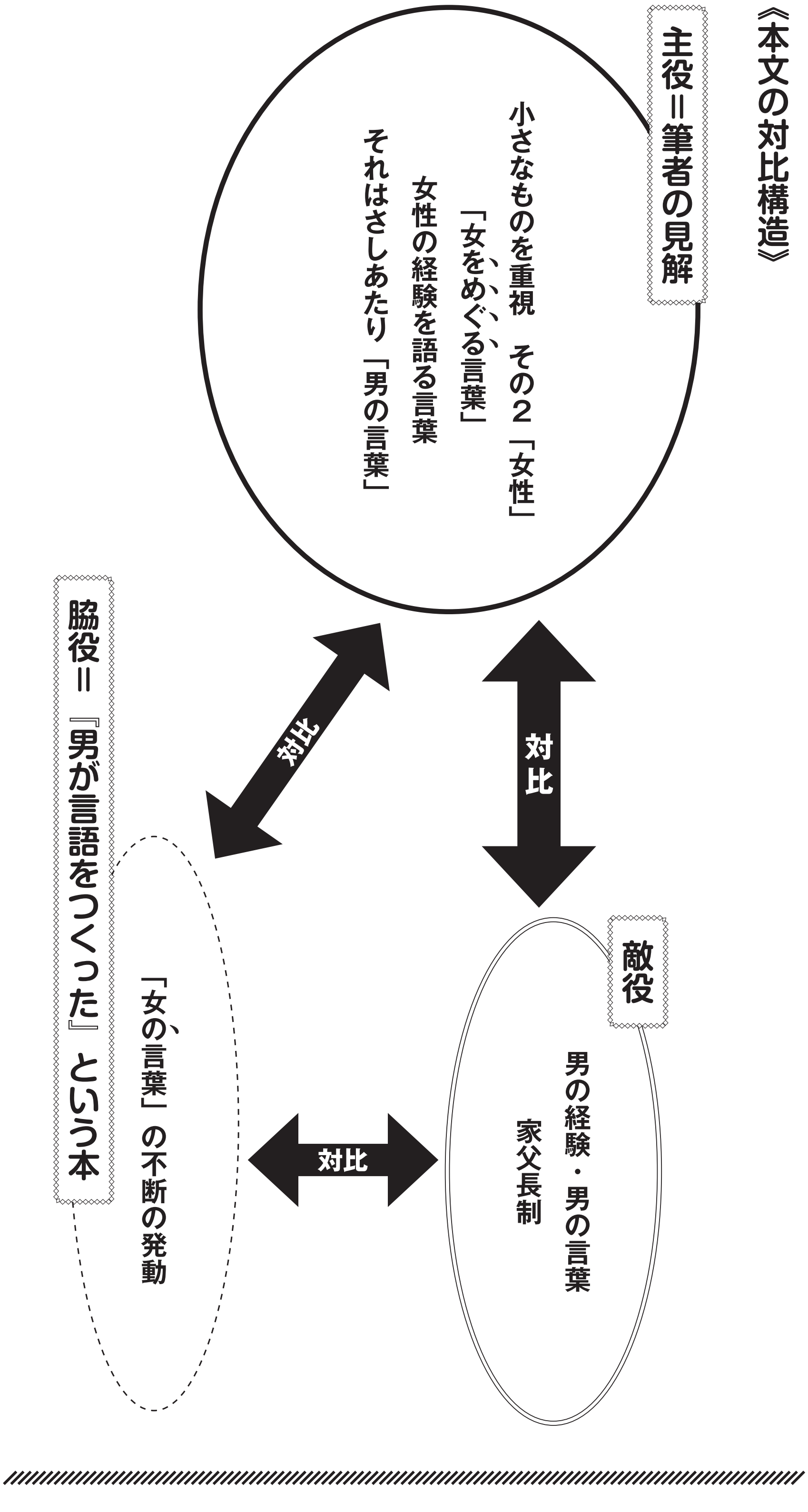
ケージ・ツアーで行けますよという感じ。南極探検もエベレスト登頂も、百年前なら国家的威信・プライドまでかけた大冒険だったけれども、現代社会なら街角の旅行代理店からお申込みできますよ、商品ですよ、というぐあい。こうして「経験」の場として、こっちこそ中心だと思われていた「社会」の魅力が減退したせいで、すみっこにいた「家族」にクローズアップというわけです。「社会」の方ばかり見るのではなく、「家族」こそ社会や経験というものを考える上で大事だったんだな、という評価の転換ですよ。これが「逆説的に発見（意外なかたちで見出された）」ということ。ここで肝心なことは、「家族」自体は大きくなったり、変化したりしたわけではないという点だよ。変わらずそこにいて、やっと光があたったということです。したがって、①が正解。④や⑤はそれぞれ「変質」、「機能が拡大」が×。家族は変わってないのだよ。つまり記述に反する誤りですね。さらに④は「閉鎖的」と「開放」というヘンなものを比較しています。こういうのを正しい対比喪失というわけです。②も③も変化の指摘になってます。「機能が弱まり」「無力で消極的」など。記述に反する誤りですな。とくに③の「言葉が必要とされる事態となり、無力で消極的な存在になった」は、筆者の見解ではなく、敵役の「ある社会学者」の見解です。したがって、この点では対比混乱の誤りです。さらにさらに「家族は本来言葉を必要としないほど内輪の経験によって成り立っていた」が×です。「本来」というなら筆者が述べる家族の本来の重要性とセットになるはず。逆に家族を軽視する表現は「従来」とするべきでした。つまり〝本来＝筆者側＝家族重視⟷従来＝敵役＝家族軽視〟という構造なのに混ぜています。そうです、対比混乱の誤りです。

模範解答

問１＝⑤　問２＝④　問３＝①

第四講　家族論・ジェンダー論・言語論（後編）

《本文の対比構造》



《解説》

問４《傍線部説明・選択肢》

従来の支配層ともいえる男については、「男の経験」を語る「男の言葉」がある。一方、肝心の「女性の経験」を語るとき「女の言葉」でいいとはいえないということです。例えば、「日本の歴史」（世界の歴史でもほぼ同様ですが）は、従来、政治軍事外交史を柱としてきましたね。将軍や政治家の名前が列挙され、○○年、○○戦争、○○条約といった事項が歴史教科書には書かれています。そこでは「男の経験」を「男の言葉」（論文の言葉、および男性学者の言葉）」で語ってきたということです。戦後変革されるまで、東大や京大のような旧帝国大学（東北大を除き）は女子学生の入学を認めていませんでしたから。国家社会の担い手は男、それを研究して語るのも男とみなされていたのです。他方、筆者が注目の「女の経験」を語るとき（当然、女性がいなかった時代や社会はない）、「女の言葉（女ことば＝「～なのよ」「～だわ」のような言葉あるいは女性研究者の言葉）」でよいのか、いやそうはいかないよというのが筆者の見解です。やはり論文の言葉（男ことば）で語ることになるし、また男性研究者が、「女の経験」を語る歴史書や社会学の本を書いてもよいわけです。また家庭内においても「家父長制」の下、お父さんの決定権が絶対的だった。因習的道徳として、女性は、幼少期は父兄に従い、結婚後は夫に従い、夫の死後、老いては子に従うのがよいとされた。いわゆる「三従」です。まさに女性は「沈黙を強い」られた。こうしたことを「男／女の経験と男／女の言葉との関係は、そういう対称性のもとにあるのではない。」といっているのです。したがって、④が正解です。③と⑤は、そうした男女の違いを踏まえず同じようなものとしてしまってます。「男にしろ女にしろ」「男～女～本質に差があるものではなく」がそれぞれ×ですね。対比で書かれたものを混ぜています。すなわち対比混乱の誤りです。①は「男が～女の立場も配慮する」が×です。テーブルにつくときに男性が女性の椅子を引いてあげるとか、ドアを先行して開けてエスコートするとか、そんな〝お気遣い〟レベルになっています。家父長制や長く重い歴史的重力、歴史的性支配を踏まえた文章のはずが、スコンとかるーい話になっています。こういうのを不当な矮小化の誤りと呼びます。これも名前付きの間違いだよ。つまり、入試の選択肢でよくあるということ。②はどうでしょう。「『男の言葉』を拒否し、女性の言葉を不断に発動させる」が×です。これは筆者の見解ではなく、『男が言語をつくった』という本の主張です。筆者側とは区別されているものを混ぜてはいけません。ここでも〝混ぜるな危険〟ですよ。すなわち、対比混乱の誤りです。

問５《全文理解に基づく間違い探し・選択肢》

①は第三講で読んだ箇所ですが、正しい指摘です。過去の「ある社会学者の指摘」、すなわち家族は言葉を必要としないという考えがこれまで主流だったからこそ、いま、堰(せき)を切ったように家族について言葉があふれ出ようとしているわけです。②は第三講の問３の各選択肢と似ています。まず、「本来」と「従来」を取り違えています。「従来」というなら家族の意義を軽視する表現となるはずが、「従来、個人の経験の場としての意味をもっていた」とやってしまいました。対比混乱の誤りです。さらに後半の「狭めて」の否定評価は、筆者のものではありません。したがって、記述に反するとも対比混乱の誤りとも言えます。そうして、これが間違いと指摘できたら、得点になるという問題だよ！　いい問題だねえ。④は「女性の経験」「女性をめぐる言葉」に注目する内容で、きっちり筆者の意見を踏まえています。正しい指摘です。⑥はどうか。「積み重ねられた歴史の中に置かれている」は、本文の「ヒエラルキーの歴史的重力」を言い換えたものとしてＯＫです。また「ゆえに、女性自身の言葉ではなく、男性の言葉によって自らを語らざるをえない」も本文に照らして正しい指摘です。女性について語るためには、いわば〃敵の言葉〃である「男の言葉」を使わざるをえないのです。他の例を出してみます。たとえば、かつてイギリスに植民地支配されていた小さな南の島があったとして、その固有の歴史や社会のありかたを、国際社会に発表するには、どんな言葉で語るのかということです。現地の○○語では現地の人しか理解できません。そうです、英語で、かつて自分たちを支配した敵の言葉で世界に語るということになる、こういうことです。では、③か⑤か、どちらを間違いの選択肢として採用するか。⑤です。③は、「商品化の精神」の内容を説明していますが、これは本文の記述なしです。記述がないだけでは間違いとはいえないという点は、覚えておきましょう。はっきり「○○の誤り」といえるものを優先します。これはこうした〃間違い探し問題〃のテクニックです。⑤は、はっきり×です。「『男が言語をつくった』という本は〜女性による言語の占有を意図」がいけません。本文によれば、この本が意図しているのは「女性の言葉の不断の発動宣言」です。今まで黙らされていたぶん、しゃべりつづけるぞ、ということです。けっして「占有」し、男にとって代わるのではありません。「占有」では、今後男は沈黙し、女性だけが言語活動をするということになります。こういうわけで記述に反する誤りです。また、かつての男の言葉による「占有」という表現を女性側について使ってしまっているという点では、対比混乱の誤りです。

模範解答

問４＝④　問５＝②・⑤（順不同）

第五講　認識論・脳科学

《本文の対比構造》

主役＝答えが自分の外にしか存在しないわかり

答えは自分の頭の中ではなく
自然や社会の中というタイプの理解
発見的理解
例１　自然科学／仮説と実験
　仮説ア「心と脳は別の存在」
　仮説イ「心と脳は一体」
例２　人生・海図なき航海

主な対比

比較相手＝答えが自分の頭の中に用意出来るわかり

自分の頭の中にモデルが
準備されている
重ね合わせ的理解
例１　会話／失語症
例２　邪馬台国
例３　学校教育

《解説》

問１《傍線部説明・抜き出し》

二種類のわかり方のうち、科学者（脳科学者）である筆者が重視している方の「わかり」です。今回の主役側の「わかり」です。本文の前半は、前フリとして比較相手の方、「答えが自分の頭の中に用意出来るタイプのわかり」の説明が続きます。こちらを端的に表現すれば「重ね合わせ的理解」です。さあ、それに対する、答えが外にしかないタイプ、「自分で発見していくしかないタイプの理解」を「端的に」言えば、「発見的理解」です。これが（甲）の答えです。（乙）は、比喩表現で答えます。比喩＝たとえ＝アナロジーは似た者同士で成立します。「発見的理解」です。例えば、ある物が、くるくるめまぐるしく変わる、動く様子を「猫の目のよう」と表現するのは、そういう類似点があるからです。また、何かがたくさんある状態を「星の数ほど」とし、景気が冷え込み、就職が厳しい様子を「就職氷河期」と呼びます。これら全部がたとえ・比喩で、似た者同士の類比です。さて、本文には「生きてゆく、というのは海図なき航海に似ています」とあります。この「似ています」が、比喩を示す決定的な根拠で「海図なき航海」を採用します。「海図を作りつつ航海」も「海図なき海へ旅立つ」「海図のない海に向かって帆を上げる」もすべて〇ではなく、△です。×ではありませんが。得点としては半分です。意味内容としては正解の「海図なき航海」と同じでも、抜き出しで、ただ一つの表現に絞るなら、「似ている」という比喩を導くことばとセットであるという理由で、やはり「海図なき航海」が完全解答なのです。こうして、答えの候補がいくつかあるときの絞りこみかたを習得してください。

問２《空欄補充》

比較相手つまり「答えが自分の頭の中に用意出来るタイプのわかり」「重ね合わせ的理解」の方です。⑤の「実験による確証」は主役の方、「発見的理解」の方ですね。はい、対比混乱の誤りです。②は「既存」は〇ですが、「仮説」が×です。これも「発見的理解」の方。かくて対比混乱の誤りです。④は「相対的に正しい」がわざとらしい、しらじらしい間違いです。今回の設問は、私＝小柴大輔が作成してますから、われながらそらぞらしいですが。本文では、「考え方のモデル」について「唯一絶対のよりどころとして」とあります。記述に反する誤りです。①は「知識」は〇ですが、「柔軟な」が×です。〝柔軟⟷硬直〟など比べていません。正しい対比喪失の誤りです。③の「既知の答え」が正解です。

問３《傍線部説明・記述》

「研究には終わりというものがない」のは、「答えが頭の中に用意出来ず」絶対的な「モデルがない」からです。これが得点になるポイントの第一です。言い換えれば、答えは、「外・自然の中にしかないから」です。これが第二ポイント。そこでどうするかというと「仮説を作る」わけです。これが第三ポイント。さらに「実験」で確かめます。これが第四ポイント。ところが、「わかった分だけ、わからないことが増加するようなところ」がありますし、あるいは「ひとつわかると、その向こうに別の問題が発見」されます。これが第五ポイント（どちらか一方でもよい）です。これら、第一から第五まで順番は問いません。自分の答案に該当する単語があれば足し算のように採点してください。なお「理由」を問うている問題ですから、文末は「から・ので・ため・理由」などで締めくくってください。ないと減点されます。さらに「句読点も数える」という条件ですから、文末に「。」＝句点を付けてください。ないと減点されます。

問４《全文理解に基づく正誤問題・選択肢》

①は、〇です。「失語症の人」の話は、モデル・重ね合わせ的理解の方ですから、「仮説」や実験の話ではありませんものね。②は×です。「邪馬台国」の話はモデル・重ね合わせ的理解の典型ですから、モデル＝証拠＝「魏志倭人伝」があります。それの解釈に違いがあるだけで、本文で言う「仮説」の適応例ではありません。この「本文で言う」というところ、とても大事です。現代文の入試問題できちんと得点する上できわめて大切なことです。その本文によれば「仮説」はひとえに「発見的理解」の方です。邪馬台国の位置をめぐってもいろいろ意見が出ているわけだから、これも仮説じゃないか、と勝手に判断してはダメだよ。本文に従う。本文に則して正確に読む。これが大事。そうなると、なぜ大学入試という学問の入り口で〝現代文〟を課してくるのか、わかるよね。自分の志望学部に進んでから専門書・文献を正確に読む技術につながるからです。さて、次の③はどうでしょう。「しか」という限定が×です。絵に描いたような典型的な不当な限定判断です。選択肢に「しか・のみ・だけ」なんて表現が付いていたら疑ってかかったほうがいいですよ。今回、比較でいえば、人生でより重要なのは発見的理解です。ですが、「われわれはこのふたつのわかり方を駆使して、社会に立ち向かっています」という記述を無視してはいけません。④はどうでしょうか。「脳の働きの研究や遺伝子の研究」は自然科学の方、答えが頭の中に用意できない方ですから、〇です。「脳」だから「頭

の中」の問題だ、「頭の中に答えを用意できる」方だ、と早とちりしないでね。自然科学の対象として脳を考えているのです。人間の身体もある種の「自然」です。よくわからないことだらけの、いわば「外部」なのです。⑤は×です。「心は脳とは別の存在である」も「心と脳は一体」もともに「仮説」です。一方だけが「仮説」で、他方が「仮説」ではないとか「仮説を立てて自然に問うてみるわかり方しかないことを理解していない」とはいえません。まず記述に反すると言えますし、本文で同じグループであるものを、あたかも違うもの、対比であるかのようにやってしまう間違いです。これを同一性分断の誤りといいます。

模範解答

問１　(甲)＝発見的理解　(乙)＝海図なき航海　問２＝③

問３　科学的研究では、答えは自然の中にしかなく、頭の中に重ね合わせるべきモデルはないため、仮説を作り出し、実験で自然に問い、確かめる必要があり、ひとつわかってもその向こうにまた別の問題が発見されるから。

問４　①＝○　②＝×　③＝×　④＝○　⑤＝×

第六講　《小説その2》　母親と子供の対比

《本文の対比構造》

主役＝「私」
現実の世界と母親の影響
との間で揺らぐ心

「あれ、こんな人だったのかしらん」
「ちぐはぐな気持ち」
「私ははぐらかされていた」
「私の戸惑い」

主な対比

比較相手＝母親・祖母
母のこしらえごとの世界

物語めいた生活・固定観念
＝折笠先生は不幸な人・生ける屍
「やっぱりそうだったのだ」

小さな対比

妹

荷厄介な存在
「もう少しどうにかならないものか」

《解説》

問１《傍線部説明・選択肢》

「乾ききって」は単なる天候気象レベルの物理的なものではありません。身体的なのどの調子、生理作用だけでもありません。「嫌悪」「いやなおつとめ」「うんざりした気持ち」とセットになった心理的なものの表現でもあります。小説ですからね、登場人物の心理描写を中心にします。入試もそこを問うてきます。ただし、気を付けるべきは、その心理についてみなさんが想像して補ったり、登場人物に共感しないと解答できないというものでは、決してありません。心理を問うてはいても、心理学や想像力のテストではなく、現代日本語の試験ですからね。したがって、そうした心理は、ちゃんと本文中に書いてあるわけです。というわけで、書いてあったことに照らして④が正解です。「のどの乾きだけでなく、うんざりした気持ちや疲労感を強調」は、しびれます！　パーフェクトですね。他の選択肢のほとんどが物理的生理的レベルに集中した表現になっていて×です。まず①は「たえがたいのどの乾きを強調」でとどまってますね。水筒を持参すればよかったね、というレベルの物理的スリカエの誤りです。③は「炎天下を歩かなければならない私たちの悲しさを強調」が不十分です。「悲しさ」という心理を表現しているようでいても「炎天下」に由来するものとして書かれてますから、これも物理的スリカエの誤りです。くもり空だったらよかったのにね、日傘をもってくればよかったのにね、というレベルになっちゃった。そもそも「いやなおつとめ」だったという心理を書かないとね。⑤は、「汗とほこりにまみれながら歩く私たちの当惑したみじめな気持ちを強調」が不十分です。これまた「当惑したみじめな気持ち」と心理を語っているように見えてそれが「汗とほこり」に由来するものとして物理レベルで終わっています。ウェットティッシュをもってくればよかったね（速乾、サラサラパウダー入りとかね）という次元の、物理的スリカエの誤りです。②は「目的地に早く到達しよう」が×です。行きたくないんですから。これは普通に記述に反する誤りです。

問２《傍線部説明・選択肢》

ここでは「たしなめながら喜ぶ」という大人の二重性が大事です。〝親戚付き合いなのだから、父方であれ、母方であれ、大事にしないとね〟というのは建て前で、本音では〝そうそう、父方の親戚はいやなひとが多いよね〟なんて感じでしょう。一方、主人公の「私」はちゃんとそれを「知っていた」というわけです。鋭い目、鋭い感受性ですね。こういうことから②が正解です。

③は、「本音と建て前」はＯＫですが、「偽善を感じて失望」が×です。〝偽善⟷本当の善＝「私」〟という対比は本文にはありません。正しい対比喪失の誤りです。①は「大人のエゴイズム」が、④は「大人たちの深い愛情」が、⑤は「大人の身勝手さ」が、それぞれ×です。正しくは大人の二重性なのですから、それを一面的に表す単語でまとめては、記述に反すると言えます。さらに①は、「大人＝エゴイズム⟷少年＝純真で正義感」が正しい対比喪失の誤りです。

問３《傍線部説明・選択肢》

「どうにかならないものか」は、妹への否定的な表現です。「私は自分の妹を醜いと思い」や「彼女の気安げな大胆さを低能のせいにしていた」「彼女がいつまでも私の為には荷厄介な付属物のように此の世の中にあって私の傍にくっついて邪魔をしているように思っていた」とありますからね。したがって、①が正解です。③は「どうにかしてやりたい」が×です。これでは妹への応援です。〝お兄ちゃんがメイク指導してあげるよ〟とか〝ファッション誌を買ってあげるよ〟ってな感じかな。余計なお世話ですよね。ともあれ、ネガティブ評価にするところをポジティブ評価にしてしまいましたから、記述に反する誤りです。あるいは文脈喪失の誤りと言ってもよいでしょう。また「自分の醜さにも気付かない妹」も×。気付かないのは「私」です。正確には、妹の「美しさ」に「気付か」ないのは「私」です。はい、ここも記述に反する誤りです。「私」と「妹」のとりちがえという点では、対比混乱の誤りとも言えます。④は「妹の本当の美しさに対する恥じらい」が×ですね。〝いもうと萌え〟かよ！「美しさに気付くことが出来なかった。彼女のえくぼさえ私は醜く思った」が本文ですからね。記述に反する誤りです。いやー楽しい間違いだよね。この試験をつくっている人、楽しんで作っているよね。こちらも楽しんで解きましょう。②は「自分のと同じ～服を好んで着たがる妹」が×です。今度は〝お兄ちゃん好きの妹〟〝兄萌え〟になってます。かわいいけど×だよ。服については「着なければならなかった」です。また「母から用意されていたもの」で、しかも「祖母は私たちにそれを着ることを強く要求」ですからね。記述に反する誤りです。⑤は「いつもは気にならなかった」がしらじらしーい×。正しくは「いつものことながら」「いつまでも」ですよ。記述に反する誤りです。

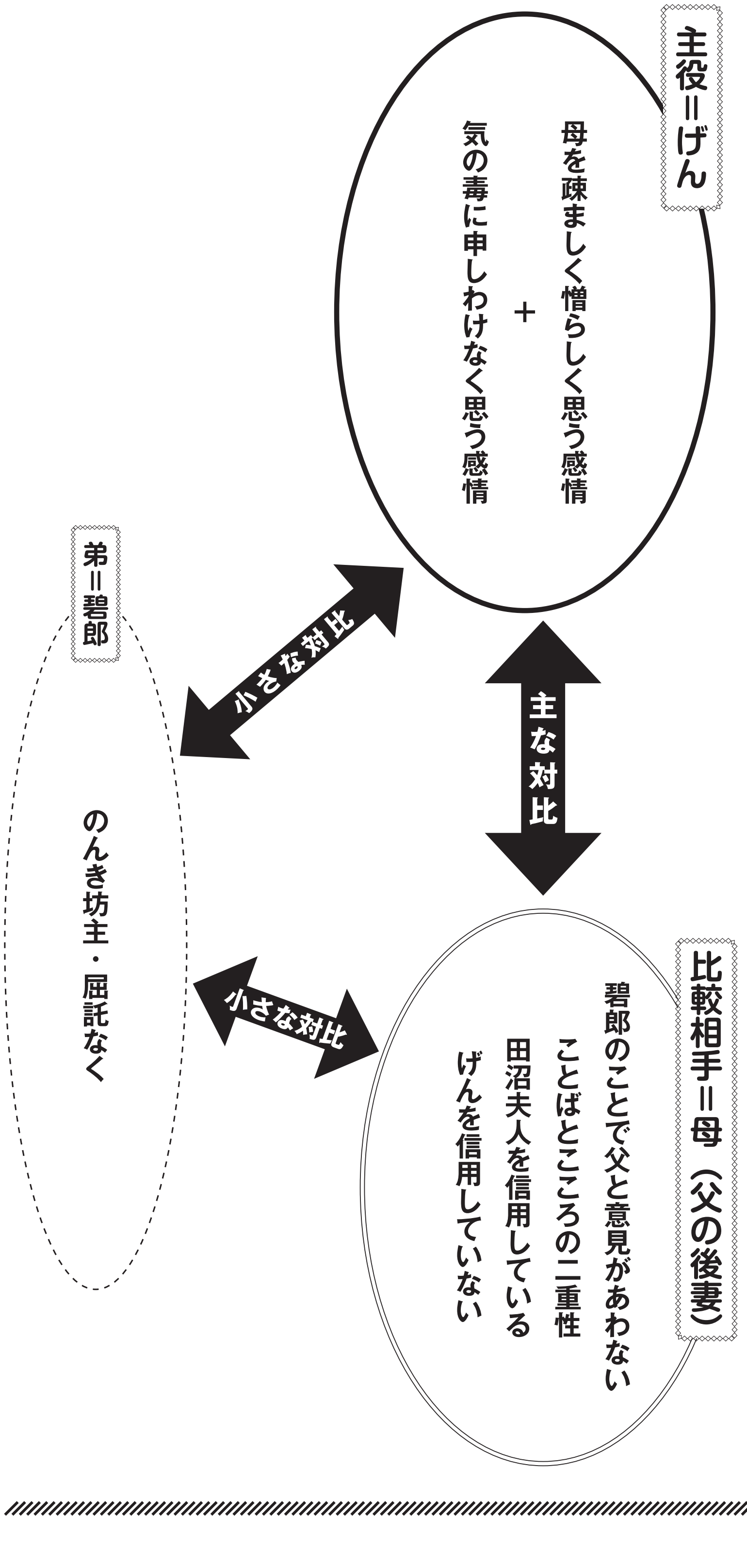
問４《全文理解・選択肢》

お母さんによる、ある種の刷り込み、固定観念つまり、「折笠先生は不幸な人」「生ける屍（子どもに言われたくない！）」からスタートし、実際の折笠先生宅への訪問で、その固定観念が揺らぎます。さらに「私の母がこしらえあげた物語めいた生活など、此の世の中にありはしなかった。私はそういう知恵を覚えて帰った」という変化に至ります。ところが、もうひとひねりあって、「何故かその日のことが強く脳裏に刻みつけられてはなれない」で結末です。それほどお母さんの影響力は、こんな賢い子どもにも強いものなのですね。したがって、④が正解です。①は、まず「幸福そうな折笠先生」に疑問符が付きます。「かげり」「荒廃の気配」「不幸な人の面影」がない、と書いてあるだけですから。また、本文のメインの対比からすれば枝葉（えだは）、枝葉末節（しようまっせつ）部分にすぎない（《本文の対比構造》に入ってない）「先生の娘」についての「失望」を大きな主題みたいに書いているため×です。匡子への「失望」は確かに本文中にありますが、先にも書いた通り枝葉末節的な部分です。部分的指摘の誤りとも正しい対比喪失の誤りとも言えます。②は、「演技」と「反省」という対比になってますが、もちろん正しい対比喪失の誤りです。そもそも「私」＝「少年」のキャラクター設定は〝良い子ぶりっ子〟ではありません。また「常に〜演技」が不当な全称判断です。こういう〝すべての・あらゆる・いつでも・どこでも〟と選択肢にあったら気を付けましょう。③は「ドラマチックに描いている」がはっきり、記述に反する誤りです。本文によれば「母がこしらえあげた物語めいた生活など、此の世の中にありはしなかった」ですよ。ドラマはなかった、です。⑤は、まず「母の話から大人の世界を理解できた」が×。母の話は「折笠先生は不幸な人」という固定観念をつくったのでしたね。記述に反する誤りです。また「幸福」は、①と同様に疑問です。さらに決定的に間違いなのは「母に対する不信と憎悪の念」です。怖いです。母親による固定イメージからなかなか解放されないということにすぎません。リベンジを誓っちゃいけません。記述に反する誤りですね。

模範解答
問１＝④　問２＝②　問３＝①　問４＝④

第七講《小説その3》　母親と子供の関係（継母と娘）

《本文の対比構造》



《解説》

問１《傍線部説明・選択肢》

げんは、母の「憂鬱の大きな原因」が「碧郎への態度のとりかたについて父（文豪の幸田露伴です）と意見の合わないこと」と推測しています。「おとうと」の碧郎クンに比べて、お姉さんであるぶん、お母さんに対しても気を遣っています。それが傍線の「母をはばかって」です。一方、碧郎クン自身は、まったくの子どもで「屈託なく」「のんき坊主」です。「何の心遣いもない」のも悪意ではなく、年端もいかないからでしょう。つまり、無邪気・イノセントなものということですよ。したがって、④が正解です。①は「碧郎の無神経さ」が×です。碧郎の行動を悪く表現しています。記述に反する誤りです。②は「明るい↔暗く」が正しい対比喪失の誤りです。このようなキャラクター分類はありません。碧郎は〝明るいキャラ〟ではなく「のんき坊主」、つまり子どもなのです。母も〝暗いキャラ〟ではなく「憂鬱」になる理由があるわけですから。そうした理由・原因があるからこそ「母をはばかって」いるのです。すると、母の心理そのものを心配しちゃってる「母の屈折した心理を危ぶんでいる」は×です。心理カウンセラーに相談しようかな、という話になってしまいます。記述に反する誤りです。③の「神経質な母」も似たような間違いです。つまり、憂鬱の理由・原因関係なく、母親そのもののキャラにしてしまいました。記述に反する誤りです。⑤は「常に」が不当な全称判断ですね。

問２《傍線部説明・選択肢》

表現の二重性についての問です。表面上、発言上は「私のばかかしらん」「私みたいにばか正直なのもつくづくよしあしね」なんて自分を責めているように見えて、その実、「よほどおこっている」らしいのです。「眼つきが許すまじという色を見せて」なんて、目に本音が出てます。さらに顔も「こわらしいものに引っ吊れていた」とありますからね。ホント怖いです。般若（はんにゃ）の形相（ぎょうそう）というヤツでしょうか（私の妻もときどきそういう顔をして、夫をふるえあがらせています）。こうした表現上のうらおもてをなんて言いますか。〝あら、奥さま、その春物のワンピース、ステキですわね（本音は、なに若づくりしてんのよ）〟みたいな二重性です。そう、皮肉・いやみ・アイロニーです。⑤が正解です。こういう皮肉って、かえってグサっと心に刺さりますよね。心にもないのに〝できるひとはちがうよねー〟と言われるくらいなら〝オマエ、アホやな〟と言われたほうがいいくらいで

すよね。③の「いじけた」は表面だけです。つまり、部分的指摘の誤りです。他の選択肢はすべて、この二重性を表現していないので、記述に反する誤りあるいは、表面と内面の正しい対比喪失とも言える、ということになります。

問３《傍線部説明・選択肢》

母は、「ありのままに私にも一度いってごらんなさい」「素直にいってごらん」「正直にいって頂戴」「私にじかにいわないの」と繰り返してます（四つとも表現を巧みに換えているところは、さすが作家の妻！）。ところが、げんが「ほんとうにげんの思ったままをいった」のに、「信用」しません。田沼の奥さまの言葉だけ「全部信用」している。そこを指摘されて「ぐっと詰まった」わけですから、②が正解です。①は、「わが子としてはふさわしくないことば」が×です。そうしたふさわしさのある⟷なしは比較になっていません。正しい対比喪失の誤りです。③は、まず「茫然とした心理状態の虚を突いて出て来たげんのことば」が×です。ボーっとしてたら、突然、言葉をかけられてうろたえているみたい。〝もう、この子ったら、話す前に話すよっていってよ〟ということでしょうか（話す前に話すってムリだけど）。実際には、ずっと言葉のやり取りが続いていたわけですから、記述に反する誤りです。さらに、「それまで自分の信じ込んできた事が激しく揺さぶられ」が×です。友達の方だけ「信用」し、げんのいうことは「信用」してないわけですから、そこは少しも揺らいでいません。記述に反する誤りです。④は「もともと神経質な母」が×です。すでに問１でも指摘したように、記述に反する誤りです。こうして、同じような間違いが繰り返し登場したりするのも、大学受験の現代文の特徴ですよ。本番で見たら、ただちに×です。解答時間の節約になるよね。⑤は「感情的な母親と冷静な子供」が、絵に描いたように典型的な正しい対比喪失の誤りです。二人とも十分に「感情的」です。その点は、比較・対比ではないのです。たとえば、げんが「だまっていた」のは「冷静」だからではなく「恐れて」です。その後も、母に同情したり、「むかむかっとむちゃくちゃ」になったり、感情に振り回されるようすが克明に描かれていますよ。

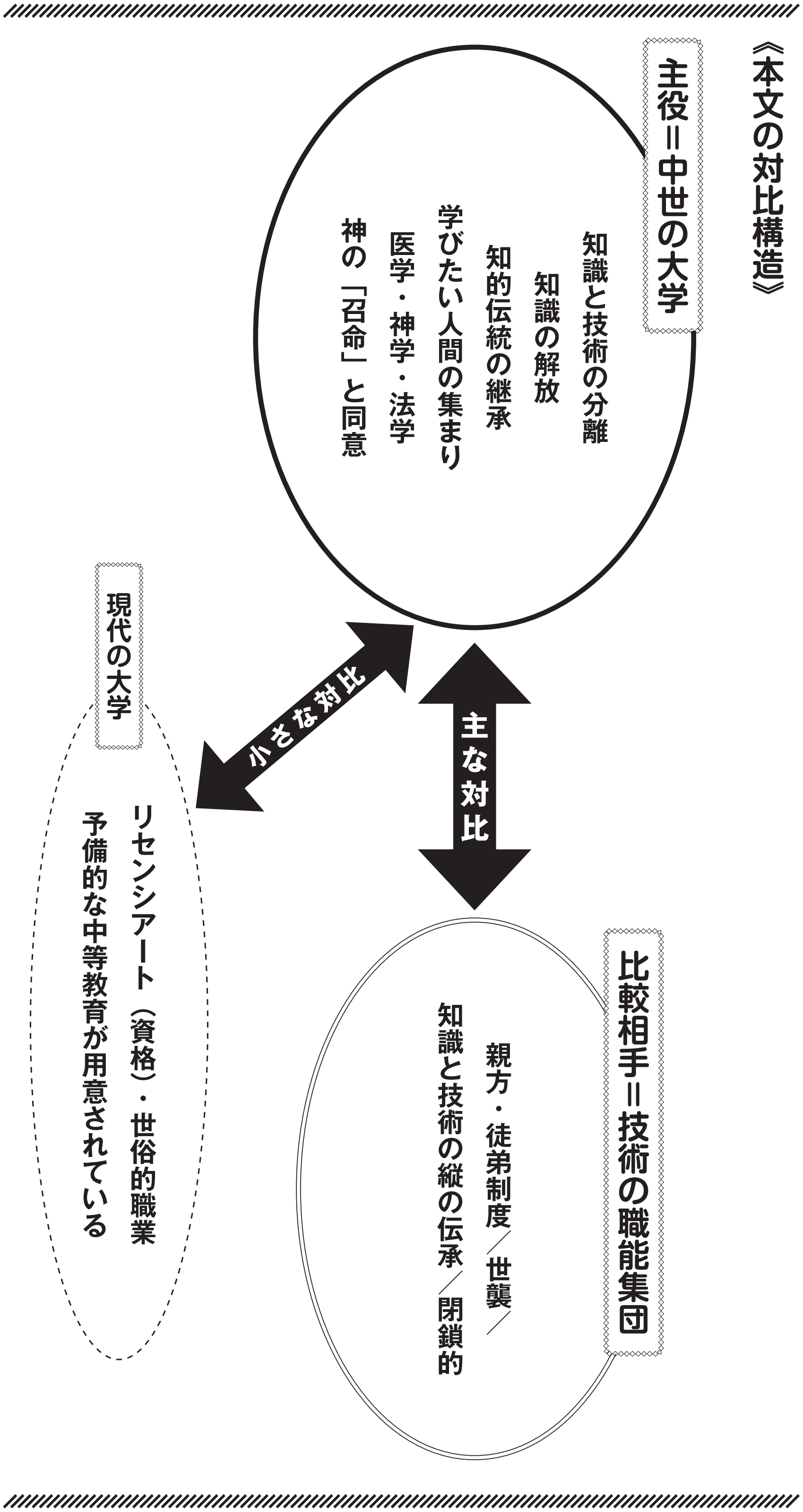
問４《傍線部説明・選択肢》

問３にも書きましたが、げんは、そのときどきの母親への感情の変化に振り回されます。「母は悪くないと感じ」たり、「むかむかっとむちゃくちゃになった」り、「母へぐうっと不快を募らせた」りします。「母を疎ましく憎らしく思う感情」と「気の毒

に申しわけなく思う感情」に「あちこち引っ張りまわされて」います。傍線部では、「ふわっと」つまり一時的に母への同情になっています。したがって、①が正解です。「我知らず〜わき出てきた」が、その一時的気分をよく表現していますよ。②は「争いの後の反動として」がいけません。これじゃ物理的スリカエの誤りです。人の心は、ピンボールやビリヤードの球ではないのですから。右に行ったら次は跳ね返ってかならず左ということではありません。「不快を募らせ」ることもあるのです。③は「和解」が×です。これでは一時的な気分ではなく、かなり永続的なものになってしまいます。記述に反する誤りです。④は「いさかいのために出会ったような二人ではあった」が笑えます。ハブとマングースかよ！（もっともそれは人間がショーとしてやらせているだけだけど）ともあれ、不倶戴天（ふぐたいてん）の敵という感じですかね（共にはこの世に生きて行かれない）。さらに、「自己の意志に反するように母を気の毒に思う感情が勝って」も×です。一本筋の通った固定的「意志」と一時的「感情」を勝手に比べていますが、こんな対比は本文にはありません。正しい対比喪失の誤りです。⑤は「母への哀れみの思いが無意識のうちに復活」が×です。これではベース・基本・基準にあるのは母への同情ということになってしまいます。反感であれ、同情であれ、そのときどきのもので、いずれもベースではありません。記述に反する誤りです。

模範解答
問１＝④　問２＝⑤　問３＝②　問４＝①

第八講　科学技術史・大学史



《解説》

問１《傍線部説明・選択肢》

今回の文章の主役は「中世の大学」です。一方、この傍線部は大学誕生以前の、「技術に関する職能集団」に属する人たちことです。主役ならざる比較相手の方です。そこでは、集団内で知った知識や技術、ノウハウを外部に伝えることを厳しく戒められていました。つまり、「閉鎖的」で「縦の伝承」形式です。したがって、③が正解です。①の「大学」はもちろん、主役です。つまり、比較相手を問うている問題で主役を答えてはいけませんね。対比混乱の誤りです。②も大学の医学校・神学校・法学校で学ぶ人たちです。「神（一神教の神）」とのかかわりは、この文章後半の話だよね。これも対比混乱の誤りです。④の「宗教的結社」はピュタゴラスの話です。古代の職能集団の話ではありますが、いくつかある中のほんの一例です。〝具体例は一段、落ちる（正解の選択肢として選びたくない）〟です。もっとまとまった表現を選択肢選びでは優先します。⑤は「いかなる時も」が不当な全称判断です。厳しい罰則があったのは事実でしょうが、いつも守られていたかは書かれていませんよ。本文に書かれていないのに「すべて・あらゆる・いつでも・どこでも・だれでも」とやってしまう選択肢を、不当な全称判断と呼んでいます。間違い選択肢の常連です。

問２《傍線部説明・選択肢》

いよいよ主役「大学」の登場です。注意すべきは、もう一つの対比、〝現代の大学〟と一緒にしてはダメだよということです。主要な対比だけでなく、小さな対比にも気配りできるようになると、文章読解は正確になり、また得点もアップします。④は「大学に入るための予備的な意味をもった中等教育」を、その小さな対比を見落として主役の「当時の大学（中世の大学）」と混ぜてしまった選択肢です。したがってこれはこれで対比混乱の誤りです。⑤は、医学・神学・法学の各学校のうち、「医学校」しか挙げていません。部分的指摘の誤りです。正解ではない選択肢として、出題者によって意図的に置かれたものです。こういう部分的指摘という間違いがあると、現代文学習で知っておけば、入試本番でいかほどスムーズか、想像できますね。さらに「かつてのように、唯一神に対する医師の誓約」が×です。古代のヒポクラテスの例に見られたのは、「神々」への誓いです。多神教です。したがって、ここは対比混乱の誤りです。②は「親方・徒弟制度が完全に否定され、技術と知識の伝播に厳しい制限が

伴わなくなった」が×です。正しくは、知識と技術の「分離」です。職能集団は技術職人養成の担当として残り続けます。例えば、バイオリンづくり職人、靴づくり職人、家具づくり職人として。また、その中では技術の伝搬（でんぱん）について厳しい制限があったはずです。一方、大学の誕生で、分離独立した知識分野については、オープンになったということです。したがって、記述に反する誤りです。③が正解になります。では、①はどうなのか。「ギリシャ・ローマ時代の古典文献からも知識を得る」は間違いではありませんが、どこから知識を仕入れたか、その仕入れ先が広く解放されたかどうかは、実はここでは重要ではありません。傍線部の「縦の伝承形式から『解放』」は、かつての職能集団の閉鎖性との対比です。こちらが正しい対比である以上、この選択肢は、正しい対比喪失の誤りと言わざるを得ません。こうして、名前付きの間違いになじんでくると、目の前の選択肢が、なぜ間違いなのかの見極めが正確かつスピーディになります。

問３《傍線部説明・選択肢》

〝現代の大学〟とは対比的な「当時の（中世の）大学」の説明です。まず⑤は「社会的に評価される『資格』の世俗性を否定」が×です。現代社会の大学をとりまく「状況とは全く異なって」いるのは本当ですが、現代の大学のような世俗性を「否定」しているわけではありません。そもそものような考え方（一流大学に行ってメガバンクや総合商社に入るぞというような）がなかっただけです。中世の大学関係者が、あたかも未来の（現代の）大学の方をみて、〝あれじゃダメだ〟なんてやっているわけじゃないよ、ということ。これはこれで記述に反する誤りです。さらに「崇高な神の英知を教える機関」が部分的指摘の誤りです。法学・医学も神さまと関与していますが、「教える」のは神学校ですから。③も「聖職者のみを養成」が部分的指摘の誤りであると同時に「のみ」という踏み込んだ限定をしてしまいました。記述に反して「のみ・だけ・しか」とやってしまったものを不当な限定判断と呼んでいます。②は「親方・徒弟制が果たした役割を継承し、より能率的に技術的職能者を養成」があきれかえって、でんぐり返ります。これを対比混乱の誤りと呼ばずして他に何と呼ぼう！　大学は知識・知的伝統の継承と発展です。したがって④が正解です。一方、①はどうして×なのか。まず、「職能集団の『掟』を否定」がダメです。「否定」ではなく、分離、区別です。役割分担がなされたのです。記述に反する誤りです。さらに「宗教的・倫理的に中立の立場」がダメです。キリスト教の神の「召命」とかかわってきますから、「宗教的に中立」とは言えません。記述に反する誤りです。

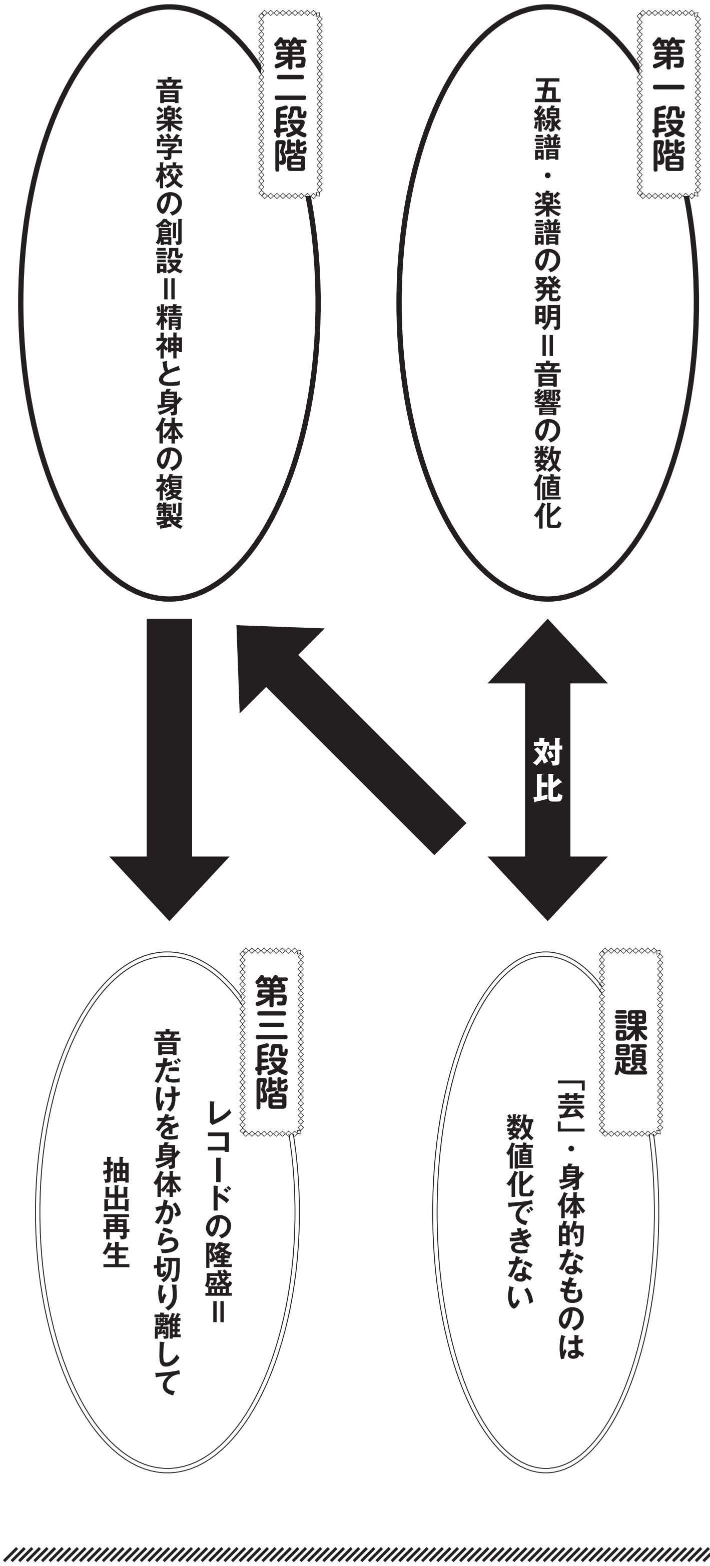
問４《傍線部説明・選択肢》

一般的な職業と異なる点は、「神からの『召命』」という点です。しかも追加があって「その呼びかけに同意して」可能になる点です。したがって、④が正解です。⑤は「神が与えた才能だけを必要」が不当な限定判断です。神に応える自由意思部分を欠落させています。③は、「大学で学ぶことによって誰でもが就くことができる」が不当な全称判断です。神様との応答がありませんね。⑤の「だけ」、③の「誰でも」など、わざと間違いの選択肢をつくっていることがわかりますね。②の「この世で『苦しんでいる人々』に奉仕」は間違いではありませんが、やはり神様との応答が抜けていますから、部分的指摘の誤りと言えます。①は「才能の有無によらず」がしらじらしいではありませんか。神様が与えた才能があるわけですから。はい、記述に反する誤りです。ところで、一般的職業の例に「木樵（きこり）」が出てきましたが、この「きこり」という言葉のひびきが私は好きです。これまで、私の人生の中で、多くの人たちと名刺交換してきましたが、「きこり」には出会ったことがありません。〝林野庁に勤めています〟とか、〝林業関係の仕事です〟という例はあっても、〝コンチワ、きこりです〟という出会いはありません。会ってみたいです。ホントはリアルな重労働だと思いますが、勝手にファンタジックな、白雪姫に出てきそうな姿を妄想してすみません。

模範解答
問１＝③　問２＝③　問３＝④　問４＝④

第九講　芸術論・音楽史・音楽社会学

《本文の対比構造》



《解説》

問１《傍線部説明・選択肢》

本文に三段階で説明されるすべてが「再生技術」です。つまり「五線譜」「学校」「レコード」です。①の「音楽を身体から引き剥がして客観化する合理化」は第一段階の「五線譜」部分の説明です。三つのうちの一つにすぎません。したがって、部分的指摘の誤りとなりますよ。同様に③の「学校の設立」は第二段階の部分にすぎませんから、部分的指摘の誤りです。⑤の「身体から切り離された音だけを抽出することが可能な再生メディア」は「レコード」、つまり第三段階の部分だけ。今回は、この部分的指摘の誤りに気付く練習ですよ。こうして何度も出てくるという事実から、みなさんの納得がいただけると思いますが、わざと〝部分的指摘〟をして間違いの選択肢をつくっているわけです。そういう典型的間違いの仕組みがあるのだ、と理解すると今後、ハイスピードで解答できるようになるという想像がつくでしょ。今回の文章は、イ段落から、順次、第一・第二・第三の「再生技術」が紹介されていくわけですが、それらを総まとめしているのが、序論にあたるアです。その中で「西洋音楽の特質」として「生まれた瞬間に消えていく音楽というはかない芸術を、固定し複製可能なものにしようとしてきた」と説明しています。ゆえに、④が正解です。②はどうなのか。これもアに出てきますが、「グレゴリオ聖歌」などの「聖なる歌」は具体例です。いいですか、選択肢選びでは、〝具体例は、一段、落ちる〟のです。選びたくないのです。「もっとも適当なもの」を選ぶ問題において、〝正解ではない選択肢〟として用意されているのだ、ということを知ってください。

問２《段落内容説明・選択肢》

第一段階の「五線譜」は、音の数値化という役割でした。ところが、「数値化不能の『生身の身体にへばりついている部分』」「芸」の部分は残ってしまいます。その話が出てくるのがウ・エで、その解決案として「学校」が登場するのが第二段階。これがオからです。したがって、③が正解です。第二段階（「学校」）はオからなのに「エ～カでは『第二段階』」とした①は×。④は問題点の指摘を「エ・オ」としている点で×。②は、その問題点の指摘をせず、大雑把に「イ～エ」を「第一段階」としているため、不充分です。⑤は「ウ以降は『第一段階』と『第二段階』の説明が交互に提示」が×です。オ～カは「学校」つまり後継者育成の話です。

問３《傍線部説明・記述》

「芸」とは、問2の説明でもふれたように「五線譜」の問題点です。「楽譜」による「数値化不能」で「生身の身体にへばりついている部分」のことです。イ〜エに書かれています。記述答案をつくるときの心がけは、〝具体例はカット〟〝対比を表現〟〝繰り返し登場する語・言い換えられている語がキーワード〟です。したがって、「ショパン」といった具体例にはふれません。対比は〝五線譜・楽譜⟷身体〟です。繰り返されたり、言い換えられたりしている語は「数値化」「数比化」「客観化」「合理化」です。これらが得点になる箇所です。第一ポイント「五線譜」「楽譜」「ドレミファの音階」です。どれでもＯＫ。次に第二ポイントは「数値化」「客観化」「合理化」「数比化」です。第三ポイントは、それが「できない」「不可能」です。第四ポイントは「身体」「生身の身体」です。第五ポイントは、その身体と「分離できない」「へばりついた」です。五つポイントを用意しましたが、三つできれば上出来ですよ。以下、自分の答案をチェックして、該当箇所があれば、一つずつ加点してください。順番は問いません。なお、「句読点を含む」と設問条件にありますから、文末に「。」をお忘れなく。ないと減点です。

問４《傍線部説明・抜き出し》

「学校」は音楽の複製技術の第二段階です。言い換えれば、問3で書いた「楽譜」の限界、身体にまつわる問題点を解決するためのものです。オに「学校（音楽院）」の登場とその「使命」が語られています。この「使命」は設問文の「目指したこと」と重なります。では、その中身とはなにか。「過去の偉大な音楽を、その精神まで含めて正しく継承し、再現することが出来る身体を複製する機関」です。最初と最後の五字ですので「過去の偉大〜製する機関」が完全解答です。ちなみに「過去の偉大〜を複製する」でもＯＫとします。

模範解答

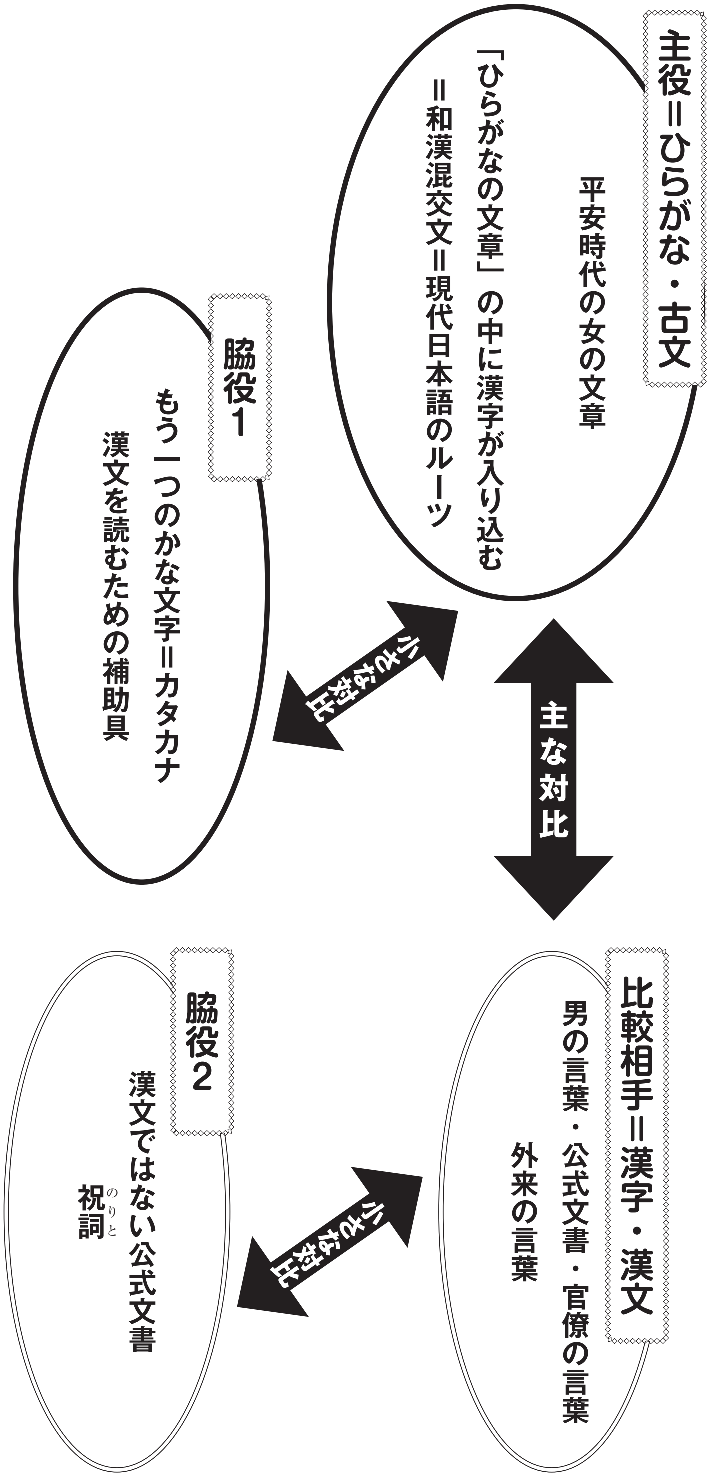
問１＝④　　問２＝③

問３＝楽譜による数値化不可能で身体と分離できない部分。

問４＝過去の偉大～製する機関（過去の偉大～を複製する）

第十講　日本語論

《本文の対比構造》



《解説》

問１《空欄補充》

空欄 A と B は対比・対照関係にありますね。さらに両方とも「漢字一字」という濃厚なヒントつきです。本文冒頭に「古文とは」、「平安時代の女の文章を学ぶこと」とあります。これをただちに言い換えて「古文の一種である平安時代のひらがなの文章は、A のためのもの」と語っているわけですから、A は「女」です。これと対になる B は「男」と判断できます。本文中では「国家公務員の官僚」「彼等」と表現されています。なにより「古文」ではなく「漢文」を書いていた人たちです。

問２《空欄補充》

設問文の「片仮名」という表現が泣かせます。試験中に泣く必要はありませんが、思わせぶりですよね。答えは「カタカナ」ですから。「もう一つのかな文字」で「漢文を読むための補助具」ですからね。漢文に添えられている送り仮名はカタカナですものね。

問３《傍線部説明・選択肢》

傍線部直後に、女の文章である「『ひらがなの文章』の中に漢字が入り込んでできあがるのが、現代日本語のルーツとなる『和漢混交文』」とあります。したがって、④が正解です。①は「女性の書く漢文」がしらじらしーほどの間違いです。漢文は男・官僚の言葉ですから、対比混乱の誤りです。②は女性と男性、ひらがなの文章と漢文の「ミックス」が×です。この表記だとハーフ&ハーフ（ピザならおいしそう）ということになりますが、正しくは、女性の言葉・ひらがな文章がベースなのです。本文には「女言葉が日本語の中心となって」とありますよ。このベース、いわば生地（きじ）の上にちらほら漢字のトッピングが加わって「和漢混交文」「現代日本語のルーツ」なのです。ハーフ&ハーフではなく、生地&トッピングですぞ（いつのまにかピザの話になってしまった）。したがって、記述に反するといってもよいですが、やはり主役（女）と比較相手（男）を同じレベルで混ぜてしまった（「ミックス」！）、対比混乱の誤りというべきでしょうね。③は「ベース」を「漢文」としていますから、これも対比混乱の

誤りです。⑤は「重要な語彙が多く」が×です。〝重要かどうか〟〝多いか少ないか〟は、本文では比較になっていません。正しい対比喪失の誤りです。

問４《全文理解・選択肢》

①は対比混乱の誤りです。「和漢混交文」はカラーリングだと赤＆青です。しかもベースは赤（ひらがな・和）です。そこに緑で塗った第三者「万葉仮名」を入れてしまいました。③は「祝詞」の説明を中心的にしていますが、本文の主役は「古文」です。「祝詞」は漢文ではない「公式文書」という脇役、チョイ役にすぎません。主役と脇役を取り違えた選択肢として、対比混乱の誤りといえます。なお、「祝詞」が「巫女などの女性によって書かれた」という説明は本文にはありません。記述なしです。④は「平安時代の日本語文は専らひらがなで女性たちによって」の「専ら」が不当な限定です。平安時代の日本語文には「祝詞」もありますからね。⑤はどうでしょう。現代日本語である「和漢混交文」の中心は「女言葉」ですが、その「女言葉」が「平安時代の日本語の中心」とはいえません。「公式文書」は男・官僚の漢文とありますからね。記述に反する誤りです。②が正解です。「祝詞」を「特殊な例」（あるいは例外）として正しく〝脇役〟扱いし、男の文章が「公式文書」で「外来の文章である漢文」であることをこれまた正しく指摘しています。ひるがえって、「古文とは」「平安時代の女の文章を学ぶこと」といえるわけです。対比で書いてあるからです。

模範解答
問１　Ａ＝女　Ｂ＝男　問２＝カタカナ　問３＝④　問４＝②

第十一講　認識論・哲学論（前編）

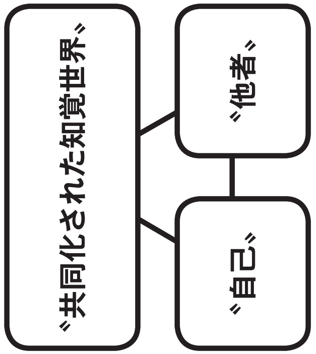
《本文の対比構造》

主役＝「私たち」人間

〝共同化された知覚世界〟をもてる

〝共同化された知覚世界〟を挟んで

〝自己〟と〝他者〟を同型的な存在と考えられる



主な対比

比較相手＝
トンボやカブト虫や金魚や鳩や鼠
ロビンソン・クルーソーの「犬」

〝共同化された知覚世界〟を

もてない

〝自己〟や〝他者〟になりえない

気分への共鳴のみ

《解説》

問１《傍線部説明・選択肢》

〝共同化された知覚世界〟は、教室とか黒板に置き換えるとわかりやすいです。黒板に対面しつつ自分も周りの同級生も大体、わかり合えている、授業が成り立つというイメージです。これが〝共同化された知覚世界〟を挟んで〝自己〟と〝他者〟がシンメトリー（左右対称）な関係にあるということです。教室の右半分の生徒も左半分の生徒も、黒板上でなされている説明がほぼ共通にわかるということです。だから、教室で教えたり教えられたりすることができるのです。もちろん、試験をすれば、得点にばらつきは出ます。全員がまったく同一とはいきません。それでもほぼ共通理解は得られる。この受験サプリだってそう。映像やこのテキストが〝共同化された知覚世界〟です。東日本の方々も西日本の方々も、この授業がわかるはずという共通前提でやっているわけですよ。先生も生徒も、私もみなさんも、この〈教え教えられる〉空間をともに作っている。こうした意味で「依存」しあっているのです。けっしてノートや消しゴムやマーカーを貸し借りし合ったりしているから「依存」ではありませんからね（私は中学生のころ、忘れ物チャンピオンなどと呼ばれ、よくいろいろなものを借りて助けてもらいましたけど）。こうした授業という〝共同化された知覚世界〟が成り立つのは人間だけです。〈メダカの学校〉があるじゃないかという声が上がるかもしれませんが、それは歌だから！　というわけで、正解は④です。①は「それぞれが独自」「対立的」が、⑤は「互いに独立」が×です。記述に反する誤りです。正しくは「互いに独立ではなく依存しあった」ですからね。かといって③の「補完的に知覚世界を構成するところから、相互に依存しあう」は×です。足りないものを「補完」しあう、つまりノートや消しゴムやマーカーの貸し借りレベルの「依存」になってしまいました。こういう間違いを文脈喪失の誤りというのです。「依存」だから〈欠落部分の補い合い、助け合いだ〉と勝手に判断した間違いです。罠にはまらないでね。②は「まったく同一」が言い過ぎ！　不当な全称判断です。正しくは「同様」「基本的に同型的」「基本的に同じようなもの」です。

問２《内容理解・選択肢》

「犬」は、対比相手の方、人間ならぬ「トンボやカブト虫や金魚や鳩や鼠」のグループです。人間の「気分（喜んでいるとか落ち込んでいるとか）」を分かち合うことはできても、人間同士のように、〈教え教えられるような関係〉をもてません。〈先生

イヌ〉が教鞭をとり、〈生徒イヌＡ〉と〈生徒イヌＢ〉が、ほぼ同じ了解に達するようなことはありませんし、そもそものような〝共同化された知覚世界〟としての〈犬の学校〉が成立しません。あるいは、人間の高校の教室に、近所の犬がちょろちょろっと迷い込んできたという場面を想像してもよいです。犬が黒板の方を向いてちょこんとすわったとしましょう。その場合でも、黒板で展開されている代数の講義や古典文法の授業内容を、他の人間たちと同様に理解しあえるということはありません。教室内の雰囲気、熱気なり、どんよりなりに反応、共鳴することはあっても、授業内容について相互了解が成り立つということはありません。そのような〈教え教えられる〉了解が成り立つのが、本文でいう〝自己〟〝他者〟で、ほかならぬ人間のことなのです。したがって、⑤が正解です。①は「世界を共有しあえない」はよいのですが、「〝自己〟と〝他者〟が本質的に異なっている」が×です。正しくは、人間と犬は本質的に異なっている、とするべきでした。記述に反する誤りです。また〝自己〟と〝他者〟は「基本的に同型」ということから言えば、両者を「異なっている」としたのは、同質性分断の誤りですね。②は「気分に共鳴する」はＯＫですが、「〝他者〟としてとらえられている」が×です。繰り返し言いますが、〝自己〟とか〝他者〟といえるのは、〈教え教えられる〉関係、〝共同化された知覚世界〟を分かち合える人間同士だけです。したがって、人間の役割を果たしているかのようなこの選択肢は、対比混乱の誤りです。④の「〝他者〟の役割を果たす」もまったく同じ間違い、対比混乱の誤りです。③は「マストが見えたという喜びをともに分かち合う相手」が×です。「喜び」だけならＯＫですが、「マストが見えたという喜び」はマズイです。水平線にかすかに見える白い三角形が「船のマスト」とわかるのは、教育を受けた人間だけです。したがって、これも対比混乱の誤りになります。こうして見てくると間違いの選択肢がどうやって作られているのか、わかりますよね。そうです。こんなことがわかるのが僕たち人間なのです。

問３《傍線部説明・選択肢》

「もし犬がいなければ」という仮定的な条件を出しているのが、決定的な根拠です。「おそらく自分の一面を〝他者〟とみなし、自分自身に語りかけた」は、その場合ありえるオプションを示している感じです（ちなみにトム・ハンクスが飛行機事故で無人島に流されたり漂流したりする映画『キャスト・アウェイ』では一緒に漂着したバレーボールのボールに話しかけていました。「ウィルソン！」って。他にもヤシの実に顔を彫って呼びかけたり）。別な言い換えを出せば、〈もしスタディサプリでしっかり

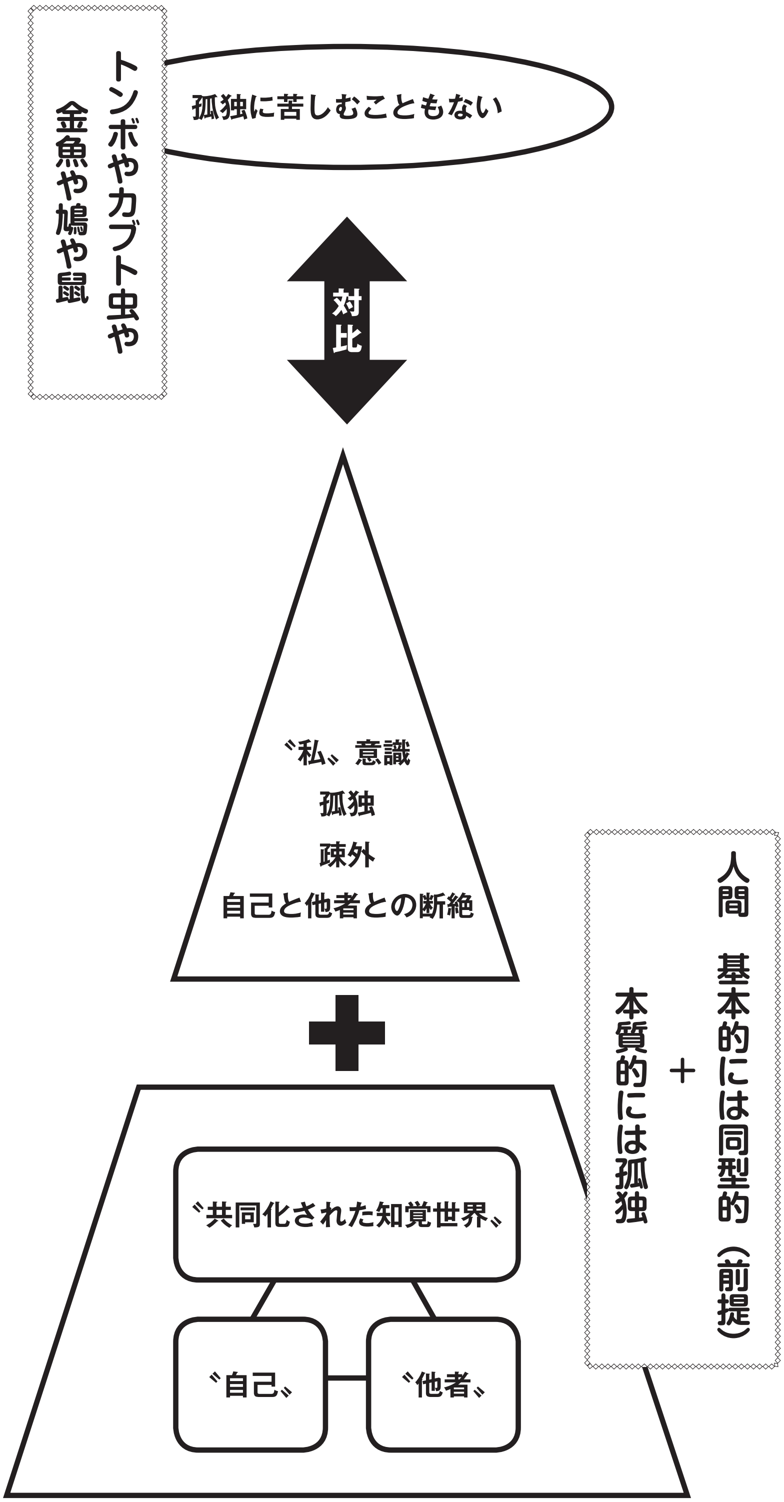
勉強して入試にいどめば、合格するだろう〉という感じです。仮にある条件を満たせば、こんな可能性があるよということ。英語でも「if」は単に未来形を示すばかりではなく、「可能性」を意味することがあります。正解は③です。

模範解答

問１＝④　問２＝⑤　問３＝③

第十二講　認識論・哲学論（後編）

《本文の対比構造》



《解説》

問４《傍線部説明・選択肢》

第十一講で見た通り、私たち人間は、お互いに全く同一ではないけれども、ほぼ「同型的」で基本的にはわかり合える存在です。あるいは、互いに理解可能な存在同士として自分や他者を考えています。でもとことん突き詰めれば、私とあなたは違う。私が考えていることについて「本質的に他の誰にも知覚できない」「他者が理解することは不可能」ということです。また「他者と自己とは本質的に異なった存在であるという意識」もあります。究極的には、自分は「孤独」だということで、筆者はさらにこれを「〝私（わたくし）〟意識」と呼んでいます。傍線部の「〝私〟という孤島に住むロビンソン・クルーソー」は、このことを指しています。したがって、①が正解です。②の「〝他者〟の理解を拒絶してしまう」や③の「〝他者〟に知られてしまうことへの抵抗感」が同種の×です。「拒否」や「抵抗」ではなく、自己と他者はその「本質」において異なるということですから、記述に反する誤りです。④は「〝自己〟と〝他者〟の本質的な相違を克服するために」が×。克服できません。記述に反する誤りです。さらに「〝自己〟の内部に理解者となる架空の〝他者〟を探し求めてしまう」も×。これは前半（第十一講）の話で、〈おおむねわかり合える〉の内容です。犬とは「船のマスト」について共通了解が成り立たなくても、いざとなれば内面のもう一人の自分を〝他者〟に見立てて、自分で納得することができるという話です。つまり〈大体わかり合えるという話〉を〈突き詰めればわかり合えないという話〉をしている問４に混ぜてしまった。これは対比混乱の誤りです。⑤は「仮想的」が×です。事実です。「〝自己〟と〝他者〟との共同化された知覚世界」を「仮想的」としていますが、それはヴァーチャルでもフィクションでもなく事実です。記述に反する誤りです。

問５《傍線部説明・選択肢》

「このような意識を〝私（わたくし）〟意識と呼ぶことができるだろう」という部分ですが、これは人間の「孤独」を様々に表現できるうち、あるオプションを、つまりこんな表現もあるよ、と提案しているのです。実際に、傍線前後で「簡単に言うと〜」「別な言い方をすれば〜とも考えられるように思われる」とあります。特にこの「〜とも考えられるように思われる」という遠慮がちな表現が根拠になります。したがって「筆者の考えを断定的になりすぎないようにやわらげている」の①が正解です。

問６《傍線部説明・選択肢》

問４で見たような「孤独」の話は、一見、第十一講の部分で述べられていた「〝自己〟と〝他者〟とを基本的に同型的なものとして認識し〝共同化された知覚世界〟をもつこと」と矛盾するようだが、そうではない、ということです。基本的には人間同士はわかり合えるはずという思いが〈大前提〉にあるからこそ、すれ違いのたびに「孤独」を感じることができるのです。〈おおむねわかり合える〉を[ア]、〈究極、本質的には孤独〉を[イ]とすれば、[ア]をベースに[イ]がその上に乗っかっている構図を描けます。人間はそういう二重性をもつ高度な生き物なのですね。したがって、[イ]は[ア]があって「はじめて成立する」という表現になっている⑤が正解です。①は、[イ]は[ア]と「無関係に成立する」という書き方ですから×。記述に反する誤りです。関係ありありです。②は、[イ]は[ア]の「一部として成立する」は×です。[ア]によってのみこまれてしまいました。はい、記述に反する誤りです。④は、[イ]は[ア]の「対極として成立する」という書き方になっていて×です。記述に反する誤りです。むしろ人間と動物が「対極」なのです。③はどうでしょうか。[イ]は[ア]から「成立」という言い方はＯＫです。しかし、[ア]に当たる説明がマズいです。「〝共同化された知覚世界〟を構成する〝自己〟と〝他者〟とが相補的な存在」としていますが、「相補的」は、十一講の問１の③の「補完的」と同じ間違いです。つまり本文の「依存」を消しゴムの貸し借り関係にとらえた間違い、つまり文脈喪失の誤りです。

模範解答

問４＝①　問５＝①　問６＝⑤

こうして、第十一講と第十二講に分けて本来一つのセンター試験の問題を扱いました。センター現代文は、時として難しく「スタンダードレベル」と言えないものも、分けて冷静に挑んでいけば、こなせます。つまり、難解に見える文章も、対比の積みかさねにすぎないとわかれば、対応可能なのです。

復習問題解答

復習問題　解答　第一講

（ア）④　（イ）②　（ウ）①　（エ）②　（オ）④
（カ）③　（キ）②　（ク）①

解答漢字一覧

（ア）獲得　（イ）独我論的　（ウ）観察　（エ）発現　（オ）束縛

復習問題　解答　第二講

（ア）③　（イ）⑤　（ウ）①　（エ）①　（オ）④
（カ）③　（キ）①　（ク）①　（ケ）③　（コ）②

解答漢字一覧

（ア）間隔　（イ）採集　（ウ）収穫　（エ）構築　（オ）覚悟
（カ）示唆　（キ）記録　（ク）検証　（ケ）規則性　（コ）拒絶

復習問題　解答　第三講

（ア）④　（イ）②　（ウ）③　（エ）⑤　（オ）③
（カ）②　（キ）③　（ク）①　（ケ）③　（コ）②

解答漢字一覧

（ア）誘発　（イ）分節化　（ウ）事態　（エ）牧歌性　（オ）切実
（カ）虚偽　（キ）不可分　（ク）予断　（ケ）還元　（コ）浸食

復習問題　解答　第四講

（ア）⑤　（イ）②　（ウ）③　（エ）④　（オ）①
（カ）③　（キ）①　（ク）⑤　（ケ）③　（コ）②

解答漢字一覧

（ア）定義　（イ）占有　（ウ）研究対象　（エ）左右対称　（オ）沈黙
（カ）不断　（キ）相対化　（ク）変革　（ケ）拒否　（コ）水準

復習問題　解答　第五講

（ア）②
（カ）⑤
（イ）①
（キ）④
（ウ）⑤
（ク）③
（エ）①
（ケ）⑤
（オ）③
（コ）②

解答漢字一覧

（ア）財産
（カ）絶対
（イ）複雑
（キ）参照
（ウ）記録
（ク）仮説
（エ）解析
（ケ）駆使
（オ）典型
（コ）航海

復習問題　解答　第六講

（ア）②　（イ）④　（ウ）③　（エ）⑤　（オ）⑤

（カ）③　（キ）①　（ク）④

解答漢字一覧

（ア）休暇　（イ）汽車　（ウ）慰安会　（エ）厄介　（オ）荒廃

復習問題　解答　第七講

（ア）②　（イ）⑤　（ウ）③　（エ）②　（オ）①
（カ）③　（キ）④　（ク）②

解答漢字一覧

（ア）交際　（イ）挨拶　（ウ）距離　（エ）加減　（オ）興奮

復習問題　解答　第八講

（ア）①　（イ）③　（ウ）⑤　（エ）②　（オ）④
（カ）③　（キ）③　（ク）②　（ケ）①　（コ）④

解答漢字一覧

（ア）伝承　（イ）気象　（ウ）規範　（エ）制約　（オ）罰則
（カ）倫理観　（キ）致死薬　（ク）制裁　（ケ）誓約　（コ）併設

復習問題　解答　第九講

（ア）⑤　（イ）③　（ウ）②　（エ）①　（オ）②
（カ）④　（キ）④　（ク）⑤　（ケ）①　（コ）②

解答漢字一覧

（ア）傾注　（イ）複製　（ウ）特異性　（エ）五線譜　（オ）等間隔
（カ）演奏会　（キ）徒弟　（ク）傑作　（ケ）創設　（コ）歌唱法

復習問題　解答　第十講

（ア）②　（イ）③　（ウ）②　（エ）①　（オ）③
（カ）①　（キ）③　（ク）④　（ケ）①　（コ）⑤

解答漢字一覧

（ア）公式　（イ）官僚　（ウ）補助具　（エ）母胎　（オ）柔軟
（カ）排他的　（キ）向上心　（ク）派生　（ケ）渡来　（コ）越権

復習問題　解答　第十一講

（ア）①　（イ）②　（ウ）③　（エ）②　（オ）⑤
（カ）③　（キ）④　（ク）③　（ケ）②　（コ）②

解答漢字一覧

（ア）知覚　（イ）依存　（ウ）孤島　（エ）二項　（オ）想像
（カ）獲得　（キ）希求　（ク）共鳴　（ケ）共有　（コ）片時

復習問題　解答　第十二講

（ア）⑤　（イ）③　（ウ）②　（エ）④　（オ）⑤
（カ）③　（キ）③　（ク）②　（ケ）①　（コ）④

解答漢字一覧

（ア）命題　（イ）矛盾　（ウ）成立　（エ）差異　（オ）類似性
（カ）比較　（キ）容易　（ク）加工品　（ケ）断絶　（コ）開示

はじめに

入試の現代文で問われていることは、**「言語としての日本語」**です。いいかえれば、**「書いてあることを書いてある通りに理解すること」**です。心理テストではありません。自由な作品鑑賞・解釈力でもありません。しかしながら、「書いてあることを書いてある通りに理解すること」は、ふつうに考えられているほど受動的で消極的な行為ではありません。むしろ、テクスト（文脈）以前の先入観や自分勝手な解釈を排して、文脈の中で著者の見解を正しく追うという**能動的で積極的な知的行為**なのです。いいかえれば、現代文には、指導を受けて獲得するべき**「読み方」「方法」**があるということです。

しかも、その「読み方」「方法」は**論説文にも小説・物語文にも共通**したきわめて一貫したものです。それは**「対比の発見と追跡」という方法**です。くわしくは、授業で展開されます。ともあれ、ここで強調したいことは、みなさんが受講しようとしているこの現代文授業は、**「方法の現代文」**だということです。

ノートの取り方

テキストへの書き込みが基本です。**赤／青／緑**（黒板では緑ですが、第三の色であれば何色でもＯＫ）**の三色**をご用意ください。文章の対比を色分けして塗っていきます。主役キーワードが赤、敵役キーワードが青、脇役キーワードが緑です。

解法の手順……**文章（論説も小説も）は、すべて対比とその言い換えの連鎖からできている。そうであるならば……**

少しでもはやく確実に読解するために

1　本文末の**書名＝タイトルをみる**　→　**テーマが判明**することが多い。さらには、「○○と△△」というようにいきなり**対比発見のてがかり**をくれることもある（現代文では、書名をつけることは多い。とくに共通テストの現代文では必ず記載されます！　論説では文章の終わりに、小説では冒頭に書かれるのが普通です）。

2　**設問の傍線部と問題文**をざっと読み、キーワードの見当をつける（**設問は本文のキーワードにかかわる**ことが多い）。タイトルの次は「キャスティング＝配役＝誰が出演するのか」に注目。本編の前に「エンドロール」を見てしまう感じです。ただし**選択肢まで読んではダメ**。五択で四つは誤りの選択肢なのだから、先に読むと歪んだ先入観ができてしまう。

3　**本文最後の数行をさきに**目を通し、テーマおよび結論、キーワードと対比の見当をつける。ドラマの最終場面、クライマックスを先に見てしまう感じ。

4　**本文を冒頭から読み**、設問の傍線部にあたるたびに、選択肢を読み、その時点でしぼれるものはしぼる。ただし問いの約半数は全文を読みとおさないと解答できないから、読んでいる途中で判断できないものは先送りにする。

記述式問題解答へのガイドライン

1　**字数指定の八割以上**書くことがのぞましい（「五十字以内で説明せよ」という設問なら四十字以上書く）なお、指定字数の半分（五割）に満たない場合は、採点の対象とならないことが多い（つまり0点）

2　記述解答の採点は、**原則的に加点制（ポイント制）**（キーワード・キーフレーズごとに得点を与える。つまり、余分なことを書いたとしても減点はされないのが普通だから、字数の許す限り、重要と思った語句を記入してやる）

3　**誤字・脱字・略字**はそれぞれ1点減点（とくに略字は印象悪いよ！）

4　**「理由はなにか」「なぜか」**などの問いかけに対しては、「～から。」「～ので。」「～ため。」など理由を示す語でしめくくる。そうでないと、1点減点。逆に、理由を求めている設問ではないのに「から」「ので」「ため」でしめくくると減点だよ。

その他解答欄・解答用紙に関する諸注意

a　｜　｜人｜間｜は｜…｜ →　**※「原稿用紙」ではなく「解答欄」**だから最初のマスを空ける必要はない

b　｜…｜…｜…｜こ｜と｜ →　**※句点なし！**（1点減点）
設問文に「句読点も字数にかぞえる」とある場合、文末には必ず句点（。）をつける・句読点をかぞえるという指摘がない場合でも、「説明終わり」の印として句点（。）をつけるのが原則
ただし、「抜き出せ」という設問の場合は、当然本文のまま（余分なものは付けない）

c　｜…｜…｜…｜こ｜と。｜ →　**※句読点は一文字分！**（1点減点）

より本質的な記述問題への解答の仕方〈答案に盛り込むべき要素〉

○具体例は原則としてカット。よりまとまった表現を解答に盛り込むべし！
○対比の表現（ＡではなくＢである）！
○繰り返し、言い換えられている表現は大事。ただし一本化！

抜き出し問題の諸注意……「語」「語句」「一文」などと表記されているものの範囲について

○「語」＝「一単語」・「ワン＝ワード」・「一品詞」（ただし「一文字」とは限らないからね！）
○「語句」＝複数の単語もありうる。「語」よりも広い概念。「部分」と表記されることもある。
○「一文（文）」＝句点（。）で区切られるまとまり。

語 ⇐ 心身
語句 ← 心身の一体性

（例）［心身の一体性、すなわち、身体が真に身体としてあるとき、身体は「外部」的ではない。］この考察は、「道具」を見直す契機になる。

⇒ 一文・文

誤りの選択肢の典型例一覧　〈誤りに名前をつけられるほどのパターンがある！〉

1 対比混乱の誤り ……本文中で**対比・区別**されていることばを同種のものとして扱ってしまっている誤り。あるいは、主役キーワードの説明を求めている設問で、敵役キーワードを挙げている誤り。**キーワードのグループ分け失敗**の選択肢といってもいい。

2 同一性分断の誤り ……本文中で同種のことばを対比であるかのように扱ってしまっている誤り。これも**キーワードのグループ分け**失敗。**同質性分断**ともいう。

3 正しい対比喪失の誤り ……本文中で「**A←→B**」という対比で記述されているのに、無関係な「C」という要素を勝手にもちこんだり、「**C←→D**」といった本文にない対比をもちこんでいる誤り。例えば、本文は「**善←→悪**」という対比で書いているのに、「美」や「醜」という無関係な対比をもちこみ、本文の正しい対比を見失っている誤り。

4 不当な全称判断 ……本文中の記述がないのに、「**すべての○○は**」「**あらゆる○○は**」と勝手に拡張している誤り。類似した誤りとして**不当な一般化**があります。例えば本文では「バラ」という個別のものに焦点を当てているのに、「花というものは」などと拡張している誤り。

5 不当な限定判断 ……本文中の記述がないのに、「**○○のみ**」「**○○だけ**」と勝手に縮小してしまっている誤り。類似した誤りとして**不当な矮小化**（わいしょう）があります。例えば本文では「人間関係全般について」書いてあるのに、「近所づきあい」の次元を書いている選択肢。話を不当にちっぽけにしているわけです。

6 不当な価値判断 （不当な当為（とうい）判断）……本文では「○○である」「○○だ」という事実判断をしているのに、「**○○であるべきだ**」「**○○にしなければならない**」「**○○する必要がある**」と勝手に改変してしまった誤り。またAとBの特徴の比較をしているだけなのに、**Aの方が優れているといった優劣を持ち込んだ**選択肢の誤り。特に論文を読んだり書いたりする上で、「事実判断と価値判断（当為判断）」との違いには気を使う必要があるんだよ。

7 **部分的指摘の誤り** ……本文中では、**「AともにB」「Aと同時にB」「AしかもB」**と追加表現がなされているのに、「A」だけ、あるいは「B」だけを扱ってしまっている誤り。本文の記述にまったく反しているわけではないため、「高度な」誤りといえます。こういうものに気づけるようになることが、現代文での高得点のカギだよ。

8 **記述に反する誤り** ……文字通り、本文中の記述に真っ向から反する選択肢。例えば本文では「AはBである」としているのに「AはBではない」としている誤り。

9 **記述なし** ……文字通り、本文中の記述にはいっさい書いてない内容を勝手にのせている選択肢。ただし、「本文の記述に反しているものを選びなさい」といった間違い探しの設問のとき、本文には書いてないだけで、間違いとはいえないということがあるから注意。つまり、「誤り」としては1〜8・10〜12のほうが深刻な誤りといえ、そちらを優先する。

10 **文脈喪失の誤り** ……文章中で特定の意味づけをして使っていることばを、**文脈外の「常識」や辞書的な意味**で扱ってしまっている誤り。例えば、「飛躍」ということばを、本文は「行き過ぎ」「誤解」という意味付けをして記述しているのに、勝手に「発展」「前進」というようにとらえてしまっているもの。

11 **物理的スリカエの誤り** ……**心理や気持ちを問うている設問で、物理的に説明している選択肢**。小説問題の選択肢としてよく出ます。例えば「暗い気持」を天候や日照量の説明にしてしまっている誤り。

12 **比喩を文字通りに解釈した誤り** ……本文中で、たとえになっている表現（擬人法もふくむ）を文字通りにとってしまった選択肢の誤り。比喩は立派な表現技法です。これをリアルに解釈するとずいぶんおかしなことになります。例えば「いやー、歩きつかれちゃって、膝（ひざ）がわらってるよ」なんて表現があるけど、ホントに笑ったら怖い！

予習の仕方

……必ず予習しましょう。映像講義を視聴しているだけでは、解答力は身に付きません。その上で、以下のようなプランが考えられますが、プランＣをオススメします。

プランＡ……映像授業を見る前にまず、自力で解答する
プランＢ……映像のチャプター１（タイトルと設問条件解説・最終段落先取り読み）まで見てから映像を止めて、解答する
プランＣ……第三講までプランＢで、解法の手順をしっかり学んだ後、第四講からプランＡ
プランＤ……現代文があまり得意ではない方は、第四講以降、ＡとＢを交互に繰り返す。例えば、偶数の講義ではプランＡ、奇数の講義ではプランＢというように

予習の時間　＝問題にアタックする演習時間

各講二〇分が基本です（ただし、第一講のみ予習要りません）。その他、以下のようなアレンジも可能です。パターンＣがオススメです。

パターンＡ……右の基本時間通り
パターンＢ……時間設定にとらわれず、納得いくまで解答する
パターンＣ……基本時間通りで解答する講と、じっくり納得いくまで解答する講を交互に繰り返す。時間設定を気にするあまり、読み方や解法が雑になっては元も子もありません。かといって悠長に構えすぎてもダメ。本来入試は時間限定付きですから。そこで、じっくり解く回と本番を想定した回を交互に組み合わせましょう。

目標得点……配点はしてありませんから、その講義ごとに、全何題中いくつできたのか、という得点率（例えば第二講なら全部で十五題。十題以上正解なら目標クリア。記述問題は、各「ポイント箇所」を一題と数えましょう）

○私大………………（第二講・九講・十講・十三講・十四講・十五講・十七講・十九講・二十講・二十一講・二十三講）
→六十五％以上
○記述問題をふくむオリジナル…………（第五講・二十四講）**→六〇％以上**
○共通テスト（マーク式問題に相当）……（第一講その１その２・三講・四講・六講・七講・八講・十一講・十二講・十六講・十八講・二十二講）**→七〇％以上**
○復習問題…………**八〇％以上**

復習の仕方について

予習と授業が柱ですが、復習するなら……

設問をもう一度解き直すというタイプの復習はオススメできません。勉強したような気になるだけで、現代文の場合、発展的な学習とは言えない。文章を読み物として再読することはオススメです。なんたって良質な文章、各テーマのモデルのような文章を集めていますから。ただし、設問については授業内で疑問を解決しましょう。また解説テキストでも確認できます。一方で、現代文入試問題での読解力・解答力を向上させるためには、同じ問題を解き直すのではなく、授業をモデルとして、問題集などで新しい問題に次々チャレンジしていきましょう。スタディサプリでも多くの講座が用意されています（高３用講座だけでなく、高１・２用講座も合わせて活用してください。こちらも実際の良質な入試問題が素材ですから）。その文章・設問も対比で読める・解けるようにする訓練を続けることが有効です。

おすすめの問題集

『マーク式基礎問題集・現代文・改訂版』（河合出版）
『マーク式総合問題集・国語』（河合出版）……「全統マーク模試」を収録したもの
『はじめての共通テスト対策　国語』エデュケーショナルネットワーク編（Ｚ会）……試行調査２回分＋オリジナル２回分から成り、古文や漢文も含みます。マークシートや記述解答用紙も付属。
『Ｚ会・現代文のトレーニング』（増進会出版）……「入門編／必修編／小説編／記述編／私大編」がそれぞれあります。
『ハイスコア！共通テスト攻略　国語　現代文』Ｚ会編集部（Ｚ会）……〈参考書＋問題集〉、〈マーク式＋記述式〉、〈センターの過去問題＋試行試験問題＋オリジナル〉など、それぞれの要素を盛り込んでいます。現代文のみです。
『入試現代文へのアクセス』（河合出版）……「基本編／発展編／完成編」があります。

おすすめの用語解説集

『読み解くための現代文単語』（シグマベスト・文英堂　小柴大輔　編著）

おすすめの参考書

『小柴大輔の一冊読むだけで現代文の読み方&解き方が面白いほど身につく本』（ＫＡＤＯＫＡＷＡ）

教材選定について

- 有名大学およびセンター試験の過去問の中から良問をセレクト
- 各テーマ（異文化理解論・家族論・認識論・芸術論・哲学論など）の読書資料になる価値の高い文章をセレクト
- それぞれの学問界を代表する筆者の文章をセレクト
- 奇問は外し、入試現代文のモデルとなる設問をセレクト。アタックすることを通じて解答力を高められる設問ばかり。

目次

第十三講　民俗学……p. 11
第十四講　旅論・異文化論……p. 17
第十五講　家族論……p. 23
第十六講　旅論その２……p. 30
第十七講　戦争論・近代化論……p. 39
第十八講　漢文学論……p. 46
第十九講　都市論・故郷論……p. 56
第二十講　文学論・文芸論……p. 63
第二十一講　メディア論・情報化社会論……p. 69
第二十二講　《小説その４》日常と非日常の対比……p. 75
第二十三講　日本文化論・建築論……p. 88
第二十四講　言語論……p. 93

第十三講　民俗学

次の文は柳田国男『山の人生』の一部分について論じたものである。これを読んで、後の問に答えよ。

今では記憶している者が、私の外には一人もあるまい。三十年あまり前、世間のひどく不景気であった年に、西美濃の山の中で炭を焼く五十ばかりの男が、子供を二人まで、鉞（まさかり）で殺したことがあった。

女房はとくに死んで、あとには十三になる男の子が一人あった。そこへどうした事情であったか、同じ歳（とし）くらいの小娘をもらって来て、山の炭焼小屋で一緒に育てていた。その子たちの名前はもう私も忘れてしまった。何としても炭は売れず、何度里へ降りても、いつも一合の米も手に入らなかった。最後の日に空手で戻って来て、飢えきっている小さい者の顔を見るのがつらさに、すっと小屋の奥へ入って昼寝をしてしまった。

眼がさめて見ると、小屋の口一ぱいに夕日がさしていた。秋の末の事であったという。二人の子供がその日当たりの所にしゃがんで、しきりに何かしているので、傍らへ行って見たら一生懸命に仕事に使う大きな斧（おの）を磨いていた。阿爺（おとう）、これでわたしたちを殺してくれといったそうである。そうして入り口の材木を枕（まくら）にして、二人ながら仰向けに寝たそうである。それを見るとくらくらとして、前後の考えもなく二人の首を打落してしまった。それで自分は死ぬことが出来なくて、やがて捕えられて牢（ろう）に入れられた。

柳田国男の晩年の回顧録『故郷七十年』には柳田は明治三十五年（一九〇二）二月から大正三年（一九一四）まで法制局の参事官をしていたときに、予審調書などの関係資料を読んで特赦（とくしゃ）に関する事務を扱ったことが記されている。その中で、一番印象の深かった刑事事件の一つが『山の人生』に述べられているものであった。

さきの『故郷七十年』によれば、このかわいそうな事実を、柳田はだれかに話したくて、旧友の田山花袋に話した。

「（花袋の方は）そんなことは滅多にない話で、余り奇抜すぎるし、事実が深刻なので、文学とか小説とかに出来ないといって、聞き流してしまった。田山の小説に現われた自然主義というものは、文学の歴史からみて深い関係のある主張ではあったが、右

の実例のような悲惨な内容の話に比べれば、まるで高の知れたものである。[A]、法制局の資料から見出した悲劇が私の心の底に溜(た)まっていて、いつかはそれを世に知らせたいという気持を持ちつづけた。それで、朝日新聞に書き、[B]『山の人生』という本を作る時、その序文のような形で、これを一番最初にもってきたのである」と柳田は述懐している。

　柳田はここで、親しい友人であった花袋の文学などは、あの悲惨な内容の話に比べれば、まるで高が知れていると言い放って、軽侮(けいぶ)の念を隠そうとはしない。柳田の田山批判は、文学の否定につながるものではない。[C]花袋にかかわる文学者、[D]短編の名手といわれる志賀直哉をもち出してみても、『山の人生』の文章のように、簡潔でムダがなく、しかもその底に無限の哀れを誘う作品が書けたとは、とうてい思えないのである。その重い事実はフィクションに仕立てることの不可能なものであった。『山の人生』の中の男が「眼がさめて見ると、小屋の口一ぱいに夕日がさしていた。秋の末の事であったという」という箇所からは、小屋の入口に晩秋の夕日がカッと照っている光景がまざまざと浮ぶ。この夕日の描写があればこそ、E<u>この光景は生きたものとなる</u>。そこで柳田はたぐいまれなる文学的手腕を発揮し、調書にはない言葉をここに挿入(そうにゅう)したのではないか、と思いたくなるのも無理はない。たとい柳田は意識していなくても、彼の記憶の中では、それ以外にはあり得ない情景が何十年かの長い歳月をかけて育ったのではないか、というつよい疑いも生まれる。

　あまりの飢餓に耐えかねて、子供たちが殺してくれと父に頼み、その父は子供の願いを受け入れて、大きな斧で殺してしまうという、殺人の動機と殺人の行為の間に、心理の入りこむ隙(すき)はまったくない。惨劇の立会人は晩秋の夕日だけであり、立会人となるために夕日は小屋の入口まで届いていなければならなかった。そこで子供たちは大きな斧を磨いていた。

　その刹那(せつな)の光景が夕日に照し出されることで、F<u>あざやかに切りとられた瞬間が、永遠の光景に転ずる</u>ことを読者は感じる。

　人間は石器時代以来たえず飢餓になやまされてきた。おそいかかる飢餓という猛獣から逃げまわるのが精一杯のくらしをつづけてきた。G<u>人間にもっとも普遍的な主題</u>がここであらわにされている。

（谷川健一『柳田国男の民俗学』による）

問１　空欄 A ・ B ・ C ・ D のそれぞれにあてはまる適切なものを、次から一つずつ選べ。

①　それにしても　②　しかし　③　さらに
④　そんなわけで　⑤　たとえば

問２　傍線Ｅ「この光景は生きたものとなる」とあるが、どうして「生きたもの」となるのか。次から適切なものを一つ選べ。

①　夕日という自然の描写によって、暗い家の内部が照し出されることになるから
②　夕日という自然の描写によって、親と子の関係が照し出されることになるから
③　夕日という自然の描写によって、自然としてある人間が照し出されることになるから
④　夕日という自然の描写によって、罪を犯した父の悲惨さが照し出されることになるから

問３　傍線Ｆ「あざやかに切りとられた瞬間が、永遠の光景に転ずる」とあるが、「永遠の光景」とはどのような意味か。次から最も適切なものを一つ選べ。

①　読者の前で事件の善悪がはっきりと呈示されること
②　読者の前で事件と季節が緊密に結びつけられること
③　人々の解釈を拒否し、事件そのものが脳裏に定着されること
④　人々の記憶に事件の悲惨さがあざやかに焼きつけられること

問４　傍線Ｇ「人間にもっとも普遍的な主題」とあるが、それは具体的にはどのような意味か。次から最も適切なものを一つ選べ。

①　親子の血縁は切りがたいこと　②　飢餓から解放されたいと願うこと
③　殺人という罪悪感に悩まされること　④　重い事実を文学として作品化すること

第十三講　知識モノ解説

文学史・人物解説

●筆者　谷川健一＝たにがわ　けんいち（一九二一〜二〇一三）東京大学文学部卒、民俗学者。日本地名研究所所長などを務めた。同じ筆者による柳田国男の「泣くこと」の分析はスタディサプリ「高3トップ&ハイレベル現代文」第九講で扱っています。文章自体も、設問も意義深い内容ですので、ぜひチャレンジしてみてください

○柳田国(國)男＝やなぎた　くにお（一八七五〜一九六二）民俗学者。民俗学＝フォークロア→一般民衆の文化・風俗・習慣を研究対象にする学問。代表作品『遠野物語』（ざしきわらし伝説や河童伝説などをふくむ）『海上の道』。柳田国男自身の文章もスタディサプリ「高3トップ&ハイレベル現代文」第一講その1で扱っています

○田山花袋＝たやま　かたい（一八七一〜一九三〇）日本における自然主義、私小説（ししょうせつ・わたくししょうせつ）の代表作的作家。『蒲団』『田舎教師』などの作品は文学史の試験問題にもよく出題されます。なお、私小説は、自分の私生活のありのままを描写することで人間の本質、自然を表現しようとする考え方。そのためストーリー性は重視されないことが多い。むしろ、破滅していく自分やダメな自分を赤裸々に描こうとする傾向が強い。虚構によって、ただし考え抜かれたフィクションによって人間とはなにかを追求しようとする作家とは対極的と言えます

○志賀直哉＝しが　なおや（一八八三〜一九七一）白樺派を代表する作家（旧制学習院高校の同人誌「白樺」のメンバー・ヒューマニズムや博愛を理念に掲げる）。主要作品として『城の崎にて』『暗夜行路』『和解』があります。こちらも文学史問題の常連さんで「短編小説の神様」とも呼ばれます。

語句

回顧＝かいこ→過去を回想すること・「懐古」が個人的な感傷、センチメンタルよりなのに対し、より公的なレベルで用います。（例）元大統領の回顧録・有名画家の回顧展

特赦＝とくしゃ→恩赦の一つ。有罪判決を受けたある者について、執行を免除すること

奇抜＝きばつ→思いも及ばないほど優れている・意表を突く・意外である

高の知れた＝たかのしれた→程度の知れた・程度の低い

述懐＝じゅっかい→思いや思い出を語ること・心中を吐露（とろ）すること

軽侮＝けいぶ→相手を軽く、低く見てあなどる、馬鹿にすること・軽蔑（けいべつ）・侮蔑（ぶべつ）

フィクション→つくりもの・虚構・創作物　対義語→ノンフィクション・ルポルタージュ・記録文学・ドキュメンタリー

刹那＝せつな→ごく短い時間

復習問題　第十三講

次の傍線部にあたる漢字を、次の選択肢から選びなさい。

（ア）課題に一生懸メイ取り組む　①命　②明　③名　④銘　⑤瞑

（イ）企画会議でキ抜な提案をする　①機　②鬼　③紀　④器　⑤奇

（ウ）事実が悲サンで物語にできない　①散　②惨　③参　④酸　⑤算

（エ）内閣の決定により特シャとなる　①謝　②舎　③赦　④遮　⑤射

（オ）前大統領の回コ録を読む　①古　②来　③雇　④故　⑤顧

（カ）幼少期の思い出を述カイする　①回　②懐　③解　④誡　⑤開

（キ）提案理由を簡ケツにまとめる　①潔　②結　③決　④欠　⑤傑

（ク）最後に渾身の力を発キする　①気　②輝　③揮　④着　⑤機

（ケ）犯行の動キが明らかになる　①期　②気　③軌　④来　⑤機

（コ）人類は長くキ餓に苦しんできた　①鬼　②既　③飢　④忌　⑤危

第十四講　旅論・異文化論

植民地主義イギリスの紀行文学の根強い伝統を論じた著作『海外へ』のなかで、イギリスの批評家ポール・フュッセルは旅人を「探検家」「トラヴェラー」「ツーリスト」の三種類のタイプに類別している。

「探検家」とは、フランシス・ドレーク卿やエドモンド・ヒラリー卿のように、A<u>しばしば爵位をもってその活動を顕彰される</u>ようなタイプの旅人である、とフュッセルは言う。いかなるトラヴェラーもツーリストも、彼らのなしとげた行為によって爵位を贈られる、というようなことはない。トラヴェラーやツーリストの旅が探検家のそれと同じ程度に困難で記憶されるべき内実をそなえたものであるとしても、それは「行為」として本質的に探検家の実践とは意味づけを異にしているからだ。「探検家」は未知の探求者である。彼らの旅は処女的発見のための旅であり、その地理的・博物学的・考古学的発見の行為は新しい科学的世界像の形成と深く結びついている。彼らは死の危険をすら冒して未知を彼らの世界の側に奪取する文化英雄たろうとする。

一方現代の「ツーリスト」の求めるものは商業主義的な企業家によってあらかじめ発見された大衆的価値である。ツーリストはマスメディアの巧妙なプレゼンテーションによって彼らのために準備されたルートとトポスとをめぐる、現代の［B］な好奇心を代表している。探検家がかたちのないもの、知られざるものと対峙（たいじ）するリスクを進んで冒そうとする人々であるならば、その反対にツーリストは徹底して既知の側につき、すでに確認されたC<u>紋切り型の</u>「知識」を安全性の保証のもとに追認するにすぎない。

そしてこの探検家とツーリストの両極の中間に「トラヴェラー」がいる。彼らは移動の途上で生起するであろうあらゆる予期せぬ経験を旅の長所として留保しつつ、一方で彼らの西欧的アイデンティティが揺らぎだす手前で巧妙に旅の混沌（こんとん）から身を引き離す。彼らは自分がいまどこにいるのかを熟知しつつ、世界放浪のロマンティックな動機に過渡的に身をまかせることのできる旅人なのである。適度な異国趣味と適度な冒険を内側から支える安定した「世界」像のなかで、トラヴェラーは時代の経済原理をたくみに利用しながら旅してゆく……。

フュッセルは「トラヴェラー」に一つの旅人としての理想のスタイルを見出そうとしている。探検家とツーリストという、

D旅の始まりと終焉（しゅうえん）の実践の両極をわたる中庸の旅人のなかに、真正の旅人へのレクイエムを聞きだそうとしている。だがここで重要なのは、探検家であろうとトラヴェラーであろうとツーリストであろうと、およそフュッセルの描きだす旅のトポグラフィにはつねに特定の起点と終点があらかじめ想定されているという事実の方である。探検家にとっての旅の起点も終点もきわめて明瞭だ。ヨーロッパの中心から国家の期待を背負って旅立った彼らは、ふたたび彼らの都市へと凱旋（がいせん）する。彼らの冒険物語を語り、撮影した処女地の写真を展覧し、爵位を授けられるために……。Eそしてその点において、トラヴェラーとツーリストもじつは変わることがない。トラヴェラーの詩的なヴァガボンドの物語はあらかじめ文明世界において語られるためにこそ体験されるのであるし、ツーリストも保証された帰還をすべての前提として土産を購入し、エキゾティックな土地の一時的占有を示す絵はがきを郷里の友人に旅先から送って彼らの知的戦利品としての風景を誇示するのである。

（今福龍太（いまふくりゅうた）『遠い挿話』より）

〈注〉トポス……場所。
トポグラフィ……地勢図。
ヴァガボンド……放浪者。

問１　傍線部Aにおいて、なぜ「探検家」は「爵位をもってその活動を顕彰される」のか。次の中からその理由として最も適切なものを一つ選べ。

① 自分の属する共同体と決別し、あえて処女地に旅立つ行動力を持ち合わせているから。
② 危険を省みず、困難な旅を行いながらも、必ずもとの場所に成果をあげて帰ってくるから。
③ 処女地を探検し、その場所を自分たちの政治的支配の下におくことは、英雄的な行為と考えられるから。
④ 国家の期待を背負いながら未知の土地を目指し、新しい世界像の形成に結びつく学術上の発見を持ち帰ってくるから。

問２　空欄［B］に入る語として最も適切なものを一つ選べ。

① 実践的　② 活動的　③ 受動的　④ 現実的　⑤ 消極的

問３　傍線部Ｃの意味として最も適切なものを、次の中から一つ選べ。

①　古びた　②　価値を持たない

③　型にはまった　④　形にとらわれた

問４　傍線部Ｄは、どのようなことを意味するか。次の中から最も適切なものを一つ選べ。

①　未知の発見としての旅と既知の追認に過ぎない旅。

②　異郷へ向けての出発と郷里への帰還。

③　冒険の成功と死ととなり合わせの危険。

④　ロマンティックな動機と詩的な放浪の物語。

問５　傍線部Ｅはどのようなことを意味するか。次の中から最も適切なものを一つ選べ。

①　トラヴェラーもツーリストも、西欧的なアイデンティティを異国の地で体現するという意味では、探検家と共通の性格を持っている。

②　トラヴェラーとツーリストは、未知の土地の探求者ではないが、自分の経験談や、旅先のみやげ物を持ち帰るという点で、探検家と類似する。

③　トラヴェラーもツーリストも、どのような形であれ異文化を体験し、また、それを語り、報告すべき、出発地である故郷を持っているという点では、探検家と同じである。

④　トラヴェラーとツーリストは、旅の遂行の仕方と、故郷に帰ってからの待遇が探検家と異なるという点で、共通の特徴を有している。

第十四講　知識モノ解説

文学史・人物解説

●筆者　今福龍太＝いまふく　りゅうた（一九五五〜）東京大学法学部卒、テキサス大大学院修了。現在、東京外国語大大学院教授の文化人類学者。受験サプリ「高1高2現代文」第四講でも登場しています。そちらは鮮やかなフットボール（サッカー）論になっています。学年を問わず、こちらもアタックしてみてください

○エドモンド・ヒラリー卿（一九一九〜二〇〇八）シェルパのテンジンとともに人類初のエベレスト登頂

○フランシス・ドレーク卿（一五四三〜一五九六）イギリスの航海者・海将。イギリス初の世界周航の達成者。スペインとのアルマダ海戦でも活躍した

語句

紀行＝きこう→旅行記・旅日記・旅行の記録文学　日本の古典文学では、紀貫之（きのつらゆき）の『土佐日記』（平安時代）、松尾芭蕉（まつおばしょう）（江戸時代）の『奥の細道』『笈（おい）の小文（こぶみ）』『野（の）ざらし紀行』などがあります。現代では、歴史小説家として知られる司馬遼太郎の『街道をゆく』

批評＝ひひょう→物事の優れた点や問題点を指摘し評価すること。批判と同義語ではないから注意

爵位＝しゃくい→貴族やナイトの称号。これをもらうと、男性なら「ミスター」ではなく「サー」で呼ばれる

マスメディア→大衆向け、大量伝達の媒体。新聞、雑誌、ラジオ、テレビ、ネットなど。ネットは双方向性があり、個人からの発信もできるため、マスメディアとは区別することもあります

プレゼンテーション→意見や計画案、企画案の発表や説明。本文では、広告や宣伝、ＣＭくらいの意味です

留保＝りゅうほ→処理を進めず、とどめ置くこと・保留

関連語　担保＝たんぽ→確保すること・借金や負債のときの保証になるもの
放浪＝ほうろう→一か所に定住せず、あちこち巡り、さすらうこと
関連語　流離＝りゅうり→故郷を離れて放浪すること
アイデンティティ→自己同一性・昨日の私も今日の私も明日の私も、基本的に同じであること・私らしさ（ただし、
自分だけの思いこみにとどまらず、他者からもそのように認められていることが大事）
混沌（渾沌）＝こんとん→入り混じって区別がつかない状態・ギリシャ語のカオス
対義語は、秩序で、ギリシャ語のコスモス
巧妙＝こうみょう→方法や技術が見事で上手なこと
ロマンティック→現実から離れた物語的な様子
過渡的＝かとてき→移り変わる過程、途中経過
異国趣味＝いこくしゅみ→異国情緒・エキゾティズム
終焉＝しゅうえん→おわり・終極・果て
中庸＝ちゅうよう→かたよらず、中性であること。行き過ぎも不足もないこと
レクイエム→鎮魂歌（ちんこんか）・死んだ者の魂を鎮める音楽
凱旋＝がいせん→勝利や成功のあと帰国すること
処女地＝しょじょち→誰も訪れたことのない未発見の地・人跡未踏
保証＝ほしょう→請け負う、受け合うこと　（例）身元保証人、借金の保証人。他にも「あなたの合格を保証します」
など
同音異義語　保障→権利や自由、安全、生活などを守ること　（例）日米安全保障条約
補償→発生してしまった損害の埋め合わせや補填（ほてん）　（例）損害補償

復習問題　第十四講

次の傍線部にあたる漢字を、次の選択肢から選びなさい。

（ア）旅の行程をキ行文にまとめる　①帰　②記　③紀　④既　⑤来
（イ）文学や芸術作品を批ヒョウする　①評　②表　③票　④標　⑤俵
（ウ）敵の地位や名を奪シュする　①主　②取　③守　④手　⑤首
（エ）犯罪の手口がコウ妙化する　①高　②効　③考　④巧　⑤功
（オ）社会変革の過ト的な状況　①途　②登　③戸　④吐　⑤渡
（カ）未開の地へとボウ険に旅立つ　①望　②貿　③冒　④暴　⑤膨
（キ）自らの立場をテッ底する　①徹　②鉄　③哲　④撤　⑤轍
（ク）漂泊の旅、放ロウの旅に出る　①狼　②朗　③郎　④浪　⑤労
（ケ）ここを旅のシュウ焉の地とする　①収　②終　③拾　④執　⑤集
（コ）過激にならず中ヨウの道をゆく　①揚　②様　③洋　④用　⑤庸

第十五講　家族論

次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

個人化の時代と言われている。家族の絆（きずな）が弱まっているとも言われる。しかしながら、人々が家族的「絆」を求める欲求は、決して弱まっていない。

ここでいう絆とは、「長期的に安定した信頼できる関係性」と定義しておく。経済的には、困ったときには助け合うというセーフティーネットであり、心理的には心の拠（よ）り所と表現することができる。孤独が好きな人もいる。［A］、多くの人々は、信頼できる人間関係を作りたいと願い、持ち続けたいと思う。

あえて、家族的絆と呼ぶのは、社会が近代化された後、このような関係性は、親子や夫婦などの「制度的家族」が供給したという事情による。

制度的家族とは、血縁や法律で繋（つな）がっている関係であり、選択不可能で解消が難しいという特徴がある。親は子を、子は親を選ぶことはできない。夫婦は一度選択してしまえば、解消には大きな困難が伴う。イヤでも切ることが難しい不自由な関係性ということができる。しかし、制度的家族と絆の関係は微妙である。

伝統的社会では、絆はイエやムラ、親族などの共同体が提供し、宗教が下支えしていた。日本では、明治時代までは、死亡率や離婚率が高く、親子や夫婦は、長期的に安定した関係と言えなかった。それゆえ、家族を包み込む共同体が生活を保障し、安心できる心の拠り所として機能していたのである。［B］、人々は、ムラの掟に従うなど、絆を維持するための不自由を甘受（かんじゅ）していた。

社会が近代化され、共同体から離脱する自由を獲得したとき、人々は安定した信頼できる関係を小規模な家族に求めた。そのためには、平均寿命が延び、乳児死亡率や離婚率が低下し、親子や夫婦が長期的に安定した関係になっている必要がある。その条件は、日本では、戦後の経済高度成長期に満たされた。ほとんどの人は結婚し、子どもを産み育て、離婚は少なかった。家族が、［C］の場と心理的拠り所を提供した。制度的家族を作り維持することが、絆を保持することとイコールとみなせたのである。

すると、家族が絆の象徴となった。親密な友人を、「家族のような」関係と形容したり、企業が従業員家族の一生の生活を保障するシステムを家族的経営と呼んだりするのは、絆と家族関係が同一視された結果に他ならない。しかし、この同一視は、近代になって生じたものであることを念頭に置く必要がある。

制度的家族と信頼できる関係性（絆）が一致しない機会が増えたのが、現代社会の特徴であり、様々な問題を生み出す原因となっている。

離婚や家庭内離婚の増加にみられるように、愛し合って結婚したからといって、信頼関係が永続するわけではない。児童虐待や親殺しなどにみられるように、親子が必ずしも信頼できる関係であるとは限らない。現実を直視する機会が増え、マスコミなどでの事件報道が増えるにつれて、家族だからと言って、自動的に「絆」が形成されるわけではないという認識が深まっている。

一方で、同性愛カップル、事実婚、グループホームに一緒に住む人、ペットをかわいがる人のように、制度的家族から離れた所に「絆」を求めようとする人が出現してきた。彼（女）らは、ことさら、自分たちの関係こそが「本当の家族」であることを強調する。［D］、絆を家族と読み替えているのである。これらの関係は、新たな家族のかたちとも言えるが、正しくは、［E］が分離した形態なのである。

もう一つの現代社会の特徴は、家族を作らなければ満たされなかった欲求が、家族なしでも果たせるようになったことにある。電化製品が普及し、コンビニができ、女性の就労が一般化し、福祉制度が整ってきた。（少なくとも大人にとっては）経済的生活をするために、家族は必要ではなくなっている。また、一緒に遊んだり、セックスしたいといった心理的欲求も、わざわざ家族を作らなくても満たすことができる。絆がなくとも、とりあえず、生活に不自由することはない。

絆と制度的家族、欲求充足という三つの領域が分離しはじめていることによって、われわれは、絆を築く上での可能性と困難性に直面することとなる。

イギリスの社会学者ギデンズは、人間関係が制度的拘束から解放されたからこそ、純粋な関係性を築く可能性が拓（ひら）けたことを強調する。確かに、共同体や家族という拘束的関係から離れて、自由に絆を築く相手を選択することは、一種の解放に違いない。イヤだと思う関係を無理して続ける必要はなくなり、これと思う関係のみを絆として選び取ることが可能になる。

しかし、選択された絆は、永続性を保証されない。前近代社会では共同体が、近代社会では制度的家族が、絆の存続を保証し

ていた。現代では、個人は、絆を作り、保つための努力が要求されるようになる。同時に、絆を一時的に失う覚悟も求められる。

そして、絆が自由に選択できる社会は、自分が絆を結ぶ相手として選択されない可能性が高まる社会と言うことができる。例えば、結婚願望が強いのにもかかわらず、未婚者が増えているという日本の現状は、結婚したいという相手からは選択されず、自分の眼中にはない相手から告白されるという事態が広範に生じているのも一因である。

また、絆を結ぶ能力を仮に「コミュニケーション能力」と言うならば、その能力の格差が様々な問題を生み出しはじめている。選択されずに、絆から排除される人が出てくる。パートナーが得られない、子どもに見捨てられるなど、大人なら［F］に帰すことができよう。しかし、児童遺棄や虐待などの例を見れば、親に選択されない子どもが現実に存在している。ことが経済的格差や生活の保障ならば、福祉などで社会的に対処することはできるが、「絆」自体を社会が作り出すことはできない。子どもやコミュニケーション能力の弱者に対して、信頼できる関係性を保障する方策を社会的に考えなければいけない時期にきている。

（山田昌弘（やまだまさひろ）『家族というリスク』による）

問１　空欄［A］・［B］・［D］に入れるのに最も適当と思うものを左の中から選び、それぞれ符号で答えなさい。ただし同じものを繰り返し用いてはならない。

①　しかし　②　たとえば　③　しかも　④　つまり　⑤　その代わり

問２　空欄［C］・［F］に入れるのに最も適当と思うものを左の中から選び、それぞれ符号で答えなさい。ただし同じものを繰り返し用いてはならない。

①　教育問題　②　社会的責任　③　自己責任　④　自由意志　⑤　生活保障　⑥　信頼関係

問３　空欄［E］に入れるのに最も適当と思う五字以上八字以内の語句を、本文中の語句を用いて「〜と〜」という形で答えなさい。

問４　次のうち、本文の著者の考え方と合致していると思うものに対しては○、合致していないと思うものに対しては×の符号で答えなさい。

①　伝統社会では、人々は家族をとりまく様々な共同体に支えられて、安心して生活を送っていた。
②　伝統社会では、イエやムラ、親族などのおかげで親子や夫婦の関係は長期的に安定していた。
③　近代社会では、個人の自立が進んだために家族的絆が弱まり、それを維持するためには絶えざる努力が必要となった。
④　現代社会では、お互いに信頼し合える特定の相手がいなくとも、生活するのにそれほど困らなくなっている。
⑤　現代社会では、心の支えとなる相手を見つけ結ばれるための特別な能力の有無が昔よりも重要になっている。

第十五講　知識モノ解説

文学史・人物解説

●筆者　山田昌弘＝やまだ　まさひろ（一九五七～）東京都生まれ。東京大学文学部卒、同大学院社会学研究科博士課程満期退学。中央大学文学部教授。専門は家族論、家族社会学。「パラサイト・シングル（収入があるのに親と同居する成人独身者）」「婚活」「希望格差社会（親の所得格差が、子供の学習意欲や希望のもちようの格差となっている）」などネーミングの才がある。入試現代文や小論文でも頻出の論客です

●アンソニー・ギデンズ（一九三八～）イギリスの著名な社会学者。ロンドン・スクール・オブ・エコノミクス名誉教授

語句

セーフティーネット↓失業保険や生活保護など、社会生活に一時的に行きづまっても復帰できるための社会保障。もともとはサーカス用語。命綱や安全網があるからこそ空中ブランコや綱渡りで最高のパフォーマンスを披露できるわけです

拠り所＝よりどころ↓心の支えや頼りになるところ／学問の議論で、根拠になるもの

近代化＝きんだいか↓理性や科学や人間の自由や権利を重視する方向になること。日本では、明治維新以後が近代化の第一段階。戦後がその第二段階と考えられる

イエ・ムラ↓筆者がわざわざカタカナで表記したのは、たんなるファミリーやホームとしての「家」や「市・町」に対する行政単位の「村」ではなく、伝統の縛りのあるかつての「イエ」や「ムラ」を指しているからです

掟＝おきて↓その社会や共同体内で守らなくてはならないきまり

マスコミ↓マス・コミュニケーションの略称・不特定多数の大衆向けに情報を大量伝達すること。その媒体が新聞、雑誌、ラジオ、テレビ、ネットなどのマスメディア

事実婚＝じじつこん↓公式な戸籍を入れないで同居したり、子供をもったりするカップル

復習問題　第十五講

次の傍線部にあたる漢字を、次の選択肢から選びなさい。

（ア）市場に商品をキョウ給する　①競　②共　③興　④経　⑤供
（イ）左右の微ミョウなバランスをとる　①妙　②名　③明　④冥　⑤命
（ウ）家族との絆をイ持し続ける　①維　②居　③遺　④緯　⑤意
（エ）幼児虐タイが疑われる　①態　②体　③耐　④怠　⑤待
（オ）ＩＴ端末が社会に普キュウする　①急　②及　③給　④朽　⑤求
（カ）企業のシュウ労規則に従う　①囚　②習　③就　④執　⑤修
（キ）社会保障とフク祉政策を立案する　①福　②復　③副　④複　⑤幅
（ク）心身のコウ束から自由になる　①硬　②構　③甲　④抗　⑤拘
（ケ）影響力は広ハンにわたっている　①版　②畔　③範　④班　⑤判
（コ）不確実な要素をハイ除する　①廃　②灰　③敗　④排　⑤配

第十六講　旅論その2

旅というものが日常生活からの離脱であることは、今も昔も変わらない。普段見なれているもの、身辺に見当たるもの、耳馴(な)れたもの、嗅(か)ぎ馴れたもの、触知し馴れたもの、それがまさに身辺そのものであるような物も人も、旅によって追憶の世界に送りこまれる。よく言われるように、旅が多くの思い出をあとに残してくれるのは本当だが、そのことが言われすぎるほどなのに対して、旅には、旅が思い出となるに先立って、日常の生活を思い出に変えるちからがあるということのほうは、つい見のがされる。

家郷で身辺の物にとり巻かれ、包みこまれていたとき、身辺の物、日常茶飯の事どもに対して、つねづね注意と理解と関心を怠らぬ習慣をもって暮らしていた人は、旅の生活でも、身辺の、目新しい現実に対して、巧(たく)まずして同じ態度をもって接することになるだろう。かつてはそこにあって、現在ただ今はそこにないものが、心のなか、あるいは脳裡(のうり)に立ちかえってくる。それが思い出であるが、思い出が現実的なものを圧倒してよみがえるとき、人は夢想にさそわれ、夢想に時をうばわれる。ロマネスク(注)なものが、ここからはじまる。内部への旅というものがあって、その旅は地獄降(くだ)りに似ている。この旅には本来、何の目じるしもなく、里程標もなく、「暗い森」とダンテ(注)が形容したような、手さぐりするしかなくて、しかも手には亡霊のような影が触れては行きすぎる茫漠(ぼうばく)とした広がりが、この旅の場というものになる。詩歌の神の助けを借りずに、この内面の旅に旅立つことは、ほとんど無謀にひとしい。だが、思い出が、つねに内面の旅をうながすほど強烈というわけではないし、それに、旅という活動的な振る舞いそのものと、刻々に変化する状況が夢想を抑止し、あるいは夢想のいとまを人から奪ってしまうものとして働くことは、旅でじっさいにしばしば経験される。こういうとき、旅の途上での思い出は、静観の対象となる。思い出を静観し吟味できるというのは、魂のちからの証(あかし)である。

旅からわれわれが受け取るこの寄与、旅のこのたまものは、今も昔も変わらないというほかに、洋の東西をこれは問わないことでもあるから、A旅というものは人を人一倍人たらしめる行動、人間にふさわしい行動ということができる。事実、自分を離れて自分を見るのは、やがて一層よく自分に戻ることなのだから。「かわいい子には旅をさせよ」という。かわいい子は、旅に

送り出されることによって、単にかわいい子というより以上のものになるのを、この日本のことわざはりっぱに告げている。（注）デカルトが万巻の書に倦み疲れたとき、「世間という書物のなかで学べるものを学ぶ」機会を旅に求め、そして報われたこと、これは西洋のこととして西洋ではよく知られている。

そのデカルトが四十一歳のときに公刊した『方法序説』をよむと、ごくはじめのところで、われわれは旅というものの効用が申し分なく簡潔に指摘されている次のような一節に出会う。ただし、その効用は、よく文字を弁え、知識として摂受し得るかぎりの知識を時代から申し受けたひとりの若々しい人間にとって、旅が用として働くときの効用である。しかもデカルトは、旅の効用を説きながらも、旅人として長く異郷に暮らすという境涯の孕んでいる危険な罠から、油断のない目を離さない。B旅もまた、この短い一節のうちで相対化されている。デカルトは、同時代のフランスで人々が呼びならわしているところをそのまま用いて、こういうC醒めきった目をボン・サンス（良識）と称した。

だが、これまでにギリシア・ラテン語のためには、もう充分の時をついやしたと私は思っていた。このことは、古き世の書物との付き合いについても、そういう書中にみえる歴史また寓話についても、同様にいえることだった。じっさい、別の世紀の人々にしたしむのと、旅をすることとは、よく似ている。いろんな違った国民の習俗について何かを知るのは良いことだ。そうすれば、われわれ自身の習俗について、もっと公平な判断がくだせるようになるし、われわれの風とは相容れないもの、納得しかねるものをすべて見境なく滑稽な、不都合なものに思ったりもしなくなる。何らの見聞もない人々は、そういう思いこみを平気でするものだ。だが、旅にあまりに多くの時を用いすぎると、自分の国に戻ってきても異邦人になってしまう。そして、過ぎし世のことにあまりに打ち興じていると、今の世のことに対してさっぱり不案内な有様になるのはよくあることだ。

（『方法序説』第一部）

右の文中、旅は喩えとして出ているにすぎないように受け取っては、おそらく見当違いになるだろう。しかも、旅は喩えとして働いていないわけでもない。二十三歳以来、折りをみて母国のフランスには「滞在する」のみで、旅に旅をかさねたうえ、『方法序説』出版の一六三七年にはすでに足掛け十年、アムステルダムに居つづけているこの哲学者は、旅宿の暮らしにも、異邦人の立場——しかも二重異邦人の立場——にも、さながら迷宮の支配者のように格別よく事情に通じていた。いいかえれば、喩えのごとくにあしらって傍らをすり抜けてみせるくらいにまで、デカルトは旅とは何かという話題におよぶ段には、みずからの言

葉に深く恃むところがあった。

（杉本秀太郎『散文の日本語』による）

（注）○ロマネスク――伝奇的、物語的。

○ダンテ――一二六五年〜一三二一年。イタリアの詩人。代表作に『神曲』、『新生』などがある。

○デカルト――一五九六年〜一六五〇年。フランスの哲学者、数学者。代表的著作に『哲学原理』、『情念論』などがある。

問１　傍線部Ａ「旅というものは人を人一倍人たらしめる行動、人間にふさわしい行動ということができる。」とあるが、なぜそのようにいうことができるのか。その説明として最も適当なものを、次から一つ選べ。

①　旅というものは多くの思い出を残してくれるので、旅によって得られる多様な経験を通じて、人は内面的な豊かさに満ちた人生を生きることができるから。

②　旅をすることによって、人は現実を離れ、ロマネスクな夢想の世界にさそわれることになり、その結果、内面へと深く沈潜して新たな自己を発見できるから。

③　旅には日常の生活を思い出に変える力があり、旅の生活を通じて、人は普段見なれている身辺の事物を懐かしい気持ちで見直せるようになるから。

④　旅をすることによって、人は日常の生活から離れ、それを思い出として静観し吟味することができ、自分自身を改めて距離を置いて見直せるようになるから。

⑤　旅における困難との遭遇とその克服によって、かわいい子は、単にかわいい子というより以上のものになり、人間的に成長して客観的な目を持つことができるから。

問２　傍線部Ｂ「旅もまた、この短い一節のうちで相対化されている。」とあるが、旅を相対化するとは、どういうことか。その説明として最も適当なものを、次から一つ選べ。

①　旅というものを、フランス人がボン・サンス（良識）と呼びならわしている醒めきった目で見直すことによって、旅の思い出を日常の生活と等価なものとしてとらえること。

②　ギリシア・ラテン語などの古い時代の書物やそこに記された歴史と付き合い、別の世紀の人々にしたしむのは、日常生活を離れて異国へ旅に出るのと同じであると考えること。

③　自分たちの風俗・習慣と相容れないもの、納得しかねるものをすべて見境なく滑稽な、不都合なものに思ったりせず、旅先の目新しい現実をも公平に判断すること。

④　何らの見聞もない人々は、自分たちの日常生活から逸脱したものを平気で排除してしまう傾向があるが、自分の国に戻っても異邦人にならないためにはそれもやむをえないと考えること。

⑤　知見を広め人間を成長させるなど、旅の有する意義を認めると同時に、旅に多くの時間をついやして現実から遊離してしまう危険性についても自覚的であること。

問３　傍線部Ｃ「醒めきった目」の「た」と同じ意味・用法のものを、次から一つ選べ。

①　家郷で身辺の物にとり巻かれ、包みこまれていたとき、身辺の物、日常茶飯の事どもに対して……

②　手には亡霊のような影が触れては行きすぎる茫漠とした広がりが、この旅の場というものになる。

③　「世間という書物のなかで学べるものを学ぶ」機会を旅に求め、そして報われたこと、これは西洋のこととして西洋ではよく知られている。

④　これまでにギリシア・ラテン語のためには、もう充分の時をついやしたと私は思っていた。

⑤　二十三歳以来、折りをみて母国のフランスには「滞在する」のみで、旅に旅をかさねたうえ、『方法序説』出版の一六三七年にはすでに足掛け十年、アムステルダムに居つづけているこの哲学者は……

問４　筆者は、旅や学問に対するデカルトの態度をどのようにとらえているか。最も適当なものを、次から一つ選べ。

①　デカルトは旅に旅を重ねた結果、長年住み慣れた異国オランダばかりでなく、母国フランスに対しても、異邦人としての冷ややかな目と識見を持つに至った。

②　デカルトは旅の暮らしや異邦人としての立場によく通じていたので、自らの学問に深く恃むところがあり、他人の意見には醒めきった態度で対処しがちであった。

③　デカルトは自己の学問成果を語る時でも、旅の効用を説く時でも、その言葉に絶大なる自信を持っていたが、それは深い学殖と経験に裏打ちされたものであった。

④　デカルトは種々の文献からはもちろん、旅などあらゆる機会をとらえて可能な限りの知識を吸収したが、また、それらを弁別し相対化する醒めた目も持っていた。

⑤　デカルトは長年人生における旅の効用について説き続けたが、世間知らずの異邦人となる危険性にも気づき、ついには旅に対して相対的な態度を取るに至った。

第十六講　知識モノ解説

文学史・人物解説

●筆者　杉本秀太郎＝すぎもと　ひでたろう（一九三一〜）京都府生まれ、京都大学文学部フランス文学科卒、同大学院博士課程満期退学。旅についての評論は数が多く、「旅論」としてテーマ分類できるほどです。入試でも頻出で、受験サプリでも「高3トップ&ハイレベル現代文」第六講（哲学者、中村雄二郎の旅論）、「高1高2現代文」第五講（作家、沢木耕太郎の旅論）で扱っています。そちらもぜひチャレンジしてください

語句

家郷＝かきょう→家のあるところ・ふるさと・故郷

追憶＝ついおく→過ぎ去った日々を思い出すこと

日常茶飯＝にちじょうさはん→普段のこと・ありふれたこと

巧まずして＝たくまずして→とくに意図せず・技巧や趣向をこらすことなく

脳裡＝のうり→頭の中・心の内・「脳裏」とも書く。この場合の「裏」は「うらがわ」の意味ではなく「うちがわ」の意味

里程標＝りていひょう→「日本橋から三〇キロ」のような距離の標識。むかしの一里塚（街道沿いに一里ごとに小山を築き、松などを植えて目印にした）。一里は約四キロメートル

形容＝けいよう→ありさまや様子を表現すること

茫漠＝ぼうばく→広くてとりとめがない・ぼんやりしてはっきりしないこと

無謀＝むぼう→後先のことを考えていない行動

刻々＝こっこく・こくこく↓次々と・次第に・刻一刻
いとま↓ひま、ゆとり。「暇」と書く。「いとまを与える・いとまを出す」というと解雇、辞めさせること。「おいとまする」なら「さよならする」こと
静観＝せいかん↓冷静に観察すること
寄与＝きよ↓社会や人のために役立つこと
たまもの↓恵みとして与えられたもの・努力などの成果
万巻＝まんがん・ばんかん↓きわめて多くの書物
効用＝こうよう↓効き目・効能・使い道／経済学では満足度
倦む＝うむ↓飽きていやになること／倦まずたゆまず↓飽きたり怠けたりせずに努力すること
弁える＝わきまえる↓正しく判断する・分別をそなえる
境涯＝きょうがい↓生きて行く立場や環境・境遇
孕む＝はらむ↓内部にふくみもつ
相対化＝そうたいか↓一つの事を絶対化しない・他との比較検討の対象とする・ことのプラスマイナスを両方とらえる
ボン・サンス↓フランス語で良識や常識を意味する。英語ならグッド・センス／常識ならコモン・センス
ラテン語↓古代ローマ帝国の公用語で、後のヨーロッパ諸言語のベースとなった。特にフランス語・イタリア語・スペイン語・ポルトガル語・ルーマニア語の直接の母体。古代ギリシャ語と並ぶヨーロッパの古典語
寓話＝ぐうわ↓教訓的な物語。とくに擬人化された動物の物語。イソップ童話はその代表です
習俗＝しゅうぞく↓その社会や共同体に伝わる伝統的な習慣や風俗・ならわし。これを学問対象とするのが民俗学（フォークロア）
相容れない＝あいいれない↓互いに受け入れられない・二つの立場がかみあわない
異邦人＝いほうじん↓フランス語のエトランゼ、英語のストレンジャーの訳語。外国人の意味だが、単に異国の人と

いう以上に、孤独や疎外感の意味を含むことが多い

かわいい子には旅をさせよ→かわいい子は甘やかして育てるよりも、手もとから放して苦労を経験させたほうがよい。かえってその子のためになるという意味。近年は、かわいい子が卒業旅行に行けるように親が金銭的支援をしてあげるべきだ、という誤用もあるようです

復習問題　第十六講

次の傍線部にあたる漢字を、次の選択肢から選びなさい。

（ア）日常の暮らしからリ脱する　①里　②吏　③離　④裏　⑤裡

（イ）あの日々が追オクの彼方へ退く　①臆　②億　③奥　④憶　⑤屋

（ウ）肌の感覚でショク知する　①色　②稙　③殖　④植　⑤触

（エ）目の前のものを圧トウする　①踏　②倒　③討　④淘　⑤到

（オ）忽然（こつぜん）とボウ霊が立ち現れる　①暴　②某　③乏　④亡　⑤貌

（カ）強レツな光に照らされる　①烈　②列　③裂　④劣　⑤埒

（キ）心を落ち着かせてセイ観する　①制　②清　③静　④晴　⑤醒

（ク）対象を分析し、よく吟ミする　①味　②身　③美　④見　⑤看

（ケ）大部の著作をコウ刊する　①興　②広　③公　④交　⑤講

（コ）自分たちとは違う習ゾクを知る　①族　②俗　③属　④賊　⑤続

第十七講　戦争論・近代化論

「戦記」の類なら、ものが書かれはじめた当初から無数にあるし、それぞれの時代にはそれぞれの「戦術論」がある。だが[A]クラウゼヴィッツの『戦争論』（一八三二―一八三四）以前に「戦争論」はない。そしてこのナポレオン戦争の敗軍の一士官をして、生涯をかけてこの書物を書かせたものこそ近代の戦争だったと言うことができる。戦争もまたナポレオン以後、あるいはフランス革命以後、それ自身の〈近代〉に入り、そのときから戦争は、歴史をいろどる勇壮なエピソードでも、贅沢で気まぐれなゲームでもなく、ある「絶対的なもの」、「全体的なもの」としてそれ自身の解明を求める何かとなったのである。

　クラウゼヴィッツは述べている。「ナポレオンこのかた、戦争は……これまでとはまったく異なる性質を帯びるにいたった、――と言うよりは、むしろ戦争の本性、即ち戦争の絶対的形態に著しく近づいた、と言うほうがいっそう適切である」。ここで言われる「戦争の本性」とは、敵を完全に打倒し無力化することである。戦争が「異なる手段をもってする政治の継続」であり、そのねらいが「相手に我が方の意志を強要する」ことにあるのだとすれば、戦争は基本的に政治的行動の選択肢のひとつであり、政治的目的を達成するための手段である。その意味では、武力を発動したとしても、敵を完全に打倒することはかならずしも必要ではなく、相手を降伏させるだけで足りる。そのあとは戦争は本来の政治的行動に場をゆずることになる。戦争はだから、知性の介入を排除するものではないが、もし一方が流血や損傷をいとわずとことん武力を行使する姿勢を示せば、相手が同じことをしないかぎり優位に立つことができる。だがそこで相手も同様の対応を示すとすれば、双方の武力行使はしだいに競り上がり「極度」にまで達することになる。そうなると戦争は、あくまでも政治的目的に合致しながらも、敵の壊滅という戦争それ自身の本性に限りなく近づくことになる。そのときにはもはや、戦争は政治性を脱却してその「純粋な」形態をあらわにして、それ自身「絶対的なもの」と化し、[B]もはや破壊行為を抑制するものとしては、戦争それ自体に内在する障害以外にないという状況になる。

　それがいわゆる「[C]絶対的戦争」の原理だ。何かのためにする行為がそれ自体目的となり、いつのまにか本来のねらいを無化してしまうという、没入の心理学的ゲームを思わせるこの原理は、おそらく動物の闘争本能と呼ばれるものや、人間の尊厳の意

識とも無縁ではなく、どんな小さな諍（いさかい）のうちにも可能性の極として含まれている。だが、「戦争の動因が大規模になり、また強力になるにつれ、またこの動因が国民の全般的存在に関係するにつれ、更にまた戦争に先きだつ彼我両国間の緊張が高まるにつれて、戦争はますますその抽象的、絶対的形態に接近し、……ますます純粋なものになり、ますますその政治性を失却するかのように思われる」（強調引用者）。クラウゼヴィッツが対ナポレオン戦争の経験をとおして、深い戦慄とともに見いだしたのは、戦争が〈国民〉の戦争となることによって可能になった、この原理の無制約的な発現だった。そしてまさしくそのことが〈戦争の近代〉を画すものであり、この「絶対的戦争」の露呈が、戦記でも兵法でも政策論でもない『戦争論』を彼に書かせることになったのである。

　クラウゼヴィッツが強調するのは、ナポレオンの率いた軍隊が〈国民〉の軍隊だったということだ。ナポレオンの軍隊は数においても士気においても圧倒的な力を発揮したが、それは彼らが、国王のために戦争に駆り出された僕従でもなければ、他人の戦争に金で雇われた傭兵でもなく、自分自身の戦争にみずから参加する〈国民〉だったからである。〈国民〉として闘うこの強力な軍隊の出現は、やがて同盟国側にも〈国民〉意識の醸成を促すことになり、これ以後戦争は基本的に〈国民〉と〈国民〉との激突の様相を呈することになる。少くとも、政治は戦争をそのようなものとして演出するようになる。

　この「諸国民戦争」は、王家の利害のために発動される戦争と違って、広範な〈国民〉の積極的参加に支えられており、その全般的存在を関わり合いにして、対立は〈国民〉同士の対立として抽象的なかたちで激化する。「抽象的」というのは、国王や王家の利害というのが具体的で限定されているのに対し、〈国民〉というものがもともと概念的存在でしかなく、それゆえにこそこの概念的存在は具体的条件を超えてどこまでも肥大しうるからだ。そればかりでなく、これまでなら王家の財政事情に制約されていた戦争手段の調達も、人的にも物的にも国家財政の枠まで広げられることになり、原理的にはその完全な破綻にいたるまで戦争は遂行しうることになる。要するに D<u>〈国民国家〉の成立が、戦争の絶対化の条件を整えたのである。</u>

　フランス革命は、絶対王権を廃して人民主権を実現した。だが王権の廃止によって人々は、たんに自由で平等な個人として解放されたわけではない。王権から解放された個人は、ただちに〈国民〉たることを運命づけられていた。革命はすぐさま諸外国の干渉を引き起こすことになったが、人々は獲得した自由を守るためにまず自由の体制を、つまり今や自分たちのものとなったフランス国家を守らなければならなかった。それまで国土を領有する王家とそこに住む領民との支配と帰属の空間であった国家

は、このときから国家が民衆の総体と合致する〈国＝民〉の空間になったのである。そしてこの戦争は〈国民〉が自分のためにみずから遂行する〈国＝民〉の戦争となる。戦争の主体はもはや「私が国家だ」と主張する絶対的主権者ではなく、「われわれが国家だ」と自負する無数の小さな主権者であり、兵士はいまやたんに利用される手段ではなく、みずから闘う理由を自覚している。したがってこの戦争は、もはや国王のものでも特定の戦士階級のものでもなく、「われわれ」と言いうるすべての者の戦争なのだ。

（西谷修『戦争論』）

〈注〉クラウゼヴィッツ（一七八〇～一八三一）…プロイセンの軍人、軍事理論家。『戦争論』の著者として有名。

問１　傍線部Ａからうかがえる著者の戦争観に**合わない**ものを次から一つ選べ。

①　本来的な戦争といえるのは近代の戦争である。
②　戦術は戦争の二次的な側面である。
③　大量破壊兵器を用いた戦争が本来の戦争である。
④　戦争はある「絶対的なもの」として現れてきたとき本来の戦争となる。

問２　傍線部Ｂにある「もはや破壊行為を抑制するものとしては、戦争それ自体に内在する障害以外にないという状況になる」というのはどういう状況を指しているのか。本文全体の趣旨を考慮した上で、次から最も適切なものを一つ選べ。

①　戦争は敵を徹底的に破壊しようとするものだが、戦争にはもともとそれを妨げる障害があり、それが最終的に戦争を抑制する状況。
②　戦争には動物の闘争本能に似た何かがあり、一方が武力を行使する姿勢を示せば、他方もそれに応ぜざるをえない状況。
③　戦争は相手を降伏させるという目的をもって始めるが、いつのまにかその行為が自動的に動き出し、その破壊は究極まで至らないと止めることができなくなる状況。

④　戦争に一端突入してしまうと歯止めがきかなくなり、戦争の原因となった問題が解決されたときにのみ、それを終結させることができるという状況。

問３　傍線部Ｃ「絶対的」を別の用語で置き代えたとき不適切なものを次から一つ選べ。

①　無制約的　　②　決定的　　③　純粋な　　④　全面的

問４　傍線部Ｄに「〈国民国家〉の成立が、戦争の絶対化の条件を整えたのである」とあるが、これはなぜか。次から最も適切なものを一つ選べ。

①　人々が〈国民〉となることによって、国家は〈国民〉を強制的に全面的な戦争に徴用することが可能になるため。

②　〈国民国家〉になると、王家の財政事情などによって制約されなくなり、国家の為政者は自分で戦争手段の調達も自由にできるようになるため。

③　人々は、王家に帰属する領民から〈国民〉になると、国王によって戦争に無理やり駆り出されるものではなくなって、〈国民〉として自由意志で参加が可能になるため。

④　〈国民〉という概念は曖昧でどこまでも広がるために、小さな対立も〈国民〉の対立として激化しやすく、国全体を巻き込んだ果てしない戦争に突き進む可能性が大きくなるため。

第十七講　知識モノ解説

文学史・人物解説

●筆者　西谷　修＝にしたに　おさむ（一九五〇～）愛知県生まれ、東京大学法学部卒。その後、東京都立大学大学院、パリ第八大学で学ぶ。立教大学特任教授。哲学・フランス現代思想が主な研究分野。入試小論文や入試現代文で頻出の研究者です

語句

近代＝きんだい→中世や伝統的社会に対して、科学、理性、民主主義や個人の自由・権利を重視する時代
勇壮＝ゆうそう→勢い盛んで勇ましい。力強く堂々たる様子
エピソード→挿話・物語
本性＝ほんせい・ほんしょう→本来、本質的にもっている性質。人の隠れた本音などを指すときには「ほんしょう」と読むことが一般的で、学問的に探究すべき対象のときには「ほんせい」と発音するのが一般的
いとわず＝厭わず→いやに思わず
抑制＝よくせい→勢いをおさえて、とどめること。感情などの高まりや噴出をおさえつけること
制約＝せいやく→条件づけて自由を縛ること
諍(い)＝いさか(い)→争い・言い争い・ケンカ・闘争
動因＝どういん→原因・動機となるもの・インセンティブ
戦慄＝せんりつ→恐ろしさで体がふるえること。「戦慄く」で「わななく」、「戦く」「慄く」はともに「おののく」と読み、これらすべて、ふるえること
士気＝しき→兵士の戦闘意欲、やる気・熱意
発現＝はつげん→内から外へとはっきり表れること・発露
醸成＝じょうせい→かもし出すこと・次第に作り出されること
概念＝がいねん→ことば・とくに抽象的なことば・概括的でおおまかな意味内容・コンセプト
肥大＝ひだい→ふくれあがること・通常や正常な状態より大きくなること
破綻＝はたん→うまくいかず、修復できない状態に陥ること

復習問題　第十七講

次の傍線部にあたる漢字を、次の選択肢から選びなさい。

（ア）勇ソウな行進曲を奏でる　①荘　②葬　③創　④総　⑤壮

（イ）敵を容赦なく打トウする　①頭　②倒　③討　④踏　⑤闘

（ウ）政治的な目的を達セイする　①制　②征　③成　④政　⑤誓

（エ）降フクせずに徹底抗戦する　①副　②伏　③腹　④覆　⑤福

（オ）相手よりユウ位な立場になる　①優　②有　③勇　④右　⑤雄

（カ）悪習からの脱キャクを試みる　①脚　②却　③客　④隔　⑤格

（キ）海洋兵力のヒ我の格差を知る　①非　②被　③彼　④比　⑤飛

（ク）内なる力の発ゲンを見る　①原　②元　③言　④現　⑤眩

（ケ）対話的な雰囲気をジョウ成する　①剰　②醸　③穣　④譲　⑤場

（コ）赤字で国家の財政が破タンする　①嘆　②淡　③綻　④短　⑤端

第十八講　漢文学論

以下は、十八世紀末から十九世紀にかけて、幕府の教学制度が整備され、さらにこれをモデルとした学問奨励策が各藩に普及していくことに伴って、漢文を読み書きする行為が士族階級を主な担い手として日本全国に広まったことを述べた後に続く文章である。これを読んで、後の問いに答えよ。（設問の都合で本文の段落に1〜20の番号を付してある。）

1　漢文学習の入り口は素読（そどく）です。初学者はまず『論語』や『孝経（こうきょう）』(注1)などを訓点に従ってただ棒読みする素読を叩（たた）きこまれました。漢籍を訓読するというのは、一種の翻訳、つまり解釈することですから、解釈の標準が定まっていないと、訓読もまちまちになってしまいます。そうすると、読み方、つまり素読を統一することはできなくなります。「素読吟味」という試験は素読の正確さを問うものでしたから、素読、すなわち訓読はおおまかにせよ統一されていることが前提となりましたし、さらにその前提として、解釈の統一が必要でした。つまり、解釈の統一は、カリキュラムとしての素読の普及と一体のものであったと言えるのです。やや極端な言い方ですが、異学の禁(注2)があればこそ、素読の声は全国津々浦々に響くことになったのです。

2　このように歴史の流れを理解すれば、十九世紀以降の日本において、漢文が公的に認知された素養であったということも、納得しやすいのではないでしょうか。

3　さて、こうした歴史的な環境の中で、漢文は広く学ばれるようになったのですが、多くの人々は儒者(注3)になるために経書（けいしょ）を学んだのではありませんし、漢詩人になるために漢籍をひもといたのではありませんでした。そうした専門家になるためでなく、いわば基礎学問としての漢学を修めたのです。もちろん、体制を支える教学として、身分秩序を重んじる朱子学が用いられたという側面を無視することはできません。しかし、現実に即して見れば、漢学は知的世界への入り口として機能しました。訓読を叩きこまれ、大量の漢籍に親しむことで、彼らは自身の知的世界を形成していったのです。

4　となると、その過程で、ある特定の思考や感覚の型が形成されていったことにも、注意を向ける必要があります。といっても、忠や孝に代表される儒教道徳が漢文学習によって身についたと言いたいのではありません。そうした側面がないとは言えないのですが、通俗的な道徳を説く書物なら、漢籍を待たずとも、巷（ちまた）に溢（あふ）れていました。何も漢文を学ばなければ身につか

ないものでもなかったのです。

5 <u>もう少し広く考えてみましょう。</u>[A]

6 そもそも中国古典文は、特定の地域の特定の階層の人々によって担われた書きことばとして始まりました。逆に言えば、その書きことばによって構成される世界に参入することが、すなわちその階層に属することになるわけです。どんなことばについてもそうですが、人がことばを得、ことばが人を得て、その世界は拡大します。前漢から魏晋（ぎしん）にかけて、その書きことばの世界は古典世界としてのシステムを整えていき、高度なリテラシー（読み書き能力）によって社会に地位を占める階層が、その世界を支えました。それが、士人もしくは士大夫と呼ばれる人々です。

7 『論語』一つを取ってみても、そこで語られるのは人としての生き方であるように見えて、士としての生き方です。「学んで時に習う…」と始められるように、それは「学ぶ」階層のために書かれています。儒家ばかりではありません。無為自然（注4）を説く道家にしても、知の世界の住人であればこそ、無為自然を説くのです。乱暴な言い方ですが、農民や商人に向かって隠逸（注5）を説くのではないのです。

8 思想でなく文学にしても、同じことが言えます。たしかに、中国最古の詩集である（注6）『詩経（しきょう）』には民歌に類するものが含まれていますが、その注釈や編纂（へんさん）が士人の手になるものである以上、統治のために民情を知るという視線はすでに定まっています。まして、魏晋以降、士人が自らの志や情を託しうるものとして詩を捉（とら）え、ついには詩作が彼らの生を構成するほとんど不可欠の要素になったことを見れば、唐代以降の科挙による詩作の制度化を待たずとも、古典詩はすでに士人のものだったことは、あきらかです。

9 こういう観点からすれば、古典詩文の能力を問う科挙は、士大夫を制度的に再生産するシステムであったのみならず、士大夫の思考や感覚の型——とりあえずこれをエトスと呼ぶことにします——の継承をも保証するシステムだったことになります。

10 日本の近世社会における漢文の普及もまた、士人的エトスもしくは士人意識——その中身については後で述べます——への志向を用意しました。漢文をうまく読み、うまく書くには、字面だけを追って真似（まね）ても限界があります。その士人としての意識に同化してこそ、まるで唐代の名文家韓愈（かんゆ）が乗り移ったかのような文章が書けるというわけです。あるいは、彼らの詩文を

真似て書いているうちに、心の構えがそうなってしまうと言ってもよいでしょう。文体はたんに文体に止まるものではないのです。

11 そういうふうにして、古典文の世界に自らを馴染ませていくこと自体は、中国でも日本でもそれほどの違いがあるわけではありません。ただ、誰がどのようにして、というところには注意が必要です。もう一度、近世日本に戻って考えてみましょう。

12 繰り返しになりますが、日本における近世後期の漢文学習の担い手は士族階級でした。となると、中国の士大夫と日本の武士が漢文を介してどのように繋がるのか、見ておく必要があります。

13 軍功を競う中世までの武士とは異なり、近世幕藩体制下における士族はすでに統治を維持するための吏僚(注7)であって、中国の士大夫階級と類似したポジションにありました。その意味では、士人意識には同化しやすいところがあります。一方、中国の士大夫があくまで文によって立つことでアイデンティティを確保していたのに対し、武士は武から外れることは許されません。抜かなくても刀は要るのが太平の武士です。文と武、それは越えがたい対立のように見えます。

14 しかしそれも、武を文に対立するものとしてでなく、忠の現れと見なしていくことで、平時における自己確認も容易になります。B刀は、武勇でなく忠義の象徴となるのです。これは、武への価値づけの転換であると同時に、そうした武に支えられてこその文であるという意識が生まれる契機にもなります。

15 やや誇張して言えば、近世後期の武士にとっての文武両道なるものは、行政能力が文、忠義の心が武ということなのです。武芸の鍛錬も、総じて精神修養に眼目があります。水戸藩の藩校弘道館を始め、全国各地の藩校が文武両道を標榜したことは、こうした脈絡の中で捉えてこそ意味があるでしょう。たとえば、幕末の儒者佐藤一斎(注8)の『言志晩録』にはこんな一節があります。

刀槊之技、懐怯心者衄、頼勇気者敗。必也泯勇怯於一静、忘勝負於一動、[…]如是者勝矣。心学亦不外於此。

(刀槊の技[剣術]は、怯心[臆病な心]を懐く者は衄し[負け]、勇気に頼る者は敗る。必ずや勇怯を一静に泯し[消し]、勝負を一動に忘れ、[…]是くの如き者は勝つ。心学も亦た此れに外ならず。)

16 臆病も勇猛も勝負も超越してこそ、勝つことができる。武芸はすでに技術でなく精神が左右するものになっています。だからこそ、精神修養の学である「心学」が、武芸の鍛錬になぞらえられているのです。注意したいのは、武芸を心学に喩えているのではないことです。その逆です。心学を武芸の鍛錬によって喩えるほどに、武芸は精神の領域に属する行為となっていたというわけです。

17 そして寛政以降の教化政策によって、学問は士族が身を立てるために必須の要件となりました。政治との通路は武芸ではなく学問によって開かれたのです。もちろん「学問吟味」という名で始まった試験は、中国の科挙制度のような大規模かつ組織的な登用試験とは明らかに異なっていますし、正直に言えば、ままごとのようなものかもしれません。けれども、「学問吟味」や「素読吟味」では褒美が下され、それは幕吏(注9)として任用されるさいの履歴に記すことができました。武勲ならぬ文勲です。そう考えれば、むしろあからさまな官吏登用試験でないほうが、武士たちの感覚にはよく適合したとも言えるのです。

18 もう一つ、教化のための儒学はまず修身(注10)に始まるわけですが、それが治国・平天下に連なっていることも、確認しておきましょう。つまり、統治への意識ということです。士大夫の自己認識の重要な側面がここにあることは、言うまでもありません。武将とその家来たちもまた、その意識を分かちもつことで、士となったのです。経世(注11)の志と言い換えることもできるでしょう。「修身・斉家・治国・平天下」とは、四書の一つ『大学』の八条目のうち、後半の四つです。『大学』は朱子学入門のテキストとして重んじられ、倫理の基本でもありました。

19 細かく言えば、八条目の前半、「格物(注12)・致知・誠意・正心」との思想的連関はどうなのか、とか、昌平黌や藩校でのむやみな政談はご法度だったのではないか、とか、いくらでも議論や検証を行う余地はあります。単純に統治意識の一語ですませられないところがあるのは事実です。近世の思想史をていねいに見ようとすれば、右の捉え方は、ややおおづかみに過ぎるかもしれません。

20 しかし当の学生たちにとってみれば、漢文で読み書きするという世界がまず目の前にあり、そこには日常の言語とは異なる文脈があったことこそが重要なのです。そしてそれは、道理と天下を語ることばとしてあったのです。C<u>漢文で読み書きすることは、道理と天下を背負ってしまうことでもあった</u>のです。

（齋藤希史『漢文脈と近代日本』による）

（注）
1　孝経――儒教の基本文献の一つ。
2　異学の禁――「寛政異学の禁」のこと。寛政の改革の一環として、一七九〇（寛政二）年以降実施された、幕府の教学政策。儒教の学説の一つである朱子学を正統の学問とし、それ以外の学説を幕府の儒者が講じることを禁じた。中国に範をとって「学問吟味」と「素読吟味」という試験制度が設けられ、幕府直轄の学問所（昌平坂学問所＝昌平黌）も正式に定められた。
3　儒者――儒学を学び、修めた人。また儒学を講じる人。儒家。
4　無為自然を説く道家――「無為自然」は、『老子』『荘子』の教えの基本理念で、人為を排し、自然の理法に従って生きること。「道家」は『老子』『荘子』の学説を奉じる人。
5　隠逸――無為自然の理念のもと、俗世を離れて暮らすこと。
6　詩経――経書の一つ。古代中国の殷・西周から春秋時代にかけての詩三〇五編を収める。
7　吏僚――役人、官吏。
8　佐藤一斎――一七七二年～一八五九年。大学者として知られ、一八四一年には昌平黌の教授となった。
9　幕吏――江戸幕府の役人。
10　修身――代表的な経書である『大学』で説かれている八つの項目の一つ。自分の行いを律し、我が身を正しく保つこと。人を治める（斉家・治国・平天下）にあたっての根本に位置づけられる。なお、「斉家」は家を正しくととのえること、「治国」は国を正しく治めること、「平天下」は天下すなわち世の中を平穏に保つこと。
11　経世――世の中を治めること。
12　格物・致知・誠意・正心――「修身」に先立つとされる、物事の理解や心構え。

問１　傍線部Ａ「もう少し広く考えてみましょう。」とあるが、それはなぜか。その説明として最も適当なものを、次のうちから一つ選べ。

①　中国に目を転じて時代をさかのぼり、中国古典文に見られる思想と文学の共通点を考慮に入れることで、近世後期の日

本において漢籍が知的世界の基礎になった根拠が把握できるから。

② 中国に目を転じて時代をさかのぼり、科挙を例に学問の制度化の歴史的起源に関する議論を展開することで、近世後期の日本において漢学が素養として公的に認知された理由が把握できるから。

③ 中国に目を転じて時代をさかのぼり、儒家だけでなく道家の思想も士大夫階級に受け入れられた状況を踏まえることで、近世後期の日本において漢文学習により知的世界が多様化した前提が把握できるから。

④ 中国に目を転じて時代をさかのぼり、中国古典文と士大夫階級の意識との関係を考察することで、近世後期の日本において漢文学習を通して思考や感覚の型が形成された過程が把握できるから。

⑤ 中国に目を転じて時代をさかのぼり、中国古典文に示された民情への視線を分析することで、近世後期の日本において漢学の専門家以外にも漢文学習が広まった背景が把握できるから。

問２　傍線部Ｂ「刀は、武勇でなく忠義の象徴となる」とあるが、それによって近世後期の武士はどういうことが可能になったのか。その説明として最も適当なものを次のうちから一つ選べ。

① 近世後期の武士は、刀が持つ武芸の力を忠義の精神の現れと価値づけることで、理想とする中国の士大夫階級の単なる模倣ではない、日本独自の文と武に関する理念を打ち出すことができるようになった。

② 近世後期の武士は、単なる武芸の道具であった刀を、漢文学習によって得られた吏僚としての資格と、武士に必須な忠義心とを象徴するものと見なすことで、学問への励みにすることができるようになった。

③ 近世後期の武士は、刀を持つことが本来意味していた忠義の精神の中に、武芸を支える胆力と、漢文学習によって獲得した知力とを加えることで、吏僚としての武士の新たな価値を発見できるようになった。

④ 近世後期の武士は、武芸の典型としての刀を忠義の精神の現れと見なし、その精神を吏僚として要求される行政能力の土台と位置づけることで、学問につとめる自らの生き方を正当化できるようになった。

⑤ 近世後期の武士は、常に刀を携えることで、統治のためには忠義で結ばれた関係が最も重要であることを自覚し、出世のための学問を重んじる風潮に流されず、精神の修養に専念できるようになった。

問３　傍線部Ｃ「漢文で読み書きすることは、道理と天下を背負ってしまうことでもあった」とあるが、それはどういうことか。本文全体の内容に照らして最も適当なものを、次のうちから一つ選べ。

① 武士の子弟たちは、漢文を学ぶことを通して、幕府の教化政策を推進する者に求められる技能を会得するとともに、中国の科挙制度が形成した士人意識と同様のエリートとしての内面性を備えるようになったということ。

② 武士の子弟たちは、漢文を学ぶことを通して、行政能力としての文と忠義の心としての武とを個々の内面において調和させるとともに、幕吏として登用されるために不可欠な資格を獲得するようになったということ。

③ 武士の子弟たちは、漢文を学ぶことを通して、身を立てるのに必要な知識を獲得するとともに、士人としての思考や心の構えをおのずから身に付け、幕藩体制下の統治者としてのあり方を体得するようになったということ。

④ 武士の子弟たちは、漢文を学ぶことを通して、幕府の教化政策の根幹に据えられている修身を実践するとともに、士人としての生き方を超えた、人としての生き方にかなう経世の志を明確に自覚するようになったということ。

⑤ 武士の子弟たちは、漢文を学ぶことを通して、中国の士人が継承してきた伝統的な思考法に感化されるとともに、それに基づき国家を統治するという役割を天命として引き受ける気になったということ。

問４　この文章の構成に関する説明として最も適当なものを、次のうちから一つ選べ。

① 第[1]段落～第[4]段落に示された全体の骨子について、第[5]段落～第[10]段落と、第[11]段落～第[20]段落との二つの部分が、それぞれの観点から具体的に説明するという構成になっている。

② 第[1]段落～第[2]段落が前置き部分に相当し、第[3]段落～第[16]段落が中心部分となり、それに対して、第[17]段落～第[20]段落が補足部分という構成になっている。

③ 第[1]段落～第[10]段落と、第[11]段落～第[20]段落という、大きく二つの部分に分けられ、同一の話題に対して、前半が概略的な説明部分、後半が詳細な説明部分という構成になっている。

④ 第[1]段落～第[2]段落、第[3]段落～第[11]段落、第[12]段落～第[19]段落、そして第[20]段落という四つの部分が、起承転結という関係で結び付く構成になっている。

第十八講　知識モノ解説

文学史・人物解説

●筆者　齋藤希史＝さいとう　まれし（一九六三〜）千葉県生まれ、京都大学卒、京都大学大学院文学研究科中国語学中国文学専攻の博士課程で学ぶ。東京大学総合文化研究科教授

語句

漢籍＝かんせき↓漢文で書かれた書籍（本）・漢書
奨励＝しょうれい↓よいこととして強く人にすすめること
津々浦々＝つつうらうら↓あらゆる港や海岸の意味ですが、それらに限定せず、全国いたるところ、の意味で使われるのが一般的
忠＝ちゅう↓まごころをこめて、物事をなすこと。まごころをこめて主君や国に仕えること
孝＝こう↓親を大切にし、よく尽くすこと
通俗＝つうぞく↓一般向け。一般大衆にとってわかりやすく親しみやすいこと
巷＝ちまた↓町中・世の中・世間。何かが行われている場所、現場の意味もある。（例）戦乱の巷と化す
リテラシー↓読み書き能力・識字・基礎教養のこと。「リテラチャー」が文学を意味するように「リテラル」「リテラシー」は本来、書きことばを読んだり書いたりする能力のほうです。一方、「オーラル」は、話し言葉にまつわる能力で「聞く力・話す力」です
cfメディア・リテラシー↓情報化時代の基礎教養。テレビや雑誌やネットなどのメディアへの対応力など情報吟味のための素養。メディア・リテラシーの先進国であるイギリスでは、小学校の「国語」の授業時間のかなりを当

てて、新しいメディアへの対応力を指導しているそうです

注釈＝ちゅうしゃく→文中の語句解説
編纂＝へんさん→数多くの素材を集めて整理し、本にまとめあげること。（例）辞書を編纂する
エトス→行動様式。ある文化圏や階層に特徴的に見られる行動や振る舞いの仕方、型。エートスともいう
軍功＝ぐんこう→戦などでの功績、成果、てがら
契機＝けいき→きっかけ・動機・転機
標榜＝ひょうぼう→自分の主義主張を公然とかかげること
脈絡＝みゃくらく→物事のつながり、道筋。論理的な筋。因果関係
鍛錬＝たんれん→厳しい修行や訓練で心身や技芸を高めていくこと
官吏＝かんり→役人・公務員・官僚
倫理＝りんり→道徳哲学・人のなすべきこと、なさざるべきこと
法度＝はっと→おきて・禁止事項・禁制
感化＝かんか→影響を与えて、考え方や行動を変えさせること
天命＝てんめい→天や神から与えられた使命や運命

復習問題　第十八講

次の傍線部にあたる漢字を、次の選択肢から選びなさい。

（ア）素読で漢文をボウ読みする　①某　②棒　③暴　④傍　⑤謀

（イ）通ゾク的な道徳を遵守する　①属　②俗　③族　④賊　⑤続

（ウ）原文に正確なチュウ釈を施す　①忠　②駐　③仲　④注　⑤中

（エ）武人の軍コウを認められる　①興　②効　③功　④幸　⑤公

（オ）江戸のバク藩体制が確立する　①幕　②爆　③漠　④莫　⑤暴

（カ）主君への忠ギを果たす　①戯　②儀　③議　④犠　⑤義

（キ）前後の脈ラクがない発言　①酪　②絡　③烙　④落　⑤楽

（ク）日々武芸の鍛レンにはげむ　①連　②蓮　③錬　④廉　⑤煉

（ケ）官吏のトウ用試験に合格する　①当　②登　③盗　④答　⑤搭

（コ）過去のリ歴を詳細に記す　①裡　②理　③利　④里　⑤履

第十九講　都市論・故郷論

人は誰もが、どこかの場所にかかわっている。故郷とは、人間が生れてから最も早い時期に出会った場所である。場所は都市であったり、町であったり、村であったりする。故郷とは、まだそうした区別の意味も知らないときに出会った空間と場所なのである。たんに生れただけで全く意識のない場所は故郷とはいいにくい。故郷とは一人の人間が子供のとき育った生活の場であり、彼を取りまく世界であり、性格を形成していった環境である。

故郷は抽象的な空間や場所でなく、具体的な風景になっているだろう。いまはありえない風景である田舎の故郷の情景をうたった、兎（うさぎ）追う山、白樺、水車小舎、からたちの垣根などが心にうったえる歌になる。そんな典型的なムラの姿でなくても、マチのなかにも［A］原風景はある。よく遊んだなんでもない道端の草むらや、小川の橋、駄菓子屋の店先、苔（こけ）のむす石垣の下など、甘ずっぱいほのかな香りと、淡い色合いで思いだす。それは、はっきり憶えていない風景でも、人々の自己形成に働き、深層のなかに沈澱（ちんでん）してゆく。

故郷は、人生の最初に出会い育まれた場所であり、心の底に刻みこまれた風景と出会った場所だという意味なら、都会生れでも、誰にとっても故郷は存在する。これが故郷の原点である。

ただ、故郷という言葉には、こうした意味のほかにもいろいろな意味がふくまれている。まず自然の豊かな田舎という意味合いがある。都会に生れ育った人々にとっては、自然に乏しく、人工的環境であることから故郷という言葉は使いにくい。田舎から都会へ出てゆく人々が圧倒的多数であったとき、故郷とは田舎、ムラの意味でもよかった。だが、いまはちがう。「都会ッ子」が多くなった今日、故郷は別に田舎、ムラを意味しなくてもよいはずである。

故郷という言葉には、甘いひびきとともに苦い思い出もからむ。とくに農村や、封建制の強い町で、地縁、血縁のしがらみだけが強く働き、自由を束縛する抑圧的、閉鎖的な意味が入っていることもある。だから「［B］故郷は遠くにありて思うもの」である。それに対して「都市の空気は自由にする」ものがある。束縛の少ない、地縁、血縁の薄い都会には故郷という言葉が使いにくいところがあった。だが、都会にも新たな地縁が生れつつある。

故郷というのは無条件に心も身体も帰れるところである。森鷗外は遺言で故郷の津和野へ遺骸を返した。そこには一切の官職などを記すことなく、ただ石見（いわみ）人森林太郎として葬るべきことをのべていた。そうした心も身体も帰れるところという意味で、都会人が故郷をもてるかどうかは疑問である。農村へ行くと、小高い丘の見はらしのよいところに墓がおかれている。故郷の風景を眺め、後の人々の営みを見下して眠るにはかっこうの場所である。それは土地と深くむすびついている。そんな墓地は都会には求めにくい。身も心も帰る場所としては都会は不向きなのであろう。

C故郷は無償の愛情のもてる場所である。自然が豊かな、古典的な意味での故郷は、都会に出て、人工的環境と雑踏のなかで疲れた人間にとっては懐しいところかもしれない。だが、無償の愛情をもてる場としてなら、都会ではどうしてそういう気持がもてないのだろう。都会でも、自分と空間の出会いの場所、育ててくれた場所に他とちがうものを感じ、愛惜の念をもたないことはないだろう。もしそうでないなら、何か努力をするべきではないか。都会は醜いからというなら、美しくしてゆくべきではないか。都会だからといって、原点としての故郷になりえないものではない。

鷗外はいくつかの都市政策論を書いている。なかでも「市区改正論略」は短いが、簡潔に都市のあるべきさまをのべている。論点は正確だが、やや教科書的で東京や都会に対してはD客観的な立場に立っている。これに対して幸田露伴の「一国の首都」は東京の都市政策について論じた大論文であり、冷たく都市をつきはなすのではなく、E露伴の東京に対する強い愛情が滲みでている。

鷗外は津和野の人であり、国際的にも科学的にも豊富な知識と洞察をもっており、東京に長く住んでいたが、東京は異郷であった。だが、露伴は、旧幕臣の家に生れ、東京に強い愛情と誇りをもっていた。だから、「一国の首都」には鷗外にはない迫力がある。

　我が東京をして漫然たる人間集会処たらしむべからず。……都会とは多数人の集る処なりということ以外に都会を解釈すること無く、また敢えて別の解釈を試みんともせず、常に自己に奉ずることのみ甚だ厚くして自己の住する土地に対する感情甚（はなは）だ冷（ひややか）に、自己の利害には鋭敏なれども隣人の休戚（注）には一顰（いっぴん）一笑をも惜（おし）み、……是等の冷淡なる自己中心主義の人士は、我が東京をして漫然たる人間集会処たらしめんことを欲するものにして、厳しく排斥せざるべからずや論無き也。

露伴の東京への強い愛情が噴出している。排他的に東京に人が来るなとはいっていない。一国の首都である以上、人の集り住

むのは当然である。だが移り住んだ以上、その都市にもっと関心をもち、利己的でなく、東京をよくするための努力をしてほしいということである。露伴にとって東京は一国の首都であるが、それ以上のものである。言葉は用いなくても原点的な意味での故郷でもあった。故郷という意味のもついろいろな夾雑物(きょうざつぶつ)を取りされば、原点的な意味の故郷をもたない人はいないはずである。ただ都会を故郷とする場合には、感傷的な過去の故郷を追うのではなく、自らも努力してつくってゆく積極的な意味の故郷である。最も今日的な意味で都会の故郷性を論じているといえる。

（田村明『都市の個性とはなにか』による）

（注）休戚……幸と不幸

問１　傍線Ａ「原風景」とはどのような風景か。次から最も適当なものを一つ選べ。

①　最初に心の底に刻みこまれた風景　　②　豊かな自然に満ちた風景
③　いまはありえない幻の風景　　④　広々とした原のひろがる風景
⑤　思い出の中にだけ生きている風景

問２　傍線Ｂ「故郷は遠くにありて思うもの」とあるが、その原因となっているものは何か。文中から十字以内で抜き出せ。

問３　傍線Ｃ「故郷は無償の愛情のもてる場所である」とあるが、その理由は何か。次から最も適当なものを一つ選べ。

①　自分の生れ育った場所だから。
②　無条件に心も身体も帰れる場所だから。
③　心の底に刻みこまれた風景と出会った場所だから。
④　自分を慰めてくれる自然がある場所だから。
⑤　甘ずっぱい思い出のある場所だから。

問４　傍線Ｄで、鷗外が東京に対して「客観的な立場に立っている」理由を示している部分を、文中から十字以内で抜き出せ。

問５　傍線Ｅ「露伴の東京に対する強い愛情」とあるが、それは具体的にどのような成果となってあらわれているか。文中の語を用いて十字以内で記せ。

第十九講　知識モノ解説

文学史・人物解説

●筆者　田村明＝たむら　あきら（一九二六〜二〇一〇）東京大学の工学部建築学科、法学部法律学科、法学部政治コースの三つを卒業。横浜市の都市政策、都市計画にもかかわる。法政大学名誉教授

●森鷗外＝もり　おうがい（一八六二〜一九二二）石見（いわみ）の国、津和野（今の島根県）生まれ。東京大学医学部卒。陸軍の軍医となり、文筆業の一方で、軍医の最高位、軍医総監にまでなる。本名は、森林太郎（〝しんりん　たろう〟ではなく〝もり　りんたろう〟）。代表作『舞姫』『高瀬舟（たかせぶね）』（小説）『於母影（おもかげ）』（訳詩集）など

●幸田露伴＝こうだ　ろはん（一八六七〜一九四七）東京生まれ、東京英学校（今の青山学院大）中退。第七講『おとうと』の筆者（幸田文（こうだあや））の父。

●室生犀星＝むろう　さいせい（一八八九〜一九六二）石川県生まれ。文中の「ふるさとは遠きにありて思ふもの」と詠んだ詩人。続きがあって「そして悲しくうたふもの」。故郷への望郷（遠くから懐かしむ）の詩ではなく、帰郷してもいいことはなく、遠くから思っているくらいがちょうどいい、という内容のようです。詩集には『愛の詩集』『抒情小曲集』などがあり、小説作品としては『幼年時代』『性に目覚める頃』『或る少女の死まで』などがあります。『幼年時代』はセンター試験でも出題されています。スタディサプリ「高１高２現代文」第八講で扱っています。学年を問わず、こちらもアタックすることをおすすめします。

語句

封建制＝ほうけんせい→厳密には、領地を家臣に与え、代わりに軍役などの義務を課すような主従関係だが、単に主従関係や、古くさい上下関係を意味することが多い。

しがらみ→川で魚などを獲るためのわな、しかけが本来の意味で「柵」と書く。もっと一般には「まとわりついて、離れないもの」「縛り」といった意味で使われる。

かっこうの→ぴったり合った、うってつけの、ということ。漢字では「恰好・格好」

雑踏＝ざっとう→たくさんの人出で、にぎわうこと

無償＝むしょう→報酬、ご褒美、見返りがないこと。対義語は「有償」

関連語　無形＝むけい→固定的なかたちのないもの。例えば、「無形文化財」は、保存されたモノそのものではなく、受け継がれた伝統的な技術を指す。対義語は「有形」

漫然＝まんぜん→はっきりした目的や意図や目標もなく、ということ。ただ何となくという意味

排斥＝はいせき→受け入れ拒否。強く拒むこと

夾雑物＝きょうざつぶつ→混じりこんでいる余計なもの

感傷的＝かんしょうてき→センチメンタル。ものごとに心を動かされやすくなっている状態。失恋などの心の痛手をいやすために出かける旅は「センチメンタル・ジャーニー」＝感傷旅行

復習問題　第十九講

次の傍線部にあたる漢字を、次の選択肢から選びなさい。

（ア）ホウ建的な身分制度のなごり　①法　②封　③奉　④邦　⑤保

（イ）伝統的な因習にソク縛される　①塞　②即　③捉　④則　⑤束

（ウ）イ骸を故郷の墓に葬る　①易　②居　③遺　④緯　⑤衣

（エ）中世の古テン文献を収集する　①典　②展　③填　④点　⑤店

（オ）都会の雑トウと喧騒を忘れる　①頭　②到　③盗　④倒　⑤踏

（カ）故郷に無ショウの愛をそそぐ　①省　②賞　③償　④性　⑤焦

（キ）優れたドウ察にもとづく分析　①洞　②同　③胴　④銅　⑤動

（ク）語る言葉にハク力がともなう　①拍　②白　③博　④迫　⑤伯

（ケ）作家のエイ敏な感性にふれる　①英　②栄　③衛　④鋭　⑤映

（コ）夕暮れ時に感ショウ的になる　①賞　②傷　③渉　④照　⑤衝

第二十講　文学論・文芸論

アリストテレス*は、コモーディア（喜劇）は人間を、現前の人々よりも、より悪く描こうとするのに対して、トラゴーディア（悲劇）は、より善く描こうとするものであると言った。しかしこの言葉は、特にコモーディアに関する言葉は、少しく注釈を必要とするように思われる。人間を、現前の人々よりも「より悪く」描こうとする作家と言えば、何か卑小な、日常生活の瑣事にのみかかずらわって、高遠な理想も何も持っていない、低級な茶番の作家のようなものを、連想しがちな恐れがあるからである。

ギリシア喜劇の巨匠アリストパネースは自作『平和』のパラバシス**の中で、自分の作品は、他の作者の作品のように、貧乏人や宿無しをけなすのでもなければ、喰いしんぼうのヘラクレス***をおもちゃにするのでもない、奴隷の逃亡を書くのでもなければ、口入れ屋****の饒舌を書くのでもない、自分はここに、雄渾なスタイルを持った芸術を提供する、その芸術の壮麗な殿堂を飾るものは、高邁な言葉と偉大なイデー*****と斬新な諧謔とであると言った。すでにアリストパネースが自分の為に弁じるパラバシスの中で、露骨に是だけの事を言っている以上、当時のアテーナイに於いて、コモーディアの作者の多くが、猥褻なものにより、卑小なものにより、瑣末浅陋なものによって、人々を笑わせる事を能事と心得る傾向を持っていたという事は、疑う訳に行かないようである。それだけにまた当時のコモーディアが、識者たちから軽蔑されていたに違いない事も、想像するに難くない。

しかしＡこの事が、コモーディアそのものの価値を上下する問題ではなくて、コモーディアを借りて人々に呼びかけようとする、作者の価値を上下する問題であるに過ぎないという事は、言うまでもない事であった。アリストパネースの言うように、作者の作品に高邁な言葉と偉大なイデーと斬新な諧謔とがありさえすれば、たとえその中に猥褻なもの、卑小なもの、瑣末浅陋なものが含まれていようとも、尚且つそれは、立派なコモーディアとして通用することが出来るからである。

高遠な、もしくは偉大なイデーに生きる者は、多くの場合、現実眼前の世界に、あらゆる害悪とあらゆる欠陥とを見出す事を常とする。この際その現実眼前の世界から眼を背けて、自分自身のイデーの世界にのみ住む事の出来る者は、［　Ｂ　］である。しかしそれらのものを、何等かの方法によって除去し填充し、自分の周囲の世界を、いくらかでも自分のイデーの世界に近づけ

なければいられない者は、或いはＣまともにその醜悪・欠陥を暴露する事によって、或いはその醜悪・欠陥を更に歪曲し、それを笑いものにする事によって、現実眼前の世界に働きかけて行くに違いない。そうして多くの場合、悲劇作者は、第一の方法を採ろうとする。喜劇作者は、第二の方法を採ろうとする。悪人を悪党として描こうとするのが悲劇作者であるならば、悪人を笑いものとして描こうとするのが喜劇作者であると言ってもよいであろう。アリストパネースも亦、この意味に於いて人間を、現在あるよりも「より悪く」描いているのである。

しかし、現実の人間を、それが現在あるよりも「より悪く」描いて、尚且つ人々を牽きつける事が出来る為には、その作者のイデーが高く且つしっかりしていなければならないのは、言うまでもないが、しかしそれとともに、その作者には、鋭利にして精到な、現実感覚がある事を必要とする。いくら作者のイデーが偉大であっても、そのイデーが、碌に足が地についていない、空漠としたものであるならば、それと現実との交渉は、見当違いの、焦点を外れたものにしかなり得ないのは、言うまでもない事である。「より悪く」するレンズが余計に加わるだけに、喜劇の方が悲劇よりも、一層濃厚な現実感覚を必要とするとも、言えば言えなくもないのである。喜劇が常に写実主義と相伴うものとして連想されるのも、亦この故であるに外ならない。

ギリシアに於いてコモーディアは、トラゴーディアと違って、その題材を主として現実眼前の世界から選び上げてきた。コモーディアの作者の現実感覚は、竟に神話・伝説の世界だけを題材とする事に堪えなくなった。それだからコモーディアの作者は、主として現実眼前の世界から、その題材を取り上げて来るのである。――その意味に於いて、Ｄあらゆる偉大な喜劇作者は、一面に於いて、偉大なレアリストであった。

（小宮豊隆の文章による）

（注）＊　アリストテレス――古代ギリシアの哲学者。『詩学』など文芸に関する著作もある。
＊＊　パラバシス――合唱集団であるコロスが、作者を代弁して歌う部分。
＊＊＊　ヘラクレス――ギリシア神話の英雄。
＊＊＊＊　口入れ屋――奉公人を周旋する職業。
＊＊＊＊＊　イデー――ここでは理念・理想といったような意味。

問１　傍線Ａの部分について。
（イ）この部分は、当時のコモーディアをめぐる状況を踏まえて述べられているが、その状況とはどのようなものか。本文に即して、句読点とも三十字以上四十字以内で説明せよ。
（ロ）「作者の価値を上下する」のはどのようなものであると、筆者は考えているか。それを明示した二十字以内の一続きの部分を本文中から抜き出し、その初めの二字と終りの二字とを記せ。ただし、句読点は含まない。

問２　空欄［Ｂ］にはどんな言葉を補ったらよいか。次から最も適当なもの一つを選べ。
①　不幸　②　滑稽（こっけい）　③　幸福　④　気楽　⑤　悲惨

問３　傍線Ｃの部分について。この部分を別の意味で言い換えた一続きの部分を本文中から抜き出して記せ。

問４　傍線Ｄの部分について。ここで言う「偉大なレアリスト」とは、どのようなものか。本文に即して、句読点とも三十字以上四十字以内で説明せよ。

第二十講　知識モノ解説

文学史・人物解説

●筆者　小宮豊隆＝こみや　とよたか（一八八四〜一九六六）福岡県生まれ、東京帝国大学文学部独文学科で学ぶ。夏目漱石の門下生

●アリストテレス＝（紀元前三八四〜三二二）古代ギリシャの哲学者、プラトンの弟子。政治学、詩学、演劇学、倫理学、物理学（フィジックス）、形而上学（メタフィジックス）などの著書を残し「万学の創始者」と呼ばれる

語句

卑小＝ひしょう→取るに足らないほど小さい。日常的で身近すぎるような小さなこと

瑣事＝さじ→ささいでつまらないこと。「些事」とも書く。「瑣末浅陋＝さまつせんろう」もほぼ同義語

　関連語　日常茶飯事＝にちじょうさはんじ→ごくありふれた、日常的なこと

高遠＝こうえん→考えが高尚で深いこと

高邁＝こうまい→志などが高くすぐれていること

茶番＝ちゃばん→見えすいたばかばかしい振る舞い。「茶番劇」ともいう

饒舌＝じょうぜつ→おしゃべりで口数が多いこと。多弁

　関連語１　雄弁＝ゆうべん→はっきりと説得的に語ること

　関連語２　寡黙＝かもく→口数が少ないこと

能事＝のうじ→するべき仕事。やりとげるべきこと

雄渾＝ゆうこん→のびのびとして力強いことで、「雄勁＝ゆうけい」もほぼ同義語

諧謔＝かいぎゃく→おもしろみがあって気がきいてること。冗談やユーモア。しゃれ

関連語　ウイット→その場に応じて気のきいたことを言える知恵。機知

猥褻＝わいせつ→性的なレベルで、みだらでいやらしいこと。ひわい

填充＝てんじゅう→欠けたところを満たすこと。「充填＝じゅうてん」とも書く

醜悪＝しゅうあく→容姿など見た目が醜い、あるいは、心のあり方が不愉快なほどけがらわしいこと

歪曲＝わいきょく→事実をわざと、故意に変形させ、ゆがめること

関連語１　捏造＝ねつぞう→実際には存在しないものごとを存在するかのようにでっちあげること

関連語２　改竄＝かいざん→もともとの文や数値データを勝手に書き換えること

精到＝せいとう→すみずみまで行き届いた、心を尽くしたということ

復習問題　第二十講

次の傍線部にあたる漢字を、次の選択肢から選びなさい。

（ア）日常のヒ小なものに注目する　① 日　② 被　③ 卑　④ 灯　⑤ 秘

（イ）高邁で高エンな理想を掲げる　① 円　② 縁　③ 園　④ 延　⑤ 遠

（ウ）直接的でロ骨な表現を避ける　① 魯　② 炉　③ 露　④ 路　⑤ 呂

（エ）学会のシキ者たちの意見を聞く　① 式　② 識　③ 敷　④ 織　⑤ 色

（オ）商品に重大な欠カンが見つかる　① 陥　② 勘　③ 寛　④ 間　⑤ 肝

（カ）世の中の過ちをジョ去する　① 叙　② 徐　③ 除　④ 如　⑤ 所

（キ）悪人のシュウ悪ぶりを表現する　① 囚　② 臭　③ 衆　④ 醜　⑤ 羞

（ク）悪行のすべてをバク露する　① 幕　② 爆　③ 漠　④ 縛　⑤ 暴

（ケ）犯行は鋭リな刃物による　① 利　② 理　③ 裏　④ 梨　⑤ 裡

（コ）濃コウな味わいの牛乳を売る　① 興　② 効　③ 厚　④ 硬　⑤ 高

第二十一講　メディア論・情報化社会論

　バリー・サンダースの『本が死ぬところ暴力が生まれる』は、書評などでも好意的にとりあげられているが、同書はまさに問題の回避の仕方という点において巧妙である。

　サンダースの論議は要約してしまえば、電子メディアという文字を欠いたメディアに接することで、文字によって形成されるべき「自己」が未成立のままになったり、あるいは崩壊し、その結果として「暴力」への歯止めが失われる、というものだ。同書を一読すればわかるのだが、この論議は「識字」をめぐって未だに明らかに文化的階級差がある社会相を前提としている。アメリカ社会がそうであるのか、それともこれは書き手の偏見なのかはここでは問題としないでおく。だが、その程度には充分に危うい側面を持っていることだけは注意を喚起しておく。

　同書は映像メディアが大衆を知的に退化させる、というありふれたメディア論を電子メディアに置き換えたにすぎない。そして「識字」の世界にある著者自身の〈私〉をつまりは遠回しに擁護している。その点で日本における自己肯定的電子メディア論と共通の枠組みを持っている。

　だが実は、インターネットは文字のメディアである。そこでやりとりされる情報の大半は圧倒的に文字情報であり、そこは新たな「識字」の世界なのである。

　インターネットなり電子メディアなりをめぐる論議が忌避しているのはまさにこの点であるように思う。これまで俗的になされてきた「新しいメディア」への批判は、それが非「識字」的な映像視覚メディアである、ということが前提となっている。そこには暗黙のうちに旧メディア、つまり「識字」メディアとそれに支えられた教養が擁護される、という構図になっている。さらに言ってしまえばこのような「教養」の担い手としての知識人の特権性が擁護されるのである。

　インターネットをめぐる論議や政策への参画に知識人が熱心なことの背景も実はこのあたりに見出せるのだが、知識人によるインターネット論は旧「教養」の電子メディアによる延命にあるのだから、当然と言えば当然である。

　だが、一方では映像メディアとしての電子メディアを批判し、他方では「識字」的な知の電子メディアによる肯定を画策する

言説は明らかにダブルスタンダードであることは言うまでもない。しかもそこには、メディアの「受け手」としての大衆は批判され、送り手としての知識人は肯定される、というもう一つの構図があることを指摘しておくべきだろう。ここには実はインターネットをめぐる本質的な問題、つまり、「送り手」と「受け手」の差異の喪失への脅(おび)えが見てとれるように思うのだ。インターネットという双方向性のメディアは、「啓蒙する知識人」と「愚かな大衆」という、未だに知識人の大半が心の奥底では依存したがっているであろう枠組みを根本的に解体する。

粉川哲夫はインターネットを、国家を越境しようとする個人と、それを寡占しようとする国家や企業の対立として図式化するが、そんな対立はいかなるメディアにも見出せるものであり、インターネットにおいて隠蔽(いんぺい)されている対立とは実は「大衆」と「知識人」のそれである。誰でも発信者となれるインターネットは「啓蒙する知識人」の特権性を支えてきた情報や言説の発信権をいまさらながら無化してしまう。既に解体しつつあったものにとどめをさしてしまう装置としての側面を持つ。

だからこそぼくより年長の「知識人」たちはタイタニックの乗客よろしくインターネットに飛び移ろうとしているのだろうが、それは少なくともかつての「知識人」にとっては泥船のようにも思える。うまくは言えないが新しいメディアの中で生き延びるのは、やはりその D新しい場にふさわしい類の「ことば」や「知」や、それらの「主体」ではないか、と思うのだ。楽天的インターネット論者たちにぼくが違和を覚えるのはまさにこの点で、自らの依存する「知」や「ことば」、そしてそれらによって形作られる「私」といった旧メディアに帰属してきたものが、本当にそっくり、何の軋轢(あつれき)もなく置き換えられる質のものなのだろうか、ということだ。

（大塚　英志「インターネットの〈私〉」による）

注　○バリー・サンダース——アメリカの社会学者
　　○粉川哲夫——社会学者

問１　傍線部Ａ「問題の回避」とはどういうことか。次から最も適当なものを一つ選べ。

① 同書が、文化的階級差の存在を前提にしていること
② 同書が、「識字」をもって文化的階級差と見なすこと
③ 同書が、著者自身の〈私〉を擁護するために書かれていること
④ 同書が、電子メディアの問題を映像メディアの問題にすりかえていること

問２　傍線部Ｂ「日本における自己肯定的電子メディア論と共通の枠組み」とはどういう枠組みか。次から最も適当なものを一つ選べ。

① インターネットの映像性を否定しながら、「識字」的な知の可能性を探ること
② インターネットを、いずれは沈む泥船であると考えながら、その中で生き延びようとすること
③ インターネットを双方向のメディアと捉えながら、「知識人」と「大衆」という図式に依存すること
④ インターネットは国家を越境するものであると考えながら、一方で国家がそれを独占すると考えること

問３　傍線部Ｃ「知識人の特権性」とは具体的に何か。文中から十字以内で抜き出して答えなさい。

問４　傍線部Ｄについて、筆者は「新しい場」の特徴をどのようなものと述べているか。文中から次の［　　］にあてはまるように十字以内で抜き出して答えなさい。

［　十字　］こと

第二十一講　知識モノ解説

文学史・人物解説

●筆者　大塚英志＝おおつか　えいじ（一九五八〜）東京都生まれ、筑波大学人文学類卒、神戸芸術工科大大学院で博士号。消費社会、芸術、マンガ、アニメなど様々なテーマで旺盛な評論活動を行っている。著書多数で、入試でもよく出題されます。なおテーマとしての「情報化社会論」は、受験サプリ「高3トップ&ハイレベル現代文」の第三講、第二十四講でもあつかっています。こちらもぜひ、アタックしてみよう。

語句

書評＝しょひょう→出版された本の紹介や批評・コメント
巧妙＝こうみょう→技術や方法が感心するほど見事で巧みであること。本文では、否定的に、つまり皮肉で使っている
要約＝ようやく→文章の要点、肝心なところをコンパクトにまとめること
識字＝しきじ→リテラシー・素朴には文字が読み書きできるということですが、ある程度高い「教養」として使われることもある。本文ではこの意味。
社会相＝しゃかいそう→社会の顔、ひとつの側面。社会のありさま、特徴
喚起＝かんき→注意を呼び起こすこと　同音異義語「換気」→空気を入れ替えること
擁護＝ようご→攻撃からかばって守ること・味方になって弁護すること
忌避＝きひ→きらって避けること
俗的＝ぞくてき→一般的、日常的

ダブルスタンダード→二重基準。一貫性を欠き、相反する基準を都合よく持ち出し、対応すること。例えば、親がわが子に対して、ある場面では「もう子供じゃないんだから、しっかり責任をもちなさい」と言ったり、また違う場面で「まだ子供なんだから生意気なことを言うんじゃありません」と言ったりするケース。言われる方は、混乱するよね、どうしたらいいんだよ！

啓蒙＝けいもう→無知蒙昧（むちもうまい）、知識や教養のない者に、知（智）の光を授け、教えひらくこと。英語では enlightenment 無知が暗闇で、知恵が光に例えられることはよくあります。上智大学のモットーも Lux Veritatis で、ラテン語で真理（知）の光という意味です。

寡占＝かせん→少数者で何かを独占すること。「寡」は、少ないという意味で「多寡を測る」といえば、量の多い少ないをみつもること。「寡婦」は、夫を失った女性で、未亡人のこと

隠蔽＝いんぺい→発覚しないように隠すこと。隠匿（いんとく）や秘匿（ひとく）もほぼ同義語

タイタニック→一九一二年、イギリスからアメリカへの処女航海で、氷山に衝突して沈没した大型豪華客船。ジェームズ・キャメロン監督、レオナルド・ディカプリオ主演の映画、その名も『タイタニック』が有名です（アカデミー賞で作品賞や監督賞などを受賞）。他にも『タイタニックを引き揚げろ』という作品がありますが、こちらは映画より、クライブ・カッスラーの原作小説の評価が高いです

主体＝しゅたい→考えたり、発言したり、行動したりする当事者

軋轢＝あつれき→争い、不和、いざこざ、葛藤（かっとう）、関係のきしみ

復習問題　第二十一講

次の傍線部にあたる漢字を、次の選択肢から選びなさい。

（ア）あらかじめ危険をカイ避する　①回　②誡　③開　④解　⑤改
（イ）犯行のコウ妙な手口を明らかにする　①硬　②効　③巧　④考　⑤光
（ウ）長い文章資料を簡潔に要ヤクする　①訳　②役　③厄　④約　⑤躍
（エ）建築物の基礎部分がホウ壊する　①放　②砲　③崩　④泡　⑤保
（オ）市民に向けて注意をカン起する　①勘　②感　③換　④喚　⑤歓
（カ）思想信条から兵役をキ避する　①飢　②危　③忌　④貴　⑤奇
（キ）市民向けのケイ蒙活動に従事する　①掲　②啓　③経　④契　⑤慶
（ク）巨大な舞台ソウ置が搬入される　①総　②葬　③創　④壮　⑤装
（ケ）知識人のトッ権意識を改める　①得　②徳　③特　④匿　⑤突
（コ）単純なコウ図で社会を考える　①講　②構　③校　④侯　⑤考

第二十二講《小説その４》日常と非日常の対比

次の文章は、岡本かの子の小説「快走」の全文である。これを読んで、後の問いに答えよ。なお、本文は、四つの場面にわけられる。

第一場面

中の間で道子は弟の準二の正月着物を縫い終って、今度は兄の陸郎の分を縫いかけていた。
「それおやじのかい」
離れから廊下を歩いて来た陸郎は、通りすがりにちらと横目に見て訊いた。
「兄さんのよ。これから兄さんも会社以外はなるべく和服で済ますのよ」
道子は顔も上げないで、忙がしそうに縫い進みながら言った。
「国策[注1]の線に添ってというのだね」
「だから、着物の縫い直しや新調にこの頃は一日中大変よ」
「はははははは、一人で忙がしがってら、だがね、断って置くが、銀ぶら[注2]なぞに出かけるとき、俺は和服なんか着ないよ」
そう言ってさっさと廊下を歩いて行く兄の後姿を、道子は顔を上げてじっと見ていたが、Aほーっと吐息をついて縫い物を畳の上に置いた。すると急に屈托[注3]して来て、大きな脊伸びをした。肩が凝って、坐り続けた両腿がだるく張った感じだった。
道子は立上って廊下を歩き出した。そのまま玄関で下駄を履くと、冬晴れの午後の戸外へ出てみた。
陽は既に西に遠退いて、西の空を薄桃色に燃え立たせ、眼の前のまばらに立つ住宅は影絵のように黝ずんで見えていた。道子は光りを求めて進むように、住宅街を突っ切って空の開けた多摩川[注4]脇の草原に出た。一面に燃えた雑草の中に立って、思い切り手を振った。
冬の陽はみるみるうちに西に沈んで、桃色の西の端れに、藍色の山脈の峰を浮き上らせた。秩父[注5]の連山だ！　道子はこういう夕景色をゆっくり眺めたのは今春女学校[注6]を卒業してから一度もなかったような気がした。あわただしい、始終追いつめられて、

縮こまった生活ばかりして来たという感じが道子を不満にした。

　ほーっと大きな吐息をまたついて、彼女は堤防の方に向(むか)って歩き出した。冷たい風が吹き始めた。彼女は勢い足に力を入れて草を踏みにじって進んだ。道子が堤防の上に立ったときは、輝いていた西の空は白く濁って、西の川上から川霧と一緒に夕靄(ゆうもや)が迫って来た。東の空には満月に近い月が青白い光りを刻々に増して来て、幅三尺(注7)の堤防の上を真白な坦道(たんどう)(注8)のように目立たせた。道子は急に総毛(そうけ)立ったので、身体をぶるぶる震わせながら堤防の上を歩き出した。途中、振り返っていると住宅街の窓々には小さく電灯がともって、人の影も定かではなかった。ましてその向(むこ)うの表通りはただ一列の明(あか)りの線となって、川下の橋に連なっている。

　誰(だれ)も見る人がない…………よし…………思い切り手足を動かしてやろう…………道子は心の中で呟(つぶや)いた。膝(ひざ)を高く折り曲げて足踏みをしながら両腕を前後に大きく振った。それから下駄を脱いで駈(か)け出してみた。女学校在学中ランニングの選手だった当時の意気込みが全身に湧(わ)き上って来た。道子は着物の裾(すそ)を端折(はしょ)って堤防の上を駆けた。髪はほどけて肩に振りかかった。ともすれば堤防の上から足を踏み外しはしないかと思うほどまっしぐらに駆けた。もとの下駄を脱いだところへ駈け戻って来ると、さすがに身体全体に汗が流れ息が切れた。胸の中では心臓が激しく衝(う)ち続けた。その心臓の鼓動と一緒に全身の筋肉がぴくぴくとふるえた。――ほんとうに溌剌(はつらつ)と活(い)きている感じがする。女学校にいた頃はこれほど感じなかったのに。毎日窮屈な仕事に圧(おさ)えつけられて暮(くら)していると、こんな駈足(かけあし)ぐらいでもこうまで活きている感じが珍(めず)らしく感じられるものか。いっそ毎日やったら――

　道子は髪を束ねながら急ぎ足で家に帰って来た。彼女はこの計画を家の者に話さなかった。両親はきっと差止(さしと)めるように思われたし、兄弟は親し過ぎて揶揄(からか)うぐらいのものであろうから。いやそれよりも彼女は月明の中に疾駆(しっく)する興奮した気持ちを自分独りで内密に味わいたかったから。

　翌日道子はアンダーシャツに(注9)パンツを穿(は)き、その上に着物を着て隠し、汚れ足袋(たび)も新聞紙にくるんで家を出ようとした。

「どこへ行くんです、この忙がしいのに。それに夕飯時じゃありませんか」

　母親の声は鋭かった。道子は腰を折られて引返(ひきかえ)した。夕食を兄弟と一緒に済ました後でも、道子は昨晩の駈足の快感が忘れられなかった。外出する口実はないかと頻(しき)りに考えていた。

「ちょっと銭湯に行って来ます」

道子の思いつきは至極当然のことのように家の者に聞き流された。道子は急いで石鹸と手拭と湯銭(注10)を持って表へ出た。彼女は着物の裾を蹴って一散に堤防へ駈けて行った。冷たい風が耳に痛かった。堤防の上で、さっと着物を脱ぐと手拭でうしろ鉢巻をした。凛々しい女流選手の姿だった。足袋を履くのももどかしげに足踏みの稽古から駈足のスタートにかかった。爪先立って身をかがめると、冷たいコンクリートの上に手を触れた。(注11)オン・ユアー・マーク、ゲットセッ、道子は弾条仕掛のように飛び出した。昨日の如く青白い月光に照らし出された堤防の上を、遥かに下を多摩川が銀色に光って(注12)淙々と音を立てて流れている。

次第に脚の疲れを覚えて速力を緩めたとき、道子は月の光りのためか一種悲壮な気分に衝たれた――自分はいま溌剌と生きてはいるが、違った世界に生きているという感じがした。人類とは離れた、淋しいがしかも厳粛な世界に生きているという感じだった。

第二場面

道子は着物を着て小走りに表通りのお湯屋へ来た。湯につかって汗を流すとき、初めてまたもとの人間界に立ち戻った気がした。道子は自分独特の生き方を発見した興奮にBわくわくして肌を強くこすった。

家に帰って茶の間に行くと、母親が不審そうな顔をして

「お湯から何処へまわったの」と訊いた。道子は

「お湯にゆっくり入ってたの。肩の凝り(注13)をほぐすために」

傍で新聞を読んでいた兄の陸郎はこれを聞いて「おばあさんのようなことをいう」と言って笑った。道子は黙って中の間へ去った。

第三場面

道子はその翌晩から出来るだけ素早くランニングを済まし、お湯屋に駆けつけて汗もざっと流しただけで帰ることにした。だが母親は娘の長湯を気にしていた。ある晩、道子がお湯に出かけた直後

「陸郎さん、お前、直ぐ道子の後をつけてみて呉れない。それから出来たら待ってて帰るところもね」

と母親は頼んだ。陸郎は妹の後をつけるということが親し過ぎるだけに妙に照れくさかった。「こんな寒い晩にかい」彼は別な言葉で言い現しながら、母親のせき立てるのもかまわず、ゆっくりマントを着て帽子をかぶって出て行った。陸郎はなかなか帰って来なかった。母親はじりじりして待っていた。そのうちに道子が帰って来てしまった。

「また例の通り長湯ですね。そんなに叮嚀に洗うなら一日置きだってもいいでしょう」

「でもお湯に行くと足がほてって、よく眠れますもの」

兎も角、眠れることは事実だったので、道子は真剣になって言えた。母親は

「明日は日曜でお父様も家においでですから、昼間私と一緒に行きなさい」

と言った。道子は何て親というものはうるさいものだろうと弱って

「なぜそう私の長湯が気になるの。眠る前に行く方がいいけれど、それじゃ明日は昼間行きましょう」

道子は一日ぐらいは我慢しようと諦めた。それが丁度翌日は雨降りになった。道子は降り続く雨を眺めて――この天気、(注14)天祐っていうもんかしら………少くとも私の悲観を慰めて呉れたんだから………そう思うと何だか可笑しくなって独りくすくす笑った。

お昼過ぎに母親と傘をさして済した顔でお湯に行った。

「そんなに長くお湯につかってるんじゃありませんよ」

母親が呆れて叱ったけれど、道子は自分の長湯を信用させるために顔を真赤にしてまで堪えて、長くお湯につかっていた。

やがて洗し場に出て洗い桶を持って来るときは、お湯に逆上せてふらふらしたが、額を冷水で冷したり、もじもじしているうちに癒った。

「いい加減に出ませんか」

母親は道子のそばへ寄って来て小声で急き立てるので、やっと身体を拭いて着物を着たが、家へ帰るとまた可笑しくなって奥座敷へ行って独りくすくす笑った。

「道子はこの頃変ですよ。毎晩お湯に行きたがって、行ったが最後一時間半もかかるんですからね。あんまり変ですから今日

は私昼間連れて行ってみました」

母親は茶の間で日記を書き込んでいた道子の父親に相談しかけた。

「そしたら」

父親も不審そうな顔を上げて訊(き)いた。

「随分(ずいぶん)長くいたつもりでしたが四十分しかかかりませんもの」

「そりゃお湯のほかに何処かへ廻(まわ)るんじゃないかい」

「ですからゆうべは陸郎に後をつけさせたんですよ。そしたらお湯に入ったというんですがねえ、その陸郎が当てになりませんのよ。様子を見に行ったついでに、友達の家へ寄って十二時近くまで遊んで来るのですから」

「ふーん」

父親はじっと考え込んでしまった。

雨のために響きの悪い玄関のベルがちりと鳴って止(や)むと、受信箱の中に手紙が落(おと)された音がした。母親は早速立って行って手紙を持って来たが

「道子宛(あ)ての手紙だけですよ。お友達からですがねえ、この頃の道子の様子では手紙まで気になります。これを一つ中を調べて見ましょうか」

「そうだね、上手に開けられたらね」

父親も賛成の顔付きだった。母親は長火鉢(注15)にかかった鉄瓶(注16)の湯気の上に封じ目をかざした。

「すっかり濡(ぬ)れてしまいましたけれど、どうやら開きました」

母親は四つに折った(注17)書簡箋(しょかんせん)をそっと抜き出して拡(ひろ)げた。

「声を出して読みなさい」

父親は表情を緊張さした。

　勇ましいおたより、学生時代に帰った思いがしました。毎晩パンツ姿も凛々しく月光を浴びて多摩川の堤防の上を疾駆するあなたを考えただけでも胸が躍ります。一度出かけて見たいと思います。それに引きかえこの頃の私はどうでしょう。風邪ば

かり引いて、とてもそんな元気が出ません……」

「へえ、そりゃほんとうかい」

父親はいつもの慎重な態度も忘れて、頓狂(とんきょう)な声を出してしまった。

「まあ、あの娘(こ)が、何ていう乱暴なことをしてるんでしょう。呼び寄せて叱ってやりましょうか」

母親は手紙を持ったまま少し厳しい目付きで立上りかけた。

「まあ待ちなさい。あれとしてはこの寒い冬の晩に、人の目のないところでランニングをするなんて、よくよく屈託したからなんだろう。俺だって毎日遅くまで会社の年末整理に忙殺されてると、何か突飛なことがしたくなるからね。それより俺は、娘の友達が言ってるように、自分の娘が月光の中で走るところを見たくなったよ………俺の分身がね、そんなところで走ってるのをね」

「まあ、あんたまで変に好奇心を持ってしまって。でも万一のことでもあったらどうします」

「そこだよ、場合によったら弟の準二を連れて行かせたら」

「そりゃ準二が可哀(かわい)そうですわ」

「兎も角、明日月夜だったら道子の様子を見に行く」

「呆れた方ね、そいじゃ私も一緒に行きますわ」

「お前もか」

二人は真剣な顔をつき合(あわ)せて言い合っていたが、急に可笑しくなって、はははははと笑い出してしまった。二人は明日の月夜が待たれた。

第四場面

道子には友達からの手紙は手渡されなかったし、両親の相談など知るよしもなかった。ただいつも晩飯前に帰らない父親が今日は早目に帰って来て自分等(ら)の食卓に加わったのが気になった。今晩お湯に行きたいなぞといえば母親が一緒に行くと言うかも知れぬ。弱った。今日は午前中に雨が上って、月もやがて出るであろう。この好夜、一晩休んで肉体が待ち兼ねたようにうずい

ているのに。段々遅くなって来ると道子はいらいらして来て遂々（とうとう）母親に言った。

「お湯へやって下さい。頭が痛いんですから」

母親は別に気にも止めない振りで答えた。

「いいとも、ゆっくり行ってらっしゃい」

道子はわれ知らず顔をほころばした。こんなことってあるかしらん――道子は夢のような気がした。夢なら醒（さ）めないうちにと手早く身支度（みじたく）をし終って表へ出た。寒風の中を一散に堤防目がけて走った。――今夜は二日分、往復四回駆けてやる――

道子は堤防の上に駆け上って着物を脱いだ。青白い月の光が彼女の白いアンダー・シャツを銀色に光らせ、腰から下は黒のパンツに切れて宙に浮（うか）んだ空想の胸像の如く見えた。彼女は先（ま）ず腕を自由に振り動かし、足を踏んで体ならしを済ました。それからスタートの準備もせずに、いきなり弾丸のように川上へ向って疾走した。やがて遥かの向うでターンしてまた元のところへ駆け戻って来た。そこで狭い堤防上でまたくるりとターンすると再び川上へ向って駆けて行った。

このとき後から追っかけて来た父親は草原の中に立って遥かに堤防の上を白い塊（かたまり）が飛ぶのを望んだ。

「あれだ、あれだ」

父親は指さしながら後を振り返って、ずっと後れて駆けて来る妻をもどかしがった。妻は、はあはあ言いながら

「あなたったら、まるで青年のように走るんですもの、追いつけやしませんわ」

妻のこの言葉に夫は得意になり

「それにしてもお前の遅いことったら」

妻は息をついで

「これでも一生懸命だもんで、家からここまで一度も休まずに駆けて来たんですからね」

「俺達は案外まだ若いんだね」

「おほほほほほほほほ」

「あはははははははは」

二人は月光の下を寒風を切って走ったことが近来にない喜びだった。二人は娘のことも忘れて、声を立てて笑い合った。

（注）
1　国策――国家の政策。この小説が発表された昭和一三（一九三八）年前後の日本では、国家総動員法が制定されるなど国民生活に様々な統制が加えられた。
2　銀ぶら――東京の繁華街銀座通りをぶらぶら散歩すること。
3　屈托――「屈託」に同じ。
4　多摩川――山梨県に発し、南東へ流れて東京湾に注ぐ川。
5　秩父の連山――東京、埼玉、群馬、山梨、長野の都県境にまたがる山地。秩父は埼玉県西部の地名。
6　女学校――旧制の高等女学校の略。
7　幅三尺――一尺は約三〇・三センチメートル。
8　坦道――平坦な道。
9　パンツ――運動用のズボン。
10　湯銭――入浴代のお金。
11　オン・ユアー・マーク、ゲットセッ――競走のスタートの際のかけ声。
12　淙々――よどみなく水の流れるさま。
13　ほごす――「ほぐす」に同じ。
14　天祐――天のたすけ。
15　長火鉢――長方形の箱火鉢。火鉢は、手先を暖めたり湯を沸かしたりするために炭火を入れる調度。
16　鉄瓶――湯を沸かす鉄製の容器。
17　書簡箋――手紙を書く用紙。便箋。

問１　傍線部Ａ「ほーっと吐息をついて縫い物を畳の上に置いた」とあるが、このときの道子の心情はどのようなものか。その説明として最も適当なものを、次のうちから一つ選べ。

①　家族のための仕事をひたすらこなすよう強いられているにもかかわらず、兄にその辛い状況を理解してもらえず、孤独を感じている。
②　家族のための仕事を精一杯こなしていたつもりが、その仕事の使命感に酔っていると兄に指摘され、恥ずかしさにいたたまれなくなっている。
③　家族のための仕事に精一杯取り組んできたのに、その苦心が兄には真剣に受け止められていないことに気づき、張りつめた気持ちが緩んでいる。
④　家族のための仕事は正しいものであると信じてきたので、その重要性を理解しようとしない兄に対して、憤りを抑えがたくなっている。
⑤　家族のための仕事が自分には楽しいものとは思えないうえ、兄に冷やかされながらその仕事を続けなければならないので、投げやりな気分になっている。

問２　傍線部Ｂ「わくわくして肌を強くこすった」とあるが、この様子からうかがえる道子の内面の動きはどのようなものか。その説明として最も適当なものを、次のうちから一つ選べ。

①　月光に照らされて厳かな雰囲気の中を「走る」うちに、身が引き締まるような思いを抱くとともに自分の行為の正しさを再認識し、その自信を得たことで胸の高鳴りを抑えきれずにいる。
②　月光に照らされた堤防を人目につかないように「走る」うちに、非常時では世間から非難されるかもしれないことに密(ひそ)かな喜びを感じ始め、その興奮を自分一人のものとしてかみしめようとしている。
③　月光に照らされて「走る」という行為によって、まるで女学校時代に戻ったような気持ちになり、窮屈に感じていた生活が変わるかもしれないという明るい予感を繰り返し味わっている。

④　月光の下を一人で「走る」という行為によって、社会や家族の一員としての役割意識から逃れた別の世界を見つけられたことに胸を躍らせ、その発見をあらためて実感しようとしている。

⑤　月光の下を一人で「走る」という行為によって、他者とかかわりを持てないことの寂しさを強く実感しつつも、社会や家庭の中で役割を持つ自分の存在を感覚的に確かめようとしている。

問３　この文章は、第一場面、第二場面、第三場面、第四場面の四つに分けられる。四つの場面の表現に関する説明として適当なものを、次のうちから二つ選べ。

①　第一場面では、母親の心情が「母親の声は鋭かった。」のように外部の視点から説明されているが、道子の心情は「よし……………思い切り手足を動かしてやろう」のように、心内のつぶやきのみで説明されている。

②　第二場面では、母親の問いかけに対し、道子が倒置法の返答をしている。この不自然な返答とその直後の兄の誇張した言い回しが母親の不審を呼び、第三場面以降の話が急展開する。

③　第三場面後半の父親と母親の会話には「まあ」という言葉が三回出てくる。この三つの「まあ」はその直後の読点（とうてん）の有無に違いがあり、読点のあるものは驚きの気持ちを表し、読点のないものはあきれた気持ちを表している。

④　第一場面終わりと第四場面半ばの道子が堤防を走るシーンは、勢いよく走り出す様子を描くのに直喩（ちょくゆ）を用いたり、情景を描くのに色彩表現を用いたりして、イメージ豊かに表現されている。

⑤　兄との会話に見られるように、道子の台詞（せりふ）は、四つの場面を通じて、家族からの問いへの応答から始まっている。これは家族とかかわり合いを持つことについて、道子が消極的であることを表している。

⑥　第一場面から道子に焦点を当てて描かれていた話が、第三場面途中から夫婦に焦点を当てて描かれ始める。このことは、第四場面終わりで、両親を示す表現が「父親」「母親」から「夫」「妻」へ変化することではっきり示されている。

第二十二講　知識モノ解説

文学史・人物解説

●筆者　岡本かの子（一八八九〜一九三九）跡見女学校卒・小説家で、岡本太郎の母親。岡本太郎は、「芸術は爆発だ」という叫び（正確には、「芸術は無目的な爆発だ」）と大阪万博の巨大モニュメント『太陽の塔』で知られる芸術家。今回と同じ筆者による小説『鮨』は、センター試行試験で出題されていました。母親との関係を通して変化していく子供を描いた作品で、小説ではよく見られるタイプです。スタディサプリ「高1高2現代文」の第三講で扱っています。学年を問わず、そちらもぜひアタックしてみてください。なお、〈日常と非日常〉という対比の小説は、スタディサプリ「高3トップ&ハイレベル現代文」第十講でもとりあげています。

語句

離れ＝はなれ→主に生活する母屋（おもや）ではなく、追加でつくられた補助的な部屋、別棟（べつむね）

新調＝しんちょう→誰かのおさがりでなく、おろしたて、新しくこしらえること

屈托する・屈託する＝くったくする→疲れて飽きること　cf屈託ない→悪気やこだわりがない。無邪気

戸外＝こがい→家の外

刻々＝こっこく・こくこく→しだいに、時を追って。刻一刻（こくいっこく）、時々刻々（じじこっこく）も同じ

総毛立つ＝そうけだつ→ぞっとして身の毛がよだつ。

端折る＝はしょる→着物の裾を折って、帯などにはさみこむこと。また、省略するという意味もある

撥剌・溌剌＝はつらつ→生き生きとして、元気がいい様子

揶揄＝からか(う)・やゆ→皮肉など言うこと。相手をひやかして面白がること

疾駆＝しっく→速く走ること。疾走と同じ
足袋＝たび→おもに和服のときの、布製のはきもの。足先が二つにわかれている。大工さんやとび職人も着用していることが多い
腰を折る＝こしをおる→途中で邪魔をすること。「話の腰を折る」などと使う
口実＝こうじつ→ごまかしや言い訳のための理由
頻りに＝しきりに→しばしば・ひっきりなしに続けて
至極＝しごく→この上なく・非常に
凛々しい＝りりしい→きりりっと勇ましい態度や姿
もどかしい→思い通りでなくじれったいこと。「はがゆい」もほぼ同義語
かがめる→しゃがんだりして身を縮めること。「こごめる」ともいう
厳粛＝げんしゅく→おごそかで心がひきしまること
不審＝ふしん→疑わしい、いぶかしいこと。振る舞いが普通でないことを「挙動不審」という
　同音異義語　「不信」→信用できない、不誠実であること／不振→成績などがふるわない、思わしくないこと
ほてる＝火照る→顔や体が熱くなること
じりじりする→思うようにならず、いらいらすること
悲観＝ひかん→よくない予想をすること。ネガティブに考えて失望すること
頓狂＝とんきょう→突然、その場に合わない、調子はずれの声をあげること
うずく→ずきずき脈打つように痛むこと
顔をほころばす→笑顔になる、にっこりほほえむ
近来＝きんらい→このごろ、最近

復習問題　第二十二講

次の傍線部にあたる漢字を、次の選択肢から選びなさい。

（ア）運動で心臓のコ動が高鳴る　①呼　②鼓　③来　④誇　⑤己

（イ）緊張でキュウ屈な思いをする　①給　②朽　③急　④糾　⑤窮

（ウ）急な外出のコウ実をさがす　①講　②公　③口　④考　⑤攻

（エ）街の不シン者に職務質問する　①信　②心　③振　④審　⑤請

（オ）ものごとをシン重に進める　①深　②慎　③伸　④津　⑤真

次の語句の意味として最も適当なものを、次の選択肢から選びなさい。

（カ）刻々に

①突然に　②あっという間に　③順番通りに

④ときどきに　⑤次第次第に

（キ）腰を折られて

①下手（したて）に出られて　②思わぬことに驚いて　③やる気を失って

④途中で妨げられて　⑤屈辱を感じて

（ク）われ知らず

①自分では意識しないで　②あれこれと迷うことなく　③人には気づかれないように

④本当の思いとは逆に　⑤他人の視線を意識して

第二十三講　日本文化論・建築論

われわれ日本人の「うち」は家であり、家の外の世間は「そと」であるということを建築の空間領域的に見直すと、靴をぬいでくつろいでいる空間は「うち」であり、靴をはいている空間は「そと」であるということができよう。

そこで、一つの卑近な例をあげてみよう。いわゆる西洋式ホテルと、温泉観光ホテルのように旅館から出発したホテルとの違いは、一体どこにあるのであろうかということを検討してみたい。両者とも外観を見れば堂々たる鉄筋コンクリート造の近代建築であるが、内部に繰り広げられる空間の秩序はまったく異なっているのである。それは「内部」と「外部」との境界の置きかたによるのである。旅館から出発したホテルは、まず第一に玄関で靴を脱ぐ。通常、われわれ日本人にとっては靴をぬいだ所から「内部空間」に入ると考えられるから、玄関ロビーも廊下もエレベーターもすべて「内部」であり、ゆかたに丹前で自由に闊歩できる空間であり、むしろ背広にネクタイの正装でいる方が場違いであるような感じすらするのである。そして通常、旅館式ホテルの玄関は夜は鍵を締めるかわりに個室には鍵をかけない。入浴のような個人的で私的な行動も海や山の見える景勝の大浴室で多数の人が一緒に行う。日本人にとって、旅館は「［A］」の拡大された「内部」の空間であり、ここに偶然泊り合わせた人々は家族の一員であるようにふるまうのが喜ばれるのである。

それに対して、いわゆる西洋式のホテルではどうであろうか。通常、ホテルの玄関は二十四時間開放されていて、靴をはいたまま自由にロビーや廊下を歩くことができる。これらの空間は日本式のホテルの空間とは異なって、［B］のような外的秩序の延長であり、また、公的な空間でもある。であるから、これらの場所でたまたま泊り合わせた人々と馴れ馴れしくしたり、ゆかた、パジャマ、ステテコだけで闊歩することは、ここを「外部」と考えている人々にとってはいかにも不都合である。西洋風のホテルでは個室はきちんとした壁や頑丈な扉によって区別され、その扉には精巧な鍵が取り付けられている。この個室ではじめて「内部」に入ったと考えられるから、靴をぬぐことも、ゆかた、ステテコ姿になることもまったく自由である。その代り、個室を出るときは、わが国で家の玄関を靴をはいて出るのと同じ意味をもつ。靴をはいて個室を出れば、家庭内の食堂であろうとホテルの食堂であろうと街のレストランであろうと同じく「外部」である。西欧の伝統としての「内部」「外部」の意識には

このような考えがあると思われる。

さて、靴をはいたまま暮らす西欧的雰囲気とは、独立した個の［Ｃ］による外的秩序の空間であり、靴をぬいで暮らす日本的雰囲気とは、わけへだてのない個の［Ｄ］による内的秩序の空間であるということができる。ここで外的秩序は内的秩序に必ずしも優（まさ）っているとも考えられない。内的秩序には外的秩序にない親密感や安心感があり、住む人々に仲間意識やくつろぎを与えてくれる。しかしながら空間領域には意識の上で内外の別があり、どこにこの境界線をおくのかということを強く意識する必要があると考えられるのである。たとえば、列車の寝台車やホテルの廊下を外的秩序と思っている人々と、Ｅ同じ場所を内的秩序と思っている人々とが同席すると、服装、態度、話し方等が不調和で、お互いに不愉快な思いをすることがあるからである。

わが国では伝統的に、家の内部に整然たる秩序をととのえ、家族を中心に一軒ごとに内的秩序を保ってきた。内部に秩序をもつということは、別な見方をすると建築の外部には無関心であることを意味し、Ｆ都市空間の充実という構想は稀薄であった。それに対し、西欧諸国では、イタリアの広場などに見られるように建築の外部にも美しい模様の舗装が古くから発達し、また家の中まで靴のまま入るという習慣が生れてきた。この西欧の生活の中には外的秩序の考え方があり、日本の住いの中で行われるようなことが外で行われる。

（芦原義信の文章による）

問１　空欄［Ａ］～［Ｄ］にはそれぞれどんな言葉を補ったらよいか。次から最も適当なものを一つずつ選べ。

Ａ　①　家　②　庭　③　室　④　街

Ｂ　①　世間　②　世界　③　街路　④　会社

Ｃ　①　融合　②　隣接　③　対立　④　協調

Ｄ　①　交際　②　消滅　③　互助　④　集合

問２　傍線線Ｅの部分について。列車の寝台車・ホテルの廊下などを「内的秩序」と思っている人々はそれらの場所でどのようにふるまうだろうか。本文中にも例が示されているが、それとは別の例を一つ挙げて、句読点とも十五字以内で答えよ。

問３　傍線線Ｆの部分について。わが国において都市空間の充実という構想が稀薄であったのはなぜか。「靴をはいている」または「靴をぬいでいる」ことと関連づけて、その理由を句読点とも四十字以内で述べよ。

問４　次のうち、本文の筆者の考えと合致するものを二つ選べ。

①　床の間に置物を飾る日本人には、広場に彫刻を置こうという考えは当然のことと感じられ、本来それは都市空間の充実につながるべきであった。

②　最近のわが国の都市住宅に見られる明るく近代的な居間・台所・化粧室は、日本人の内部に秩序をもつという考えが変わったことを示している。

③　家を「うち」と考え、家の外の空間を「そと」と考える日本人の空間認識と、西欧の伝統としての「内部」「外部」の意識との間には、大きなへだたりがある。

④　西欧の住宅地にみられる、塀のない手入れのいきとどいた前庭は、住まいを都市空間の一部であるとする意識の現れである。

⑤　日本の都市に親密感や安心感があるのは、日本人の空間領域に意識の上で内外の別がなく、都市空間が内的秩序の空間になっているからである。

第二十三講　知識モノ解説

文学史・人物解説

●筆者　芦原義信＝あしはら　よしのぶ（一九一八〜二〇〇三）東京都生まれ、東京帝国大学工学部建築学科卒、ハーバード大学で修士号を取得。建築家としての主な仕事に、オリンピック駒沢体育館、銀座のソニービル、池袋の東京芸術劇場などがある。なお、住宅や建築に焦点をあてた文化論は、スタディサプリ「高3トップ&ハイレベル現代文」第二講があります。こちらにもぜひチャレンジしてみてね。テーマへの理解が深まりますよ。

語句

卑近＝ひきん→身近でわかりやすいこと。通俗的日常的でなじみ深いもの。「卑(いや)しい」という字を使いますが、とりたてて否定的な意味ではなく、謙遜して、〝身近な例ですまないね〟くらいの感じで使われることが多い

検討＝けんとう→よく調べて考えること

同音異義語１　見当→おおよその方向性を考えること。予測、見通しを立てること

同音異義語２　健闘→全力を尽くして戦ったり努力すること

同音異義語３　拳闘→ボクシングのこと

丹前＝たんぜん→全体に綿のはいった袖の広い着物で、浴衣の上から着るもの

闊歩＝かっぽ→大またで悠々、堂々と歩くこと。いばって思うままに行動すること

景勝＝けいしょう→景色がすばらしいこと　景勝地＝眺めのいい観光地

復習問題　第二十三講

次の傍線部にあたる漢字を、次の選択肢から選びなさい。

（ア）分かりやすくヒ近な例を出す　①日　②被　③妃　④非　⑤卑

（イ）深く議論し検トウを重ねる　①到　②踏　③闘　④当　⑤討

（ウ）披露宴に正ソウして臨む　①相　②奏　③装　④遭　⑤荘

（エ）土台の構造がガン丈である　①玩　②頑　③元　④顔　⑤厳

（オ）セイ巧な錠前を付ける　①精　②正　③制　④静　⑤清

（カ）硬苦しい雰イ気をほぐす　①易　②居　③意　④囲　⑤衣

（キ）外と内とのキョウ界を考える　①競　②共　③境　④鏡　⑤経

（ク）教室に机をセイ然と並べる　①制　②整　③正　④聖　⑤斉

（ケ）ジュウ実した時間を過ごす　①重　②充　③住　④柔　⑤従

（コ）和服の柄や模ヨウを鑑賞する　①洋　②揺　③用　④様　⑤妖

第二十四講　言語論

二十世紀にはいってからの、言語についての理論や学説の交代には、目をみはるほど激しいものがある。それでは、あたらしい理論は、以前のふるい理論が克服された結果として出現したのかといえば、そうではない。それは、時代の、あるいは理論家個人の趣味にあわなくなって、単に廃棄され、とりかえられるにすぎない。こうしたことが、留保なく、いくぶん大胆にいいうるのは、とりわけ日本のような、理論的な周辺地帯においてである。では、こうした理論の入れかわりは意味のないものかといえばそうではない。まさに、その転変の契機にこそ、言語内・外のイデオロギー的な背景があり、それだからこそ、言語学史には特別の関心が寄せられるのである。

ところで、あたらしく躍り出た理論がスマートにみえるのは、主として共時的(注)な分析や記述の手順においてであって、人類史の展望のなかで、言語とはどういうものかという問題になると、まことに古色蒼然たる、そして、ほとんどは言明されることのない仮定がかげにかくされている。この仮定は学問的には十九世紀の生物進化論を核に形成された、インド・ヨーロッパ語比較言語学として実現している。その内容を具体的にいえば、人類の言語は単純な構造から複雑な構造へと進化するものであり、その発展段階の相異は、あたかも生物種がそうであるように、相互に混血を許さぬ、ことなる系統として分立しているというものである。わたしたちがある言語の性格を説明するときに、その言語がスラヴ系だのアルタイ系だのというのは、いかに便宜のためだとはいえ、厳密にいえば、生物学的言語系統主義にもとづいて説明するという、欺瞞(ぎまん)に手を汚していることを知っていなければならない。

この進化主義は、じつは至るところで破綻している。そのひとつは、進化したはずのあたらしい言語ほど単純で、ふるい言語ほど複雑になっていることで、これをたとえば英語とサンスクリット語との対比においてみることができる。しかし、こういう問題があることを理論の制作者がしらぬわけはなく、すでに十九世紀において説明が試みられている。

比較言語学のもっと重要な前提は、生物において異種間の交配がありえないように、ことなる言語相互間の交配もありえないという考え方である。こうした「[A]体系」をもっともよく体現しているものとして、文法がもちだされる。たとえば、英語

と日本語の文法をまぜあわせた混合文法などというものは考えられない。互いに相手の言語の影響を強く受けているとしても、所詮は、日本語であるか英語であるかのどちらかだと主張される。

こうした考え方が実践面にあらわれると、自分の母語が異言語によって汚染されることを極度に不快と感じる［Ｂ］になる。ましてや、文字も知らない未開の蛮族が、西洋人の上等言語を、自分流に使いよくくずしてできたピジン語などは、ことばの名にあたいしない、できそこないだと考えられるのはしごく自然のことである。また、使うほうにとっても、おまえの英語は、「日本人の英語」だときめつけられれば恥入るしかないのだが、しかし、そのできそこないのことばしか、ほかに知っていることばがなければ、引きつづいて使っていくしかない。

ところが、言語純血種論こそが言語科学の基礎だという十九世紀の風潮のなかで、オーストリアのCフーゴ・シューハルトは、もともとすべての言語は混合の結果であるとして、むしろ混合のなかにこそ言語の本質をみいだそうとしたから、奴隷や交易商人たちの使う、できそこない言語をとりわけ熱心に研究した。言語学の領域でも、こうした人は、充分に変わった人であるとみられたが、ましてや、由緒ただしい文章を重んじるはずの作家が、フランス語をひどくくずした、アンティル諸島のクレオール語を聞いたとき、それを「世界のうちでもっとも流麗で快い」言語だなどと讃美したら、気が変だと思われるだろう。だがこのことばに魅（み）せられて、ついにはその俗謡集まで編んで刊行したのが、日本に来る前のラフカディオ・ハーンであった。しかもシューハルトは、ハーンのこの刊行物にちゃんと注目していた。

近代国家が誕生する以前の、文字のないことばとことばとの境界は、いまよりはるかに移行的でゆるやかであった。ところがそれに境界をほどこして、相互に切断したのは国家であった。じつに国家の出現は、ことばの性質を変えてしまったのである。ところで、生物種的系統論と、言語混交論とのあいだにある、言語に関する重要な観点の相異に気がついておく必要がある。すなわち、前者においては、言語が不動の主体であって、人間は、それを単に［Ｄ］に使わされているだけなのである。言語は種として不変であるから、人間の力は、言語を変えるには至らない。いっぽう、後者においては、主体は人間であるから、かれは言語を必要に応じてつくり変えもし、外来の要素とごちゃまぜにもするのである。

方法としては、言語を不変の主体として固定したうえで仕事をはじめたほうが楽であることはいうまでもない。しかし、それでは、「言語の学」はいつまでたっても、「人間の学」にはなりえないのである。おそらく、言語学者はそのことを知っていて、

そこに踏みとどまっているのであろう。

（田中克彦『ことばのエコロジー』）

（注）共時的……通時的（歴史的・時間的）の対義語で、この場合は言語をすでに完備された、時間的に推移しない不動の構造物としてみる見方

問１　空欄［Ａ］を補充するのに最も適当なものを、次の選択肢から一つ選べ。

①　複雑な　②　素朴な　③　閉じた　④　難渋な　⑤　混在した

問２　空欄［Ｂ］を補充するのに最も適当なものを、次の選択肢から一つ選べ。

①　論理実証主義　②　言語純化主義　③　言語混血主義　④　環境保護主義　⑤言語流動主義

問３　傍線部Ｃ「フーゴ・シューハルト」について次の（１）（２）の問に答えなさい。

（１）「フーゴ・シューハルト」の学問上の立場を端的に表現している語句を本文中より抜き出せ。

（２）「フーゴ・シューハルト」の意見とは対照的（対立的）な意見の土台をなす考え方を七十字以内（句読点も字数に数える）で説明せよ。

問４　空欄［Ｄ］を補充するのに最も適当なものを、次の選択肢から一つ選べ。

①　受動的　②　積極的　③　能動的　④　間接的　⑤　暴力的

第二十四講　知識モノ解説

文学史・人物解説

●筆者　田中克彦＝たなか　かつひこ（一九三四〜）兵庫県生まれ。東京外国語大学モンゴル語学科卒、一橋大学大学院社会学研究科修了。言語学・社会言語学者。語学の達人のひとりです。モンゴル語、ロシア語、英語、ドイツ語、その他多数の言語をマスターしているそうです。ご自分があまりにデキル人であるためでしょうか、大学で指導していた学生にも非常に高い水準を求める、とっても厳しい先生だそうです。

○ラフカディオ・ハーン（一八五〇〜一九〇四）アイルランド出身のイギリス軍医が父、ギリシャ人の女性が母親。イギリスやフランスで教育を受け、アメリカで新聞記者となって一八九〇年に来日。その後英語教師として日本各地で教鞭をとる。一八九六年、日本国籍を得て「小泉八雲（こいずみやくも）」と名乗る。耳なし芳一の話や雪女など日本各地の幽霊話を収録した『怪談』はあまりに有名。

語句

エコロジー→生態学

目を見張る＝めをみはる→驚いたり感心したりして、目を大きく見開く様子

関連語１　目覚ましい→目が覚めるほどすばらしい、注目にあたいする様子　（例）目覚ましい進歩

関連語２　目まぐるしい→変化が激しく目がまわるようだということ　（例）目まぐるしい変化

留保＝りゅうほ→決定、決断、処理しないで一時とどめておくこと。「保留」でも同じ。サスペンド

契機＝けいき→変化のきっかけ・転機

イデオロギー→根本的なものの考え方・思想。歴史的社会的に形成された主義主張

古色蒼然＝こしょくそうぜん→時代もの、いかにも古めかしく見えるさま
系統＝けいとう→一定の順番にもとづくまとまり。グループ分け
欺瞞＝ぎまん→あざむき、だますこと。ウソ
破綻＝はたん→修復不可能になり行きづまること
サンスクリット語→古代インドの文章語（文語）、梵語（ぼんご）。古代インドのしゃべり言葉（口語）は、パーリ語。仏教の開祖、ブッダのことばはサンスクリット語で記録された。その後、仏典は中国で漢字を当てられ、さらに日本にもたらされることになる
交配＝こうはい→動植物の雌雄を人工的に授精や受粉させること
体現＝たいげん→抽象的あるいは曖昧なものを具体的な形で現すこと
蛮族＝ばんぞく→文明の開けていない、遅れた民族
ピジン語→南太平洋のソロモン諸島で使われている言語
クレオール語→主にヨーロッパ語と交易で交流のあった世界各地の現地語との混合言語
由緒＝ゆいしょ→ものごとの起源と今に至るまでのながれ、いきさつ
俗謡＝ぞくよう→広く庶民の間でうたわれる歌。小唄（こうた）や端唄（はうた）という言い方もある

復習問題　第二十四講

次の傍線部にあたる漢字を、次の選択肢から選びなさい。

（ア）困難をコク服して成長する　①告　②酷　③刻　④克　⑤穀

（イ）決断をひとまずリュウ保する　①流　②留　③竜　④柳　⑤粒

（ウ）ハイ棄物を適正に処理する　①廃　②灰　③排　④敗　⑤配

（エ）生物進化をケイ統的に説明する　①系　②係　③傾　④型　⑤経

（オ）草花の交ハイを実験的に進める　①輩　②灰　③排　④敗　⑤配

（カ）大気の汚センの状況を改善する　①選　②染　③践　④線　⑤潜

（キ）由ショ正しい家柄の出身である　①所　②処　③緒　④諸　⑤書

（ク）新しい作品をサン美する　①参　②惨　③産　④讃　⑤散

（ケ）図書館にカン行物を納入する　①官　②刊　③慣　④観　⑤肝

（コ）外国とのコウ易を盛んにする　①港　②公　③交　④江　⑤攻

〈 Memo 〉

〈 Memo 〉

テキスト解答・解説

誤りの選択肢の典型例一覧　〈誤りに名前をつけられるほどのパターンがある！〉

1　対比混乱の誤り　……本文中で**対比・区別**されていることばを同種のものとして扱ってしまっている誤り。あるいは、主役キーワードの説明を求めている設問で、敵役キーワードを挙げている誤り。**キーワードのグループ分け失敗**の選択肢といってもいい。

2　同一性分断の誤り　……本文中で同種のことばを対比であるかのように扱ってしまっている誤り。これも**キーワードのグループ分け失敗**。**同質性分断**ともいう。

3　正しい対比喪失の誤り　……本文中で「**A⟷B**」という対比で記述されているのに、無関係な「C」という要素を勝手にもちこんだり、「**C⟷D**」といった本文にない対比をもちこんでいる誤り。例えば、本文は「**善⟷悪**」という対比で書いているのに、「美」や「醜」という無関係な対比をもちこみ、本文の正しい対比を見失っている誤り。

4　不当な全称判断　……本文中の記述がないのに、「**すべての○○は**」「**あらゆる○○は**」と勝手に拡張している誤り。類似した誤りとして**不当な一般化**があります。例えば本文では「バラ」という個別のものに焦点を当てているのに、「花というものは」などと拡張している誤り。

5　不当な限定判断　……本文中の記述がないのに、「**○○のみ**」「**○○だけ**」と勝手に縮小してしまっている誤り。類似した誤りとして**不当な矮小化**（わいしょうか）があります。例えば本文では「人間関係全般について」書いてあるのに、「近所づきあい」の次元を書いている選択肢。話を不当にちっぽけにしているわけです。

6　不当な価値判断　（不当な当為判断（とうい））……本文では「○○である」「○○だ」という事実判断をしているのに、「**○○であるべきだ**」「**○○にしなければならない**」「**○○する必要がある**」と勝手に改変してしまった誤り。またAとBの特徴の比較をしているだけなのに、**Aの方が優れているといった優劣を持ち込んだ**選択肢の誤り。特に論文を読んだり書いたりする上で、「事実判断と価値判断（当為判断）」との違いには気を使う必要があるんだよ。

7 **部分的指摘の誤り** ……本文中では、**「AとともにB」「Aと同時にB」「AしかもB」**と追加表現がなされているのに、「A」だけ、あるいは「B」だけを扱ってしまっている誤り。本文の記述にまったく反しているわけではないため、「高度な」誤りといえます。こういうものに気づけるようになることが、現代文での高得点のカギだよ。

8 **記述に反する誤り** ……文字通り、本文中の記述に真っ向から反する選択肢。例えば本文では「AはBである」としているのに「AはBではない」としている誤り。

9 **記述なし** ……文字通り、本文中の記述にはいっさい書いてない内容を勝手にのせている選択肢。ただし、「本文の記述に反しているものを選びなさい」といった間違い探しの設問のとき、本文には書いてないだけで、間違いとはいえないということがあるから注意。つまり、「誤り」としては1〜8・10〜12のほうが深刻な誤りといえ、そちらを優先する。

10 **文脈喪失の誤り** ……文章中で特定の意味づけをして使っていることばを、**文脈外の「常識」や辞書的な意味**で扱ってしまっている誤り。例えば、「飛躍」ということばを、本文は「行き過ぎ」「誤解」という意味付けをして記述しているのに、勝手に「発展」「前進」というようにとらえてしまっているもの。

11 **物理的スリカエの誤り** ……**心理や気持ちを問うている設問で、物理的に説明している選択肢**。小説問題の選択肢としてよく出ます。例えば「暗い気持」を天候や日照量の説明にしてしまっている誤り。

12 **比喩を文字通りに解釈した誤り** ……本文中で、たとえになっている表現（擬人法もふくむ）を文字通りにとってしまった選択肢の誤り。比喩は立派な表現技法です。これをリアルに解釈するとずいぶんおかしなことになります。例えば「いやー、歩きつかれちゃって、膝（ひざ）がわらってるよ」なんて表現があるけど、ホントに笑ったら怖い！

第十三講　民俗学

《本文の対比構造》

主役＝柳田国男の民俗学

『山の人生』の記録

飢餓と殺人という重い事実
殺人の動機と殺人の行為の間に、
心理の入りこむ隙はまったくない
飢餓に苦しむ人間の普遍的姿

主な対比

比較相手＝文学・小説

田山花袋／志賀直哉
フィクション・心理

《解説》

問１《接続語の空欄補充・選択肢》

Ａは、〝したがって・そのため・そこで〟の仲間が入ります。空欄の前で、田山花袋には手におえないことが書かれていますね。「高の知れたもの」とまで表現しています。そのため「私の心の底に溜まっていて、いつかはそれを世に知らせたいという気持を持ちつづけた」わけです。というわけで「そんなわけで」の④が答えです。Ｂは追加表現です。すなわち、「朝日新聞に書き」、加えて「『山の人生』という本を作る時、その序文のような形」で西美濃の山中の惨劇に触れたのです。したがって、「さらに」の③が正解。Ｃは、前の文の内容を認めた上でそれを乗り越える形式です。〝なるほど、しかし〟（〝たしかに、しかし〟でも同じ）をいっぺんに表現しているといっていいでしょう。つまり、〝なるほど柳田国男は田山花袋を批判しているのであって、文学全体の批判ではないよ。だがしかし〟を一度に表現して①の「それにしても」なのです。②の「しかし」単独では不十分でした。Ｄは「花袋にかわる文学者」として「志賀直哉」を具体例として導いています。したがって「たとえば」の⑤が正解になります。接続語の補充が四つありましたが、今回のこれらはスタンダードレベル以上で、ちょっとむずかしめでした。四つのうち、二つ正解できればよいでしょう。

問２《傍線部説明・選択肢》

問４ともかぶりますが（そもそも各設問は関連しあってます）、この文章、あるいは柳田国男の『山の人生』の主題・テーマでは、最終段落にあるように、「人間は石器時代以来たえず飢餓になやまされてきた」ことです。つねにすでに、オールウェイズ＆オールレディに人間は飢えてきた。これが人間の自然状態であったわけです。太陽もまたそれを見てきたはずですね。本文では「立会人」と表現されていますよ。だからこそ「この光景は生きたものとなる」のです。「人間にもっとも普遍的な主題」に焦点がいくからです。したがって、③が正解です。①の「暗い家の内部が照し出される」では、「夕日」が舞台やドラマの照明係になってしまいますよ。これは物理的スリカエの誤りです。②は「親と子の関係」を持ち出していますが、主題ではありません。主題は飢餓（および殺人）という「深刻」な「事実」ですからね。たしかに、親が子を思い、子が親を思うドラマや小説は存在しますが、今回のテーマではないということです。そうした親子の愛情や葛藤なら文学や小説が扱えるということを考え

ると、対比混乱の誤りです。④はどうでしょう。「悲惨さ」はＯＫです。本文にも、「悲惨な内容」や「惨劇」という表現がありますからね。しかし、「罪を犯した父」が悲惨なのではありません。飢餓そのものの方です。罪の有無や重い軽いは比べられていません。現に、特赦の対象になっていますしね。これは正しい対比喪失の誤りと言えそうです。

問３《傍線部説明・選択肢》

「永遠の光景」はこれまた、問４および問２とかぶりますが、人間にとっていつでも変わらぬ「普遍的な主題」ということです。①の「善悪がはっきり」が×です。正しい対比喪失の誤りです。本文にある対比は〝人間にまつわる事実に焦点をあてる民俗学⟷人間の心理に焦点をあてる文学や小説〟です。善悪や罪の白黒をつける裁判ではありませんよ。②はどうでしょう。「季節」が×です。たしかに「晩秋」ということばは本文にありますが、初秋か、早春か、盛夏や真冬ではダメなのか、そんなことは比較になっていません。正しい対比喪失の誤りです。③はどうか。「事件そのものが脳裏に定着」はＯＫですが、「人々の解釈を拒否」が×です。本文に、「殺人の動機と殺人の行為の間に、心理の入りこむ隙はまったくない」とありますが、これは恨みや親子の愛憎のもつれが動機になっているわけではないよ、ということです。飢えという大昔から人間をおそってきたものがあり、今回の「西美濃の山の中」の出来事も飢餓による惨劇です。〝憎いから殺した〟という動機がない、そもそも存在しないということと「解釈を拒否」は違いますからね。記述に反する誤りと言えます。「事実」そのものの「深刻」さを表現している④が正解です。

問４《傍線部説明・選択肢》

直前に「人間は石器時代以来たえず飢餓になやまされてきた。おそいかかる飢餓という猛獣から逃げまわるのが精一杯のくらしをつづけてきた」とあります。「たえず」ですよ！　これぞ「普遍（いつでもどこでも）」の言い換えにふさわしいでしょ。したがって、②が正解です。文中の子どもたちがとった「飢餓から解放されたい」という願いは、斧で殺してもらうほどだったのです。①はどうか。「血縁は切りがたい」とありますが、記述に反します。また親子なら小説で書けますから、対比混乱の誤りです。さらに〝切りやすい関係⟷切りがたい関係〟など比べていませんね。また「親子の血縁」と比較になるものも出てきま

せん（女の子は親子でもありませんしね）。正しい対比喪失の誤りです。③は「罪悪感」が×です。何度も似たような間違いが登場しますね。問２の④や問３の①と同様に正しい対比喪失の誤りです。④は絵に描いたような対比混乱の誤りです。「重い事実」や深刻な「事実」に向き合うのは柳田国男の民俗学です。今回は「文学や小説」と対比になっていましたよ。

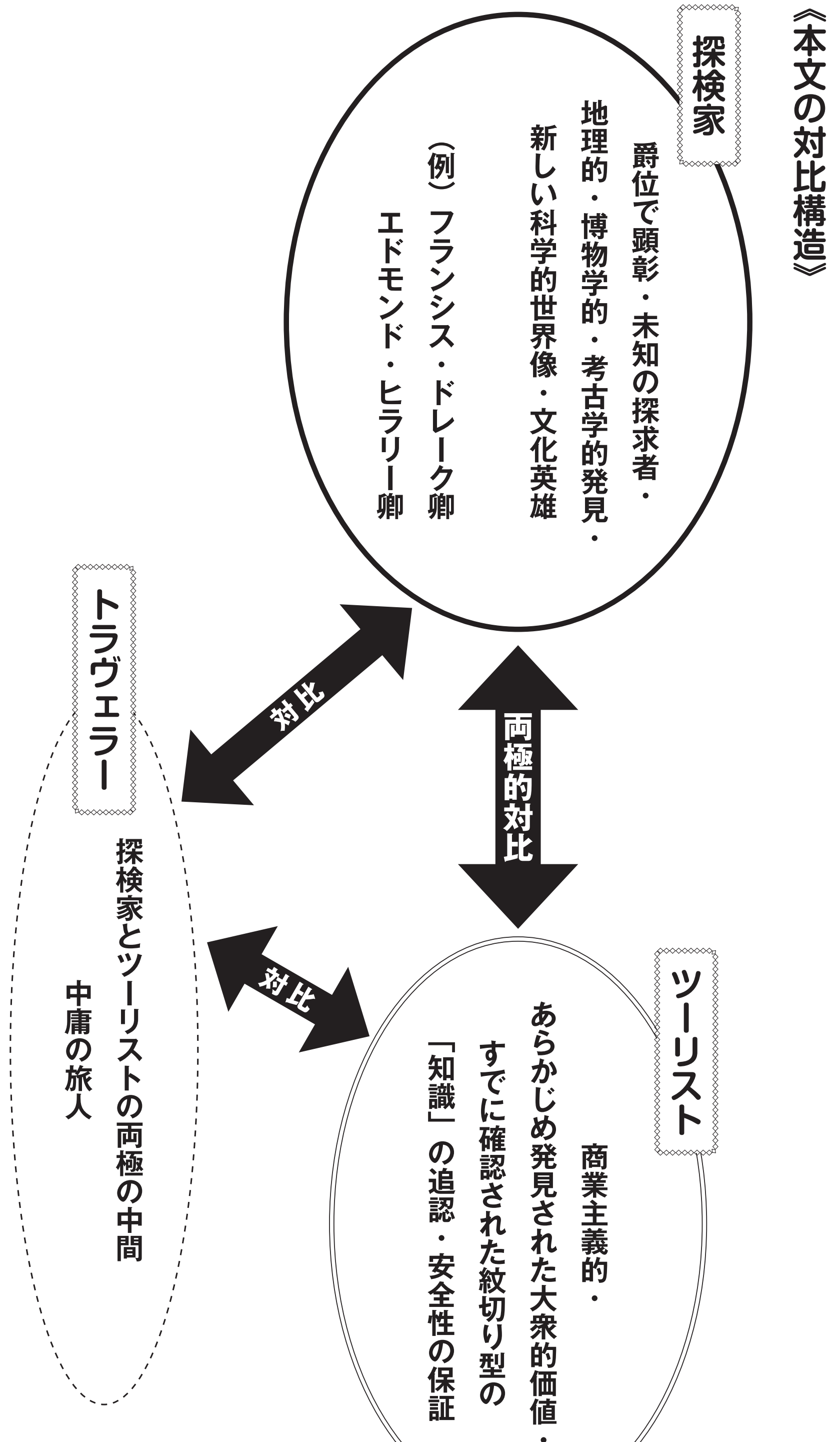
模範解答

問１　Ａ＝④　Ｂ＝③　Ｃ＝①　Ｄ＝⑤

問２＝③　問３＝④　問４＝②

第十四講　旅論・異文化論

《本文の対比構造》



《解説》

問１《傍線部説明・選択肢》

①は「自分の属する共同体と決別し」が×。「決別（きっぱりわかれることだよ！）」なんてとんでもない。出発点の共同体（社会や国家）とつながってますよ。だからこそ、成功して帰ってくれば（それを凱旋（がいせん）という）、「爵位」が待っているわけですから。矛盾しますね。記述に反する誤りです。②は「必ずもとの場所に成果をあげて帰ってくる」が×。不死身か！　彼らは「死の危険をすら冒して」いるのです。当然、帰国できない、成果も得られない人たちもいたはずです。ちなみにイギリスのスコット隊は、南極点一番乗りをノルウェーのアムンセン隊と競って敗れ、しかもその後全滅、だれも帰還できませんでした。ともあれ、本文にないのに〝あらゆる・すべての・いつでも・どこでも・かならず〟などと拡張している間違いを不当な全称判断と呼びます。③は「政治的支配の下におく」が×。植民地か！　たしかに探検家の発見が政治的支配・領土化・植民地化のきっかけや足がかりになったことは歴史的事実かもしれません。しかしそこまでは時間もかかるし、それは探検家の仕事ではなく軍隊の仕事でしょうね。なにより、そのような歴史に関する知識が問われているのではありません。現代文の試験です！　本文では「地理的・博物学的・考古学的発見」「新しい科学的世界像の形成」「文化英雄」とありますよ。記述に反する誤りです。④の「学術上の発見」こそ正解です。

問２《空欄補充・選択肢》

「ツーリスト」に関する問題です。③の「受動的」か⑤の「消極的」かで迷うかもしれません。ほぼ同じ意味で使われることも多いですからね。しかし、旅行代理店によって用意されたパッケージツアーに参加するだけにしても、参加するだけの積極性はあるわけです。そもそも「消極的」だったら旅にもでません。本文の「あらかじめ発見された」「準備された」「すでに確認された」の表現に合致するのは「受動的」です。観光地でみかけるような、旗をふっている添乗員さんにぞろぞろついていく旅行スタイルが一つの典型ですね（なんか、表現にトゲがあってすみません）。

問３《語句説明・選択肢》

問２につづいて「ツーリスト」に関する問題です。この「紋切り型」はよ〜く入試に出ます。どこをとっても模様やデザインが同じということです。伝統的な和菓子に〝金太郎アメ〟というのがあるでしょ。長いスティック状に仕上げ、どこを切っても同じ金太郎の顔が出てくるアメですね（一つだけ桃太郎とかQ太郎とか、オカルトです！）。英語ではステレオタイプ・ステロタイプといいます。もともと印刷用語だったようです。うなずけます。型どおりということです。本文に即して言えば、ツーリストは旅行パンフレットのような商業広告を見て参加するわけですが、その参加者は基本的に同じルートを巡り、同じ感動を味わうように企画されているということです。したがって③の「型にはまった」が正解。④の「形（かたち）にとらわれた」と迷ったかもしれません。しかし、これだと〝内容や本質をみていない〟という意味になってしまいます。〝前人未到の探検⟷パッケージされた観光旅行〟という対比はあれども、〝かたち・表面だけ⟷なかみ・本質〟という対比はありません。そうです、これではたちまち正しい対比喪失の誤りを形成してしまいます。こうして、迷ったとき、何と何を比べているのだろうということを考えると、たちまち迷いや疑問が氷解することが多いです。なんとなくこっち、というような選択肢選びはもうおしまいです。みなさんの知的な習慣にして。

問４《傍線部説明・選択肢》

「旅の始まりと終焉」は探検家とツーリストをたとえた比喩です。これを文字通りに〝旅のスタートとゴール〟と解釈してはいけません。それをやってしまったのが②の「〜出発と〜帰還」です。比喩の誤解・比喩を文字通りに解釈した誤りは《**誤りの選択肢の典型例一覧**》にも収録されているようによくある、つまり仕組まれた間違いです。〝目に入れても痛くない孫〟〝尻に火が付く〟〝他人のために骨を折る〟などすべて比喩です。ホントにやったら痛いよ。では、なぜ比喩とわかるのか。第四段落に「探検家とツーリストの両極の中間に『トラヴェラー』がいる」とあります。これを繰り返す形で「探検家とツーリストという、旅の始まりと終焉の実践の両極をわたる中庸の旅人」とあるからです。したがって「探検家」のキーワード「未知の発見」と「ツーリスト」のキーワード「既知の追認に過ぎない」を答えている①が正解です。③は「探検家」のことしか書いていません。こういうのを部分的指摘の誤りと言います。④は「トラヴェラー」のキーワードを答えてしまいました。「探検家とツーリスト」な

のにね。はい、対比混乱の誤りです。

問５《傍線部説明・選択肢》

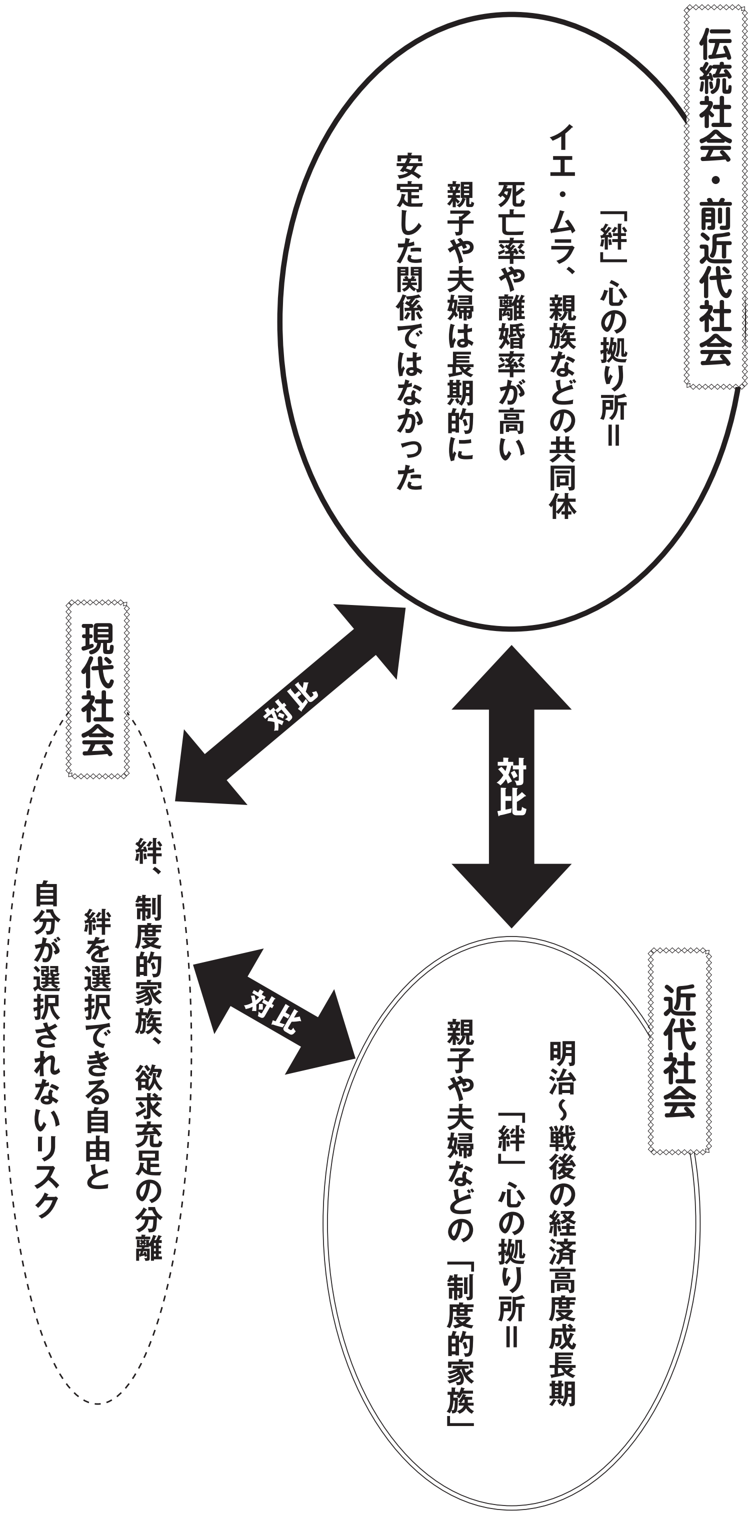
三者の共通点の説明です。「爵位」をもらえるのは「探検家」だけですが、行って帰るホームがあるよ、という点ではトラヴェラーもツーリストも同じです。ホームがあるからアウェイを楽しめるのです。本文でも「ここで重要なのは、探検家であろうとトラヴェラーであろうとツーリストであろうと～特定の起点と終点があらかじめ想定されているという事実」とありますよ。傍線の「その点」は、この「重要な」点を指します。したがって③が正解です。①はどうでしょうね。「西欧的なアイデンティティ（西欧人らしさ）」とありますが、それが書かれていたのは「トラヴェラー」だけです。三者に共通ではなく部分的指摘の誤りとなります。なお、細かいことを言うと「西欧的なアイデンティティを異国の地で体現する」は記述に反する誤りです。これでは、わざわざ外国で西欧人らしさを発揮するという意味になります。例えば、せっかく日本にきているのにスシもラーメンも食べず、日本酒も飲まず、ボルドーワインを飲み、フォアグラやブルーチーズをこれ見よがしに食べ、これが西欧の食のたしなみだと実感するといったイメージでしょうか。本文で言っているのは、まったく逆です。例えば、日本にきて、おでんに天ぷら、アジの開きなどすっかり日本食を食べ歩き、これじゃ西欧人らしさがあやういなというところに、ヨーロッパに帰っていくということです。②は「自分の経験談や、旅先のみやげ物を持ち帰る」が×です。これは「トラヴェラー」や「ツーリスト」にはあてはまっても「探検家」には当てはまりません。部分的指摘の誤りです。探検家がもたらすのは「新しい科学的世界像」ですからね、話が小さすぎます。その点では、不当な矮小化と呼ぶことも出来ます。エドモンド・ヒラリー卿が持ち帰ったのが、エベレストの置物だったり、キャプテン・ドレークが持ち帰ったのが帆船のプラモデルだったらどうするの！　④は「探検家と異なるという点」を挙げてしまいました。冒頭で書いたように、三者の共通点を問うていますからね。記述に反する誤りです。また、二者の共通点だけ挙げているということでは、部分的指摘の誤りです。

模範解答

問１＝④　問２＝③　問３＝③　問４＝①　問５＝③

第十五講　家族論

《本文の対比構造》



《解説》

問１《接続語の空欄補充・選択肢》

A の直前では「孤独が好きな人もいる」とふっておいて、いわば一歩譲ってある種の立場があることも認めておいて（こういうのを〝譲歩〟といいます）、A の後、それを乗り越えて「多くの人々は、信頼できる人間関係を作りたいと願い」としています。したがって、〝逆接（だが・しかし・けれども・ところが）〟を選びます。映像授業ですと、〝色違いをつなぐ〟接続語ということになります。選択肢からなら①の「しかし」です。なお、この A 前後は、冒頭部分「個人化の時代と言われている。家族の絆（きずな）が弱まっているとも言われる。しかしながら、人々が家族的「絆」を求める欲求は、決して弱まっていない」の繰り返しでもあります。

B の前後とも「共同体」「ムラ」の話です。ただし、直前は「生活を保障し、安心できる心の拠り所」というプラス面を挙げて、直後は「ムラの掟〜不自由」といったマイナス面を挙げています。ここで注意すべきは、「心の拠り所」というプラス面が「ムラ」「共同体」の説明としてより重要であるということです。なぜなら「絆」の話をしているからです。B 直後の「不自由」は、サブ的位置づけ、補助、ただし書き、条件付きということです。選択肢からは⑤の「その代わり」を選びます。

D は〝言い換え〟を導きます。「制度的家族」から離れた人間関係（同性愛カップルや事実婚など）を選択した人たちが、いわゆる「家族」ではないのに「自分たちの関係こそが『本当の家族』であることを強調」している。これを言い換えて「絆を家族と読み替えている」ということになります。したがって、④の「つまり」と決まります。

問２《空欄補充・選択肢》

C は、何らかの絆がもたらすもので、しかも「心理的拠り所」とならぶ安心要素ですね。第二段落に「経済的には、困ったときには助け合うというセーフティーネットであり、心理的には心の拠り所」とあります。これが根拠になり、⑤の「生活保障」と決まります。

F はどうか。「大人なら F 」で済まされるが、子どものことまで視野に入れれば「社会的に考えなければいけない」という対比です。①の「教育問題」や②の「社会的責任」は子どもを視野に入れた方です。つまり対比混乱の誤りになってしま

います。その反対で〝大人の個人レベルの問題〟でなければなりません。③の「自己責任」か④の「自由意志」か。もちろん「社会的責任」の反対だから「自己責任」で決まり、でもよいですが、もうひとつ、「パートナーが得られない、子どもに見捨てられるなど」ネガティブな例とセットであることに注目しましょう。これらは「自由意志」で選んだわけではありませんね。こうした考察からも「自己責任」と決まります。

問３《空欄補充・抜き出し》

E の直後にある「分離」に注目しましょう。何と何が「分離」したのでしょうか。この周辺部分と類似した表現を探すのが有効な方向です。そこから、何と何の内容もわかるはず。すると、二つ前の段落に「現代社会の特徴」として、「制度的家族と信頼できる関係性（絆）が一致しない機会が増えた」とあります。ただし「制度的家族と信頼できる関係性（絆）」では字数オーバーです。なんとかそれを「五字以上八字以内」で表現したものはないのか。あります。その前の段落にあります。「近代社会の説明として「絆と家族関係が同一視」とあります。ああそうか、近代ではセットだったものが現代では分離なのね、とわかります。したがって、まず「絆と家族関係」で正解です。もうひとつあります。E の二つ後の段落に「絆と制度的家族、欲求充足という三つの領域が分離」とあります。こちらをとって「絆と制度的家族」としても正解です。

問４《全文理解にもとづく正誤問題》

本文にあった三つの対比、すなわち「伝統社会」「近代社会」「現代社会」が出てきますね。それぞれの説明としてOKかどうか、吟味しましょう。しかも今回は○×形式ですから、×と判断出来たらそれも得点ですからね。①②は「伝統社会」の説明を試みています。まず①ですが、安心安全の拠り所として「家族」ではなく「家族をとりまく様々な共同体」を挙げていますね。これはOKです。他方、②は「親子や夫婦の関係は長期的に安定していた」が×です。本文に「明治時代までは、死亡率や離婚率が高く、親子や夫婦は、長期的に安定した関係と言えなかった」とあります。「親子や夫婦」といった典型的な家が安定するのは「近代社会」です。したがって、対比混乱の誤りです。すがすがしいほどの間違いですね。③は「近代社会では」と言っておきながら、その内容は「現代社会」のものですね。×です。これを対比混乱の誤りと呼ばずして他になんと呼ぼう！出題者が、

こういうカタチで間違いの選択肢をつくっているのだな、ということもよくわかるね。解答するわれわれ、受験生であるみなさん方も、そういう間違いのパターンを知っておくと、実になめらかにスピーディーに解答できてしまうことが想像できるでしょ！　④⑤は「現代社会」です。さあ、点検しましょう。④は、本文中の「家族を作らなければ満たされなかった欲求が、家族なしでも果たせるようになった」「経済的生活をするために、家族は必要ではなくなっている」「絆がなくとも、とりあえず、生活に不自由することはない」といった記述に合致しています。○です。⑤は「特別な能力の有無」が×です。本文では「絆を結ぶ能力」を「コミュニケーション能力」と呼んでいますが、「特別な能力」などとは表現していません。記述なしです。さらに、本文にあるのは「コミュニケーション能力」の「格差」です。「コミュニケーション能力の弱者」という表現もありますね。つまり、この能力の〝強弱の格差〟は本文にあれど、「有無」はでてきません。本文にない対比を勝手につくってしまった間違い、そうです、正しい対比喪失の誤りです。というわけで、⑤は×。

模範解答

問１　A＝①　B＝⑤　D＝④　問２　C＝⑤　F＝③　問３　絆と家族関係／絆と制度的家族（どちらでも正解）

問４　①＝○　②＝×　③＝×　④＝○　⑤＝×

第十六講　旅論その2

《本文の対比構造》

筆者の見解＝静観としての旅

それまでの日常生活を
思い出として静観する

デカルト
旅の相対化＝
⊕効用　＋　⊖危険性（異邦人）

↕ 対比

比較相手その1＝一般論

旅先の思い出

↕ 対比

比較相手その2＝行き過ぎた反省

夢想・内部への旅・地獄降り

↕ 対比

比較相手その3＝見聞のない人

自分たちの習俗と異なる
ものを滑稽とみなす

《解説》

問１《傍線部説明・選択肢》

筆者の意見箇所です。筆者がいう「思い出」は、旅にでることで今までの日常生活をふり返り、冷静に反省することです。特別な意味をこめて「思い出」という言葉づかいをしています。そうでなければ、わざわざ文章を発表しませんよね。しかも、そういう特殊な意味づけをされたところが設問になります。さて、日本暮らしの人が海外旅行、例えばフランス・パリに出かけたとすれば、日本での暮らしを、距離をおいて反省することが、今回の「思い出」であり、筆者はそういうことができることが「人間にふさわしい」と肯定しています。本文にも「日常の生活を思い出に変える」「自分を離れて自分を見るのは、やがて一層よく自分に戻る」とあります。したがって、④が正解です。注意すべきは、旅先の思い出、例えばパリ旅行の思い出は、世間的に一般的に「よく言われる」話であって、筆者の意見ではないということです。①は、そこを間違えています。「旅というものは多くの思い出を残してくれる」では、旅先の思い出です。〝エッフェル塔に上ったよね〟〝シャンゼリゼ通りを散歩したよね〟というように。比較相手の方を答えてしまっていますから、対比混乱の誤りの典型です。③はどうか。「旅には日常の生活を思い出に変える力があり」はＯＫです。ところが「身辺の事物を懐かしい気持ちで見直せる」がいけません。本文の文脈では、先にも書いたように「思い出」は「静観」「吟味」の対象です。哲学的省察ともいうべき特別な意味で使っているのに、そのことをスコーンと忘れて〝思い出だから懐かしさだろ〟とやってしまった間違いです。思い出のアルバムをめくって過去をセンチメンタルに回想している感じだよ。こういう間違いを文脈喪失の誤りといいます。《**誤りの選択肢の典型例一覧**》にも収録しています。⑤も似ています。「旅における困難との遭遇とその克服」が×です。〝旅だからアドベンチャーだぜい〟〝冒険しようぜ！〟という感じで文脈を喪失しまくってます。

ところで、この傍線Ａを含む本文前半にはもうひとつ対比があります。もう一つの比較相手が出てきます。それは行き過ぎちゃった反省ともいうべき「夢想」「地獄降り」「内部への旅」です。旅先で、今までの自分を反省しているうちに、止めどもない自己否定になってしまう危険です。〝あのとき、ああして置けばよかったのに。あぁ、なんてこの私はダメなやつなのだろう！〟という感じです。したがって①の「内面的な豊かさ」は×です。対比混乱の誤りです。かくて、①は二重に間違いでした。②も「夢想」「内面」を答えてしまいました。対比混乱の誤りです。せっかく旅行に来ているのだから、反省しすぎの自己嫌悪でナイー

ブにならないようにしないともったいないよね。ほら、カフェで憩うパリジェンヌがこっちにウインクしたよ（たぶん、勘違いかもしれないけど）、元気出していきましょう。

問２《傍線部説明・選択肢》

ここでの「相対化」は、旅のプラス面とマイナス面を冷静に見つめるということです。プラス面だけ熱に浮かれたように絶賛してはいけないということ。それでは、旅を絶対化してしまいます。このプラスとマイナス、酸いも甘いも噛み分けてこそ「ボン・サンス（良識）」です。「醒めきった目」です。したがって「意義〜同時に〜危険性」を指摘した⑤が正解です。①は「旅の思い出を日常の生活と等価」が×です。功罪＝プラス・マイナスを指摘してほしいのに、へんなものをセットにしています。へんというのも「旅の思い出（旅先の思い出）」と「日常の生活」を同じ価値だとしているからです。筆者は日常生活を冷静にふりかえることを重視しています。この点では対比混乱の誤りです。またなによりプラス・マイナスの対比を見失っているという点では、正しい対比喪失の誤りです。③はどうか。「旅先の目新しい現実をも公平に判断」とありますが、これではプラス面のみです。部分的指摘の誤りということになります。④は、第三の比較相手である「何らの見聞もない人々」の勝手な決めつけを「やむをえない」と認めてしまっています。これではたちまち対比混乱の誤りを形成してしまいます。②はまず、プラス・マイナスにふれていないということから×という判断でＯＫです。続いて、もう少し深く吟味してみましょう。この選択肢は、「書物」と「付き合い」「したしむ」ことを「旅に出るのと同じ」という主旨でとらえていますね。つまり旅といっても唯一絶対の価値ではなく、本を読むことと同じレベルだぜという意味で「相対化」の説明を試みています。これが間違いです。本文の「相対化」は、プラスマイナス両面含むという意味ですから、文脈喪失の誤りであり、正しい対比喪失の誤りでもあります。

問３《口語文法・選択肢》

口語文法（現代語の文法）の問題です。その中で【「た」の識別】と呼ばれているものです。〝識別〟といっても二種類しかありませんから、簡単です。知らなかった人はこれを機会に知識に登録しておいて。では、いきます。「た」といっても、〝〜している〟と言い換えられる〈様態（状態のこと）〉と、〝〜だった〟〝過去に〜していた〟と言い換えられる〈過去〉の二種類です。

傍線部「醒めきった目」は「醒めきっている目」と言い換えられます。〈様態〉です。これと同じものを選択肢から探します。②が正解です。「茫漠とした広がり」は、過去に茫漠としていたのではなく、茫漠としている状態、〈様態〉です。他の選択肢はすべて〝過去に〜していた〟〝〜だった〟の意味です。

問４《内容理解・選択肢》

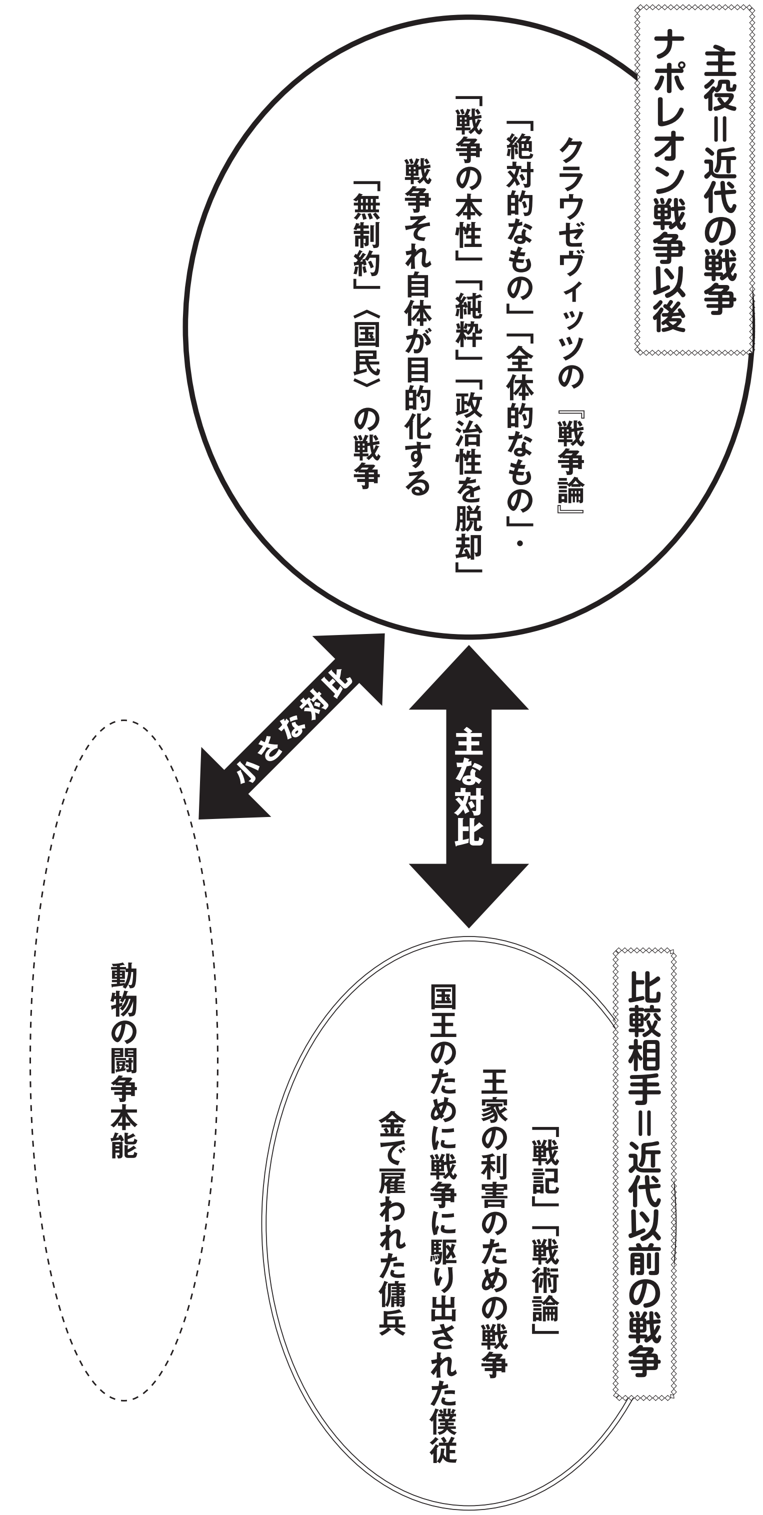
筆者はデカルトを高く評価しています。旅の功罪＝プラス・マイナス両面を冷静にとらえるボン・サンス（良識）をもった人間として。したがって④が正解です。①はどうでしょうか。「ばかりでなく」という追加表現があり、プラスとマイナスの両面を挙げているのかなと一瞬、思います。ところが「異国オランダばかりでなく、母国フランスに対しても、異邦人」という二重のマイナス、「二重の異邦人」を挙げているだけでした。結局、部分的指摘の誤りです。②は「他人の意見には醒めきった態度で対処」が笑える間違いです。自分に甘く、他人に厳しいというわけですか。本文では、そういう意味で「醒めきった」を使っていませんね。はい、文脈喪失の誤りです。出題者は、わざとこんな選択肢をつくっているのだということをご理解くださいね。③はどうでしょうね。「学問成果〜旅の効用〜自信〜深い学殖と経験に裏打ち」など、プラス面のオンパレードです。わざとらし〜！　①がマイナスだけを重ねても、部分的指摘の誤りだったように、プラスをどんなに重ねてもこれまた部分的指摘の誤りですよ。⑤はちょっと難しいけれども、どこがいけなかったのでしょうか。「長年人生における旅の効用について説き続けたが〜ついには旅に対して相対的な態度を取るに至った」とありますが、これでは晩年になってやっと旅の危険性に気がついたということになってしまいます。ところが、本文によれば「四十一歳のときに公刊した『方法序説』」の「ごくはじめのところ」で、早々に旅の危険、異邦人になってしまう危険を指摘しています。したがって、記述に反する誤りです。

模範解答

問１＝④　問２＝⑤　問３＝②　問４＝④

第十七講　戦争論・近代化論

《本文の対比構造》



《解説》

問１《傍線部説明・間違い探し・選択肢》

筆者がこの文章で描いているのは、戦争全般ではなく、「近代の戦争」です。また筆者が取り上げた、クラウゼヴィッツの『戦争論』も、それ以前の戦争とは異なる「近代の戦争」に焦点をあてています。「近代の戦争」になって、はじめて戦争そのものの「本性」が現れます。当初あったはずの「政治的目的」さえときに脱却して、敵を完全にのめし、打倒し、無力化するまで突き進んでしまいます。「何かのため」だったはずの戦争が「それ自体目的」となります。ゆえに「無制約（ノンストップ）」「純粋」「全体的」なものになります。したがって、近代の戦争を「本来的な戦争」「本来の戦争」とした①や④は本文の記述に合っています。②の「戦術」は「二次的」という評価も正しいと言えます。「二次的」とは、大事ではない、本質的ではないという意味です。そうです、「それぞれの時代にはそれぞれの『戦術論』がある」と第一段落にあるように、「戦術（どんな武器を使うかとか、どんな陣地を築くかなど）」は、近代以前の昔からある。古代ギリシャの重装歩兵の密集隊形（ファランクス）とか、日本の戦国時代の鉄砲隊の配置もそうした例でしょう。しかし、「近代の戦争」では、戦争それ自体、「それ自身の解明」を必要とするものになります。③の「大量破壊兵器」は、核兵器や生物化学兵器などです。〝現代か！〟とツッコミを入れてください。もちろん、本文中にも出てきません。記述なしです。したがって、戦争それ自体の全体性や絶対性や純粋性を語ることが〝第一次的〟に重要で、戦術は「二次的」になるのです。③の「大量破壊兵器」が×で、これが答えになります。

問２《傍線部説明・選択肢》

政治的目的をおいてけぼりにして「とことん」「極度」までいってしまう戦争のありかたを「戦争それ自体に内在する障害以外にない」と表現しています。物資や人材が底をついて、戦争自体を遂行できなくなるまでやってしまう、つまりストッパーや安全装置はないということです。①の「戦争にはもともとそれを妨げる障害があり、それが最終的に戦争を抑制する」では正反対になってしまいますね。戦争には、行き過ぎない安全ストッパーがついているという話になってしまいます。そりゃ安心だね（皮肉です！）。というわけで、記述に反する誤りと言えます。④の「戦争の原因となった問題が解決されたときにのみ、それを終結させることができる」では、冷静にも政治的目的にしたがっています。これまた正反対です。対比混乱の誤りですし、「のみ」

は、不当な限定です。②は「動物の闘争本能に似た何か」が×です。本文には、たしかに「動物の闘争本能と呼ばれるもの」とも「無縁ではなく」とあります。しかし、それは「どんな小さな諍のうちにも～含まれている」とあるように、「近代の戦争」以前のものにもあてはまってしまいます。筆者自身、「だが」という逆接の接続語で「動物の闘争本能」の話を乗り越えています。そうして「近代の戦争」の特別の特徴として、「〈国民〉の戦争」として、熱狂的に全面化するという話を展開しています。したがって、「近代の戦争」の説明のはずが、それ以外の戦争にもまたがるものを答えたこの選択肢は、対比混乱の誤りなのです。

こういうわけで、「破壊は究極まで至らないと止めることができなくなる」とした③が正解です。

問３《傍線部説明・間違い探し・選択肢》

問1とよく似た問題です。間違い探しの問題であるというだけでなく、内容的にも重なります。「絶対的」は、「近代の戦争」の特徴ですから、言い換え・置き代えとして、①「無制約的」③「純粋な」④「全面的」はすべてOKです。②の「決定的」が×でこれを解答として選びます。野球やサッカーでも〝決定的ホームラン〟〝決定的なゴール〟〝決定力がある〟などの表現は、〝勝敗を決する〟、だらだら延長ではなく、これでスカッとおしまいにするということです。ところが、「近代の戦争」はそうではありません。「とことん」までやります。相手の「降伏」や政治的目的さえ忘却しかねないものです。したがって、「決定的」では、はっきり対比混乱の誤りと言えます。

問４《傍線部説明・選択肢》

「近代の戦争」は「〈国民〉戦争」として、「絶対化」・全面化します。かつてのように王様から「駆り出される」ことはなくなりますが、かといって戦争に参加してもしなくても〝自由気まま〟〝勝手気まま〟にできるというわけではありません。「〈国民〉たることを運命づけられて」います。フランス革命の場合なら、革命で「獲得した自由を守るためにまず自由の体制を、つまり今や自分たちのものとなったフランス国家を守らなければならなかった」のです。自分はこの国の国民だと考える人は、戦争にだって自ら参加しなければならなかったと言えます。そうでなければ、自分は〈国民〉ではない、ということになるだろうし、まわりからも〝非〈国民〉め〟と言われてしまうかもしれません。本文で、国民にカッコをつけて〈国民〉としているのも、国

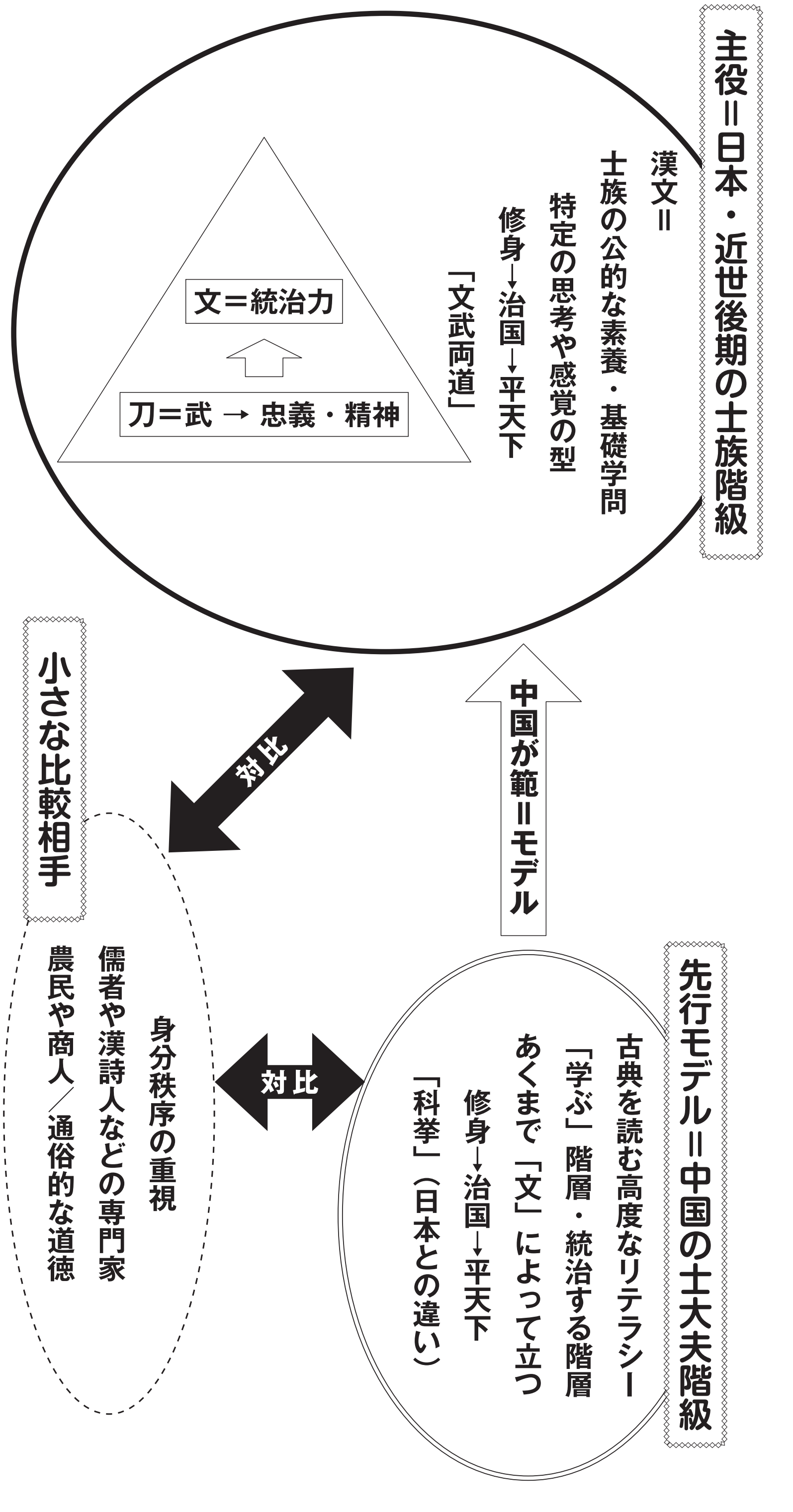
民というものが「抽象的」で「概念的（抽象的なことばということ）」と表現しているのも同じ理由です。つまり、国民であることは、当たり前の自明なものでも、固定確定したものでもなく、自ら〈国民〉と考え、戦争にだって行く覚悟がある者ということなのです。①は「強制的」「徴用」が×です。これでは前近代の王様によって「駆り出される」のと同じ水準になってしまいます。フランス革命という民主化などなかったかのごとき選択肢です。対比混乱の誤りです。②は「為政者（政治家）」の話になっていて国民がでてきません。また、財政の「調達」について「自由にできるようになる」とプラス評価のような書き方をしていますが、間違いです。本文は、国家の財政まるごとの「完全な破綻」にいたってしまう危険・リスクを語っているのでした。記述に反する誤りです。③は戦争について「自由意志で参加が可能」としていますが、先にも書いた通り、はなはだしい間違いです。国民として、自分をある国の国民と考えるならば、参加しなければならなかったはずです。対比混乱の誤りと言えます。また「自由」を勝手気ままさとしてとらえていますが、文脈喪失の誤りです。本文ではフランス革命で「獲得した自由を守るために」「自分たちのものとなったフランス国家を守らなければならなかった」とありますよ。したがって、④が正解です。

模範解答

問１＝③　問２＝③　問３＝②　問４＝④

第十八講　漢文学論

《本文の対比構造》



《解説》

問１《傍線部説明・選択肢》

日本の士族階級の「基礎学問」「素養」として漢学・漢文が学ばれます。「知的世界を形成」します。しかも、その「過程」で「ある特定の思考や感覚の型が形成されて」いきました。このことに「注意を向ける必要があります」と、筆者自ら第④段落で強調しています。その「型」のモデルは、中国の「学ぶ階層」である士大夫です。脚注の２にも「中国に範をとって」いることが記されていますよ。つまり、近世後期の日本の武士たちの知的態度をよく知るために「[A]もう少し広く考えてみましょう」というガイドのもと、そもそもモデルである中国の「知の世界の住人」はどうなっているのか、考察が進められています。したがって、④が正解です。①は「中国古典文に見られる思想と文学の共通点」が×です。日本の士族階級と中国の士大夫階級の「共通点」ならＯＫですが、中国国内、古典文内での「思想と文学」については、そもそも比較考察の対象ではありません。共通点も相違点も話題になっていません。これは正しい対比喪失の誤りです。なお、ここでの正しい対比は〝専門家・農民・商人⟷士族階級・士大夫階級〟です。②は「学問の制度化の歴史的起源」や「日本において漢学が素養として公的に認知された理由」が×です。ここで話題になっているのは、そんなことではありません。日本の士族の「思考や感覚の型の形成」であり、モデルの「士大夫の思考や感覚の型」です。したがって記述に反する誤りです。③は「多様化」が×です。あたかも、かつて学ぶ対象が画一・均一・一様だったものが、あるときから「多様」になったかのような対比を勝手に作り上げていますね。正しい対比喪失です。⑤は「専門家以外にも漢文学習が広まった」が×です。この表現では、一般庶民にも広がったかのようです。あくまでも士族階級の素養ですからね。不当な一般化の誤りと呼べるでしょう。

問２《傍線部説明・選択肢》

まず、「刀」のもつ意味が「武勇」「武芸」「軍功」「技術」から「忠義」「精神」に変わったことが大事です。さらに、その転換した「刀＝武↓忠義・精神」が「文＝統治能力」のベースであること、言い換えれば、「文」は「武に支えられて」いることが重要事項です。「文武両道」といっても、文と武が横並びだったり、混ざり合って調和しているというのではなく、「武」が土台で「文」が上に乗るピラミッド構造（下部構造＋上部構造）です。したがって、④が正解です。「武芸の典型としての刀を忠

義の精神の現れと見なし」、「その精神を〜行政能力の土台と位置づける」なんて、完璧です。①は、中国の「模倣」と「日本独自」といったヘンなものを比べています。正しい対比喪失です。しかも「文と武に関する理念」で済ませてしまい、ピラミッド構造を指摘していません。②は「刀を〜吏僚としての資格と、武士に必須な忠義心とを象徴するものと見なす」が×です。後半の「忠義心」はOKですが、前半の「吏僚としての資格」が間違いです。それは「刀＝武」ではなく「文」の領域です。この選択肢では「刀」が二つに分岐して「武」にも「文」にもなったかのようです。まったくもって記述に反する間違いです。異なるものを混ぜてしまったという点では、対比混乱の誤りです。③は「刀を持つことが本来意味していた忠義の精神」がシラジラシーほどの×です。「刀」は〝武→忠義〟へと転換したのです。はじめっから「忠義の精神」だったわけではありませんね。中世と近世の区別ができていないという点で、対比混乱の誤りです。⑤は「出世のための学問を重んじる風潮に流されず、精神の修養に専念」が×です。「精神修養」としての武芸、学問は「士族が身を立てるために必須の要件」とありますから、記述に反する誤りです。また「学問」と「精神の修養」を対比的に表現していますが、しくまれた間違いです。両者は基本的に同じものですから。同一性分断の誤りです。

問３《傍線部説明・選択肢》

漢文を学ぶこと、学問することが「士族が身を立てるために必須の要件」になり、しかも学ぶという精神修養や修身が「統治への意識」、「治国・平天下に連なって」いきます。こうして「漢文で読み書きする」ことは、「日常」レベルを超えて「道理と天下を語る」ものになります。したがって③が正解です。①は、まず「技能」が×です。武芸も「技術でなく精神」「精神修養」になっているはずです。これじゃ中世と同じ、旧態依然ということになりますよ。対比混乱の誤りです。さらに「中国の科挙制度〜同様の」が×です。中国の士大夫がモデルであることは確かですが、日本の「学問吟味」は「科挙制度のような大規模かつ組織的な登用試験とは明らかに異なっています」と本文にあります。日本と中国との小さな対比、脇役的対比とはいえ、対比混乱の誤りと言えるでしょう。また「エリート（選ばれし少数者の意味ですよ）」も疑問です。少数か多数かは比較にありませんから、正しい対比喪失の誤りですね。②は「文と〜武とを〜調和」が×です。「文武両道」は調和ではなく上下の階層構造です。記述に反するといっても、これはこれで対比混乱の誤りと呼んでもよいでしょう。④は「士人としての生き方を超えた、人とし

ての生き方」が、もうあきれかえってでんぐりがえるような間違いです。不当な一般化の典型を見る思いです。「人」一般ではなく「士族階級」の話です！　⑤は「国家を統治するという役割を天命として引き受ける」が×です。文中の「天下」は世の中・国家・統治そのもので〝神様から使わされる〟というような意味ではありません。文脈喪失の誤りの典型ですな。

問４《段落構成・選択肢》

第1段落～第4段落は、前書き部分にひきつづき、日本の士族階級と漢文学習の関係が語られています。大きな転換は、第5段落からやってきます。「もう少し広く考えてみましょう」ということで、日本の士族の学びのモデルとして、中国の士大夫階級の学びが紹介されます。その後、第11段落で「もう一度、近世日本に戻って考えてみましょう」と宣言されているように、再び日本の士族階級の学びに復帰します。［日本の士族の漢文学習（文章全体のテーマ）〈1～4〉］→［中国の士大夫（日本のモデルとしての具体的説明）〈5～10〉］→［日本の士族（漢文学習の具体的な説明）〈11～20〉］という大きな枠があります。①が正解です。

②④は、第2段落と第3段落を分離し、ここに境界線があるかのようになっていて、×です。その他もすべてそうですが、区切りとグループをことごとく間違えています。このように、大学受験の現代文で、「段落構成（役割分担や大きな区切りのこと）」を問うてくる以上、それは本文にもわかるように書いてあるということです。そもそも、この講座テキストの【はじめに】に記したように、入試現代文は〝書いてあることを書いてある通りに理解すること〟を問うからです。本番でも、あわてず、さわがず、わかるように書いてある、そのための訓練をしてきた、ということを思い出してください。なお、④の「起承転結」は、評論・論説ではめったにないスタイルだということを言っておきます。漢詩なら「起承転結」が大事な「型」ですが、論文はそうではないのがむしろ普通ですからね。

模範解答

問１＝④　問２＝④　問３＝③　問４＝①

第十九講　都市論・故郷論

《本文の対比構造》

主役＝筆者の見解
現代にも通用する故郷
原風景としての故郷

人生の最初に出会い育まれた場所
性格を形成していった環境
心の底に刻みこまれた風景と出会った場所
無償の愛情のもてる場所
都会も故郷たりうる
現代にも通じる故郷

幸田露伴の都市論

主な対比

小さな対比

比較相手＝従来の故郷論
田舎の故郷
典型的なムラの姿

自然の豊かな田舎
無条件に心も身体も帰れるところ
甘いひびきと苦い思い出
地縁と血縁のしがらみ

森鷗外の都市論

《解説》

問１《傍線部説明・選択肢》

「原風景」は、筆者が強調する「原点としての故郷」で、現代でも通じる、都会にも通じる故郷です。したがって、①が正解です。他はすべて、かつての農村のような故郷の話、「典型的なムラ」です。つまり、ことごとく対比混乱の誤りです。

問２《傍線部説明・抜き出し》

こんどは比較相手の故郷の話ですよ。ムラの話です。故郷といってもムラでは「甘いひびき」だけでなく「苦い思い出」もくっついてきます。いいことばかりではないのです。これを表現しているのが「故郷は遠くにありて思うもの」です。つまり、故郷とは距離を保って懐かしむくらいがちょうどよく、近づくとあるいは、その中にいるといやな縛りもあるよ、という内容です。では、ムラ（「農村や、封建制の強い町」）には何があったのか、「自由を束縛する抑圧的、閉鎖的」なものとはなにか。設問条件の「原因」「十字以内」に当てはまるのは、「地縁、血縁のしがらみ」です。これが答えです。また傍線部の後にある対比を通して、確認と確信もできます。すなわち、「都市の空気は自由にする」が対比で、そのわけ・原因は「地縁、血縁の薄い」です。

問３《傍線部説明・選択肢》

「無償の愛情のもてる場所」は、筆者側の故郷です。問1と類似問題です。②の「無条件に心も身体も帰れる場所」、④の「自然」、⑤の「甘ずっぱい思い出」は、すべて比較相手の方、ムラの話ですね。対比混乱の誤りです。①はどうでしょうか。本文には「たんに生れただけで全く意識のない場所は故郷とはいいにくい」とありますから、「自分の生れ育った場所」では不十分ということになります。記述に反する誤りとも対比混乱の誤りとも言えます。「性格を形成していった環境」「心の底に刻みこまれた風景と出会った場所」とまでいかないと、筆者が言う故郷にならないのです。したがって、③が正解です。

問４《傍線部説明・抜き出し》

森鷗外と幸田露伴という小さな対比に関わる問題です。幸田露伴が、東京に「強い愛情と誇り」という、いわば〝主観的〟に

東京に関わっているのに対し、森鷗外は「客観的な立場」です。この両者の違いはどこからくるのでしょうか。つまり「理由」は何でしょうか。ここでも対比がヒントをくれます。まず、幸田露伴は「旧幕臣の家に生れ」です。江戸幕府の重要な地位にあった家系ということで、ともあれ東京生まれです。対して、「鷗外は津和野の人（現在の島根県）」です。この「鷗外は津和野の人」を解答に選んだ人は、△です。間違いとは言えませんが、○とは言えません。「鷗外は津和野の人」って、〝つまり、どういうことよ〟というツッコミが可能だからです。では、つまりどういうことかというと、「東京は異郷であった」ということです。だからこそ東京に対して「冷たく」「教科書的で」「客観的」になるわけです。こちらが完全解答です。問４の設問条件に十全に応えることになります。こうして、候補が複数出る場合、よりよさを追求します。

問５《傍線部説明・記述》

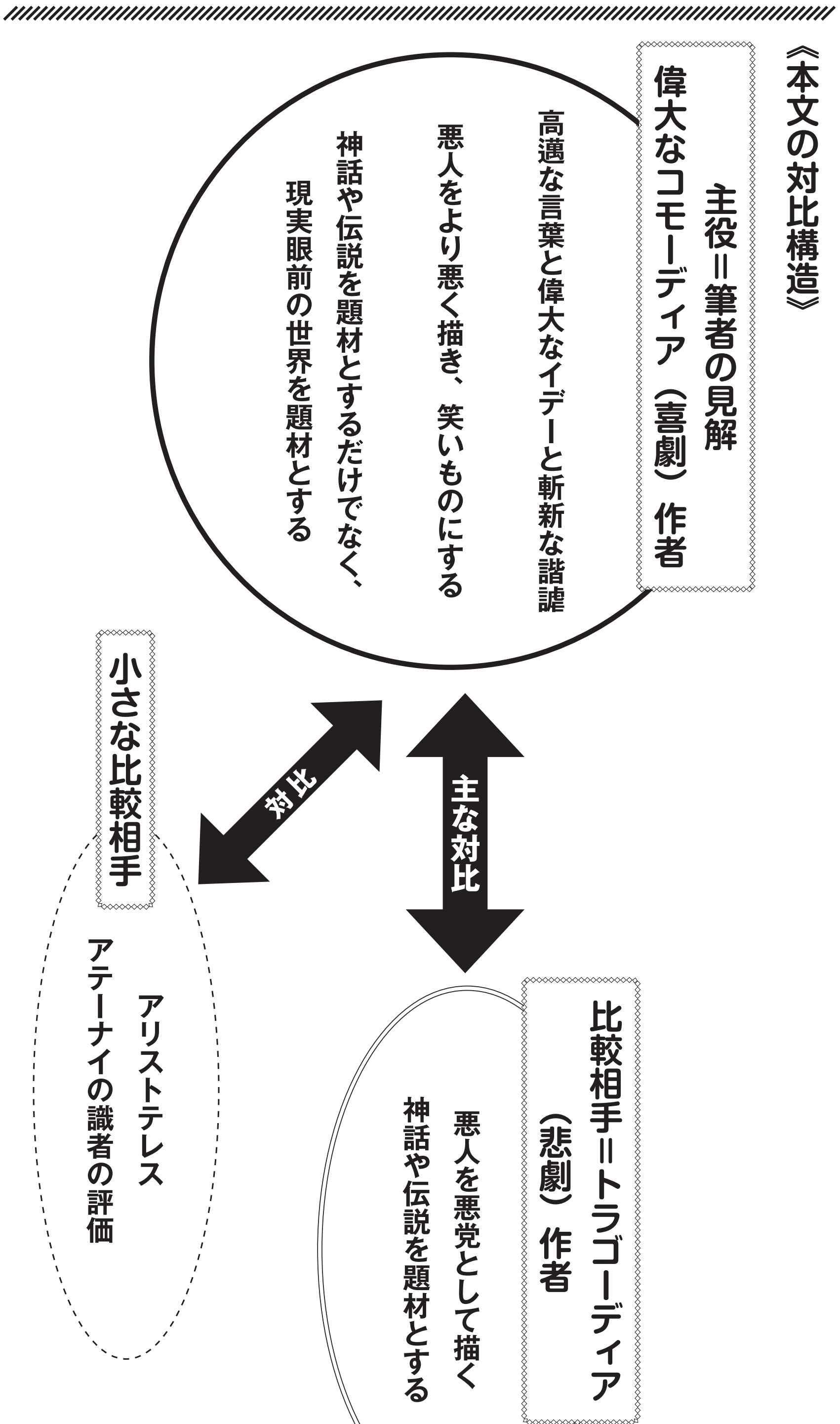
こんどは、幸田露伴に関わる問題で、同時に筆者の主要意見に関わるものでもあります。つまり、筆者は、幸田露伴の都市論、東京論を高く評価していますが、それはなぜでしょうか。言い換えればどんな「成果となってあらわれている」のでしょうか。ここで、主な対比に立ち戻って考えてみましょう。従来、かつての故郷といえば、自然豊かな農村やムラなどであったのに対し、原点的な故郷は誰にでもあること、都会も故郷たりえることを筆者は力説しています。この筆者の考えに見事に応えてくれる「成果」を幸田露伴の東京論がもたらしてくれた。これをまとめているのが、最終段落、最終行です。「最も今日的な意味で都会の故郷性を論じているといえる」です。これを字数指定に合うように十字以内で書けば、「今日的な都会の故郷論」といった表現になるでしょう。得点になるポイント箇所を細かく言いますよ。第一ポイント「今日的」「現代的」「現代にも通じる」などの表現です。第二ポイントは「都会」「都市」にふれることです。「東京」だけだと都市の一例ですので、△です。第三ポイントは「故郷」「故郷性」にふれていることです。第四ポイント「論じている」「論」です。四つのポイントの内、二つ取れるとよいですね。

模範解答

問１＝①　問２　地縁、血縁のしがらみ　問３＝③

問４　東京は異郷であった　問５　今日的な都会の故郷論

第二十講　文学論・文芸論


《本文の対比構造》
主役＝筆者の見解
偉大なコモーディア（喜劇）作者
高邁な言葉と偉大なイデーと斬新な諧謔
悪人をより悪く描き、笑いものにする
神話や伝説を題材とするだけでなく、
現実眼前の世界を題材とする
主な対比
対比
比較相手＝トラゴーディア
（悲劇）作者
悪人を悪党として描く
神話や伝説を題材とする
小さな比較相手
アリストテレス
アテーナイの識者の評価

《解説》

問１《傍線部説明・記述》

（イ）筆者の意見ではない、小さな比較相手の見解をまとめます。それが「当時のコモーディアをめぐる状況」です。第二段落に、「当時のアテーナイに於いて」「当時のコモーディア」がどのようなもので、しかも当時の識者からどんな評価だったのかが書かれています。詳しくいえば、どんなに低い評価だったのかが書かれています。さて、記述問題の解答の三原則は〝具体例はカット〟〝対比の表現〟〝繰り返されているものは大事〟です。これに基づいて解答をつくります。できあがったものは、模範解答を見ていただくとして、ここには、得点になるポイント箇所を挙げます。順番は問いません。自分の答案に、次に挙げるものが含まれていれば、その都度、加点してください。第一ポイント「理想がない」「イデーがない」、第二ポイント「卑小」「日常の瑣事」「瑣末」「瑣末浅陋」、第三ポイント「笑わせる」、第四ポイント「能事」、第五ポイント「識者から軽蔑」です。以上五つのうち、三つ取れるとすばらしいです。

（ロ）さて、右で見たように、当時評判の悪かった喜劇・コモーディアですが、筆者は違う意見です。コモーディアそのものが低級、価値が低いときめつけてはいけない、それぞれの作者の力量によると考えています。それが傍線部「この事が、コモーディアそのものの価値を上下する問題ではなくて、コモーディアを借りて人々に呼びかけようとする、作者の価値を上下する問題であるに過ぎない」です。たしかに、しょーもない喜劇作家もいただろうけれど、ちゃんとした喜劇作家もいたんだぞ、ということです。アリストパネースのように。では、何があれば、ちゃんとした喜劇作家とよべるのか。これが「『作者の価値を上下する』のはどのようなもの」かという問いの答えです。傍線直後に「作者の作品に高邁な言葉と偉大なイデーと斬新な諧謔とがありさえすれば」と条件を挙げていますよ。二十字以内の核心部分は「高邁な言葉と偉大なイデーと斬新な諧謔」です。あとは、初めと終わりの二字を答えてね。なお、「偉大なイデー」という語は、この第三段落だけでなく、第二段落にも、第四段落にも登場するキーワードですね。

問２《空欄補充・選択肢》

皮肉・アイロニー・イロニーになるように空欄を埋めますよ。どういうことか。世の中に、「現実眼前の世界」にイヤーなこ

とを見つけた場合の対応の仕方が三パターン書かれています。仮に、ア・イ・ウとしましょう。はじめに、アは「その現実眼前の世界から眼を背けて、自分自身のイデーの世界にのみ住む事の出来る者」、イが「まともにその醜悪・欠陥を暴露する事によって」「自分の周囲の世界を、いくらかでも自分のイデーの世界に近づけなければいられない者」、ウが「その醜悪・欠陥を更に歪曲し、それを笑いものにする事によって」「自分の周囲の世界を、いくらかでも自分のイデーの世界に近づけなければいられない者」です。筆者がオススメしているのは、ウの道ですが、問２の空欄はアの道に関わるものです。ここでアの「住む事の出来る」という肯定表現に注目します。しかもその直後で「しかし」という逆接の接続語で、乗り越えて、もっと良いものを紹介しているというスタイルです。つまり、一見、表面上は肯定でもその真実の意味は、否定というしかけです。こういうのを皮肉というのですよ。したがって、空欄にはその〝表面上は肯定〟の表現を選びます。③の「幸福」が正解です。〝イヤなことから、目をそむけられるなんて、キミは幸せなヤツだな〟という痛烈な皮肉・いやみを形成するわけです。①の「不幸」、②の「滑稽」、⑤の「悲惨」などは、いきなり否定的表現になってしまい、皮肉になりませんからね。④の「気楽」を選んだ人、おしいです。△とします。なぜ、○でないかというと、「気楽」は「幸福」と比べて一時的なものです。大きな皮肉になりません。

問３《傍線部言い換え・抜き出し》

傍線部は、問２の解説でいうとイのパターンですね。それはトラゴーディアを書く人、「悲劇作者」の採用する方法と書かれています。「悪人を悪党として描こうとする」という方法で、これが正解です。コモーディア、喜劇作者がウのパターンで、「悪人を笑いものとして描こうとする」「より悪く」描こうとするのと対照的ですね。

問４《傍線部説明・記述》

筆者がオススメの「偉大な喜劇作者」の特徴をまとめます。記述の三原則〝具体例はカット〟〝対比の表現〟〝繰り返されているものは大事〟でいきますよ。第一ポイントは「偉大なイデー」「イデーが高い」「イデーがしっかりしている」「高い理想をもつ」という主旨です。第二ポイントは「現実感覚がある」「現実感覚が鋭い」「鋭利な現実感覚」「精到な現実感覚」などです。第三ポイントは「神話・伝説だけを題材にせず」（神話と伝説はどちらか一方でもよい）です。対比です。第四ポイントが「現実眼

前の世界を題材にする」です。以上、四つのうち、二つ取りたいです。

模範解答

問１　(イ)　理想もなく卑小なもので人を笑わせることを能事とし、識者から軽蔑されていた状況。

(ロ)　高邁～諧謔　　問２＝③　　問３　悪人を悪党として描こうとする

問４　高いイデーと鋭利な現実感覚をもち、神話だけでなく現実眼前の世界を題材とする者。

第二十一講　メディア論・情報化社会論

《本文の対比構造》

主役＝筆者によるネット論

ネットは文字のメディア
新たな「識字」の世界
「送り手」と「受け手」の差異の喪失
誰もが発信者

主な対比

小さな対比

敵役＝従来型の知識人によるネット評価

バリー・サンダース
『本の死ぬところ暴力が生まれる』
＝電子メディアは文字を欠いたメディア
映像や電子メディアは
大衆を知的に退化させる
「大衆」と「知識人」の区別
「識字」「教養」、
知識人が自身を擁護

脇役＝粉川哲夫によるネット論

国家を越境する個人と
越境を寡占する国家、企業の対立

《解説》

問１《傍線部説明・選択肢》

「同書」つまり、『本が死ぬところ暴力が生まれる』について、筆者は批判的に語っています。それが「問題の回避」とくに「回避」という表現です。しかも、そのやりかたが「巧妙」というように皮肉をこめています。第五段落冒頭の「インターネット～論議が忌避」も同様の批判です。①の「文化的階級差の存在を前提」、②「『識字』をもって文化的階級差と見なす」、③の「著者自身の〈私〉を擁護するために書かれている」は、いずれも本文の記述には合致しています。しかし、肝心の傍線部「問題の回避」という批判の説明にはなっていません。肝心なのは、以下のことです。すなわち、「同書は映像メディア（電子メディア・インターネット）が大衆を知的に退化させる」と見なしているが、「だが実は、インターネットは文字のメディアである」（これが筆者の見解）。つまり、バリー・サンダースは、ネットの本当の姿をとらえそこなったまま、ネットの問題を挙げているわけで、これじゃ問題の焦点がズレてるよということです。それが「問題の回避」ということ。これじゃ、議論がかみあわないよ、建設的な討論に発展しないよ、と筆者は考えているようです。こういうわけで④が正解です。他は、その肝心ではない別の部分だけを拾っています。この点では、部分的指摘の誤りといえるでしょう。

問２《傍線部説明・選択肢》

アメリカの学者バリー・サンダースの議論と日本の知識人の議論との「共通」点を挙げる問題ですよ。そろいもそろって敵役ですぞ。「自己肯定的電子メディア論」といっているのは、従来タイプの知識人が、自分たちの「識字」、本を書ける教養をよしとし、その立場から、ネットの事を語る議論です。内容としては、ネットは文字ならぬ映像メディアと決めつけて、自分たちより劣ったものとみなす考え方です。したがって、①が正解です。②は、「インターネットを、いずれは沈む泥船であると考えながら」が、×です。従来型知識人は、ネットをばかにしながら、一方で、それによる自分たちの延命策を考えています。こんな二重基準（ダブルスタンダード）でネットを考えている知識人、言い換えれば、従来と異なる「新しい識字」が必要なのだという認識を欠落させている知識人にとっては、ネットは新しい可能性をひらくどころか「泥船」だろう、とは筆者の見解です。従来型知識人が「泥船」と認識しているわけではありません。つまり、この選択肢は、筆者の見解と敵役の見解を混ぜてしまった

間違いです。対比混乱の誤りです。③は、後半の「『知識人』と『大衆』という図式に依存」は、従来型知識人の発想としてOKですが、前半がまずいです。「インターネットを双方向のメディアと捉え」は、筆者の見解です。ゆえに、対比混乱の誤りです。④は、粉川哲夫の見解として紹介されているものです。《文章の対比構造》で図示してあるように、脇役です。つまり、主役の筆者の見解でもなければ、敵役の従来型知識人の見解でもありません。問２は、敵役の説明を求めている問題ですから、そこに脇役を持ち込んだりしては、これはこれで対比混乱の誤りです。

問３《傍線部説明・抜き出し》

今回の敵役である、旧来の知識人たちが保持しようとしているものです。しかも、インターネットによって失おうとしているものです。「知識人の特権性」については、終わりから二段落目に「『啓蒙する知識人』の特権性」として繰り返されています。では、その内容、中身はなにか、それが問３の答えになります。「情報や言説の発信権」です。「『啓蒙する知識人』の特権性を支えてきた」ものですから、内容言い換え、コンテンツになります。

問４《傍線部説明・抜き出し》

「新しい場」とは、インターネットのもたらす言論、表現の空間のことです。では、それはどのような意味で「新しい」特徴を持つのか、旧来の考え方をどう変えてしまうものなのか、その中身が答えです。まず、従来の考え方とは、啓蒙する（上から目線で教えてあげる）知識人、つまり情報や知識の発信者である知識人とそれをただ受け取るだけの大衆という二分法的な区別を前提とする考え方です。ネットはそれを変えた！　そうした二分法的区別を喪失させ、「無化」したのです。かくて、ネット空間はどういう「場」なのか。すなわち、「誰でも発信者となれる」場なのです。これが答えです。ちなみに『ウェブ進化論』の筆者、梅田望夫氏は、〝総表現社会〟というネーミングで、情報化社会のことを語っています。

模範解答

問１＝④　問２＝①　問３　情報や言説の発信権　問４　誰でも発信者となれる

第二十二講《小説その4》日常と非日常の対比

《本文の対比構造》

メイン＝非日常・違う世界
＝堤防を「快走」
主役＝道子

「ほんとうに潑剌と活きている感じ」
「疾駆する興奮した気持ち」
「活きている感じ」「駈足の快感」
「自分はいま撥剌と生きている」
「違った世界」
「自分独特の生き方を発見した興奮」
「わくわく」

主な対比

対比

小さな比較相手

父親／兄弟
（親しいなりに距離をおいている）

比較相手＝日常・もとの人間の世界

忙しい日常／
国策（生活への統制）／屈托
「縮こまった生活」への不満
「毎日窮屈な仕事に
圧えつけられて暮している」
もとの人間界

母親＝日常の代表
セリフ「どこへ行くんです、
この忙がしいのに」

《解説》

問１《傍線部説明・選択肢》

日常の仕事に倦み疲れ、やや鬱屈して解放感を味わいたい主人公の話です。傍線前に「忙がしそうに縫い進み」「国策（脚注にあるように、国民の生活への縛り、統制が強まっている）」「この頃は一日中大変」などの表現があります。さらにその後、「あわただしい、始終追いつめられて、縮こまった生活ばかりして来たという感じが道子を不満にした」「毎日窮屈な仕事に圧えつけられて暮している」とまであります。さらにその後、堤防を「快走」（タイトルですぞ！）することで非日常的な、別世界のような興奮を味わうことになります。③の「張りつめた気持ちが緩んで」は、いわば〝緊張と弛緩〟で正しい対比です。傍線直後にも「肩が凝って、坐り続けた両腿がだるく張った」「立上って」「戸外へ出てみた」とあり、この〝緊張と弛緩〟を繰り返しておりヒントになっています。したがって、③が正解です。①は「孤独」が×です。〝孤独⟷他者とのつながり回復〟というような対比はありません。堤防を走って、誰かとお友達になって救われるという話ではありません。堤防に誰もいないことを確認して走り出していますし、さらに「快走」の快感も「独りで内密に味わいたかった」と書いてあります。このように〝対比〟という尺度、軸線をもちだすと、選択肢中のヘンな表現がどうしてヘンなのか（間違いなのか）よくわかります。というわけで、この選択肢は正しい対比喪失の誤りです。②はまず、「仕事の使命感」が×です。「忙がしい」というだけです。道子はこれに「不満」ともあります。また、同様ですが、「使命感に酔っている」とのお兄さんの「指摘」が当たっていて「恥ずかし」い思いをしているわけでもありません。それなら「吐息」をつくのではなく、赤面するべきでしたね。ともあれ、ことごとく記述に反する誤りです。④は、「仕事は正しいものであると信じて」「その重要性」が×です。日常の鬱屈からの解放が、この文章の主題ですからね。正しい対比喪失の誤りです。〝正誤〟〝重要・非重要〟の対比ではございません。さらに「兄に対して、憤りを抑えがたく」も×です。記述に反する誤りです。日常的な仕事の正しさや重要さに無理解なお兄さんをこらしめたり、正しい道へ導いてあげようというストーリーではないですから。このあとのストーリーでもお兄さんとの争いはありません。⑤は「投げやりな気分」が×です。自暴自棄、捨て鉢（ばち）になっているわけではありません。着物を「畳の上に置いた」だけで破り裂いたりもしてません。記述に反する誤りです。間違いの選択肢は、このように、ありもしない物語をこしらえるものです。この問題出題者の方は、とても想像力のある方なのですね。よくもこんなにもたくさんの間違い選択肢をつくれるものです。みなさんもその苦労と

創意に気付いてあげましょう、そして×をつけましょう。

問２《傍線部説明・選択肢》

さあ、日常から非日常への解放ですよ。「ほんとうに潑剌と活きている感じ」「活きている感じ」「疾駆する興奮した気持ちを自分独りで内密に味わい」「自分独特の生き方を発見した興奮」とありますね。したがって、④が正解です。①は「自分の行為の正しさ」が×です。先ほどの問１の④を引きずってます。記述に反する誤りといってもよいですし、〝不正⟷正義〟の対比ではないという点では、正しい対比喪失の誤りです。②は「非常時では世間から非難される」ことに「興奮」が×です。変質者か！　犯罪者か！　〝非日常の興奮〟なら正解なのにね。記述に反する誤りです。また「世間」との対比は本文にはありません。道徳の問題ではないのです。はい、正しい対比喪失の誤りです。③は「窮屈に感じていた生活」はＯＫですが、その「生活が変わる」が×です。〝日常と非日常〟は対置されているのであって、日常そのものが変わってしまう話ではありません。「違った世界」「もとの人間界」という表現がありますでしょ。日常世界と違うところで疾駆してこその「快走」なのです。⑤は「他者とかかわりを持てないことの寂しさ」が×です。これも問１の①を引きずった間違いです。正しい対比喪失の誤りです。さらに「社会や家庭～役割～確かめよう」は、絵に描いたような典型的な対比混乱の誤りです。

問３《表現理解・選択肢》

①は「道子の心情」について「心内のつぶやきのみで説明」が不当な限定判断です。《本文の対比構造》でも多数挙げているように、道子の心情については「つぶやき」以外に、筆者による描写としてどっさり出てきます。②は「倒置法の返答」を「不自然」としていることが×です。倒置法は、主語と述語の順番や修飾語と被修飾語の順番をひっくり返す表現技法ですが、〝強調〟であって、「不自然」ではありません。なお、「直後の兄の誇張した言い回し」とありますが、むしろ倒置法こそ「誇張」です。この点でもすれ違い、間違いですね。記述に反する誤りと言っていいでしょう。さらにさらに、そもそもこの文章の対比構造にしても〝不自然な兄妹⟷自然重視の母親〟ではありません。この点で、正しい対比喪失の誤りです。③は「まあ」について、「読点のないものはあきれた気持ちを表している」が×です。「まあ待ちなさい」という表現がありますが、これは相手を落ち着か

せよう、なだめようという〝まあまあ、そんなあわてずに〟という意味ですよ。〝おう、なんてこった！〟という「あきれ」ではありませんからね。はい、記述に反する誤りです。④はＯＫですね。「直喩」というのは、〝まるで○○のように〟というカタチで、比喩ですよ、たとえですよ、ということがダイレクトに、直接的にわかる表現技法です（英語ではアナロジー）。文中に「弾条仕掛のように飛び出した」「弾丸のように〜疾走」とあります。ちなみに「まるで」とか「のように」が付いていない比喩のことを「暗喩（あんゆ）」「隠喩（いんゆ）」（英語ではメタファー）といいます。ちょく、ではなくそれとなく暗示的に隠しながらたとえをする技法です。さて、加えて、「西の空を薄桃色に燃え立たせ」「影絵のように黝（くろ）ずんで」「桃色の西の端れに、藍色の山脈の峰」「青白い月光」「青白い月の光」などの表現がありますから、「情景を描くのに色彩表現を用いたり」も、ＯＫということになります。⑤は「道子が消極的」が×です。家族とのかかわりをめぐって〝積極派⟷消極派〟などいっさい比べていませんからね。正しい対比喪失の誤りです。⑥は、とくに問題ありません。つまり、記述に合致していて、あっけない正解です。「場面」が変わるだけのことはありますね。

模範解答

問１＝③　問２＝④　問３＝④・⑥

第二十三講　日本文化論・建築論

《本文の対比構造》

主役＝日本の建築

靴をぬぐ「うち」重視
家や家族中心にした内的秩序
外部や都市空間には無関心
（例）旅館……ロビーや廊下は「うち」

主な対比

比較相手＝西欧の建築

靴をはいたまま暮らす
外的秩序
都市空間の充実
（例）西洋式ホテル
……ロビーや廊下は「そと」
（例）広場などの美しい模様の舗装

《解説》

問１《空欄補充・選択肢》

　A は、日本人の「内部」の話ですから①の「家」です。直後の、同宿の人々が「家族の一員であるようにふるまう」も大きなヒントですね。④の「街」では外部ですから、対比混乱の誤りです。②の「庭」は外部です。家に付いているとしても、靴をはきますから。対比混乱の誤りです。一方、③の「室」は「内部」ではありますが、細分化しすぎです。最適なものを選ばないとね。一方、B は「靴をはく」「外的秩序」のほうです。しかも「ロビーや廊下を歩く」という例の言い換えですから、③の「街路」が正解です。他の「世間」「世界」では広すぎ漠然としすぎです。④の「会社」は具体的ですが「歩く」場所としてはそぐわないでしょ。オフィスは靴をはくでしょうが、通常はデスクについて座ってお仕事ですからね。C と D も対比です。直後に「内的秩序には外的秩序にない親密感や安心感があり」とあって、さらに「仲間意識」「くつろぎ」とあります。C は、「外的秩序」ですから、これら「親密・安心・仲間・くつろぎ」の反対です。したがって、③の「対立」を選びます。①の「融合」では、個人がとけあってしまいます。対比混乱の誤りです。②の「隣接」は正しい対比喪失の誤りです。近くで隣り合っているのか、遠く離れた関係かは比べていませんから。D は、その個人の対立がなく、「わけへだてのない」状態です。内側には「境界」がないわけですから④の「集合」を選びます。さすがに個人が「消滅」し、どろどろの一体感の中にいるわけではありません。一方、①の「交際」や③の「互助」は自律した個人が取り結ぶ関係ですから、×です。どちらも対比混乱の誤りです。家族内で「交際」しているとか「互助」関係にあるとか、ヘンでしょ。

問２《傍線部説明・記述》

　本文にすでに挙げられている例は、「たまたま泊り合わせた人々と馴れ馴れしくしたり、ゆかた、パジャマ、ステテコだけで闊歩する」です。他の例を出さなければなりません。寝台車やホテルのロビーで、わが家のごとくくつろぐ例ですから、大きな声で会話する、内輪話をする、大声で笑う、電話でしゃべる、食べ物を分け合う、下着姿になるなどでしょう。他にも、爪を切る、化粧をする、鼻をほじる、耳かきするなどでもOKでしょう。すべて〝家でやれよ〟と言いたくなります。〝家でやろう〟というマナー広告もありましたねえ。点になるポイントでいうと、「家でするように」「自宅のように」「わが家のように」が第

一ポイント、以下第二ポイントは、先に挙げた「大声で会話する」などです。

問３《傍線部説明・記述》

「靴をぬいでいる」と「靴をはいている」と関連づける、これらの単語を盛り込むことは、設問条件です。そこで「靴をぬいでいる」という表現とセットになるものとして、「家」という指摘があれば、これが第一ポイント、さらに「内的秩序」という表現が入って、第二ポイントです。さらに「親密感」「安心感」「仲間意識」「くつろぎ」のいずれかの指摘が入って第三ポイントです。他方、「靴をはいている」とセットになる表現として「外部」や「外的秩序」が入っていたら第四ポイントで、それについて「無関心」「考えがない」などの打消し表現が入っていたら、第五ポイントです。全部で五つポイントを設定しました。三つ獲得できれば合格です。なお、「理由」を問うている設問ですので、しめくくりは「から」「ので」「ため」としてください。それがないと1点減点です。さらに「句読点」を数えますから、「。」が、結末にないと、1点減点ですよ。

問４《全文の理解・選択肢》

①はしらじらしいほどの対比混乱の誤りと不当な当為判断の誤りを犯しています。まず、「床の間」は「うち・家」で日本人が重視するものとしてOKですが、「広場」は外部の都市空間です。問3でも見たように、日本人の配慮が行き届かない領域ですね。これら対比事項を混ぜたらいけません。対比混乱の誤りです。さらに「都市空間の充実につながるべき」としていますが、これが不当な当為判断です。〝当為判断〟というのは、〝当然なすべし〟と言う意味です。本文にはない指摘です。本文は、冷静に日本と西欧を比べ、その特徴を「内的秩序」「外的秩序」として整理分析しているだけです。どっちが優れているという価値判断もしていません。事実としてある両者の特徴の比較をしているだけです。筆者は、「外的秩序は内的秩序に必ずしも優っているとも考えられない」とまで、断り書きをしています。こうした事実判断と当為判断は別物ということが肝心です。多くの文章は、事実判断です。そんなときに、よくある間違いの選択肢として〝○○すべし〟とやってしまう不当な当為判断があるのです。よーく覚えておいて。②は、あからさまなほどの正しい対比喪失の誤りです。この文章は、日本と西欧の対比であって、日本の昔と今を比べておりません。言い換えると、〝最近・近代的・明るい⟷かつて・前近代・暗い〟なんて比べちゃいません。

これを正しい対比喪失の誤りと呼ばずして他に何と呼ぼう！　③は本文の正しい対比をふまえています。正解です。④も正解です。「西欧の住宅地」の「前庭」といった具体例は、直接には本文中には登場しません。今回の大きな主旨として、西欧の「外的秩序」では、靴をはく外部空間を美しくするという意識がはたらきます。ゆえにそれが、家の外の前庭におよぶとしても、本文と矛盾なく、ＯＫといえます。⑤はどうですか。失笑するほどの対比混乱の誤りではありませんか。今回の問題は立教大学の過去問ですから、十分難易度は高いはずなのですが、対比で読む訓練を積んできますと、間違いの仕組みにすぐ気付けるでしょ。はい、「都市空間」は日本人にとっては「外部」ですよね。それを「内的秩序」としてしまいました。また、「内外の別がない」も×です。靴をぬぐかぬがないかで明解な境界があるのでした。したがって、ここは記述に反する誤りです。

模範解答

問１　Ａ＝①　Ｂ＝③　Ｃ＝③　Ｄ＝④

問２　家で振る舞うように大声で話す。（家でのように大声で笑う。家のように食べ物を分け合う。など）

問３　靴をぬいでいる家の親密感など内的秩序を重視するが、靴をはく外部には無関心だから。

問４＝③④（順不同）

第二十四講　言語論

《本文の対比構造》

メイン＝筆者の見解

「人間の学」としての言語学
言語混交論
言語ではなく人間が主体で言語を変える
フーゴ・シューハルト
ラフカディオ・ハーン

↕ 対比

敵役＝生物学的言語系統主義

十九世紀の生物進化論を核とする
インド・ヨーロッパ語比較言語学
言語は単純な構造から複雑な構造へ進化
相互に混血や交配を許さない・系統分立
言語純血種論
言語を不変、固定した主体と考える

《解説》

さあ、第二十四講、最終回はオリジナル問題です。設問は、小柴大輔の制作です。素材は、日本を代表する言語学者・社会言語学者の田中克彦氏の文章です。テーマとして、言語論は芸術論と並んでよく出る分野です。なお、読書上の価値も高い文章で、ことばを見つめ直すヒントをくれます。ことばという身近でありながら、それ自体を対象化してとらえることの少ないものをとらえ直します。みなさんの教養の広がりにも貢献しうるものです。なお、タイトルが『ことばのエコロジー』とありますが、いわゆる環境保護について書いているわけではありません。むしろ、ことばを取り巻く環境のことを語っていると思われます。つまり、ことばは、生身の人間が生活する社会環境によって影響され、一方で、ことばがそうした社会環境に影響を与える、そういう言語の本質を語ろうというタイトルと推測されます。

問１《空欄補充・選択肢》

敵役に関する問題です。つまり、言語はお互いにまじりあわない、「交配はありえない」、「混血を許さない」と考える立場です。言い換えれば、それぞれの言語は「系統として分立している」、言語グループ同士の境界を超えないと考える側です。したがって、③の「閉じた」が正解です。⑤の「混在した」の正反対であり、対比混乱の誤りです。①と②、つまり「複雑な」と「素朴な」は、ここでは比べられていません。正しい対比喪失の誤りです。④の「難渋な」は、物事がスムーズに運ばないで苦労するという意味ですが、スムーズかそうでないかは、これまた比べられていません。正しい対比喪失の誤りです。

問２《空欄補充・選択肢》

こちらも敵役に関する問題です。言語のまじりあいを毛嫌いする立場です。言い換えれば、交配や混血を「汚染」と考えて「不快と感じる」側です。次の段落の言葉で言えば、「言語純血種論」です。したがって、②の「言語純化主義」が正解です。③の「言語混血主義」では正反対で、対比混乱の誤りです。⑤の「言語流動主義」も対比混乱の誤りですね。最終段落からもわかるように、本文の敵役たちは、言語を「不変」「固定」したものと見なす立場ですからね。④の「環境保護主義」は、しらじらしいですね、わざとらしいですね。つくっているヤツの顔が見たいですね（私ですが）。でも、実際の入試問題も、わかってく

るとこのくらいしらじらしいですからね。ともあれ、地球生態系を守れ、という話ではありませんし、〝環境保護⟷環境破壊〟の対比ではないという点で、正しい対比喪失の誤りとも言えます。①の「論理実証主義」も×です。論理、たとえば言語表現されたものを目に見えるデータ（経験データ・実験データ・実証的証拠）でチェックするという話も本文にはありません。記述なしと言ってもよいですし、実証の有無は比べてないよ、ということで正しい対比喪失の誤りと呼んでもＯＫです。

問３《傍線部説明・抜き出しと記述》

（１）フーゴ・シューハルトは、筆者側です。正確には、言語のまじりあいという事実、本質をしっかりとらえている側です。〝言語純血種論⟷フーゴ・シューハルト〟の対比は、終わりから二段落目に「生物種的系統論と、言語混交論とのあいだにある、言語に関する重要な観点の相異」として、見事に簡潔に言い換えられています。はい、そうです、「言語混交論」です。

（２）こちらは、敵役を記述で説明する問題です。しかも、その「土台をなす考え方」をまとめます。この「土台」にあたる表現として、第二段落に「仮定」ということばがあり、また第四段落に「前提」ということばがあります。その内容を集めます。さらに記述答案の三原則、〝具体例はカット〟〝対比の表現〟〝繰り返される表現は大事〟にもとづいて答案をつくりましょう。では、ここでは、得点になるポイント箇所をあげますよ。まず、「十九世紀」という指摘が第一ポイント。次に、「生物進化論」あるいは「進化論」を核にしている、モデルにしている、基づいているという表現が、第二ポイントです。その中身として言語が「単純から複雑へ」という指摘があれば、第三ポイントです。さらに、「生物種が混血しないのと同じように」という指摘が第四ポイント、「言語の交配もない」「言葉もまじりあわない」という表現が、第五ポイントです。五つのうち、三つ取れれば合格水準です。

問４《空欄補充・選択肢》

筆者は「人間の学」、人間の活動に焦点をあてた「言語の学」を考えているのに、敵役の「生物種的系統論」の人々は、「言語

が不動の主体」と考えています。動かないで堂々とご主人様のように君臨しているのが言語だ、という感じです。ここでは、人間が従者、言われるがままに付き従う召使いのような立場になってしまいます。これが［D］です。直後の「使わされているだけ」という表現も決定的なヒントですね。こういうわけで、①の「受動的」が正解です。②の「積極的」や③の「能動的」では、人間が主役で主人公ということになるから、正反対ですね。対比混乱の誤りです。〝直接的⟷間接的〟は、本文では比べられてないので④の「間接的」は、正しい対比喪失の誤りです。⑤の「暴力的」は行きすぎですね。これでは受け身どころか奴隷です。〝ことばの暴力〟って表現はあるけれど、ことば自体の暴力で人間が使われているということにはなりません。ここでの正しい対比は、人間が主体で人間自体が自ら動いて言語を変えるのか、それとも言語が不動の主体か、の対比ですからね。暴力のありなしは比べられてないという点では、正しい対比喪失の誤りです。

模範解答

問１＝③　問２＝②

問３　（１）言語混交論

（２）十九世紀の生物進化論を核に、言語は単純な構造から複雑な構造に進化し、生物種が混血を許さないように、言語相互の交配もありえないという考え方。

問４＝①

はい、高３スタンダードレベル現代文の終了です。やりきりましたね、おめでとうございます。一つの講座をやり通す、一つの問題集をやり通す、立派なことです。修了証書を出したいくらいです。さて、みなさんにおすすめしたいのは、次々に新しい問題に挑んで、それらも一貫した方法で、つまり対比的に読んで解答することです。スタディサプリの現代文講座のラインナップをご活用ください。「高３トップ＆ハイレベル現代文」「高１高２現代文」を、学年問わず、ゴリゴリ、バリバリ、どしどしご利用ください。

復習問題解答

復習問題　解答　第十三講

（ア）①　（イ）⑤　（ウ）②　（エ）③　（オ）⑤

（カ）②　（キ）①　（ク）③　（ケ）⑤　（コ）③

解答漢字一覧

（ア）懸命　（イ）奇抜　（ウ）悲惨　（エ）特赦　（オ）回顧録

（カ）述懐　（キ）簡潔　（ク）発揮　（ケ）動機　（コ）飢餓

復習問題　解答　第十四講

（ア）③　（イ）①　（ウ）②　（エ）④　（オ）⑤

（カ）③　（キ）①　（ク）④　（ケ）②　（コ）⑤

解答漢字一覧

（ア）紀行文　（イ）批評　（ウ）奪取　（エ）巧妙　（オ）過渡的

（カ）冒険　（キ）徹底　（ク）放浪　（ケ）終焉　（コ）中庸

復習問題　解答　第十五講

（ア）⑤　（イ）①　（ウ）①　（エ）⑤　（オ）②
（カ）③　（キ）①　（ク）⑤　（ケ）③　（コ）④

解答漢字一覧

（ア）供給　（イ）微妙　（ウ）維持　（エ）虐待　（オ）普及
（カ）就労　（キ）福祉　（ク）拘束　（ケ）広範　（コ）排除

復習問題　解答　第十六講

（ア）③　（イ）④　（ウ）⑤　（エ）②　（オ）④
（カ）①　（キ）③　（ク）①　（ケ）③　（コ）②

解答漢字一覧

（ア）離脱　（イ）追憶　（ウ）触知　（エ）圧倒　（オ）亡霊
（カ）強烈　（キ）静観　（ク）吟味　（ケ）公刊　（コ）習俗

復習問題　解答　第十七講

（ア）⑤　（イ）②　（ウ）③　（エ）②　（オ）①
（カ）②　（キ）③　（ク）④　（ケ）②　（コ）③

解答漢字一覧

（ア）勇壮　（イ）打倒　（ウ）達成　（エ）降伏　（オ）優位
（カ）脱却　（キ）彼我　（ク）発現　（ケ）醸成　（コ）破綻

復習問題　解答　第十八講

（ア）②　（イ）②　（ウ）④　（エ）③　（オ）①
（カ）⑤　（キ）②　（ク）③　（ケ）②　（コ）⑤

解答漢字一覧

（ア）棒読み　（イ）通俗　（ウ）注釈　（エ）軍功　（オ）幕藩
（カ）忠義　（キ）脈絡　（ク）鍛錬　（ケ）登用　（コ）履歴

復習問題　解答　第十九講

（ア）②　（イ）⑤　（ウ）③　（エ）①　（オ）⑤
（カ）③　（キ）①　（ク）④　（ケ）④　（コ）②

解答漢字一覧

（ア）封建　（イ）束縛　（ウ）遺骸　（エ）古典　（オ）雑踏
（カ）無償　（キ）洞察　（ク）迫力　（ケ）鋭敏　（コ）感傷

復習問題　解答　第二十講

（ア）③　（イ）⑤　（ウ）③　（エ）②　（オ）①
（カ）③　（キ）④　（ク）⑤　（ケ）①　（コ）③

解答漢字一覧

（ア）卑小　（イ）高遠　（ウ）露骨　（エ）識者　（オ）欠陥
（カ）除去　（キ）醜悪　（ク）暴露　（ケ）鋭利　（コ）濃厚

復習問題　解答　第二十一講

（ア）①　（イ）③　（ウ）④　（エ）③　（オ）④
（カ）③　（キ）②　（ク）⑤　（ケ）③　（コ）②

解答漢字一覧

（ア）回避　（イ）巧妙　（ウ）要約　（エ）崩壊　（オ）喚起
（カ）忌避　（キ）啓蒙　（ク）装置　（ケ）特権　（コ）構図

復習問題　解答　第二十二講

（ア）②　（イ）⑤　（ウ）③　（エ）④　（オ）②
（カ）⑤　（キ）④　（ク）①

解答漢字一覧

（ア）鼓動　（イ）窮屈　（ウ）口実　（エ）不審　（オ）慎重

復習問題　解答　第二十三講

（ア）⑤　（イ）⑤　（ウ）③　（エ）②　（オ）①
（カ）④　（キ）③　（ク）②　（ケ）②　（コ）④

解答漢字一覧

（ア）卑近　（イ）検討　（ウ）正装　（エ）頑丈　（オ）精巧
（カ）雰囲気　（キ）境界　（ク）整然　（ケ）充実　（コ）模様

復習問題　解答　第二十四講

（ア）④　（イ）②　（ウ）①　（エ）①　（オ）⑤
（カ）②　（キ）③　（ク）④　（ケ）②　（コ）③

解答漢字一覧

（ア）克服　（イ）留保　（ウ）廃棄　（エ）系統　（オ）交配
（カ）汚染　（キ）由緒　（ク）讃美　（ケ）刊行物　（コ）交易